仲 間 後 原 遺 跡

仲間あさと原の印部土手

浦添市教育委員会

序　文

本調査報告書は、浦添大公園整備に先立ち沖縄県中部土木事務所の委託を受けて行った、仲間後原遺跡と仲間あさと原の印部土手の発掘調査成果をまとめたものです。

浦添大公園は昭和43年に都市計画が決定された県営の総合公園で、総面積37.4ヘクタールの広大な公園です。公園はＡ～Ｃの３つのゾーンに分かれており、Ａゾーンは浦添グスクを題材として浦添のみならず沖縄のたどってきた歴史を理解するための「歴史学習ゾーン」、Ｂゾーンは子供からお年寄りまでそれぞれの目的で活動できる「ふれあい広場ゾーン」、Ｃゾーンは自然観察会や各種イベントを開くことができる「憩いの広場ゾーン」として位置づけられています。これら３つのゾーンのうち、ＣゾーンとＢゾーンについては既に供用が開始されており、現在はＡゾーンの設計や整備が進められています。整備主体である沖縄県中部土木事務所と当市教育委員会は、平成９年度より公園整備にかかる協議、調整、発掘調査に取り組んでまいりました。

今回報告する遺跡は沖縄県浦添市仲間後原に所在し、浦添大公園のゾーンとしてはＡゾーンにあたります。浦添グスクガイダンス施設建設予定地の造成工事および公園内園路設置工事に先立ち、平成12、15、17年度に発掘調査を実施しました。発掘調査の結果、仲間後原遺跡では浦添グスクの最盛期に先立つ集落跡を、仲間あさと原の印部土手では、現在では失われてしまった小字名が記されたハル石を確認することができました。これらの調査成果をまとめた本調査報告書は沖縄の歴史を知る上で役立つものと確信しております。

本書が学術研究や歴史学習の資料として、さらには文化財愛護思想の普及に活用されることを期待しております。最後になりましたが、発掘調査ならびに整理作業に指導・助言いただきました諸先生方に厚くお礼申し上げるとともに、事業の円滑な運営に尽力くださった皆様に心から感謝申し上げます。

平成19年３月

浦添市教育委員会
教育長　西原　廣美

例　言

1．本報告書は、沖縄県浦添市仲間後原に所在する仲間後原遺跡と仲間あさと原の印部土手の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、沖縄県中部土木事務所による浦添大公園整備に伴い、浦添市教育委員会文化課が実施した。

3．2000年度の発掘調査は、文化課長安里進、グスク整備係長松川章の指示の下、仁王浩司が担当した。2001年度の整理作業は文化課長安里進、グスク整備係長松川章の指示の下、仁王が担当した。2002年度の整理作業は文化課長安里進、グスク整備係長村山みきの指示の下、仲宗根久里子が担当した。2003年度の発掘調査および整理作業は、文化課長下地安広、グスク整備係長村山みきの指示の下、仲宗根が担当した。2004年度の発掘調査は、文化課長下地安広、グスク整備係長村山みきの指示の下、仲宗根および佐伯信之が担当した。2005年度の発掘調査および整理作業は、文化課長下地安広、グスク整備係長村山みきの指示の下、佐伯が担当した。2006年度の整理作業は、文化課長下地安広、グスク整備係長松川章の指示の下、仁王が担当した。

4．本文の執筆分担は目次に示した。編集については仁王が行った。

5．石材の同定については神谷厚昭氏（沖縄県立博物館友の会）にお願いした。

6．発掘調査および整理作業の実施にあたって、以下の参加者があった。

新垣　智、新城茂人、石原　学、稲福大吾、大城竜也、大嶺由紀子、菊地恒三、喜納政英、木下秋海、金城　薫、金城直之、金城礼子、具志尚樹、久場島清貴、古波蔵保直、島袋　保、下地サヨ子、高松弥生、澤岻永子、棚原里奈、田鍋真由美、當山俊行、友寄隆作、仲原　誠、西垣理絵子、比嘉美智子、宮城かの子、宮平和子、銘苅さつき、盛舛恵利子、諸見優子、山里栄作、山城正吾

7．本調査に関わる出土遺物、実測図等の調査記録、写真資料、カラースライド等は浦添市教育委員会文化課において保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．本書で表示している北は座標北を示す。

2．基準高は全て海抜高を用い、メートル単位で表示した。

3．遺構番号については、調査時において調査区ごとに付した番号を使用している。番号は１番から機械的に付与したため、遺構の時期や性格などと対応するものではない。原則として遺構番号の前に、その遺構の種別（土坑、溝など）を付した。なお、掘立柱建物はその限りではない。

4．掘立柱建物には別個の通し番号（掘立柱建物１・２）を付与した。

5．遺構実測図は、対象により適宜縮尺を変え掲載し、図ごとにスケールで表示した。

6．遺物番号は１番から通し番号を付与した。本文・挿図・写真図版の番号は一致する。

7．遺物実測図の縮尺は原則として１/２であるが、必要に応じて異なる縮尺を用い、その旨をスケールで表示した。

8．引用・参考文献は、各章や節の末尾に記した。

本文目次

序　文
例　言
凡　例

Ⅰ．仲間後原遺跡 …… 1

第１章　報告の前提 …… 3
第１節　地理的環境 …… （仁王浩司）3
第２節　歴史的環境 …… （仁王）4
第３節　調査の経緯と経過
1　その１ …… （仁王）5
2　その２ …… （仲宗根久里子）5
3　その３ …… （仁王）5
第２章　仲間後原遺跡（その１）調査成果 …… （仁王）10
第１節　調査区内の地形と基本層序 …… 10
第２節　遺構と遺構内出土遺物 …… 10
第３節　出土遺物 …… 32
遺構一覧 …… 47
第３章　仲間後原遺跡（その２）調査成果 …… （仲宗根）52
第１節　№８トレンチの基本層序と遺構 …… 52
第２節　Ⅰ区の基本層序と遺構 …… 55
第３節　出土遺物 …… 62
第４章　仲間後原遺跡（その３）調査成果 …… （仁王）69
第５章　まとめ …… （仁王）73

Ⅱ．仲間あさと原の印部土手 …… （佐伯信之）77

第１章　はじめに …… 79
第１節　調査の経緯 …… 79
第２節　調査体制 …… 79
第２章　位置と環境 …… 80
第１節　位置 …… 80
第２節　歴史的環境 …… 80
第３章　調査成果 …… 81
第４章　文献にみる印部土手―おわりに代えて …… 82

挿図目次

第１図　仲間後原遺跡と周辺のグスク時代遺跡 …… 6
第２図　仲間後原遺跡の周辺地形（昭和20年代） …… 7
第３図　仲間後原遺跡の周辺地形（現況） …… 7
第４図　調査区の位置 …… 8
第５図　調査区断面図 …… 11
第６図　調査区平面図 …… 12
第７図　北側遺構群平面図 …… 14
第８図　溝176・溝177遺構実測図 …… 16
第９図　溝176遺物実測図（1） …… 18
第10図　溝176遺物実測図（2） …… 19
第11図　溝176遺物実測図（3） …… 20
第12図　溝176遺物実測図（4） …… 21
第13図　溝177遺物実測図 …… 21
第14図　掘立柱建物１遺構実測図 …… 22
第15図　掘立柱建物１遺物実測図 …… 23
第16図　掘立柱建物２遺構実測図 …… 23
第17図　土坑110・土坑121遺構実測図 …… 24
第18図　土坑116遺構実測図 …… 24
第19図　土坑116遺物実測図 …… 24
第20図　土坑137・土坑204・土坑159・土坑173・遺構実測図 …… 25
第21図　土坑207遺構・遺物実測図 …… 26
第22図　土坑001・土坑083・土坑103・土坑111・土坑131・土坑132・土坑139遺構実測図 …… 27
第23図　ピット058遺構実測図 …… 28
第24図　ピット058遺物実測図 …… 28
第25図　ピット174遺構実測図 …… 28
第26図　ピット174遺物実測図 …… 28
第27図　ピット153遺構実測図 …… 29
第28図　ピット153遺物実測図 …… 29
第29図　溝188・溝189遺構実測図 …… 30
第30図　溝202遺構実測図 …… 31
第31図　土器実測図（1） …… 33
第32図　土器実測図（2） …… 34
第33図　カムィヤキ実測図 …… 35
第34図　白磁実測図 …… 37
第35図　青磁実測図（1） …… 40
第36図　青磁実測図（2） …… 41
第37図　青磁（3）・青花・黒釉陶器・褐釉陶器・土製品・銭・釘実測図 …… 42
第38図　高麗系瓦実測図 …… 44
第39図　石製品実測図（1） …… 45
第40図　石製品実測図（2） …… 46
第41図　№８トレンチ基本層序図 …… 53
第42図　№８トレンチ平断面図及びピット断面図 …… 54
第43図　ピット03平断面図及び出土遺物 …… 54
第44図　Ⅰ区基本層序図 …… 56
第45図　Ⅰ区遺構全体図 …… 58
第46図　Ⅰ区ピット平断面図（一部） …… 59
第47図　Ⅰ区ピット出土遺物 …… 60
第48図　Ⅰ区炉跡01平断面図 …… 60
第49図　Ⅰ区炉跡02平断面図 …… 60
第50図　Ⅰ区土坑01平断面図 …… 61
第51図　Ⅰ区土坑01出土遺物 …… 61
第52図　土器実測図 …… 63
第53図　カムィヤキ実測図 …… 64
第54図　青磁実測図 …… 65
第55図　白磁実測図 …… 66
第56図　青花実測図 …… 66
第57図　天目実測図 …… 67

第58図　褐釉陶器実測図 …… 67
第59図　チャート製品実測図 …… 68
第60図　ガラス製玉実測図 …… 68
第61図　ピット24出土遺物 …… 69
第62図　１区平断面図 …… 70
第63図　２区平断面図 …… 71
第64図　１区遺構断面図 …… 72
第65図　仲間後原遺跡調査箇所 …… 73
第66図　仲間あさと原の印部土手
　　平・横断面図 …… 82
第67図　仲間あさと原の印部土手縦断面図 … 83
第68図　ハル石立面図および拓本 …… 83

表　目　次

第１表　土器観察表 …… 32
第２表　カムィヤキ観察表 …… 35
第３表　白磁観察表 …… 36
第４表　青磁観察表（1） …… 38
第５表　青磁観察表（2） …… 39
第６表　青花観察表 …… 43
第７表　黒釉陶器・褐釉陶器・
　　土製品・半練・銭・釘・
　　高麗系瓦観察表 …… 43
第８表　石製品観察表 …… 45
第９表　遺構データ一覧表（1） …… 48
第10表　遺構データ一覧表（2） …… 49
第11表　遺構データ一覧表（3） …… 50
第12表　遺構データ一覧表（4） …… 51
第13表　土器観察表 …… 62
第14表　カムィヤキ観察表 …… 64
第15表　青磁観察表 …… 64、65
第16表　白磁観察表 …… 66
第17表　青花観察表 …… 66
第18表　天目観察表 …… 67
第19表　チャート製品観察表 …… 68

図 版 目 次

仲間後原遺跡（その１）

図版１　仲間後原遺跡（その１）と浦添グスク
　　東より
図版２　調査区北側（東より）
　　調査区南側（東より）
図版３　溝176（南より）
　　溝176断面（南より）
図版４　溝176近景（南より）
　　溝176（北より）
図版５　溝177（西より）
　　溝177断面（南より）
図版６　掘立柱建物１（西より）
　　ピット９（南より）
図版７　ピット８（南より）
　　ピット10（南より）
図版８　ピット43（南より）
　　ピット49（南より）
図版９　土坑110（北より）
　　土坑116（南より）
図版10　土坑137（南より）
　　土坑159（南より）
図版11　土坑173（北より）
　　土坑204（西より）
図版12　土坑207（東より）
　　土坑103（東より）

図版13　土坑111（北より）
土坑131・土坑132（南より）
図版14　ピット174（南より）
ピット153（北より）
図版15　溝176出土遺物（土器）
図版16　溝176出土遺物（土器）
溝176出土遺物（カムィヤキ）
図版17　溝176出土遺物（青磁・白磁）
溝177・ピット40・ピット９
出土遺物
（土器・白磁・滑石製石鍋）
図版18　溝176・177出土遺物（石器）
図版19　ピット102・土坑116・
ピット58・ピット174・
ピット153出土遺物
（半練・土器・青磁・白磁）
土器
図版20　カムィヤキ
白磁
図版21　青磁
図版22　青磁
図版23　青磁
図版24　青磁
図版25　青磁
図版26　青磁
図版27　青花
図版28　黒釉陶器・褐釉陶器・土製品・銭・釘
土坑207出土遺物（石器）
図版29　高麗系瓦
図版30　石器

仲間後原遺跡（その２）

図版31　調査区遠景（南西より）
Ⅰ区遠景（南より）
図版32　№８トレンチ遺構検出状況（北東より）
№８トレンチピット03半截状況
№８トレンチ層序北壁（東より）
図版33　Ⅰ区表土剥ぎ後の状況（北西より）
Ｃ－４層序（北壁）（南東より）
Ａ－４層序（東壁）（南西より）
図版34　炉跡01半截状況
炉跡02半截状況
土坑01内堆積土状況
図版35　ピット70半截状況
ピット検出状況（南東より）
遺構完掘状況（南南東より）
図版36　土器
図版37　カムィヤキ・青磁
図版38　白磁・青花・天目・褐釉陶器・
チャート製品・ガラス製玉

仲間後原遺跡（その３）

図版39　１区（南より）
ピット24（東より）
図版40　２区（東より）
ピット24出土遺物（土器）

仲間あさと原の印部土手

図版41　全景（西から）
全景（南西から）
碑面（南西から）

Ⅰ．仲間後原遺跡

第１章　報告の前提

第１節　地理的環境

沖縄県浦添市仲間後原に所在する仲間後原遺跡は、13世紀から14世紀に形成された集落遺跡である。仲間後原遺跡は浦添大公園Ａゾーン西端の標高114ｍから122ｍの範囲に広がるとみられ、浦添市教育委員会では平成12年度（その１）、平成15年度（その２）、平成17年度（その３）に発掘調査を行った。今回の報告はそれらの発掘調査成果をまとめたものである。

仲間後原遺跡（その１）の調査地点は、地番では仲間後原592-1・593・661・662・663番地、住所表示では仲間二丁目53番２号に当たる。現況では将棋の駒のような形をした一角で、北は原野、南は道路、東は崖、西は住宅地に囲まれる。

当地の標高は約120ｍを測り、浦添市内でも高い場所に位置する。そのため当遺跡からの眺めはよく、青々と広がる東シナ海を望むことができる。そもそも仲間後原遺跡は、浦添市内を北西－南東に延びる浦添断層崖の上に位置するため、眺めが良いのも当然といえよう。浦添断層崖は石灰岩で形成された比高差20ｍを測る大断層で、表層の地質は石灰岩と赤土（沖縄方言でマージ）である。この崖の上には、浦添グスクと伊祖グスクという、浦添のグスク時代を語る上で欠かせないグスクが存在している。

調査地点の東側が崖に接していることは先述したとおりであるが、これは本来の地形ではない。1948年（昭和23）にアメリカ軍が作成した地形図を見ると、当地の北東に標高430ft.（131ｍ）の高まりが認められる。現在、この高まりは半分近く消失し、逆に消失したところは比高差６ｍほどの崖となっているのであるが、これは戦後に石灰岩の採掘が行われた結果によるものである。よって、大規模な地形改変が行われる前は、北東に高さ10ｍほどを測る小丘陵が存在し、南西に仲間集落が広がるという環境にあったのである。

仲間後原遺跡（その２）の調査地点は浦添城跡（148.1ｍ）のある石灰岩提に位置し、標高119ｍを測る。遺跡の南側は中位段丘下位面に広がる仲間集落があり、また北側は浦添断層崖による崖面のため東シナ海を望む眺望地である。表層地質は新生代第四紀更新世（約200万年前から約１万年前）に堆積した琉球層群であり、琉球石灰岩が露頭する。

今回の調査地点は、先に述べた仲間後原遺跡（その１）より約120ｍ西側に位置する。前記したように調査地点周辺は琉球石灰岩が露頭しており、土壌は島尻マージである。

現在、仲間後原遺跡（その２）は恵まれた緑地帯を利用して園路となり、散策に好適な公園としてまた隣接する浦添グスク・ようどれ館と相まって市民の憩いの場となっている。

仲間後原遺跡（その３）の調査地点は、（その２）の調査地点から北西側に10ｍほど下った平坦面上に位置する。現在、この平坦面は北東および北西を崖、南東を標高127ｍの石灰岩丘陵、南西を比高差２ｍの斜面に画された空間であるが、アメリカ軍作成地形図によると北西側に標高402フィート（約122ｍ）の小丘陵が存在したことが見て取れる。つまりこの小丘陵は戦後の砕石によって削られてしまい、現在は崖となっているわけである。よって、（その３）の調査区は標高127ｍと122ｍの小丘陵に挟まれた矮小な平坦地の南端にあたっていたと言える。

第２節　歴史的環境

浦添市に所在するグスク時代の遺跡を列記すると、下記のごとくなる。

仲間後原遺跡南東約300ｍには浦添グスクが所在する。浦添グスクは浦添断層崖南東端に位置する大型グスクで、標高130～138ｍを測る。伊波普猷や東恩納寛惇の研究によって首里城以前の中山王城と考えられるようになった。グスクは13世紀末から造成が開始され、14世紀後半から15世紀初頭頃に飛躍的発展を遂げた（浦添市教委1984･1985）。その後15世紀代に一時廃城となるが、16世紀に入り浦添按司家の居館となったといわれる。グスク周辺には堀が掘削され外敵に対する防御とし、またグスクの南斜面には敵の侵入を監視するためのテラスが数カ所造成されていた。グスク周辺には世持井、魚小堀など首里城と共通する地名や施設が存在し、さらにグスク北方に隣接して寺（極楽寺）があったことから、首里城を構成する諸要素の源流は浦添グスクに求められると指摘されている（安里1998）。

浦添グスクの北側崖下に位置する浦添ようどれは、英祖王（在位1260～99）と尚寧王（在位1589～1620）を葬った王陵と伝わる。近年の発掘調査によって、浦添ようどれは13世紀後半に造営され、14世紀後半から15世紀初頭に石積みに改修され、さらに尚寧王代にも修築されたことがわかった。また、英祖王陵の墓室内から建物の礎石が出土し、新聞などで報じられた（浦添市教委2000・2001・2002）。

浦添グスク北方崖下に位置する当山東原遺跡では、14世紀から16世紀に属する掘立柱建物群や17世紀の大型礎石柱建物跡などが確認された（浦添市教委2003など）。これらの建物跡に隣接する地点では畑跡も検出されている。多量の中国産陶磁器と共に金メッキ飾り金具や馬の蹄骨、明代華南三彩、緑釉陶器などが出土したことから、14世紀中頃から17世紀の有力者の屋敷跡だと考えられている。

浦添グスク南西約400ｍに位置する浦添原遺跡では、14世紀に属する畑の跡や16世紀の掘立柱建物跡が確認された（浦添市教委2005）。14世紀の畑は、直径20㎝の穴を20㎝ほどの間隔で掘り込んだもので、琉球の畑作について「田を治むるに、但だ鍤を以てし耒耜を用いず。」とした朝鮮王朝実録の記事を裏付ける遺構であると考えられる。16世紀の掘立柱建物は、包含層から出土した華南三彩の分布状況から、浦添番所の前身となった建物と推定されている。

浦添グスク北西方1.5kmの浦添断層崖上には伊祖グスクが所在する。英祖王の出生地として伝えられ、グスク内外から中国産陶磁器やカムィヤキ、グスク土器等が採集されるが、本格的な発掘調査は行われていない（浦添市教委1986）。

浦添断層崖北東台地上に位置する真久原遺跡では、13世紀後半から14世紀前半に属する二重柵列の跡や炉跡が確認された（沖縄県教委1985）。浦添グスクの支城を兼ね備えた倉庫と考えられている。城間の琉球石灰岩台地上、海岸から距離200ｍの地点には城間遺跡がある。遺跡は貝塚時代前期から近代まで断続的に経営されたが、特に拳大から人頭大の石灰岩をＴ字状や＝型に並べた石列などは、16世紀から機能した畑の空間区画と考えられている（浦添市教委1992）。

浦添市と西原町の境には拝山遺跡がある。この遺跡は琉球石灰岩台地の頂上から斜面地にかけて形成される。遺構は確認できなかったものの、13世紀から14世紀の中国産磁器が多数出土した（沖縄県教委1987）。貝塚時代中期からグスク時代までの複合遺跡である親富祖遺跡では1981年に発掘調査が実施され、調査地周辺が13世紀後半から16世紀の石積みを伴わない村落遺跡であることが明らかになった（浦添市教委1983）。

第３節　調査の経緯と経過

１．その１

その１の調査は浦添グスクガイダンス施設建設予定地の造成工事に先だって行ったものである。浦添グスクは1989年（平成元）に指定を受けた国の史跡であり、県営浦添大公園の一部に含まれる。浦添大公園は沖縄県中部土木事務所が整備を進める総面積37.40haの広大な公園であり、Ａ・Ｂ・Ｃの３つのゾーンに区分されるが、浦添グスクを含む17.18haが歴史学習ゾーン（Ａゾーン）として整備される予定である。

1998年（平成10）７月に沖縄県土木建築部都市計画課が策定した『浦添大公園Ａゾーン基本設計報告書』によると、当地は駐車場や便所、休憩所などを備えた浦添グスク西側のエントランスとして位置づけられている。2000年（平成12）度に沖縄県中部土木事務所による駐車場造成工事が予定されていたため、同年８月28日から９月18日まで浦添市教育委員会は埋蔵文化財有無確認のための発掘調査を実施した。その結果、造成予定地西側にグスク時代の遺構が良好な状態で保存されていることが判明し、工事で厚い盛土で覆われる、もしくは擁壁によって下部の遺構が破壊される980㎡については発掘調査を実施することとなった。当遺跡は今回新たに発見したものであるため、文化財保護法第57条の６第１項（当時）に基づく遺跡発見の通知を、11月20日付で提出している。

発掘調査は2000年（平成12）12月21日から2001年（平成13）３月30日まで実施した。３月10日には発掘現場見学会を実施し、約120名の見学者を得た。埋め戻しに際しては、遺構保護のため遺構確認部分を土嚢で囲い、砂を厚さ30㎝に敷き詰めた上で埋め戻した。

２．その２

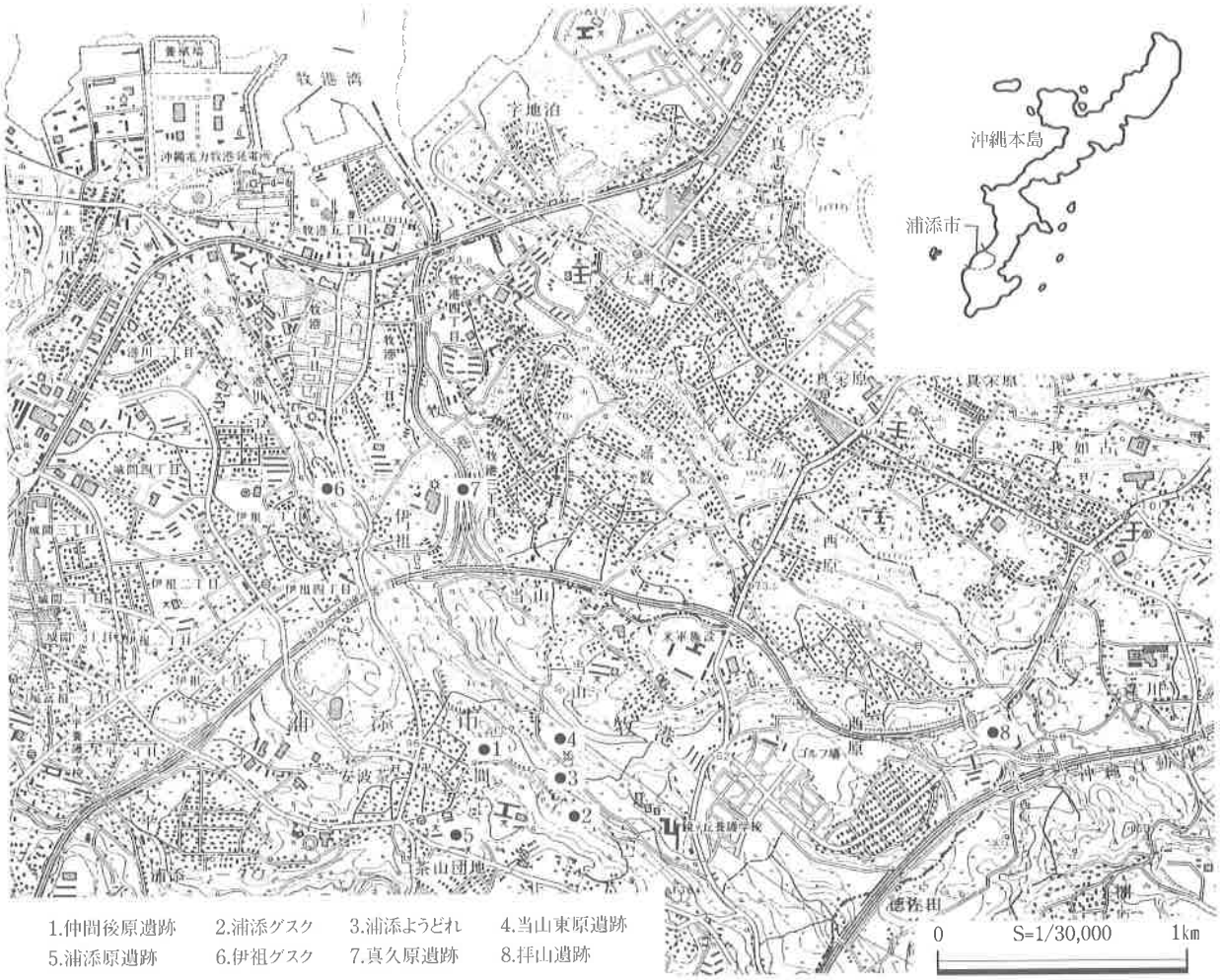
浦添大公園内において先述したＡゾーンとＢゾーンとでは同じ園内にもかかわらず行き来できる園路が建設されていなかったため、両ゾーンをつなげるための園路が数年度に渡って計画されてきた。2003年（平成15）度に計画された園路は、仲間集落から当山集落に抜ける道の途中、両側に石灰岩が露頭する場所である通称イシジョーより浦添城跡側の石灰岩提に計画され、平成13年度完成したガイダンス建設予定地までの総距離約348ｍ、総面積約1,048㎡に及ぶ広域な園路であった。

この園路が計画されている範囲は、平成13年度に行った試掘によりグスク時代の遺構を確認したこと及び、前述した仲間後原遺跡の範囲内であるとの見解から、事業主である中部土木事務所と協議を行い、市教育委員会は2003年（平成15）５月12日付にて沖縄県中部土木事務所より発掘調査についての依頼を受け、同年５月30日付で受諾の回答をした。それらの協議を踏まえて、同年６月２日付にて発掘調査の実施にかかる委託契約を締結した。

発掘調査は2003年（平成15）の８月13日から2004年（平成16）１月30日まで実施した。調査はイシジョーから浦添城跡に向かって当遺跡の範囲を確認しながら行うことにし、トレンチを20カ所設定した。そのうち、８カ所目のトレンチで東限が確認でき、グスク時代の遺物包含層及び遺構が検出された。また、平成13年度の試掘により確認した遺構がある範囲にはグリッドを設けて調査を行い、東西にアルファベットでＡ～Ｄ、南北に算用数字で１～16を設定した。

３．その３

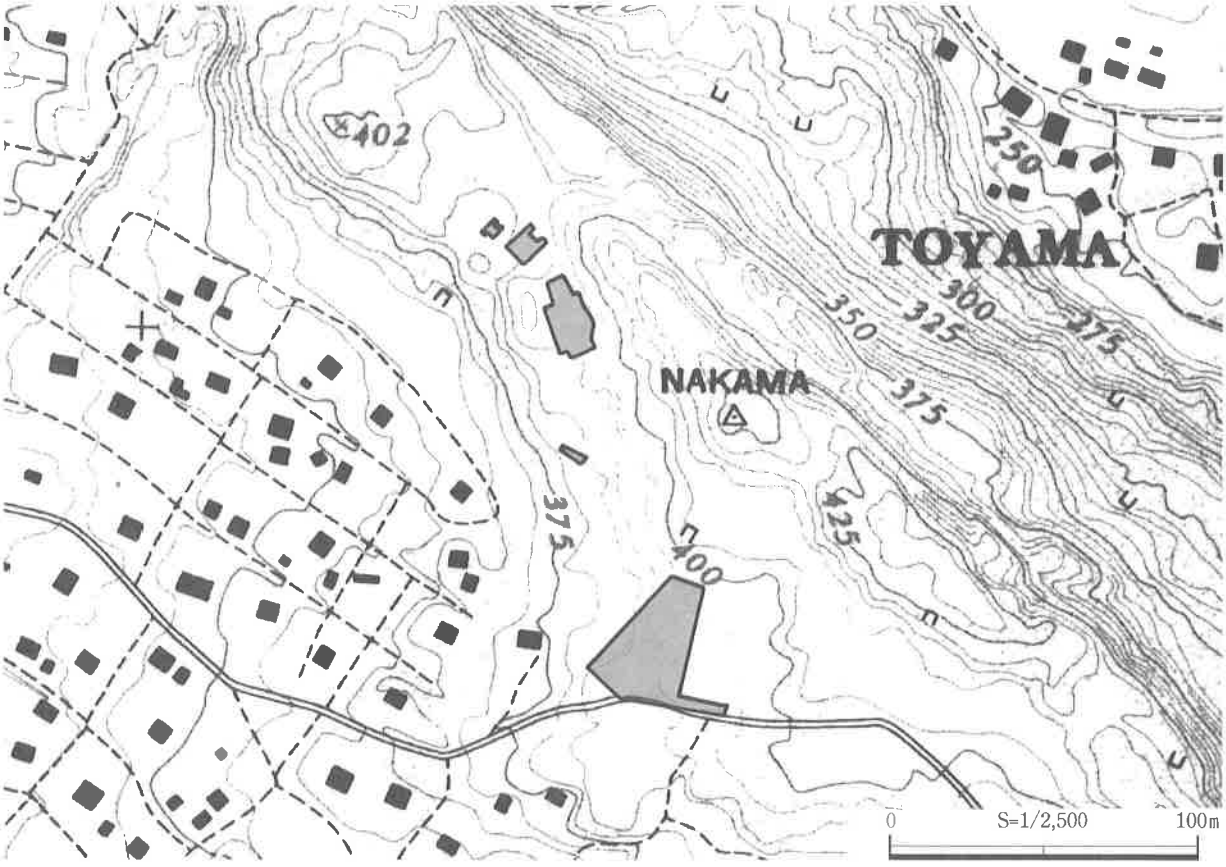
その３の調査は、浦添大公園Ａゾーン木かげの広場エリア園路整備工事に先だって行ったものである。この園路は展望広場から９号園路までを、平成15年度に発見されたハル石を横目に見つつ繋ぐため



第１図　仲間後原遺跡と周辺のグスク時代遺跡

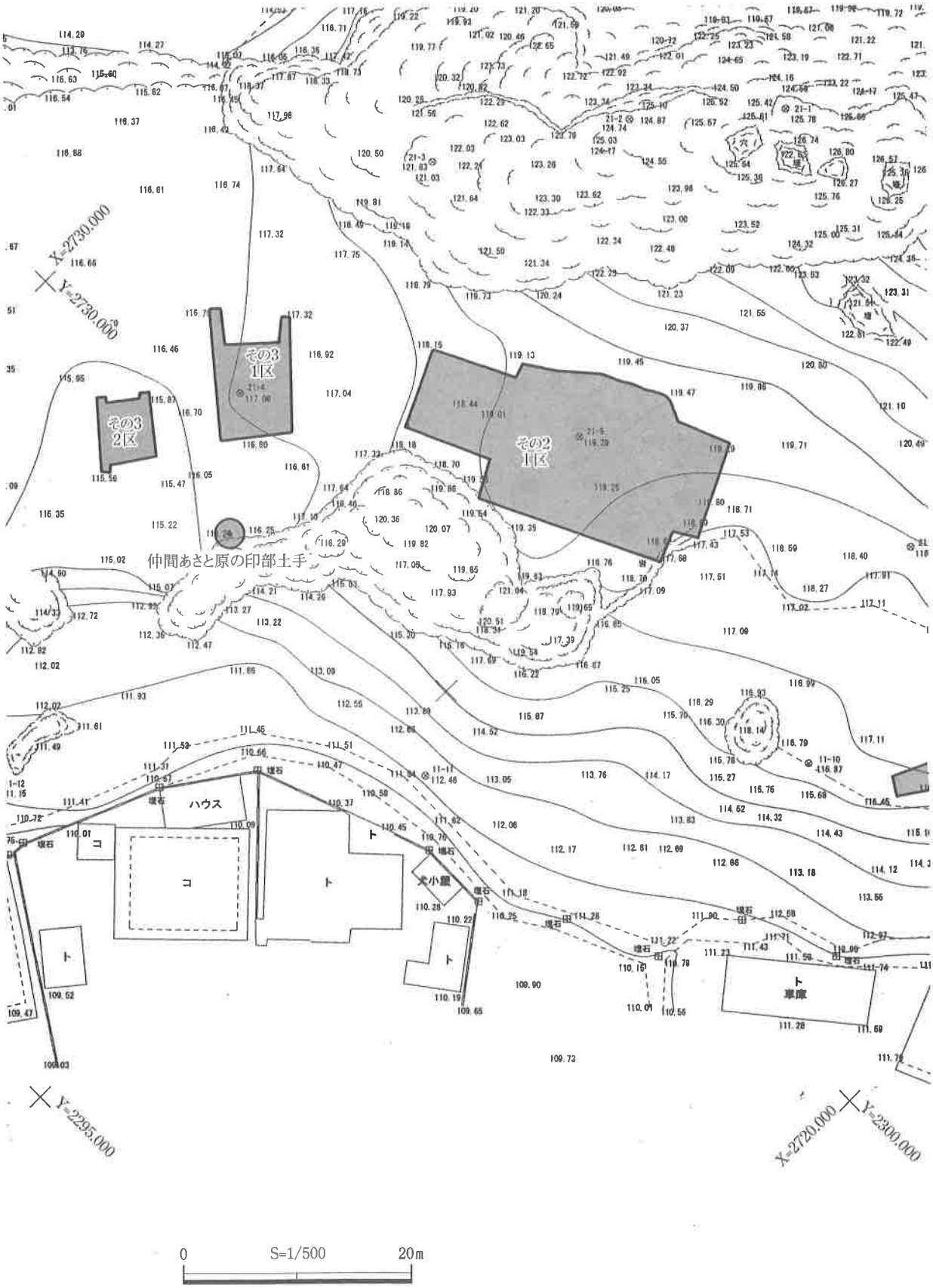
に計画されたものである。計画地内には仲間後原遺跡の存在が予想されたため、遺構の分布状況を把握することを目的として発掘調査を実施した。調査区は東側の１区（59㎡）西側の２区（28㎡）の２ヶ所（計87㎡）を設定した。発掘調査は2006年（平成18）１月10日から３月８日まで実施したが、同時期に他の発掘調査も並行して実施しているため、作業は断続的に行っている。

参考文献
安里進　1998「首里城以前の中山王城・浦添グスクの調査」『グスク・共同体・村　沖縄歴史考古学序説』
浦添市教育委員会　1983「親富祖遺跡」『浦添市文化財調査報告書』第３集
浦添市教育委員会　1984「浦添城跡第二次発掘調査概報」『浦添市文化財調査報告書』第６集
浦添市教育委員会　1985「浦添城跡発掘調査報告書」『浦添市文化財調査報告書』第９集
浦添市教育委員会　1986「自然・考古・産業・歌謡」『浦添市史』第六巻資料編５
浦添市教育委員会　1992「城間遺跡」『浦添市文化財調査報告書』第19集
浦添市教育委員会　2000『蘇る琉球国中山王陵浦添ようどれ』
浦添市教育委員会　2001「浦添ようどれ」『浦添市文化財調査研究報告書』第32集
浦添市教育委員会　2002『浦添ようどれ墓室見学会』
浦添市教育委員会　2003「当山東原遺跡」『浦添市文化財調査研究報告書』第33集
浦添市教育委員会　2005「浦添原遺跡」『浦添市文化財調査研究報告書』
沖縄県教育委員会　1985「牧港貝塚・真久原遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第65集
沖縄県教育委員会　1987「拝山遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第83集

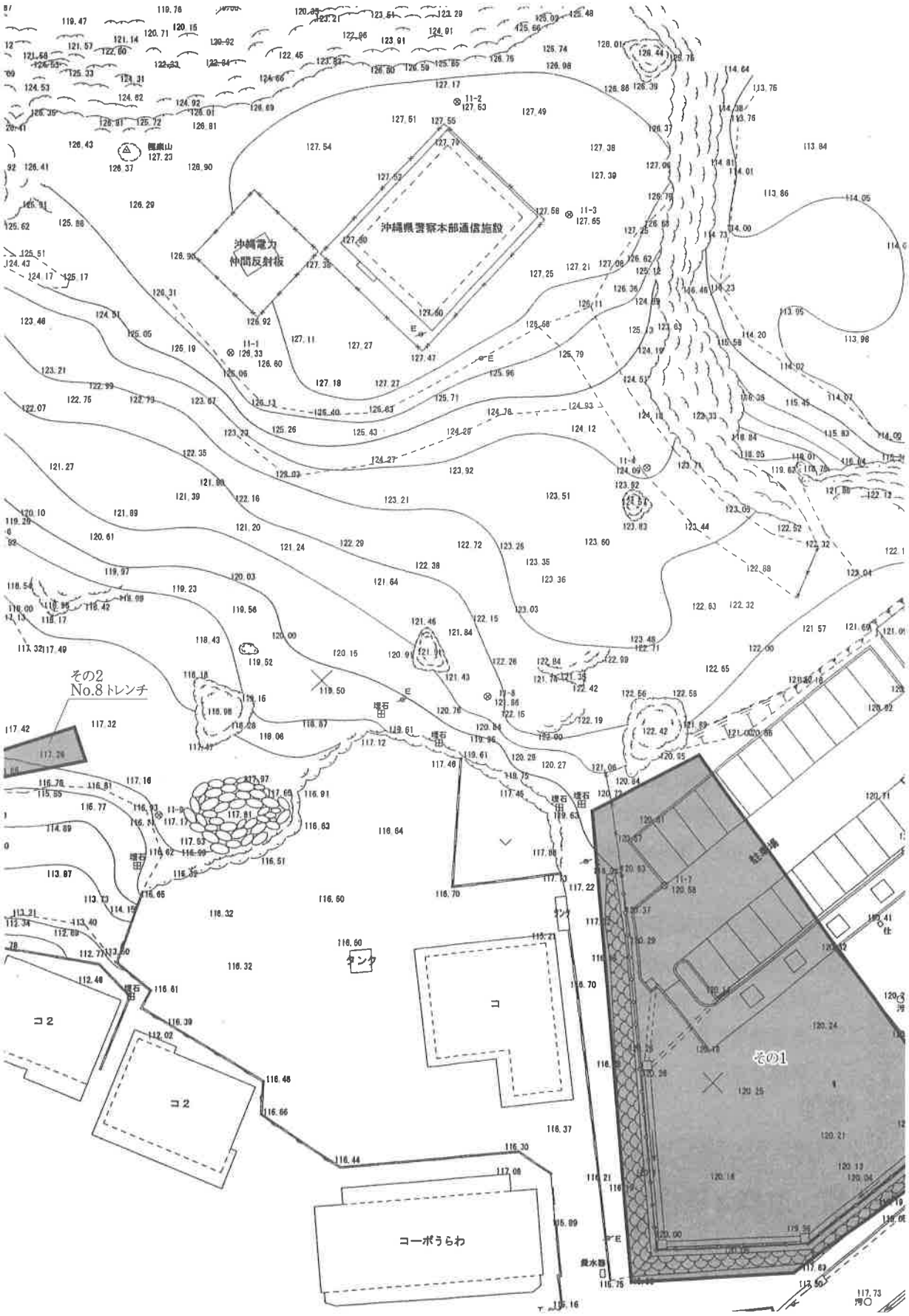


第２図　仲間後原遺跡の周辺地形（昭和20年代）

第３図　仲間後原遺跡の周辺地形（現況）


その3
1区
その3
2区
その2
1区
仲間あさと原の印部土手
ハウス
犬小屋
車庫
X=2730.000
Y=2730.000
Y=2295.000
X=2720.000
Y=2300.000
0
S=1/500
20m

第４図　調査区の位置


沖縄県警察本部通信施設
沖縄電力
仲間反射板
その2
No.8トレンチ
タンク
コ
コ2
コ2
コーポうらわ
その1

第２章　仲間後原遺跡（その１）調査成果

第１節　調査区内の地形と基本層序

第１章でも述べたように、今回の調査は浦添大公園Ａゾーンのエントランス造成に先立つものである。昭和10年代の土地利用図を見ると畑地として利用されていたことがわかる。

そもそも、今回のエントランス造成予定地の西隣には戦後しばらくまで「安波茶の殿」が存在しており、仲間村と安波茶村に住む人々の信仰の対象となってきた。安波茶村とは仲間村の西に位置する集落である。

安波茶村各門中は仲間村や浦添グスク内の御嶽なども拝したのに対し仲間村の巡拝は安波茶内の拝所へは及ばないこと、17世紀前半に作成されたとみられる『琉球石高究帳』に仲間村は見えるが安波茶村の名が見えないこと、安波茶村は屋号親安波茶家の先祖が小字安波茶原を碁盤目状に開発した集落であるとする伝承が残ることなどから、安波茶村は仲間村からの分村であると考えられている。このような背景から、安波茶の殿と仲間後原遺跡との関係は興味を引かれるところである。

発掘調査着手以前の当地は緩やかな斜面地であったが、発掘調査によって実際に土を掘り下げるとこの斜面はほぼ姿を消し、変わりに巨大な石灰岩の岩盤が姿を現した。そのため、調査区内は石灰岩岩盤によって画された標高120mの北側平場と、一段下がった標高117～118mの南側平場という地形で構成されるということになる。なお、南側の「平場」は厳密に言うと平坦ではなく、調査区わきを通る仲間線同様、東に向かって緩やかに傾斜している。

発掘調査の結果、北側平坦面はピットが集中しており、南側平坦面は戦後に破壊された部分が目立つものの、溝やピットが存在することが確認できた。断面観察は調査区の西側断面と中央の東西方向に残したアゼ断面で行った。基本的な層序は３層で、層名は上層から下層へ順に番号を付与した。

第Ⅰ層　層の厚さ50～80cmの撹乱層である。

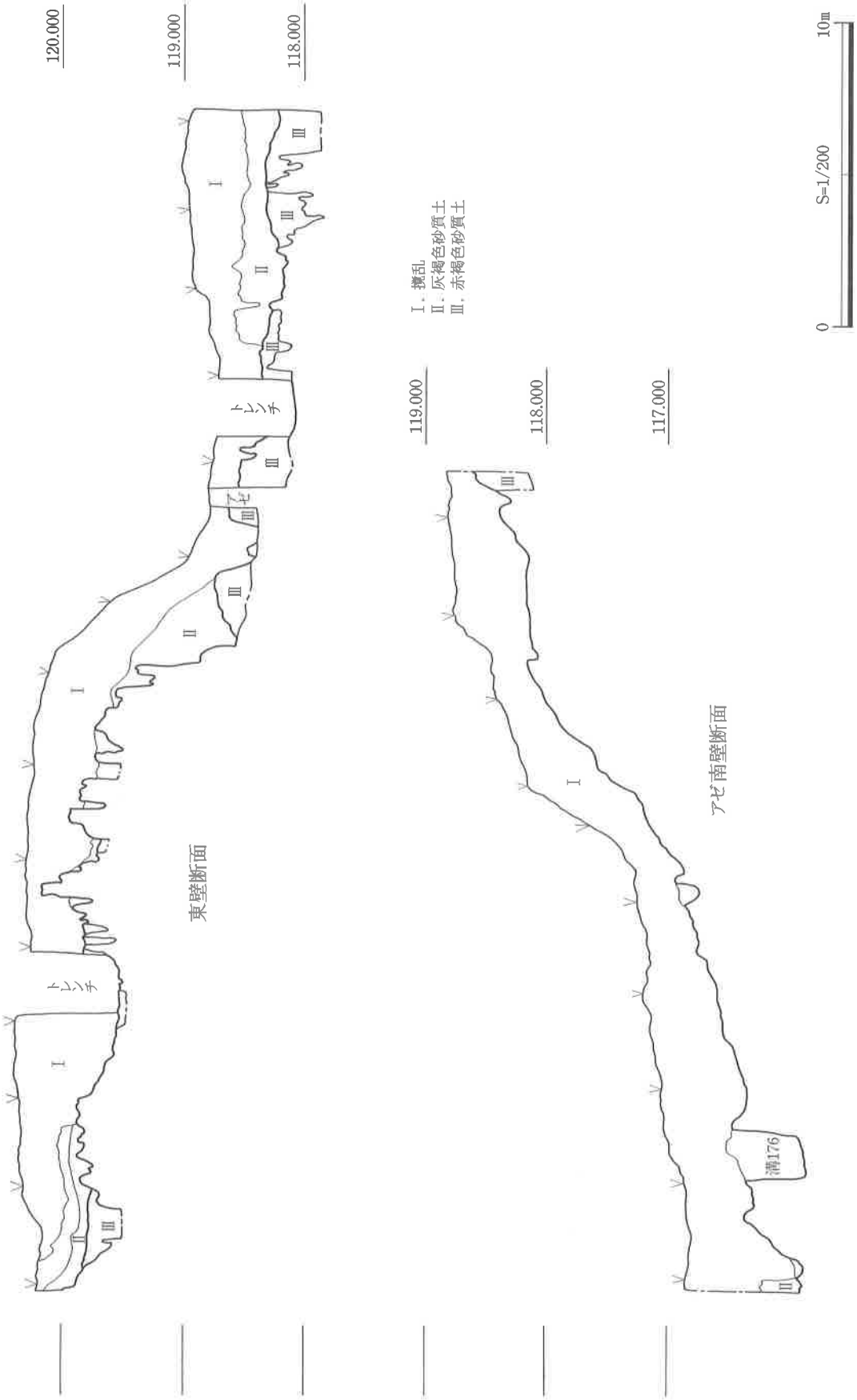
第Ⅱ層　灰褐色砂質土の遺物包含層で、層の厚さ20～40cmである。戦後は広範囲にわたって撹乱を受けたようで、残存状況は極めて悪い。

第Ⅲ層　無遺物層である赤褐色砂質土である。いわゆる沖縄の方言のマージで、当層の下は石灰岩の岩盤となる。

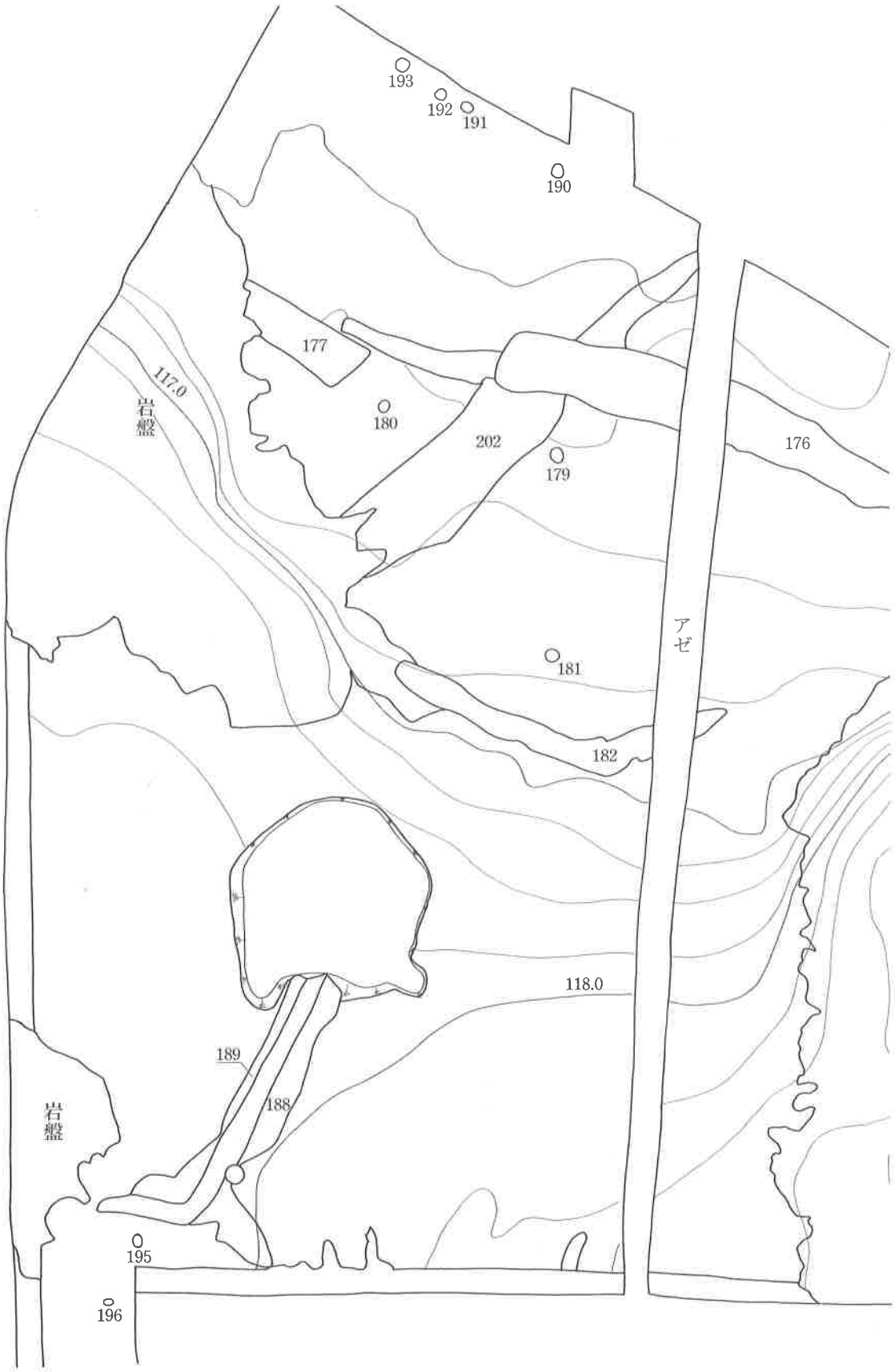
第２節　遺構と遺構内出土遺物

遺構の概要

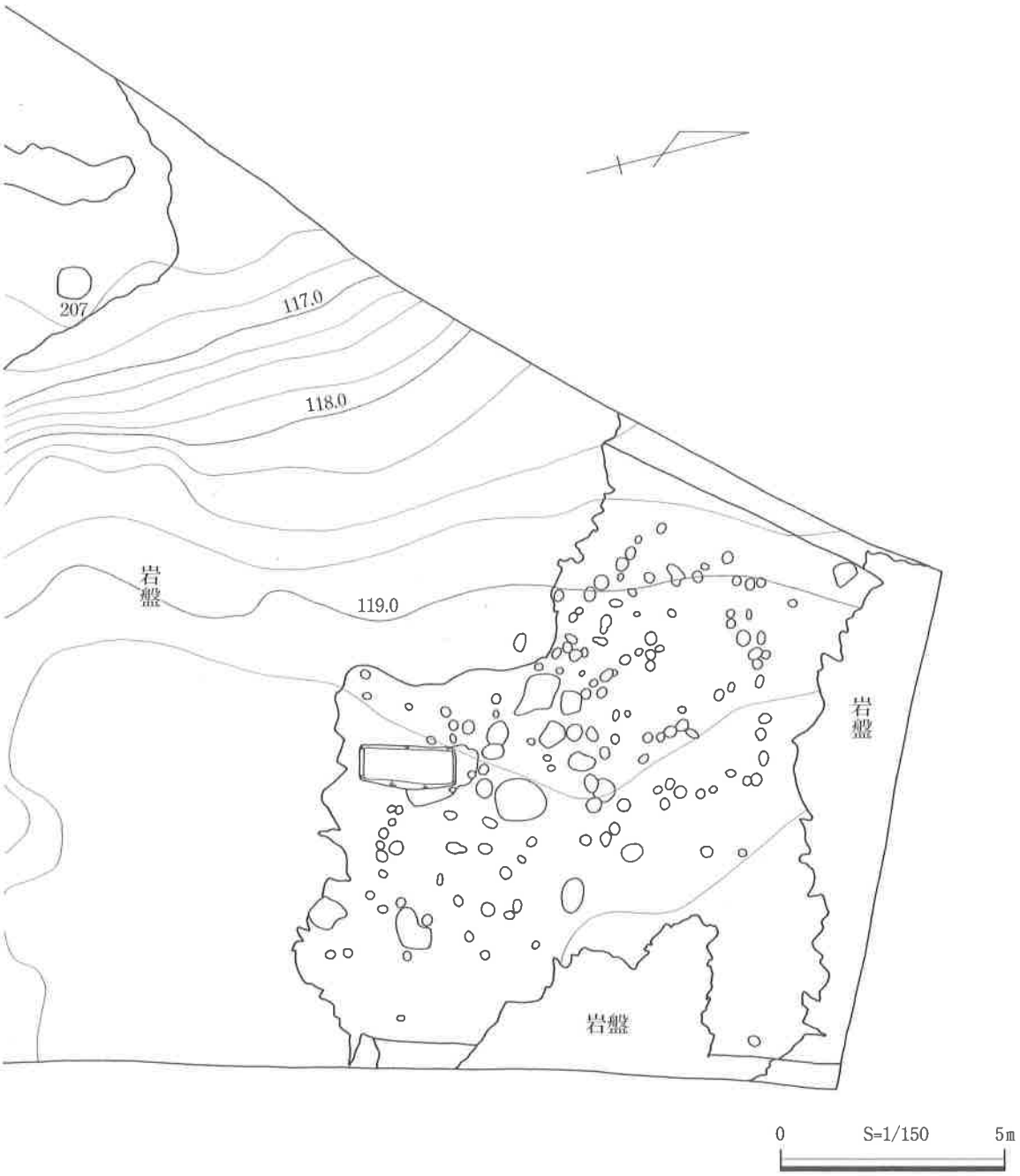
今回の仲間後原遺跡の発掘調査では、１つの遺構面を調査した。遺構には遺構の種類にかかわらず通し番号を付し、機械的に割り振った。発掘調査中に番号を付与した遺構は207を数えるが、うち31は調査の進行とともに遺構ではないと判断されたため、最終的な遺構の数量は176である。確認した遺構のう

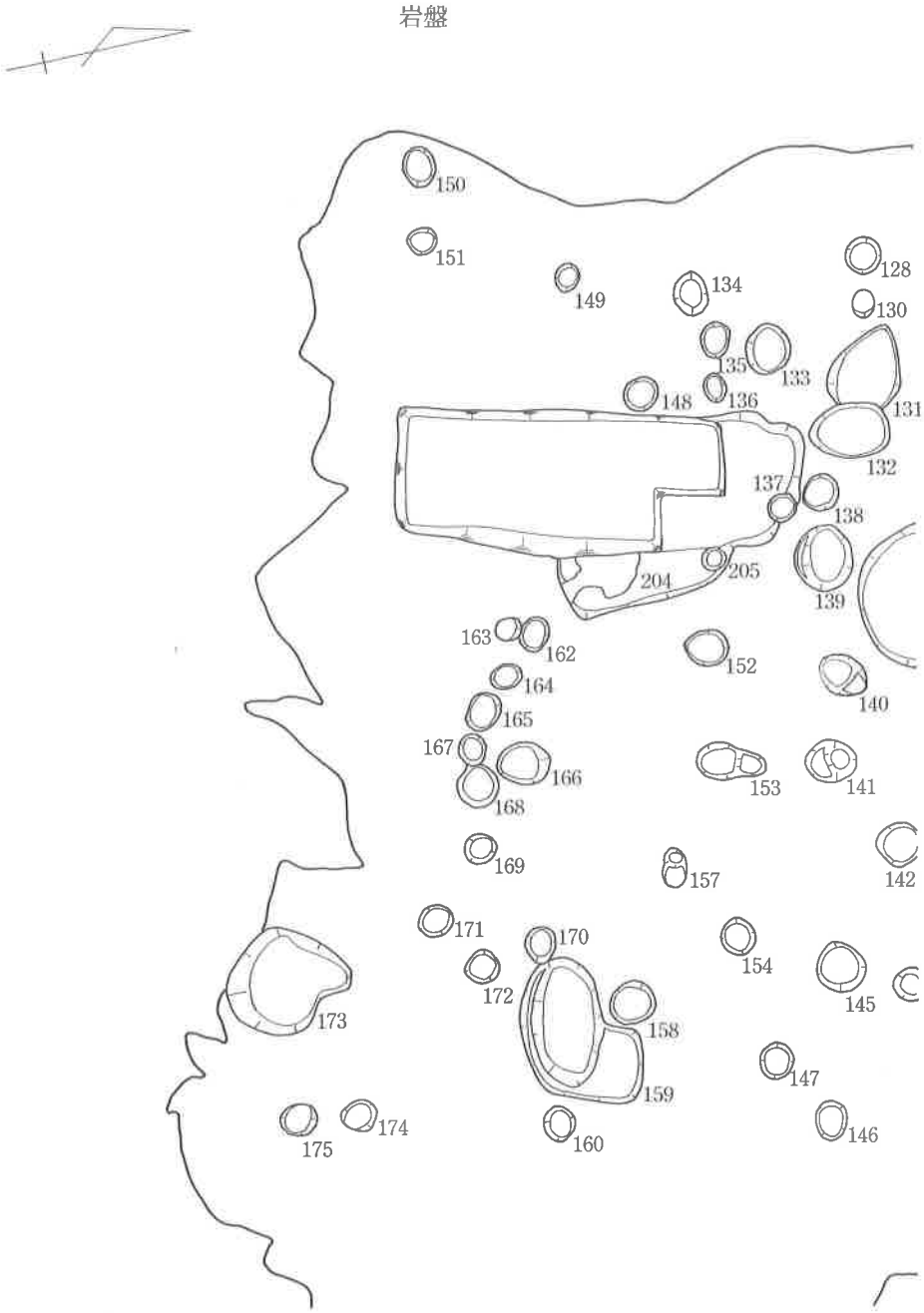


第５図　調査区断面図（縦 1/50・横 1/200）

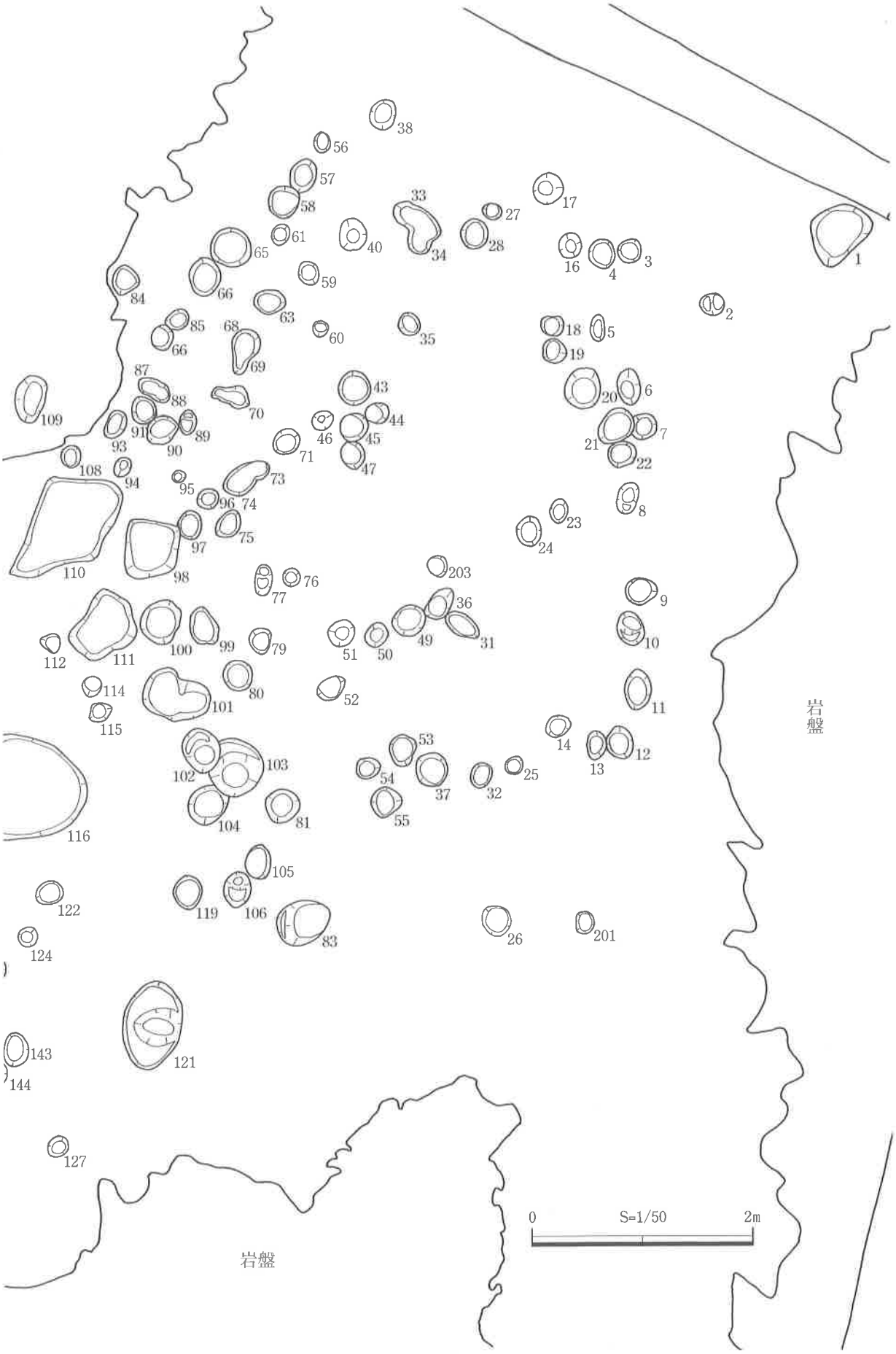

193
192
191
190
177
117.0
岩盤
180
202
179
176
アゼ
181
182
118.0
189
188
岩盤
195
196

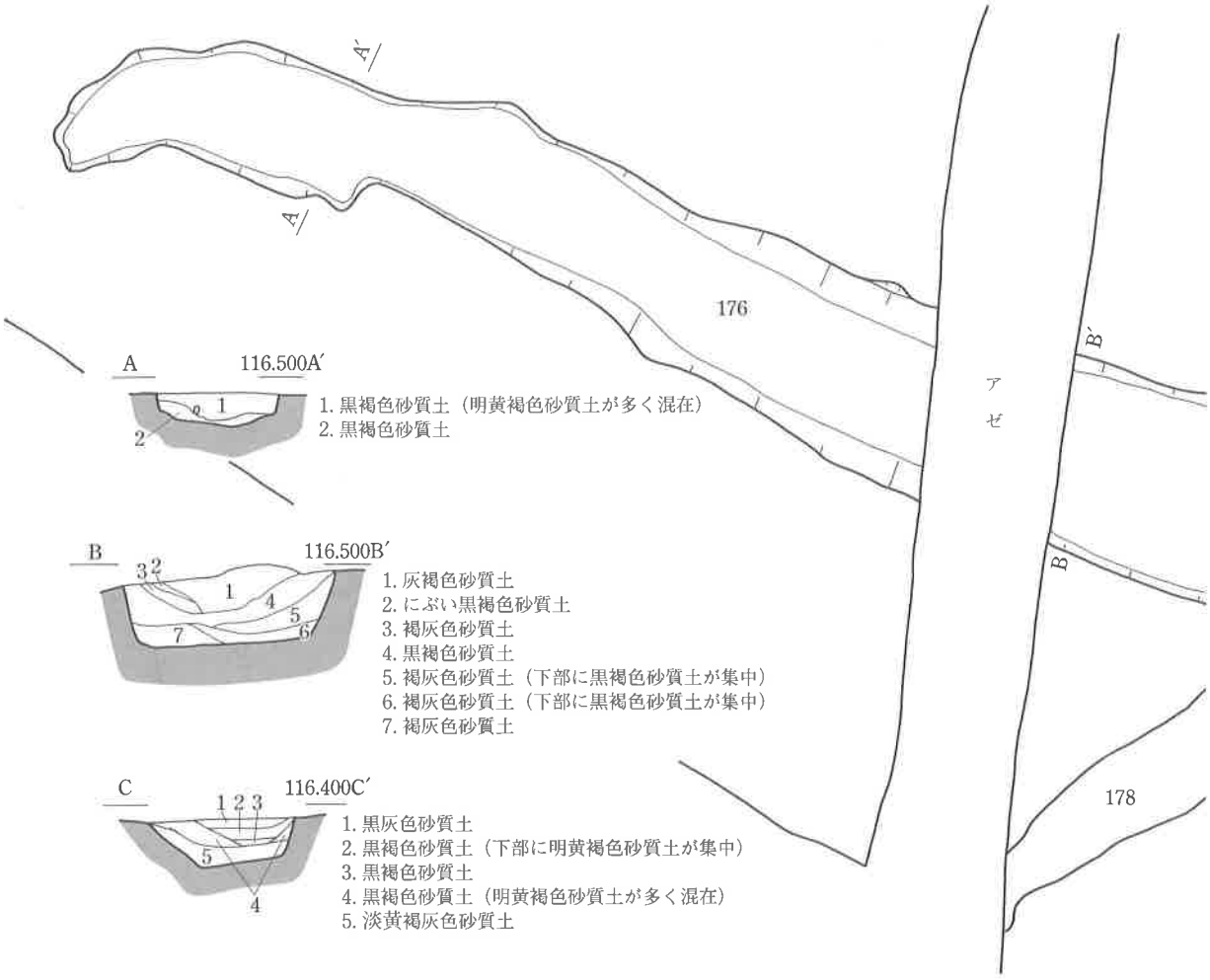
第６図　調査区平面図


207
117.0
118.0
119.0
岩盤
岩盤
岩盤
0
S=1/150
5m



第７図　北側遺構群平面図


岩盤
岩盤
0
S=1/50
2m



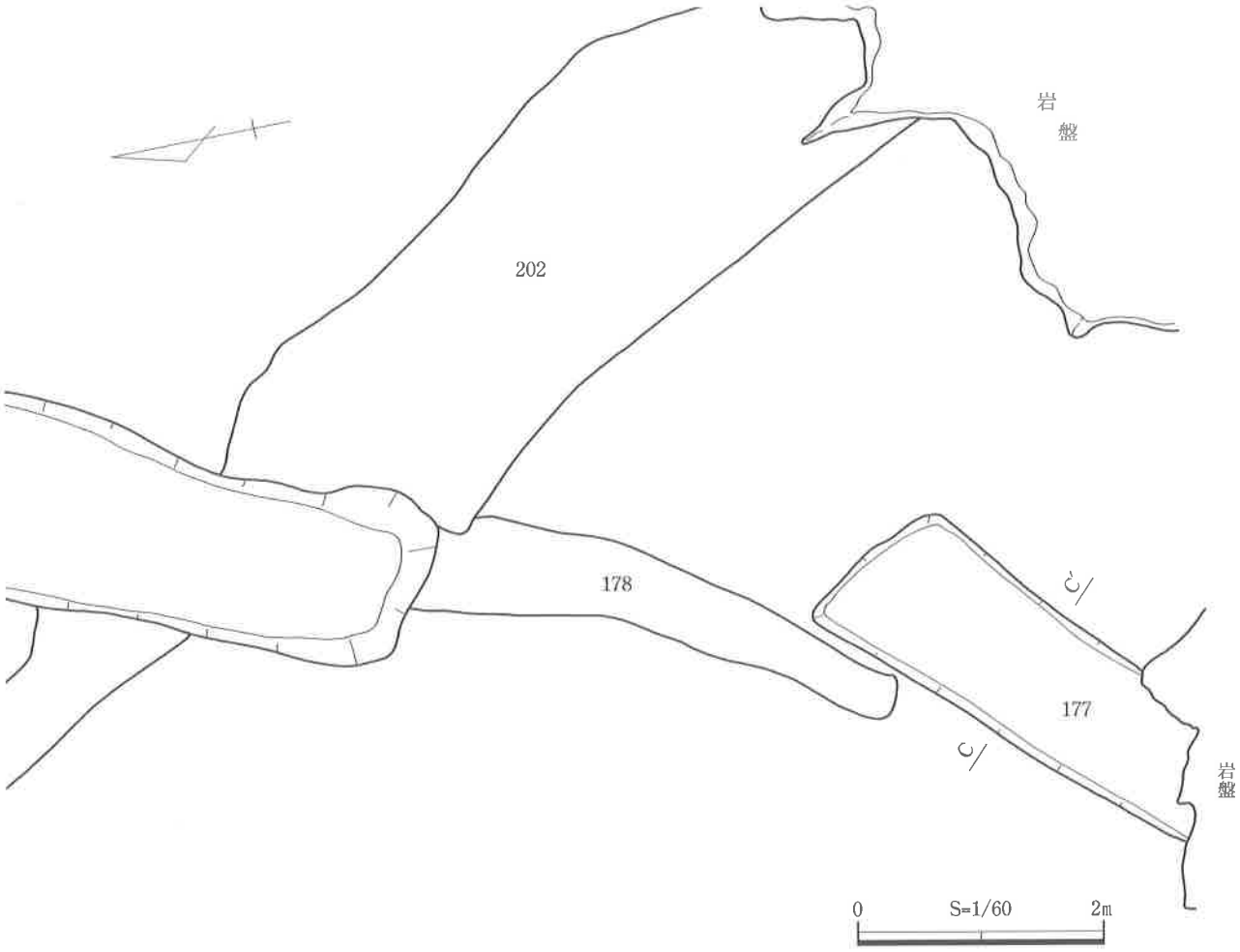
第８図　溝176・溝177遺構実測図

ち遺物が出土した遺構は、近世に属する一部の溝を除きほとんどがグスク時代のものである。また、遺物が出土していない遺構についてもグスク時代に属する可能性が高い。遺構は溝や土坑、ピットなどを確認しているが、溝は南側に、土坑やピットは北側に集中している。以下、主要な遺構について記述する。

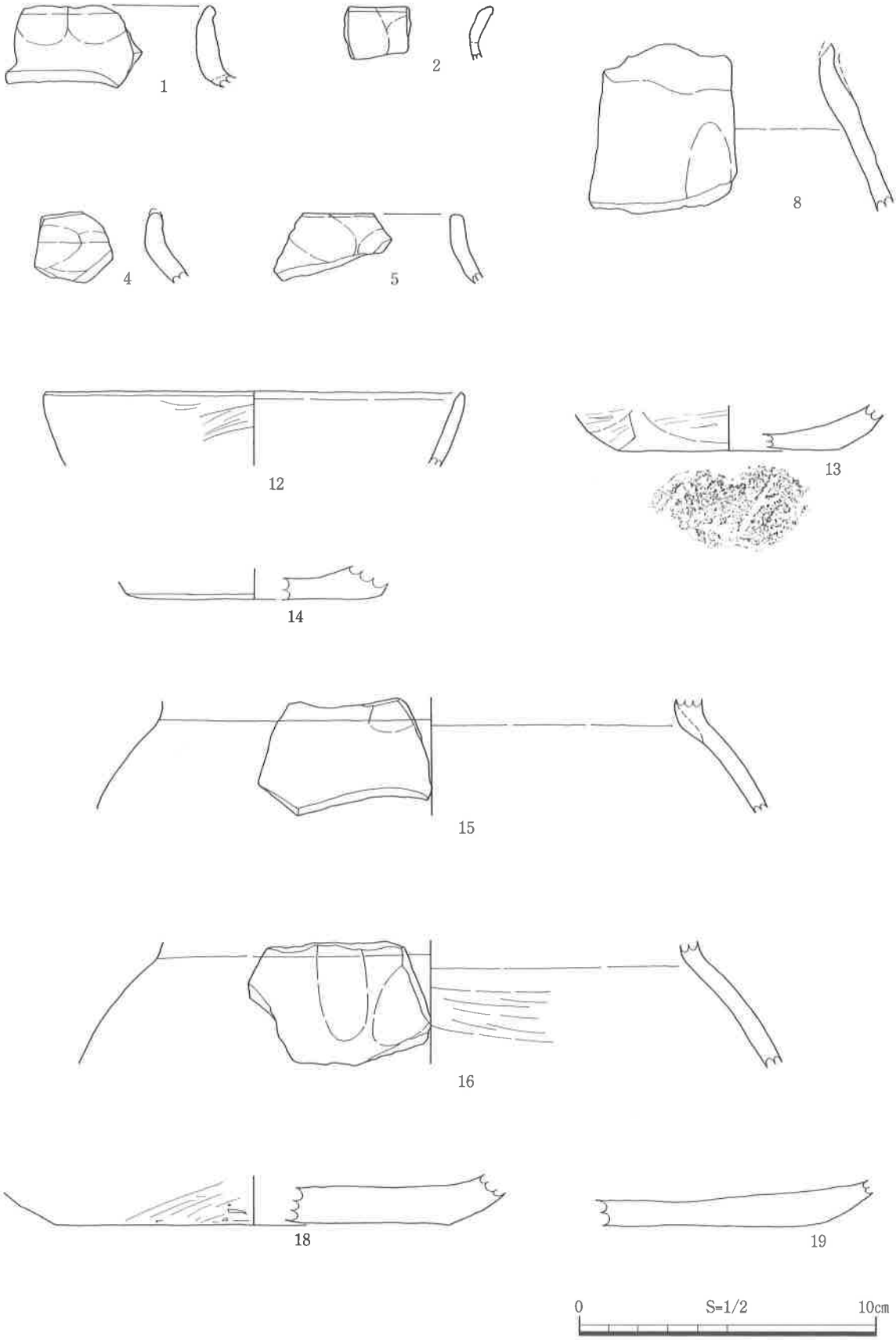
溝176（第８・９・10・11・12図　図版３・４・15・16・17・18）

遺構　調査区の南西で確認した溝で、長さ13.3m、幅155cm、深さ54cm。北東から南西方向に延び、南西側は深く、幅も広く掘り込まれるのに対し、北東側へ行くに従い徐々に浅く、狭くなっていく。溝177とは3.3mの空白地をもって画されている。埋土は灰褐色および黒褐色砂質土である。

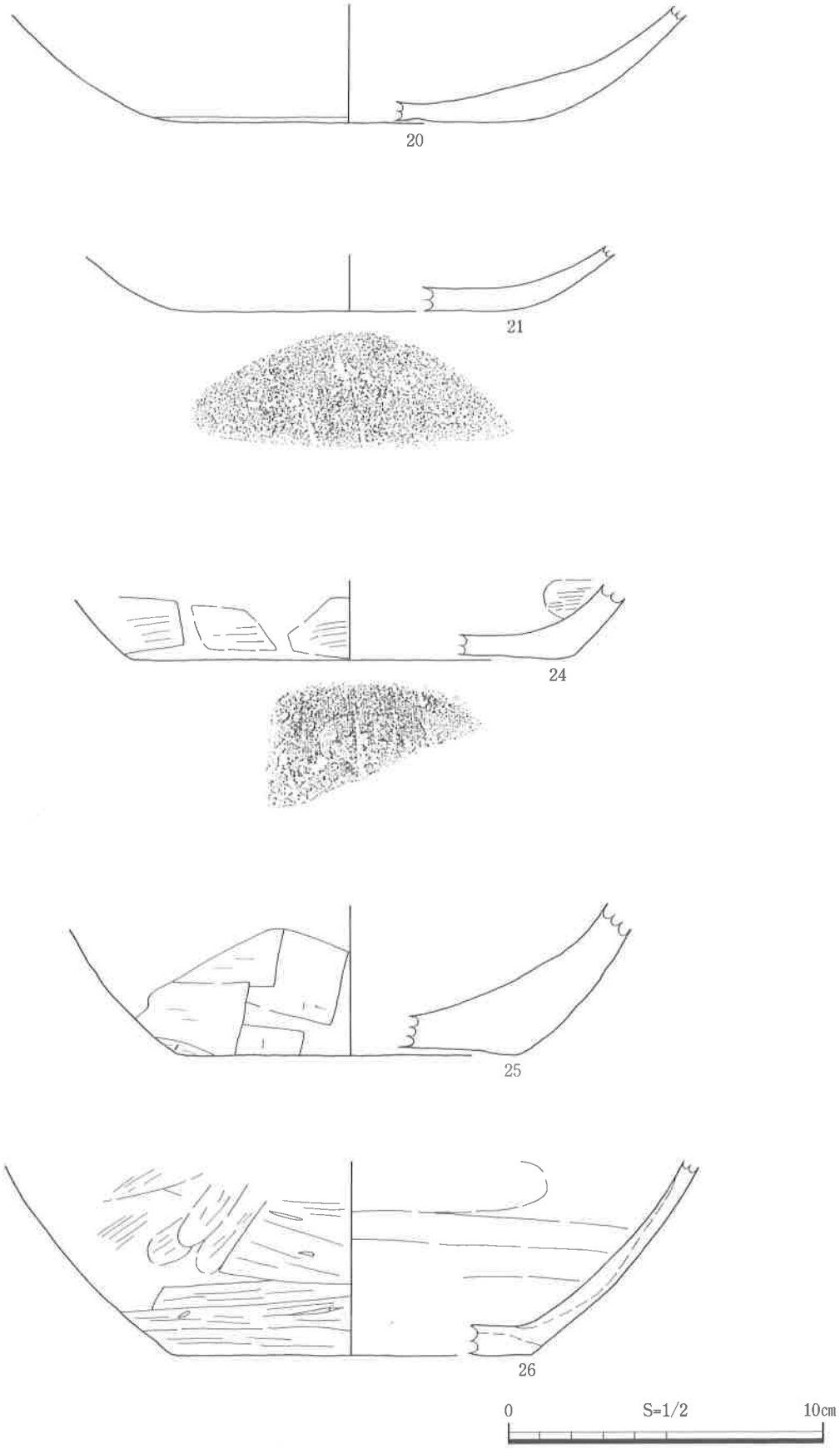
遺物　遺物の出土量は多く、コンテナ３箱分に達する。その内訳は土器片215点、カムィヤキ片４点、青磁片７点、白磁片９点などである。１、２、４、５、８、12～16、18～21、24～27はグスク土器。１は壷の口縁部。外面は指頭圧痕が認められ、内面はナデ調整か。径１㎜の暗灰色細砂をわずかに含む。２、４、５、８、15、16は甕。２は外面に指頭圧痕が認められる。内面も指頭圧痕か。微細な黒色粒を少量含む。４は内外面に指頭圧痕が認められる。混入物は少ない。５は内外面に指頭圧痕が認められる。径１～２㎜の赤褐色粒を含み、器面はアバタ状となる。８は頚部から口縁部へ移行する部分で、口縁部側は剥れのため擬口縁となる。径２～４㎜の赤褐色粒を多く含み、器面はアバタ状となる。内外面



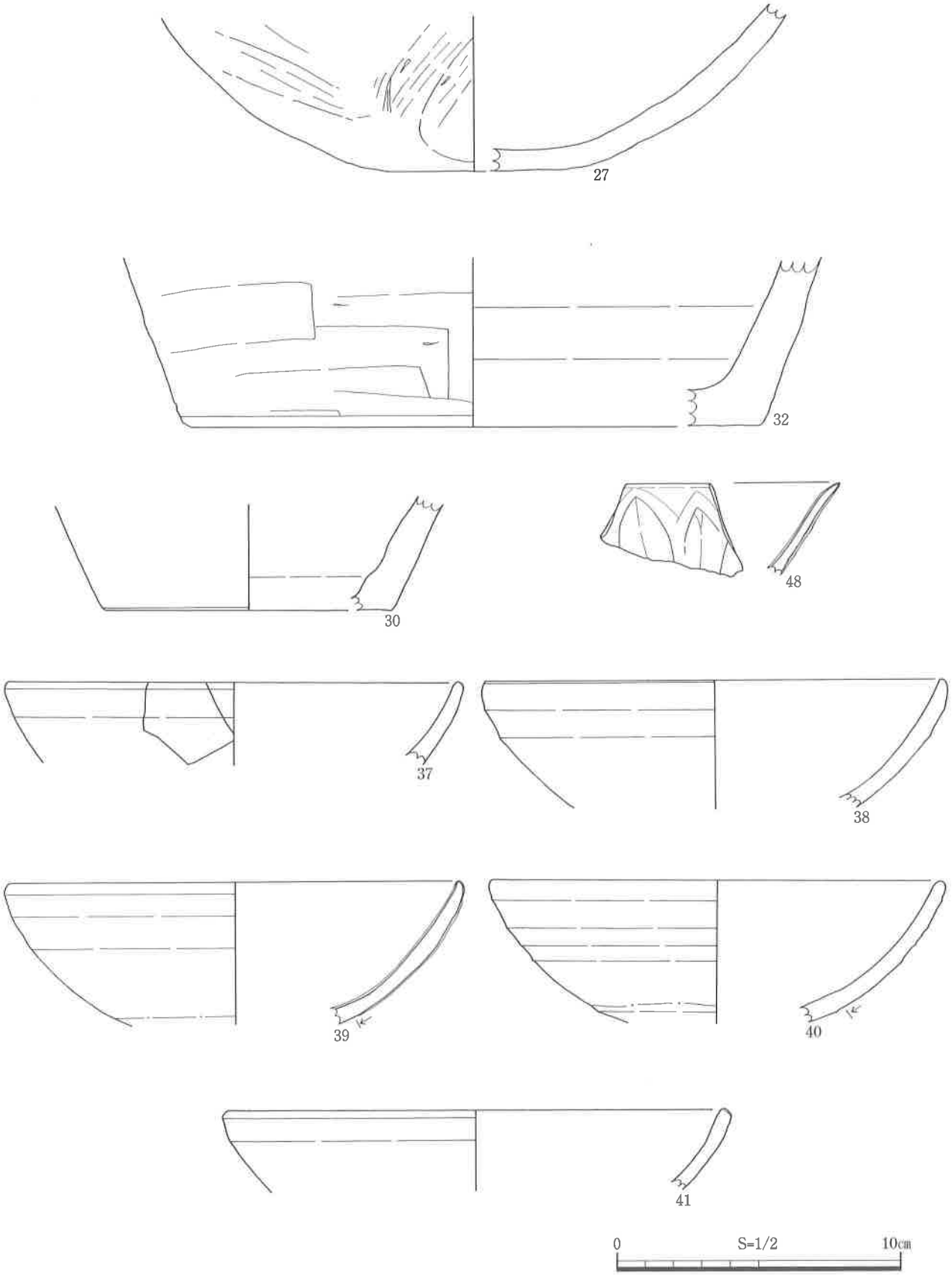
ともナデ調整か。15も頚部から口縁部への移行部。屈曲部には粘土を継ぎ足した痕跡が明瞭に残る。径1～2㎜ の赤褐色粒を多く含む。内外面とも指頭圧痕が認められる。16も頚部から口縁部への移行部で、外面は指頭圧痕、内面にはハケ目状の調整痕がみられる。径1～2㎜の赤褐色粒や白色細砂を多く含む。12はやや内湾する碗の口縁部。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。混入物は少ない。13と14は碗の底部資料。13は外面がヘラケズリ、内面はナデ調整。径2～3㎜の赤褐色粒を含む。器面はアバタ状となる。底部に葉痕が残る。14の器面調整は不明。径2～4㎜の赤褐色粒を含む。18～21、24～27は底部資料。18～21は底部から胴部への立ち上がりが大きく開くもの。18は外面がヘラケズリ、内面はナデ調整。径2～5 ㎜ の赤褐色粒を多く含む。器面はアバタ状となる。19は内外面共にナデ調整か。微細な黒色粒を多く含む。20は内外面共にナデ調整か。径2～5㎜ の赤褐色粒や微細な黒色粒を多く含む。21は内面がナデで、外面もナデ調整か。微細な黒色粒を多く含む。底部に葉痕が残る。24～26は底部から胴部への立ち上がりがやや内側に閉じるもの。24は外面がヘラケズリ、内面はナデ調整。胎土は精製されており、微細な黒色粒以外は観察できない。底部に葉痕が残る。25は外面が非常に粗いヘラケズリ、内面はナデ調整。径2～5㎜の赤褐色粒を多く含む。器面はアバタ状となる。26は外面がヘラケズリ、内面はナデ調整。径2～5㎜の赤褐色粒や白色細砂を多く含む。27は底部から胴部への移行部が非常に緩やかなもの。外面はヘラケズリ、内面はナデか。径2～5㎜の赤褐色粒を多く含む。30と32はカムィヤキ壷の底部。30は立ち上がりが直線的なもので、陶胎断面の中央部分は赤褐色を呈す



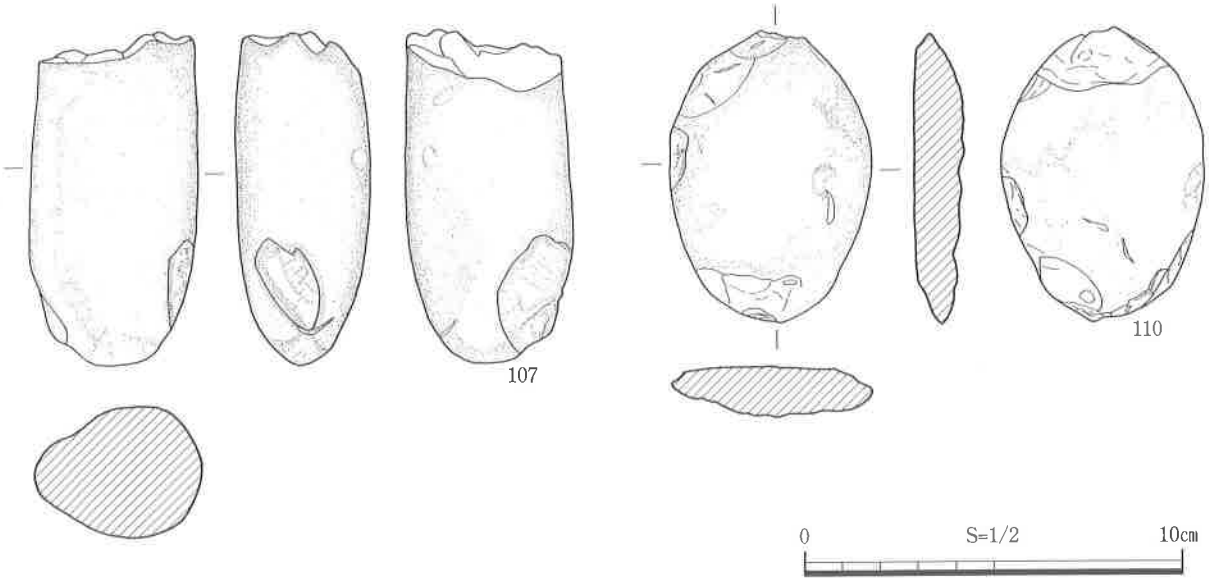
第９図　溝176遺物実測図（1）



第10図　溝176遺物実測図（2）



第11図　溝176遺物実測図（3）

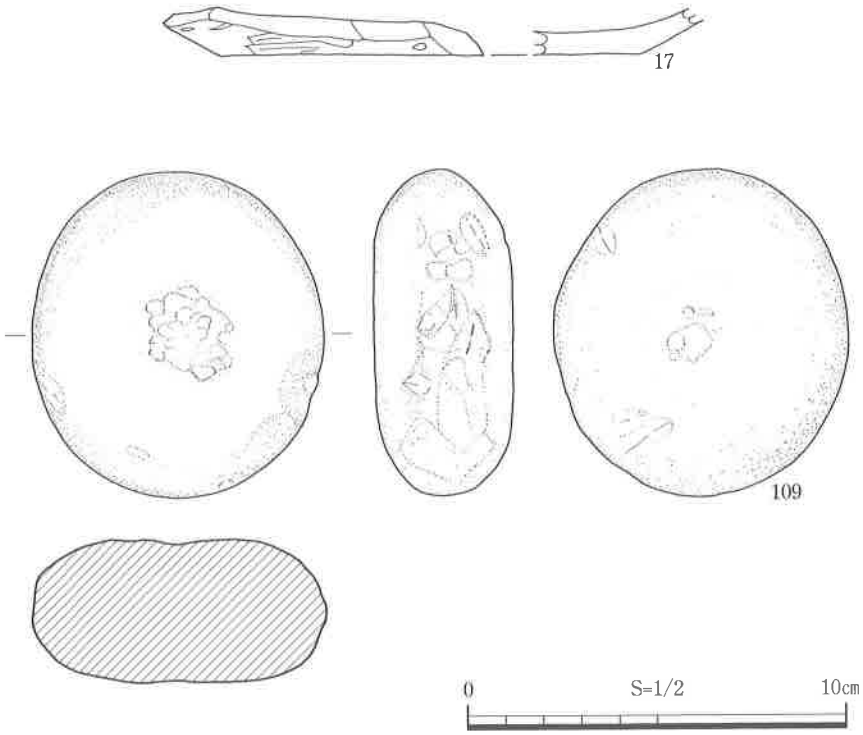


第12図　溝176遺物実測図（4）

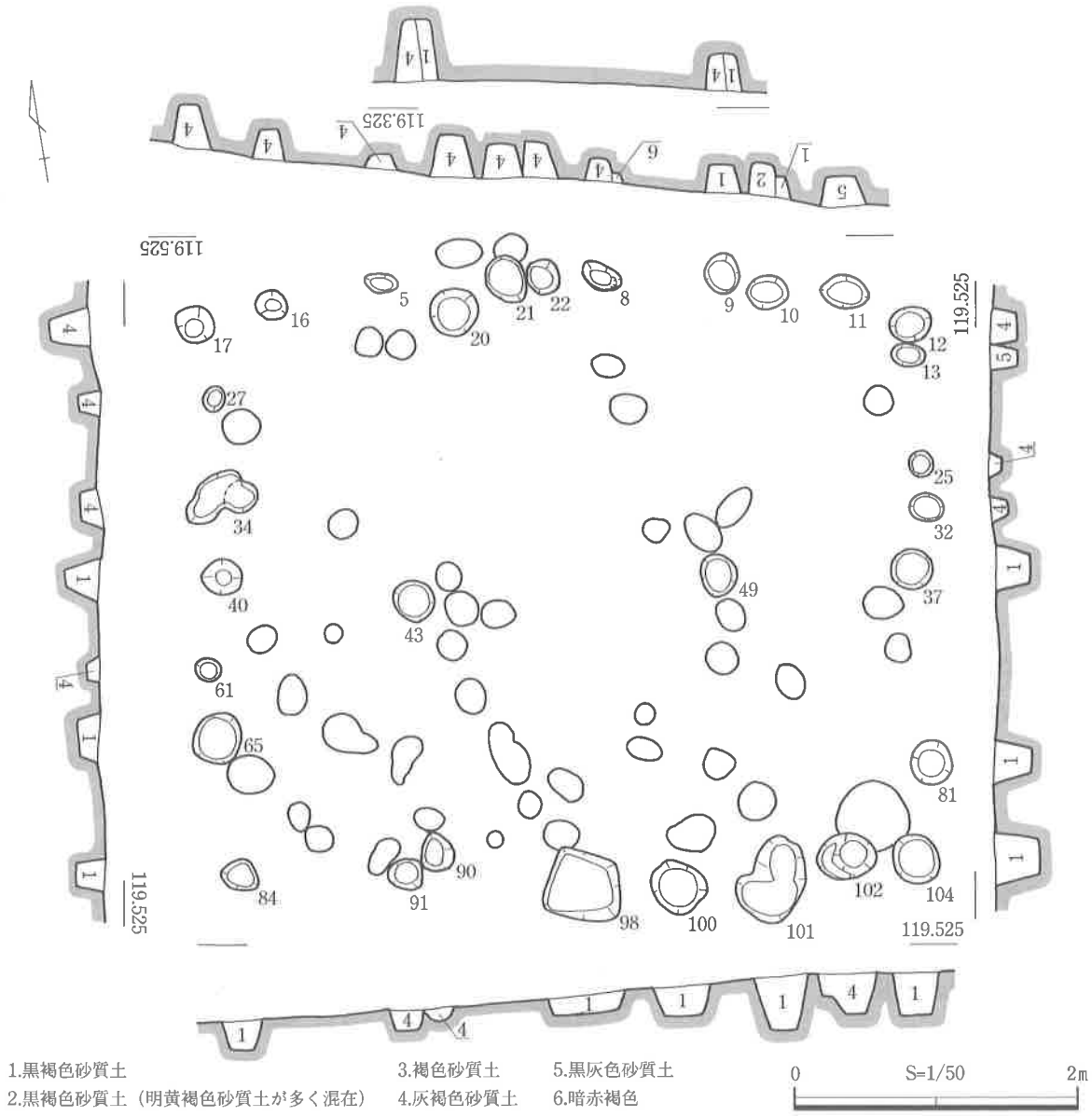
る。外面には回転ヘラケズリがわずかに認められ、内面にはナデが認められる。32も底部からの立ち上がりが直線的で、外面には回転ヘラケズリ、内面には指ナデが認められる。48は鎬蓮弁文碗の口縁部。37～41は白磁の碗で、ビロースクタイプ。107は棒状の石製品で、砥石として使用されたものか。片面の上下方向にくぼみが観察される。片方の端部を欠失していることから、何らかの製品を砥石として二次使用したものと考えられる。残存した端部には敲打痕などの使用痕はみられない。緑色片岩製。110は緑色片岩製の扁平な石斧状石製品。平面形は卵型をしており、卵の先端に当たる部分の縁辺に階段状剥離様の潰れがみられることから、こちら側が使用されたものと考えられる。オモテ面は丁寧に研磨されており、ウラ面は剥離痕を残す。縁辺には成形時の敲打痕がみられる。

溝177（第８・13図　図版５・17・18）

遺構　調査区の南西で確認した溝で、長さ3.2m、幅115cm、深さ35cm。溝176と同じく北東から南西方向に延びるが、南西側は石灰岩岩盤によって途切れている。埋土は黄褐色および黒褐色砂質土である。



第13図　溝177遺物実測図



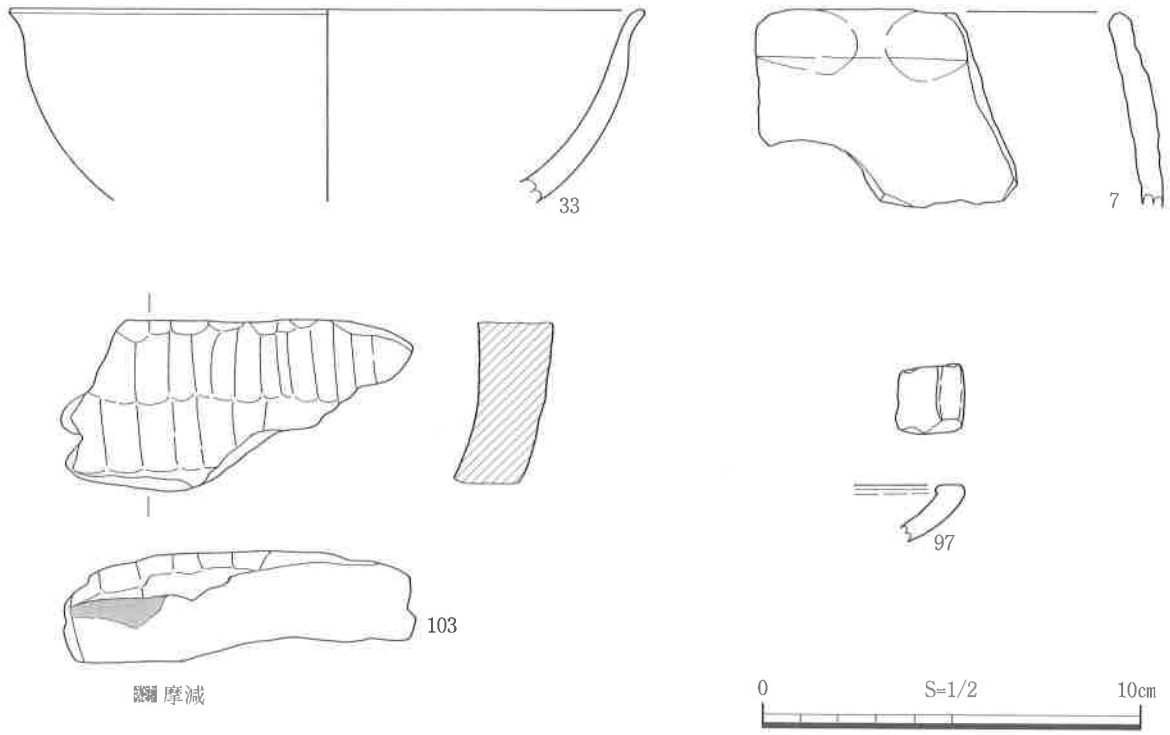
第14図　掘立柱建物１遺構実測図

遺物　出土遺物は土器片28点、青磁片１点、石器１点である。17は形式不明の土器底部。外面立ち上がり部はヘラケズリ、外底は無調整で、内面はナデ調整である。109は砂岩製の凹石で、両面や側面に打痕が見られる。

掘立柱建物１（第14・15図　図版６・７・８・17・19）

遺構　ピット17、16、５、21、22、８、９、10、11、12は調査区北部にあり、東西に並ぶピットである。これらのピットの並びを基準に東西５m、南北４mの掘立柱建物を想定した。まずピット12から南へはピット13、25、32、37、81、104が、ピット17から南へはピット27、34、40、61、65、84が、ピット84から104へはピット91、90、98、100、101、102が並ぶ。なお、ピット43と48は中柱として想定した。ピット検出面は西に向かって緩やかに傾斜している。

本報告では掘立柱建物としたが、柱通りが良いとはいえないことや、柱間の間隔・ピット底面がまちまちであることなど、掘立柱建物とするには躊躇を覚えざるを得ないのも事実である。



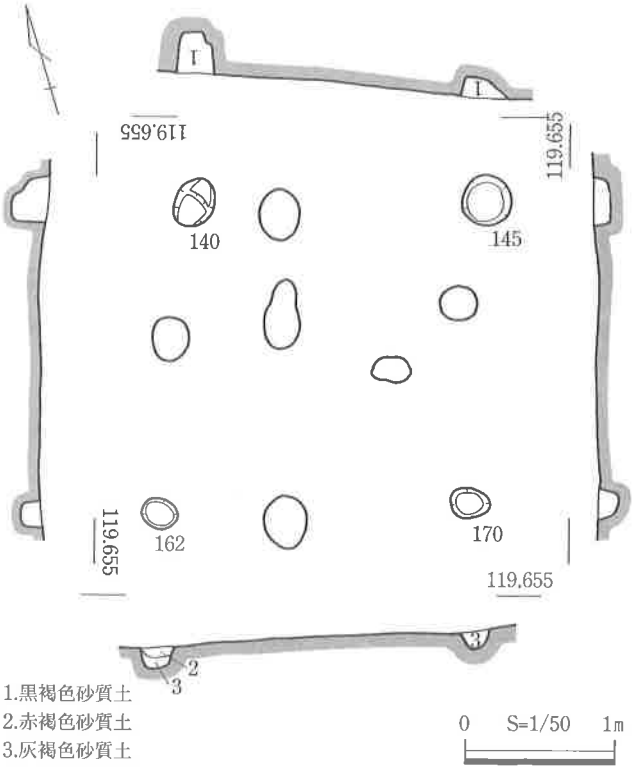
第15図　掘立柱建物１遺物実測図

遺物　33は腰の張る白磁無文外反碗で、ピット40から出土した。７、103はピット９から出土した。７は鉢形土器の口縁部である。器壁は凹凸が顕著で、口縁外面には指頭圧痕がみられる。内面も指頭圧痕か。口唇部断面はやや舌状をなすが、一部では平坦面も認められる。103は滑石製石鍋口縁部の破片である。破損部分の一部には摩滅が認められる。97はピット102から出土した半練蓋。端部を折り曲げ、上面を平坦に仕上げる。

掘立柱建物２（第16図）

遺構　掘立柱建物１の南東方約2.5mに位置するピット140、145、162、170から、東西１間（1.9～2.0m）、南北１間（2.0m）の掘立柱建物を想定した。柱穴の径は20～30cm、検出面からの深さは15～25cm。埋土は灰褐～黒褐色砂質土である。

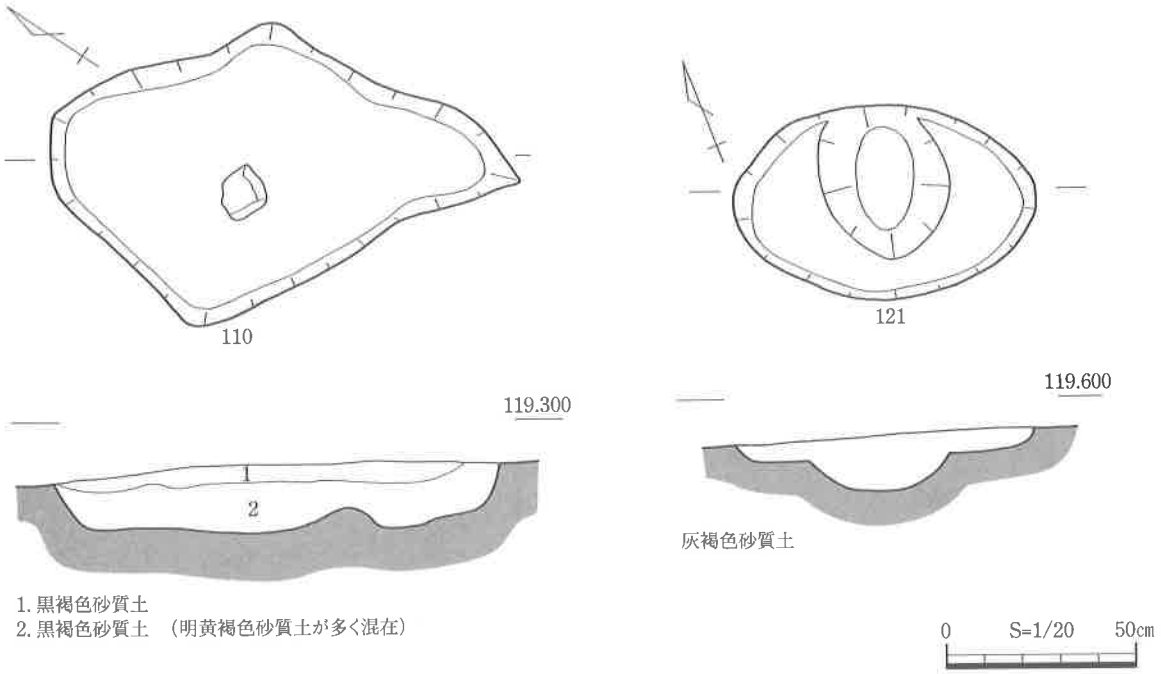
遺物　出土していない。



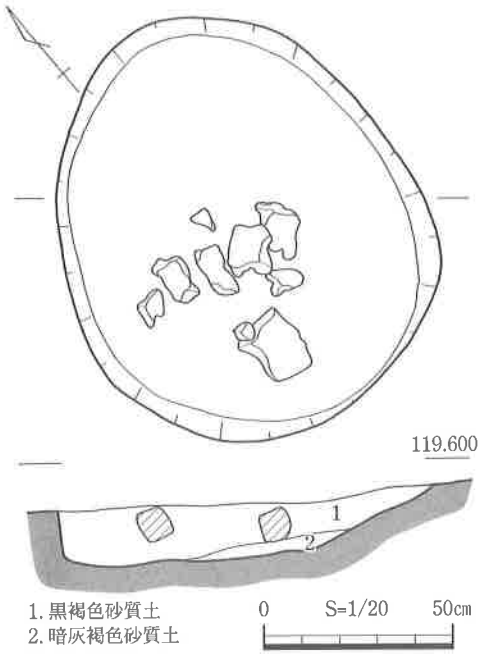
第16図　掘立柱建物２遺構実測図

土坑110（第17図　図版９）

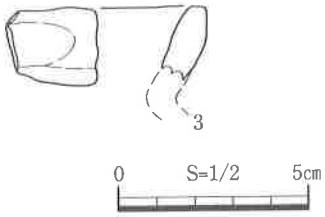
遺構　長径126cm、短径84cm の北西－南東方向に主軸をもつ菱形の土坑である。遺構確認面からの深さは18cm を測り、底面はほぼ平坦である。埋土は上下の２層に分かれてお



第17図　土坑110・土坑121遺構実測図



第18図　土坑116遺構実測図



第19図　土坑116遺物実測図

り、上層は黒褐色砂質土、下層は、赤褐色砂質土が多く混在する黒褐色砂質土である。遺構中央から泥質砂岩片が１点出土した。

遺物　土器片２点および泥質砂岩片１点が出土した。

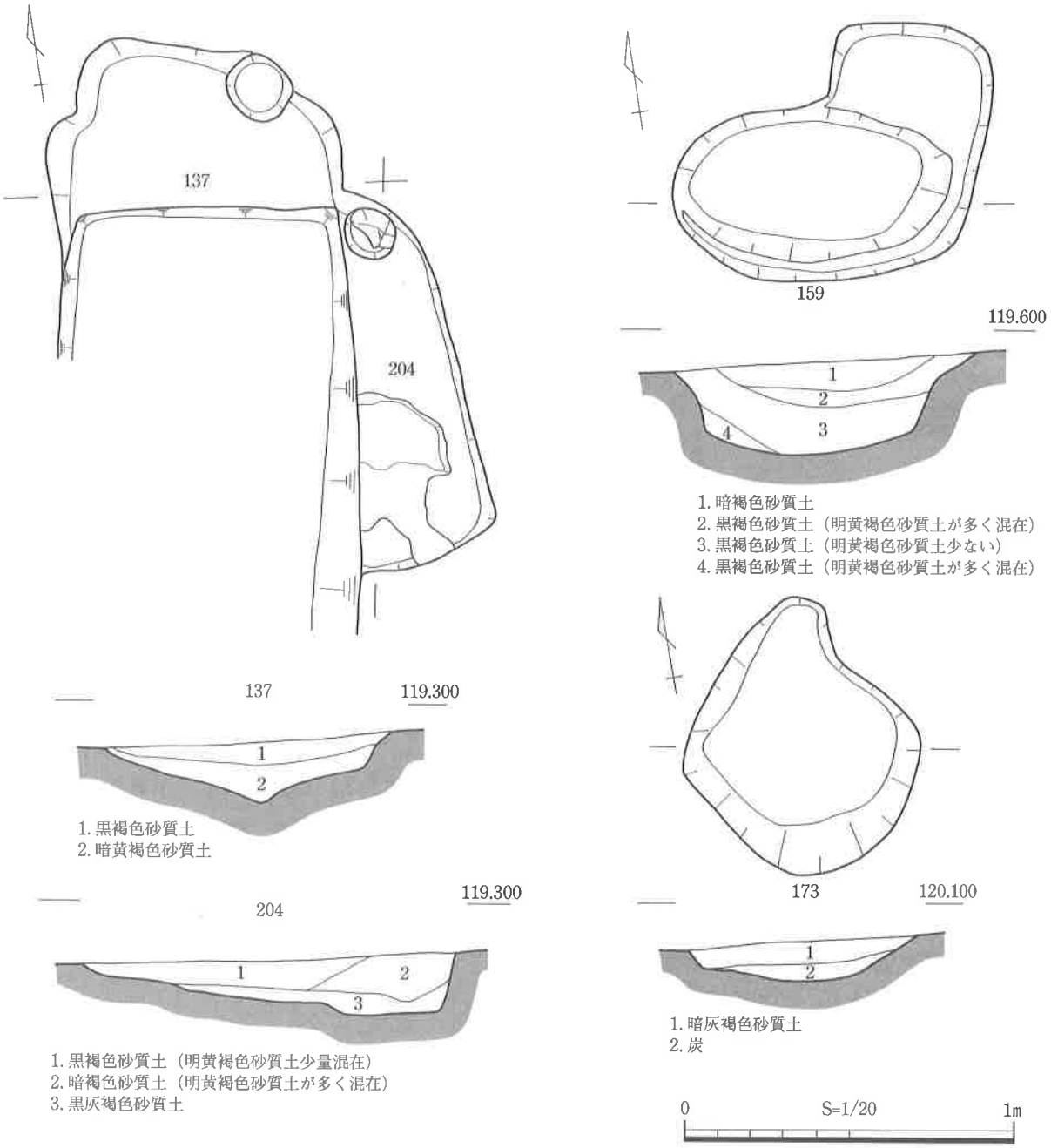
土坑116（第18・19図　図版９・19）

遺構　長径116cm、短径94cmの南北に主軸をもつ楕円形の土坑である。遺構確認面からの深さは14cm を測り、底面は北側がやや深い。埋土は上下の２層に分かれており、上層は黒褐色砂質土、下層は、赤褐色砂質土が多く混在する暗灰褐色砂質土である。遺構中央付近で拳大から人頭大の石灰岩が約10点出土した。特に、中央部には差し渡し10cm ほどの石５個が東西方向に並んでいる。

遺物　土器片８点が出土した。３は甕形土器の口縁部で、口唇部断面には明確な平坦面が認められる。内外面とも指頭圧痕か。

土坑121（第17図）

遺構　長径80cm、短径52cm の東西に主軸をもつ楕円形の土坑である。遺構確認面からの深さは４cm を測り、底面は平坦である。土坑中央に長径約40cm、短径約30cm の落ち込みを確認し、その深さは土坑底面から更に約10cm を測る。埋土は灰褐色砂質土である。



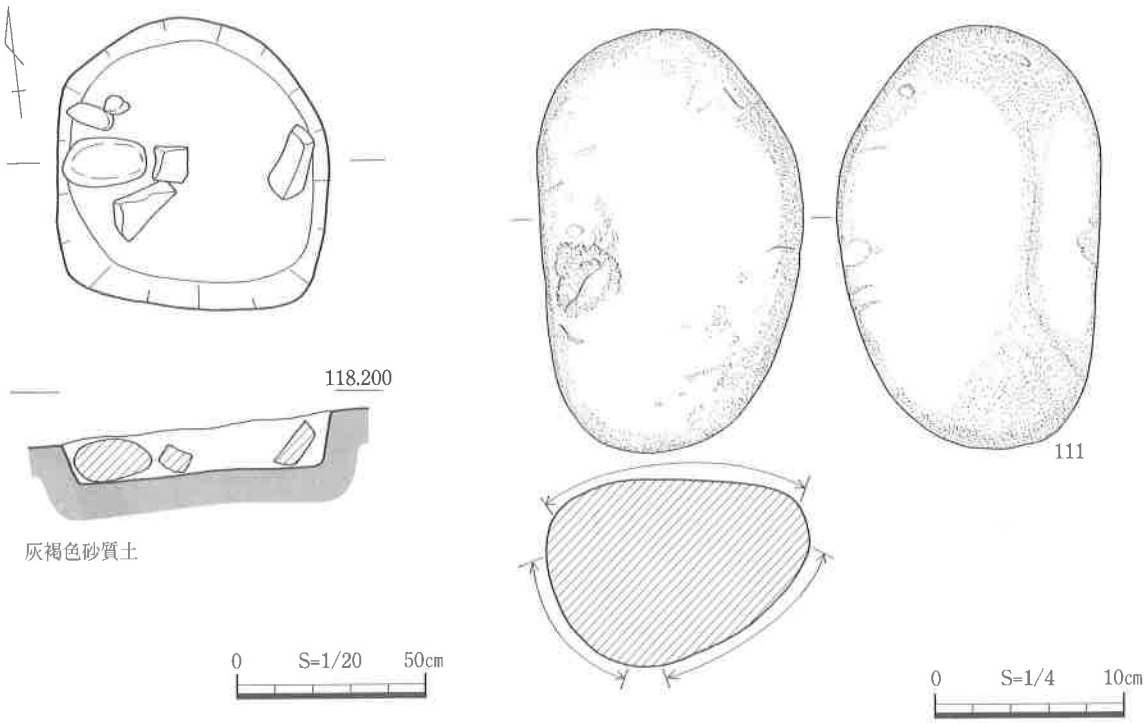
第20図　土坑137・土坑204・土坑159・土坑173遺構実測図

遺物　出土していない。

土坑137（第20図　図版10）

遺構　長径88cm を測ると考えられる土坑であるが、一部を撹乱によって切られるため、短径や平面形の詳細は不明である。遺構確認面からの深さは16cm を測り、底面は中央がやや深い。埋土は上下の２層に分かれており、上層は赤褐色砂質土が少量混在する黒褐色砂質土、下層は黒褐色砂質土が混在する暗黄褐色砂質土である。

遺物　土器片２点が出土した。



第21図　土坑207遺構・遺物実測図

土坑159（第20図　図版10）

遺構　長径90cm、短径76cm の東西に主軸をもつＬ字形の土坑である。底面には段差があり、北側が浅い。遺構確認面からの深さは、深いところで28cm、浅いところで14cm を測る。埋土はレンズ状に堆積しており、３層に大別できる。上部２層は赤褐色砂質土を多く混在する暗褐色もしくは黒褐色の砂質土であるのに対し、下層は赤褐色砂質土があまり混在しない黒褐色砂質土である。

遺物　土器片11点、白磁片１点が出土した。

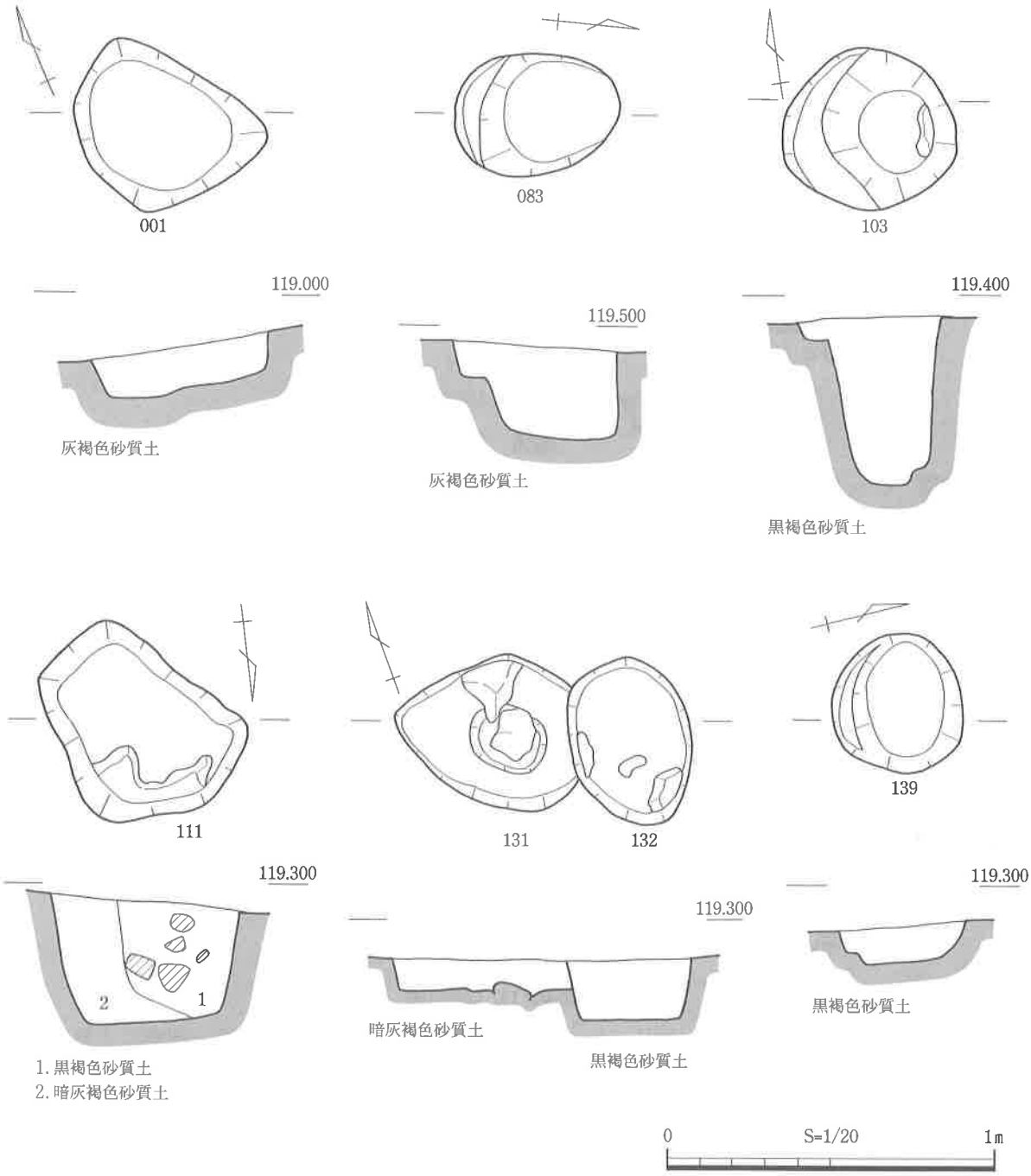
土坑173（第20図　図版11）

遺構　長径84cm、短径72cm の南北に主軸をもつ菱形の土坑である。遺構確認面からの深さは10cm を測り、底面は平坦である。埋土は上下の２層に分かれており、上層は赤褐色砂質土が多く混在する暗灰褐色砂質土、下層は炭化物が非常に多く混在する黒褐色砂質土である。下層に炭化物が非常に多く混在するため、遺構壁面が焼けているかどうかを観察したが、とくに焼けている様子は認められなかった。そのため、火を数回おこしただけで役割を終えた炉と考えられる。

遺物　土器片１点が出土した。

土坑204（第20図　図版11）

遺構　長径110cm を測ると考えられる土坑であるが、一部を撹乱によって切られるため、短径や平面形の詳細は不明である。遺構確認面からの深さは18cm を測り、底面は北側へ行くに従い徐々に浅くなる。埋土は上、中、下層の３つに大別できる。上層は炭化物や赤褐色砂質土が少量混在する黒灰褐色砂質土、中層は赤褐色砂質土が多く混在する暗褐色砂質土、下層は黒灰褐色砂質土である。なお、遺構内北側床面には、当遺構に切られる形で直径約15cm のピットを確認しており、ピット205とした。ピット



第22図　土坑001・土坑083・土坑103・土坑111・土坑131・土坑132・土坑139遺構実測図

205埋土は赤褐色砂質土が少量混在する黒褐色砂質土である。

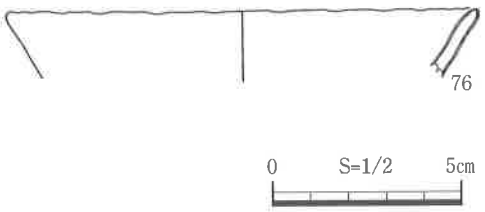
遺物　土器片１点が出土した。

土坑207（第21図　図版12・28）

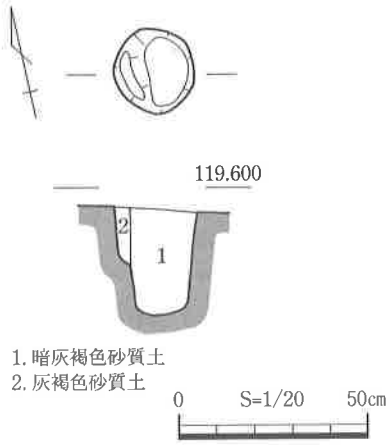
遺構　長径76cm、短径70cmを測る方形の土坑である。遺構確認面からの深さは10cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。土坑に据え置かれた状態で石皿（？）を確認した。

遺物　土器１点と石器１点が出土した。111は石皿と考える。広い磨面をもつ面を表面、狭い２つの磨面をもつ面を裏面としたが、断面形状が通常石皿とされる盤状の石製品とは明らかに異なるため、石

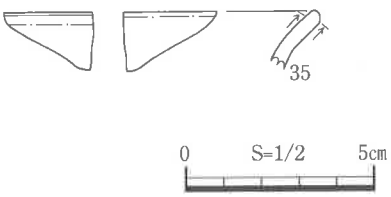
第23図　ピット058遺構実測図



第24図　ピット058遺物実測図



第25図　ピット174遺構実測図



第26図　ピット174遺物実測図

皿とするには少々躊躇する。石質は砂岩のホルンフェルス。

土坑001（第22図）

遺構　長径54cm、短径54cm の東西に主軸をもつ長円形の土坑である。遺構確認面からの深さは13cm を測り、底面は西側にやや傾斜する。埋土は灰褐色砂質土である。

遺物　出土していない。

土坑083（第22図）

遺構　長径50cm、短径38cm の南北に主軸をもつ長円形の土坑である。遺構確認面からの深さは30cm を測り、底面は北側がやや深い。埋土は灰褐色砂質土である。

遺物　出土していない。

土坑103（第22図　図版12）

遺構　長径54cm、短径48cm の東西に主軸をもつ長円形の土坑である。遺構確認面からの深さは50cm を測り、底面は東側が深い。遺構の中央には差し渡し30cm の石灰岩が配されており、木柱を固定するための機能を担っていたものと考えられる。埋土は黒褐色砂質土である。

遺物　土器片３点が出土した。

土坑111（第22図　図版13）

遺構　長径66cm、短径44cm の北西－南東に主軸をもつ長方形の土坑である。遺構確認面からの深さは35cm を測り、底面は平坦である。埋土は赤褐色砂質土が多く混在する暗灰褐色砂質土を基本とし、土坑西側において黒褐色砂質土の落ち込みを確認した。落ち込み内部には拳大の石灰岩礫が多く含まれる。

遺物　土器片２点が出土した。

土坑131（第22図　図版13）

遺構　長径54cm、短径46cm の北西－南東に主軸をもつ長円形の土坑である。遺構確認面からの深さは10cm を測り、底面は平坦である。埋土は赤褐色砂質土が多く混在する暗灰褐色砂質土である。当土坑は土坑132より古い。

遺物　土器片２点が出土した。

土坑132（第22図　図版13）

遺構　長径54cm、短径38cmの南北に主軸をもつ長円形の土坑である。遺構確認面からの深さは18cmを測り、底面は平坦である。埋土は赤褐色砂質土が少量混在する黒褐色砂質土である。当土坑は土坑131より新しい。

遺物　土器片１点が出土した。

土坑139（第22図）

遺構　長径44cm、短径40cmの東西に主軸をもつ長円形の土坑である。遺構確認面からの深さは10cmを測り、底面は擂鉢状である。埋土は黒褐色砂質土である。

遺物　出土していない。

ピット058（第23・24図　図版19）

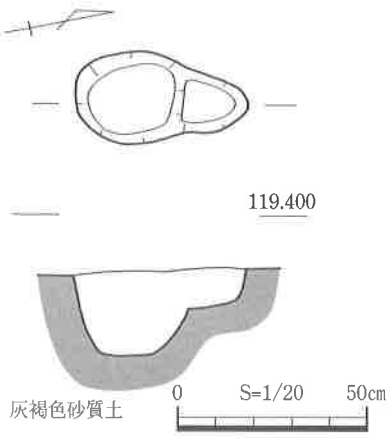
遺構　長径30cm、短径28cmの正円形のピットである。遺構確認面からの深さは19cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

遺物　土器片１点、青磁片１点が出土した。76は口唇部にわずかな刻みをもつ青磁の皿で、外へ開きながら立ち上がる器形である。

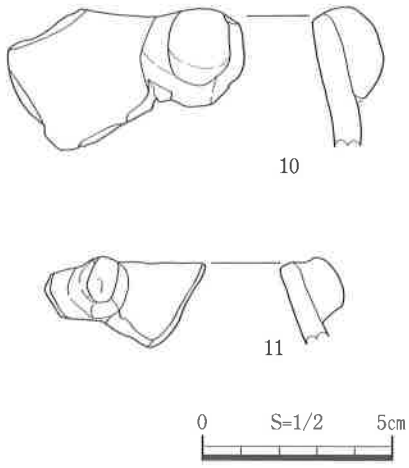
ピット174（第25・26図　図版14・19）

遺構　長径22cm、短径21cmの正円形のピットである。遺構確認面からの深さは29cmを測る。ピット底面は東側で一段低くなっており、埋土は暗灰褐色砂質土と灰褐色砂質土である。

遺物　土器片３点と白磁片１点が出土した。35は白磁口禿碗で、口縁部を外反させるもの。



第27図　ピット153遺構実測図



第28図　ピット153遺物実測図

ピット153（第27・28図　図版14・19）

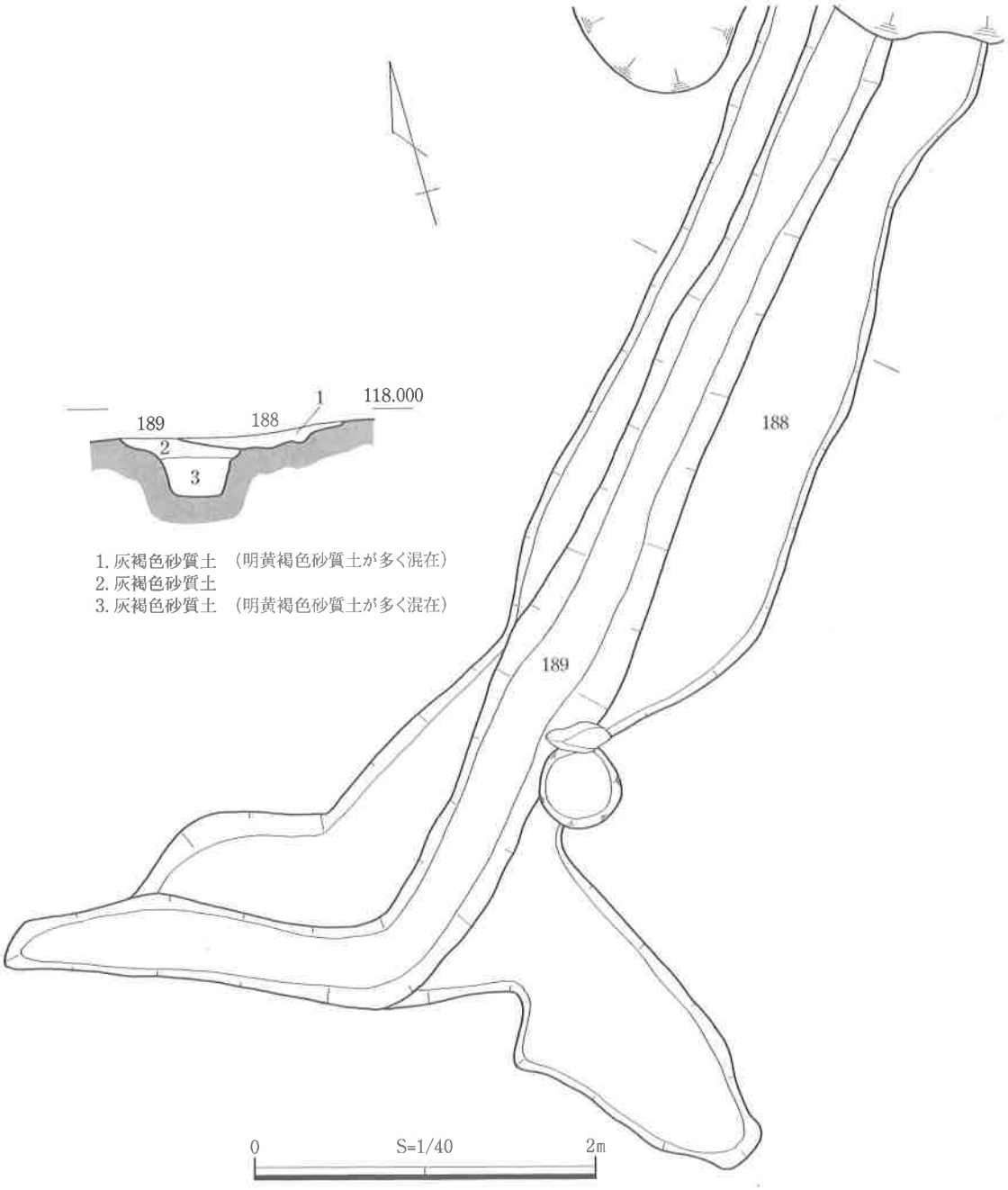
遺構　長径45cm、短径28cmの長円形のピットである。遺構確認面からの深さは25cmを測る。ピット底面は南側で一段低くなっており、埋土は灰褐色砂質土である。

遺物　土器片14点が出土した。10と11は石鍋Ａ群模倣土器の口縁部。10は瘤状突起を貼り付けるもので、口唇部断面はルーズである。内外面とも指頭圧痕か。11は小さな瘤状突起を貼り付けるもので、口唇部断面には明確な平坦面が認められる。内外面とも指頭圧痕か。

溝182

遺構　調査区の南で確認した溝で、長さ９ｍ、幅71cm、深さ９cm。北東から南西方向に延びる。埋土は上下２層に分かれ、上層は灰色砂質土、下層は暗灰褐色砂質土である。

遺物　出土していないが、埋土の様子から近世に属するものと思われる。

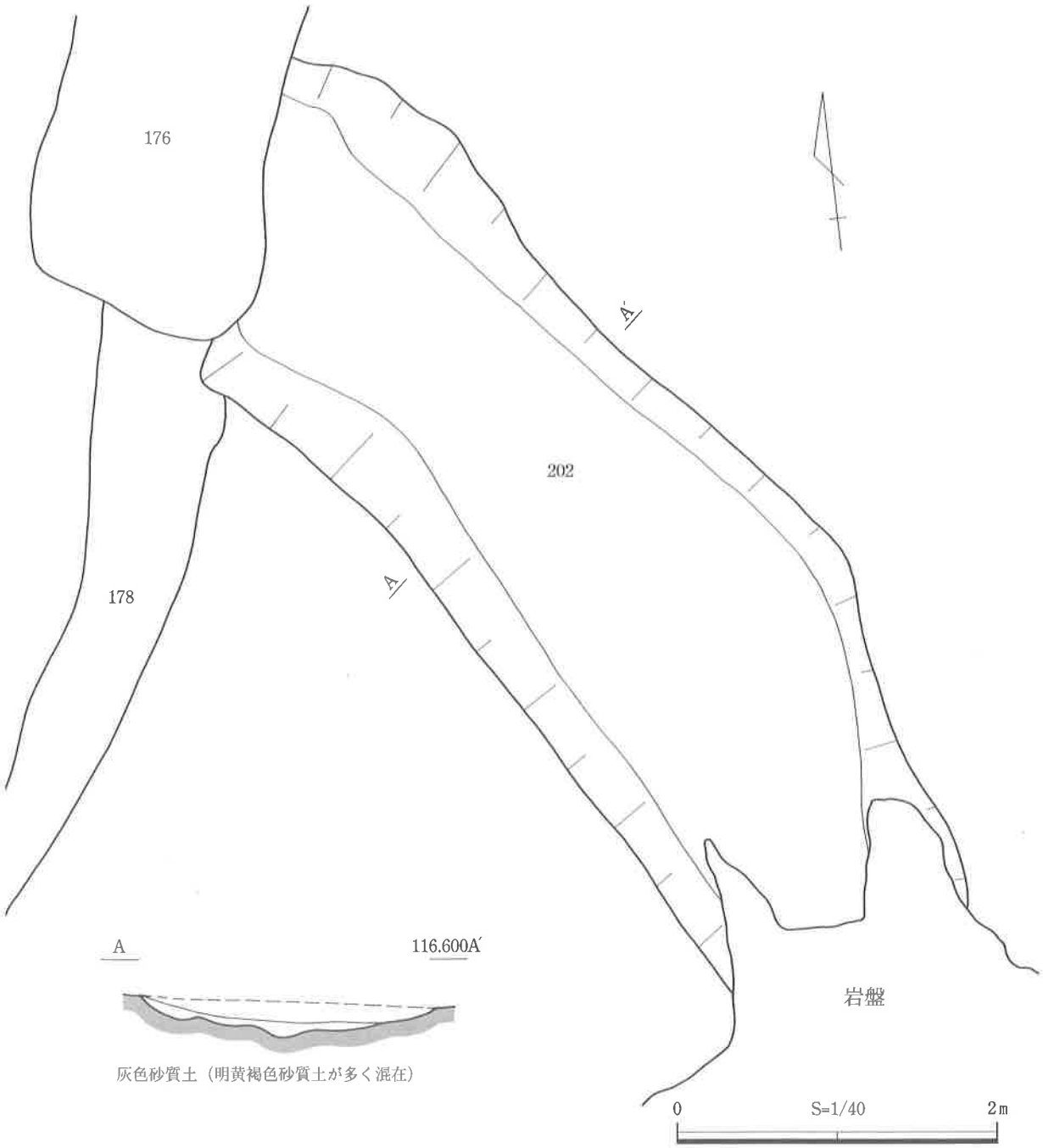


第29図　溝188・溝189遺構実測図

溝188・189（第29図）

遺構　調査区の北東で確認した、北西から南東へ延びる溝である。一見すると一本の溝のように見えるが、断面および平面の観察によって、南東で二股に分かれる溝188と、同じく南東で南へと曲がる溝189に明確に分けることができる。また、溝189が完全に埋め戻った後に溝188が掘り込まれたことが、断面観察の結果から読みとることができる。溝188が長さ7.3m、幅140cm、深さ7cm、溝189が長さ9.3m、幅41cm、深さ22cm。埋土は溝188が黄褐色砂質土ブロックを多く含む灰褐色砂質土。溝189が上下2層に分かれ、上層が灰褐色砂質土、下層が黄褐色砂質土ブロックを多く含む灰褐色砂質土である。

遺物　遺構188より土器片7点、青磁片1点、沖縄産無釉陶器7点、沖縄産施釉陶器5点、青花1点等が出土した。遺構189からは出土していない。



第30図　溝202遺構実測図

溝202（第30図）

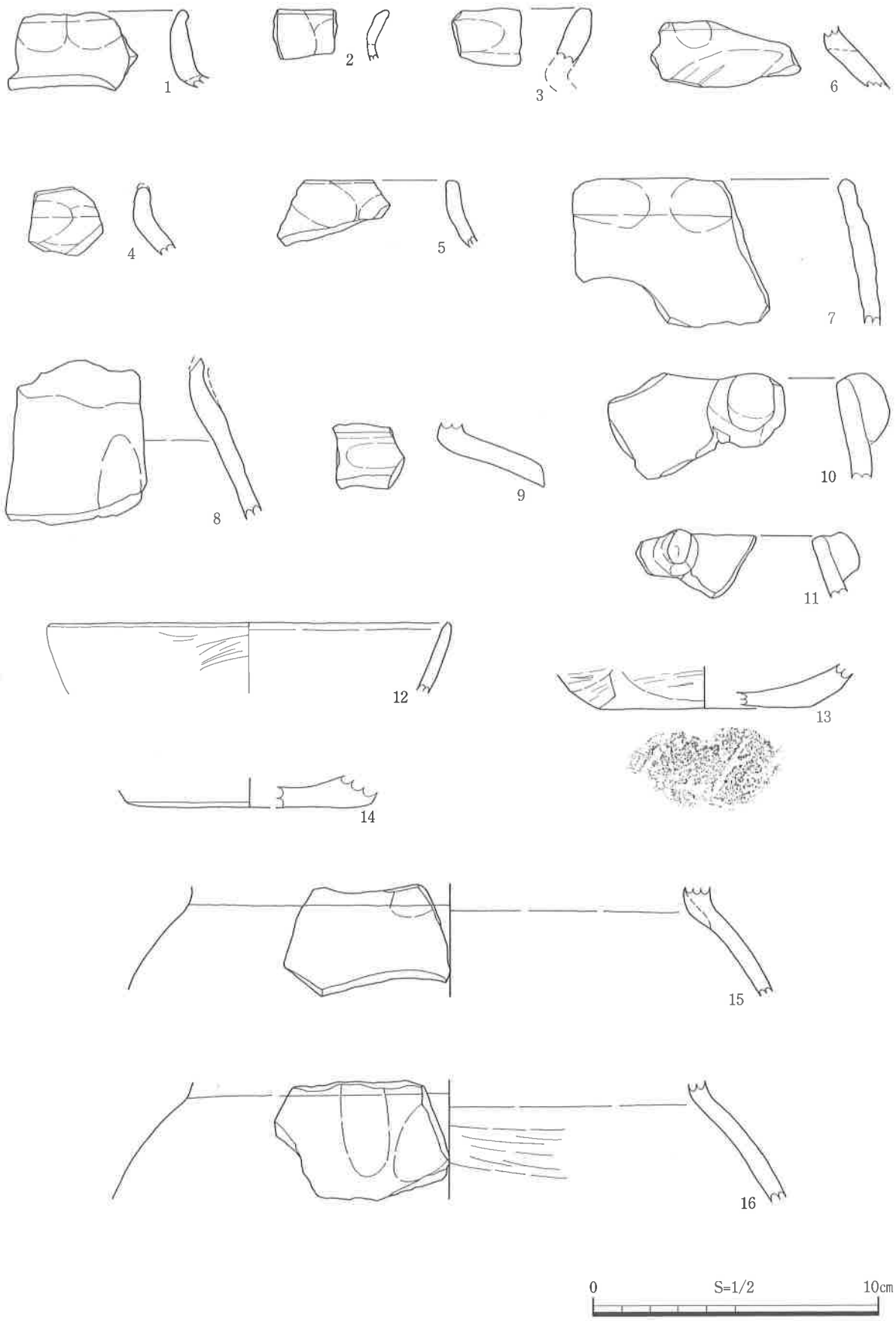
遺構　調査区の南西で確認した、北西から南東に延びる溝である。長さ5.7m、幅146cm、深さ6cmを測り、北西は調査区外へ続き、南東は石灰岩岩盤により途切れる。埋土は灰色砂質土である。

遺物　土器片8点、沖縄産無釉陶器1点、沖縄産施釉陶器3点等が出土した。

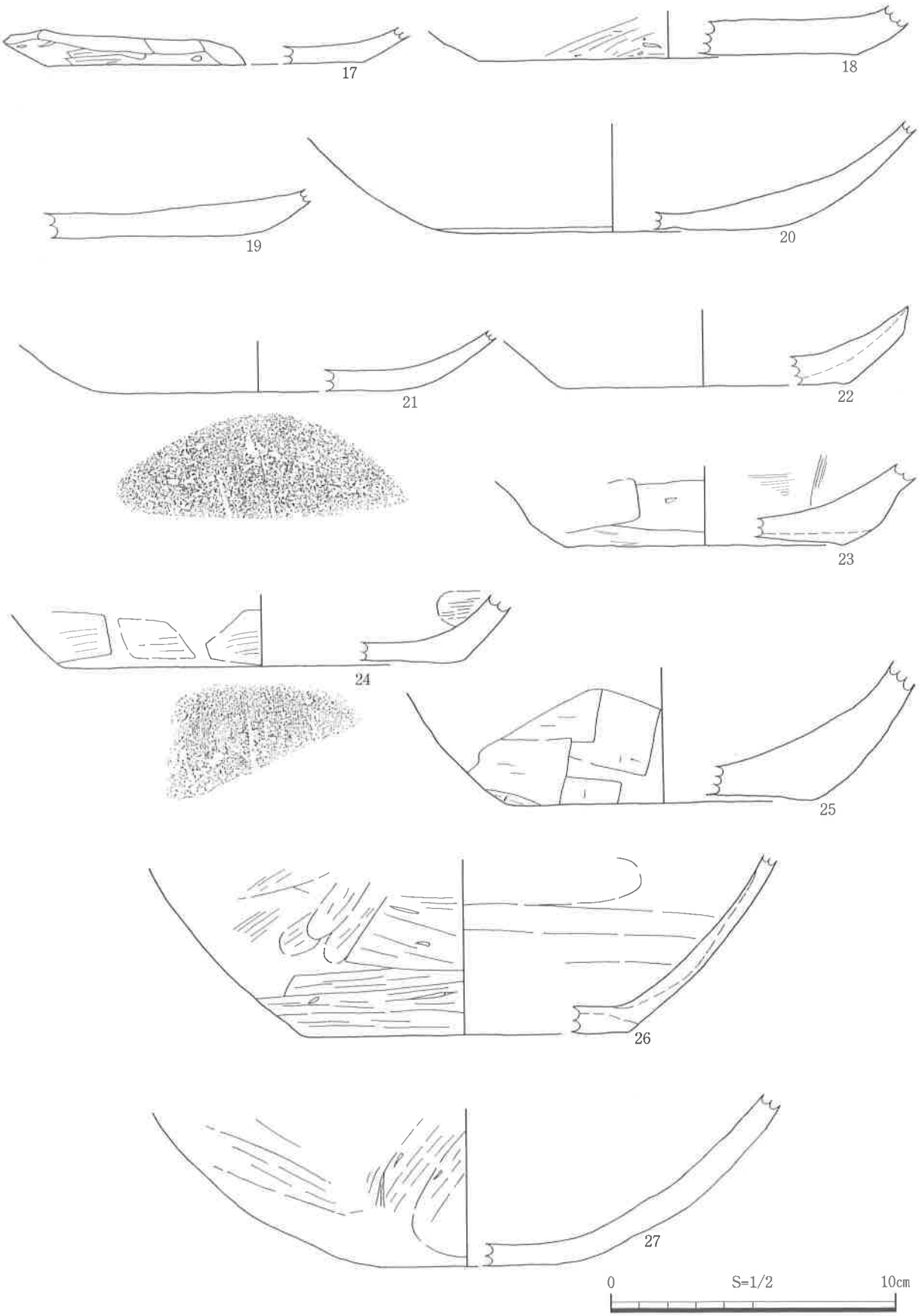
第３節　出土遺物

挿図No. 図版No.	遺物No.	器　種	口径 底径 (cm)	外面色調 内面色調	混 入 物	外面調整 内面調整	備　考	遺構／ 包含層
第31図 図版15	1	壷	― ―	黄橙色 灰黄褐色	暗灰色細砂少量	指頭圧痕 ナデ？		溝176
第31図 図版15	2	甕	― ―	黄褐色 黄褐色	黒色粒少量	指頭圧痕 指頭圧痕？		溝176
第31図 図版19	3	甕	― ―	明黄褐色 明黄褐色	赤褐色粒少量	指頭圧痕？ 指頭圧痕？		土坑116
第31図 図版15	4	甕	― ―	明黄褐色 明黄褐色	―	指頭圧痕 指頭圧痕		溝176
第31図 図版15	5	甕	― ―	明黄橙色 明黄褐色	赤褐色粒少量	指頭圧痕 指頭圧痕		溝176
第31図 図版19	6	甕？	― ―	橙色 橙色	赤褐色粒 黒色粒	指頭圧痕・刷毛目？ 指頭圧痕		包含層
第31図 図版17	7	鉢	― ―	明赤褐色 明赤褐色	赤褐色粒少量	指頭圧痕 指頭圧痕？		建物１ （ピット９）
第31図 図版15	8	甕	― ―	黄橙色 暗褐色	赤褐色粒多量	ナデ？ ナデ？		溝176
第31図 図版19	9	甕	― ―	明黄褐色 明黄褐色	赤褐色粒 白色細砂多量	指頭圧痕 指頭圧痕？		包含層
第31図 図版19	10	石鍋Ａ群模倣	― ―	橙色 橙色	赤褐色粒少量	指頭圧痕？ 指頭圧痕？		ピット153
第31図 図版19	11	石鍋Ａ群模倣	― ―	黒褐色 黒褐色	白色細砂多量	指頭圧痕？ 指頭圧痕？		ピット153
第31図 図版15	12	碗	14.0 ―	黒褐色 黄褐色	―	ヘラケズリ ナデ		溝176
第31図 図版15	13	碗	― 7.4	明赤褐色 黄褐色	赤褐色粒	ヘラケズリ ナデ	底部葉痕	溝176
第31図 図版15	14	碗	― 8.6	暗黄褐色 黒褐色	赤褐色粒	？ ？		溝176
第31図 図版15	15	甕	― ―	黄褐色 黄褐色	赤褐色粒多量	指頭圧痕 指頭圧痕		溝176
第31図 図版15	16	甕	― ―	暗黄褐色 灰黄褐色	赤褐色粒 白色細砂	指頭圧痕 刷毛目		溝176
第32図 図版17	17	不明	― ―	黒褐色 橙色	赤褐色粒少量	ヘラケズリ ナデ		溝177
第32図 図版15	18	不明	― 13.2	明黄褐色 明黄褐色	赤褐色粒多量	ヘラケズリ ナデ		溝176
第32図 図版15	19	不明	― ―	暗橙色 黒褐色	黒色粒多量	ナデ？ ナデ？		溝176
第32図 図版15	20	不明	― 10.4	黄橙色 黄褐色	赤褐色粒 黒色粒	ナデ？ ナデ？		溝176
第32図 図版16	21	不明	― 10.4	黒色 黒褐色	黒色粒多量	ナデ？ ナデ	底部葉痕	溝176
第32図 図版19	22	不明	― 10.2	暗黄褐色 橙色	赤褐色粒少量	ヘラケズリ ナデ？		包含層
第32図 図版19	23	不明	― 9.6	暗橙色 黄褐色	赤褐色粒少量	ヘラケズリ 刷毛目		包含層
第32図 図版16	24	不明	― 13.8	橙色 黄褐色	黒色粒少量	ヘラケズリ ナデ	底部葉痕	溝176
第32図 図版16	25	不明	― 10.8	明橙色 明黄褐色	赤褐色粒多量	ヘラケズリ ナデ		溝176
第32図 図版16	26	不明	― 11.5	暗橙色 黄褐色	赤褐色粒 白色細砂多量	ヘラケズリ ナデ		溝176
第32図 図版16	27	不明	― 6.4	灰黄褐色 黄褐色	赤褐色粒多量	ヘラケズリ ナデ？		溝176

第１表　土器観察表



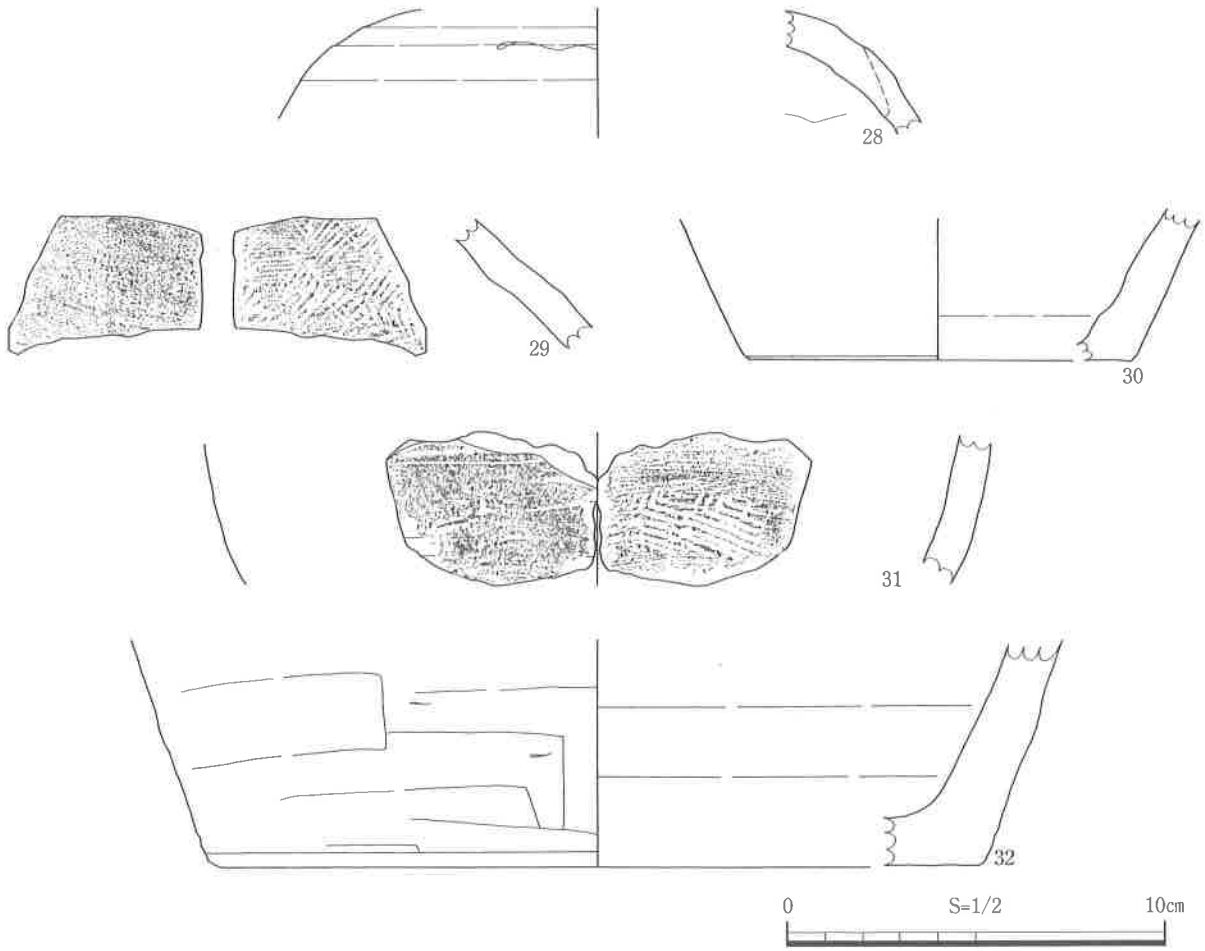
第31図　土器実測図（1）



第32図　土器実測図（2）

挿図No 図版No 遺物No	器 種	口 径 器 高 高台径 (cm)	外面色調 断面色調 内面色調	混入物	外面調整 内面調整	備 考	包含層／遺構
第33図 図版20 28	壺？	― ― ―	灰色 赤褐色 明灰色	白色粒多量	ナデ ナデ	内外面とも接合痕あり	包含層
第33図 図版20 29	不明	― ― ―	暗灰色 赤褐色 暗褐色	白色粒多量	ナデ タタキ		包含層
第33図 図版16 30	不明	― ― 10.2	暗灰褐色 赤褐色 明灰色	白色粒少量	ヘラケズリ ナデ		溝176
第33図 図版20 31	不明	― ― ―	暗灰色 赤褐色 暗褐色	白色粒多量	ナデ タタキ		包含層
第33図 図版16 32	不明	― ― 20.2	灰色 暗灰色 灰色	白色粒多量	ヘラケズリ ナデ		溝176

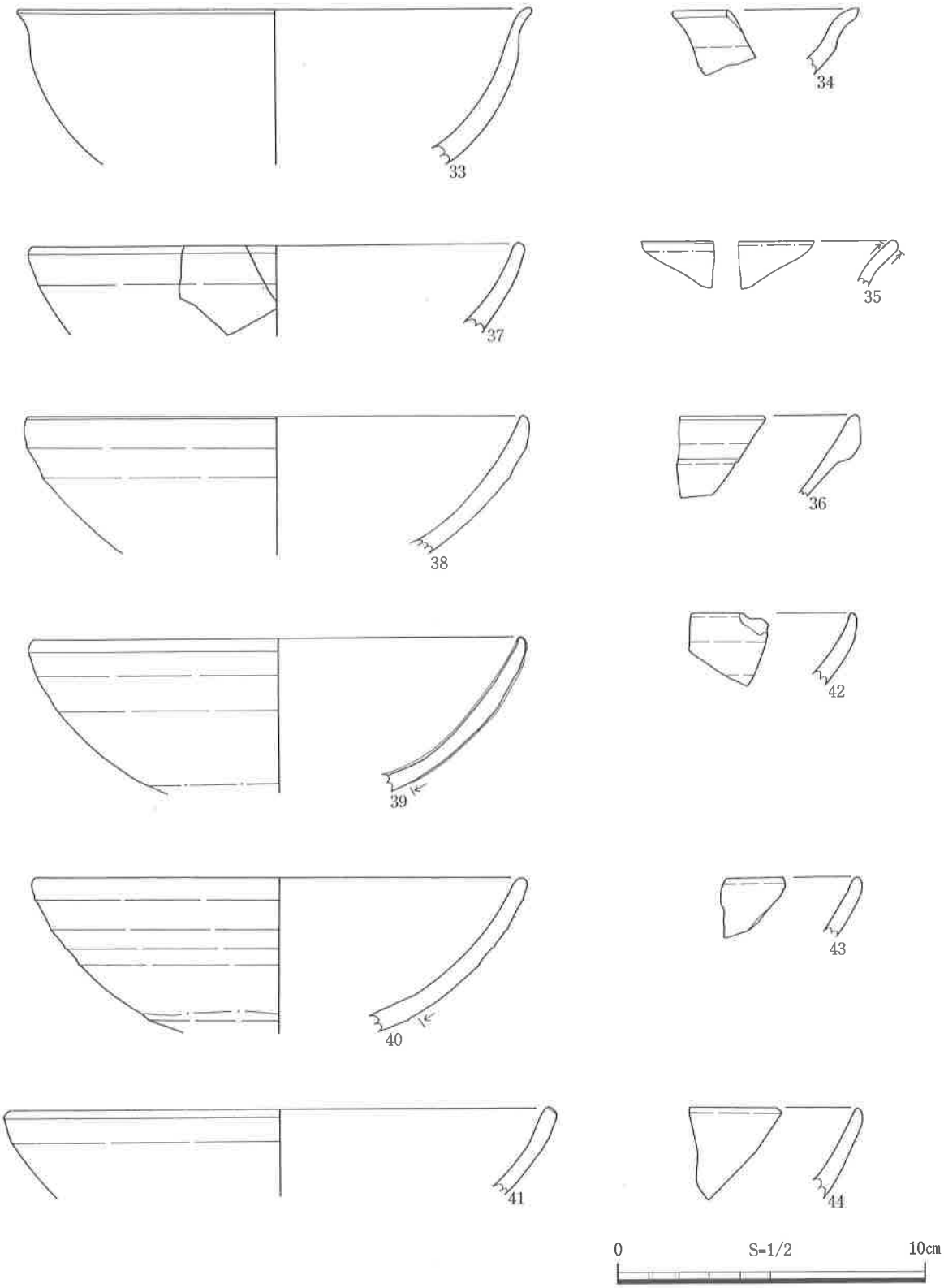
第２表　カムィヤキ観察表



第33図　カムィヤキ実測図

挿図No 図版No 遺物No	器種	型式	口径 器高 高台径 (cm)	素地色調 精粗	施釉位置 釉色調 貫入	備考	包含層／遺構
第34図 図版17 33	碗	外反	16.8 — —	黄白色 精	— 白緑色 なし		ピット40
第34図 図版20 34	皿	外反	— — —	黄白色 粗	— 緑白色 粗		包含層
第34図 図版19 35	碗？	口禿	— — —	白色 精	— 白色 なし		ピット174
第34図 図版20 36	碗	玉縁	— — —	白灰色 粗	— 白色 なし		包含層
第34図 図版17 37	碗	ビロースク	16.0 — —	白灰色 粗	— 白灰色 なし	口縁部直下に削り	溝176
第34図 図版17 38	碗	ビロースク	16.0 — —	灰白色 粗	— 白緑色 粗		溝176
第34図 図版17 39	碗	ビロースク	16.2 — —	白灰色 粗	体部中位から下は露胎 青白色 なし		溝176
第34図 図版17 40	碗	ビロースク	18.0 — —	黄白色 粗	体部中位から下は露胎 白青色 粗		溝176
第34図 図版17 41	碗	ビロースク	16.0 — —	白色 精	— 白青色 粗		溝176
第34図 図版20 42	碗	ビロースク	16.0 — —	白灰色 粗	— 白灰色 なし		包含層
第34図 図版20 43	碗	ビロースク	— — —	白黄色 粗	— 白灰色 なし		包含層
第34図 図版20 44	碗	ビロースク	— — —	白灰色 粗	— 白灰色 なし		包含層

第３表　白磁観察表



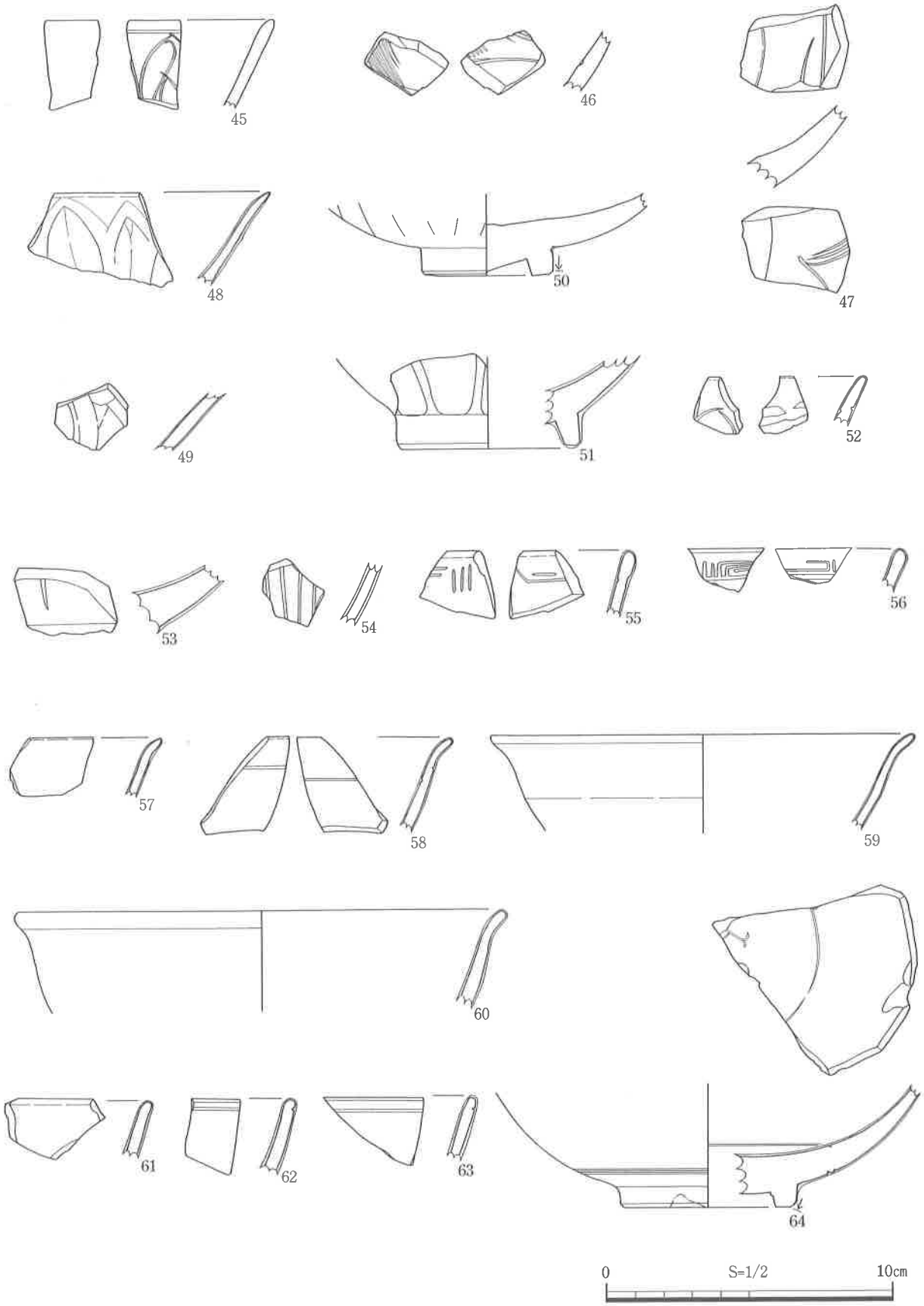
第34図　白磁実測図

挿図No 図版No 遺物No	器種	口径 器高 高台径 (cm)	素地色調 精粗	施釉位置 釉色調 貫入	外面文様 内面文様	備　　考	包含層／ 遺構
第35図 図版21 45	碗	― ― ―	暗灰色 精	― 暗緑色 なし	― 劃花文		包含層
第35図 図版21 46	碗	― ― ―	灰色 粗	― 灰緑色 なし	櫛描文 櫛描文		包含層
第35図 図版21 47	碗	― ― ―	灰白色 粗	― 青緑色 粗い	櫛描文 櫛描文		包含層
第35図 図版17 48	碗	― ― ―	白灰色 粗	― 緑青色 なし	鎬蓮弁文 ―		溝176
第35図 図版21 49	碗	― ― ―	白灰色 粗	― 緑青色 なし	鎬蓮弁文 ―		包含層
第35図 図版21 50	碗	― ― 4.4	黄白色 粗	畳付外側まで 黄緑色 細かい	鎬蓮弁文 ―	内底に凹み	包含層
第35図 図版21 51	碗	― ― 6.0	白色 精	全体施釉後外底釉拭き取り? 緑色 なし	ヘラ描き蓮弁文 ―		包含層
第35図 図版22 52	碗	― ― ―	白色 精	― 明緑色 なし	ヘラ描き蓮弁文 ?		包含層
第35図 図版22 53	碗	― ― ―	白色 精	― 緑色 粗い	ヘラ描き蓮弁文 ―		包含層
第35図 図版22 54	碗	― ― ―	白色 精	― 緑色 なし	細蓮弁文 ―		包含層
第35図 図版22 55	碗	― ― ―	白色 精	― 緑色 なし	スタンプ雷文 スタンプ雷文？		包含層
第35図 図版22 56	碗	― ― ―	白色 精	― 緑色 なし	スタンプ雷文 スタンプ雷文		包含層
第35図 図版22 57	碗	16.0 ― ―	灰色 粗	― 青緑色 なし	― ―	口縁部外面に２本沈線？	包含層
第35図 図版22 58	碗	― ― ―	灰色 粗	― 青緑色 なし	― ―	口縁部内外面に１本沈線？	包含層
第35図 図版23 59	碗	14.8 ― ―	灰色 粗	― 緑青色 細かい	― ―		包含層
第35図 図版23 60	碗	17.0 ― ―	白色 精	― 緑色 なし	― ―		包含層
第35図 図版23 61	碗	― ― ―	白色 精	― 緑色 なし	― ―		包含層
第35図 図版23 62	碗	― ― ―	白色 精	― 濃緑色 なし	― ―		包含層
第35図 図版23 63	碗	― ― ―	白灰色 精	― 濃緑色 なし	― ―		包含層
第35図 図版24 64	碗	― ― 5.8	灰白色 粗	畳付外側まで 緑青色 なし	― ―		包含層

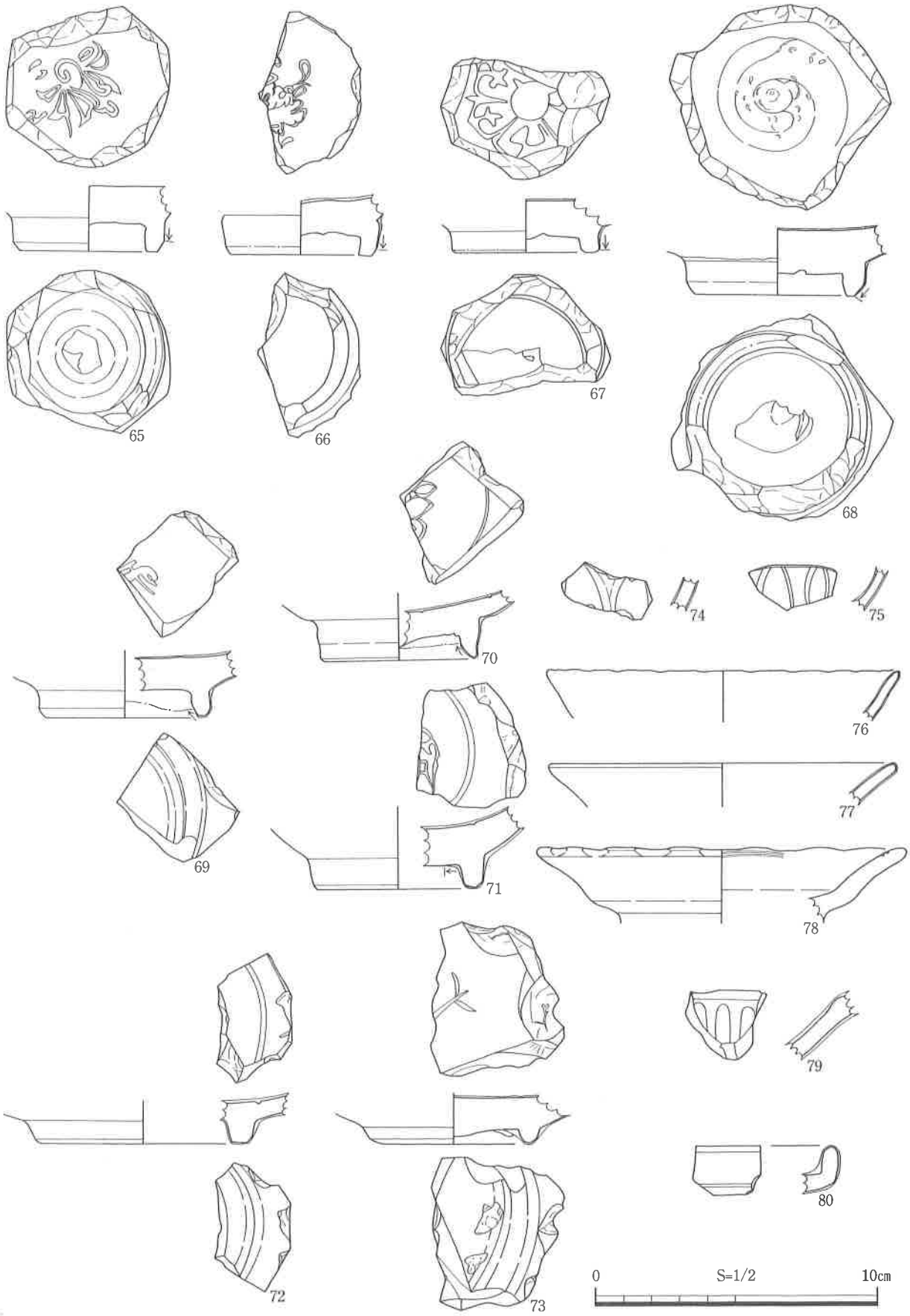
第４表　青磁観察表（1）

挿図No 図版No 遺物No	器種	口径 器高 高台径 (cm)	素地色調 精粗	施釉位置 釉色調 貫入	外面文様 内面文様	備　　考	包含層／ 遺構
第36図 図版24 65	碗	― ― 4.9	灰白色 粗	畳付外側まで 緑青色 なし	― 陰圏線と印花文		包含層
第36図 図版24 66	碗	― ― 5.0	灰白色 粗	畳付外側まで 青緑色 粗い	― 印花文		包含層
第36図 図版24 67	碗	― ― 5.0	黄白色 粗	畳付外側まで 緑青色 細かい	― 花弁文		包含層
第36図 図版25 68	碗	― ― 6.4	灰白色 粗	畳付外側まで 緑色 粗い	― ―		包含層
第36図 図版25 69	碗	― ― 5.8	白黄色 粗	畳付内側途中まで 緑色 粗い	― 印花文		包含層
第36図 図版25 70	碗	― ― 5.6	黄白色 精	畳付内側途中まで 緑青色 粗い	― 陰圏線と印花文		包含層
第36図 図版25 71	碗	― ― 5.8	白色 精	全体施釉後外底釉拭き取り 緑色 なし	― 陰圏線と印花文		包含層
第36図 図版25 72	碗	― ― 7.5	白黄色 粗	少なくとも外底まで 緑色 粗い	― 陰圏線		包含層
第36図 図版25 73	碗	― ― 5.6	白色 精	全体施釉後外底釉拭き取り 緑色 なし	― 印花文	内底に窯道具付着	包含層
第36図 図版23 74	皿	― ― ―	白色 精	― 濃緑色 なし	ヘラ描き蓮弁文 ―	口折皿	包含層
第36図 図版23 75	皿	― ― ―	白灰色 粗	― 青緑色 粗い	ヘラ描き蓮弁文 ―	口折皿	包含層
第36図 図版19 76	皿	12.4 ― ―	白色 粗	― 緑青色 粗い	― ―	口唇部に わずかな刻み	ピット58
第36図 図版23 77	皿	12.2 ― ―	白色 精	― 緑青色 なし	― ―	外反皿	包含層
第36図 図版23 78	皿	13.2 ― ―	暗灰色 粗	― 濃緑色 粗い	― 刻線	稜花皿	包含層
第36図 図版23 79	盤	― ― ―	白色 精	― 緑色 なし	― 蓮弁文	直口口縁盤	包含層
第36図 図版23 80	盤	― ― ―	白色 精	― 緑色 なし	― ―	鍔縁盤	包含層
第37図 図版26 81	盤	― ― 14.8	黄白色 粗	蛇の目釉はぎ 緑黄色 なし	― 蓮弁文		包含層
第37図 図版26 82	盤	― ― ―	灰白色 粗	― 緑黄色 なし	ヘラ描き蓮弁文 花文？	稜花盤 83と同一個体？	包含層
第37図 図版26 83	盤	― ― ―	灰白色 粗	― 緑黄色 細かい	ヘラ描き蓮弁文 花文？	稜花盤 82と同一個体？	包含層
第37図 図版26 84	碗？	― ― ―	灰白色 粗	― 濃緑色 粗い	― ？		包含層
第37図 図版26 85	壺？	― ― ―	白黄色 粗	― 緑青色 細かい	蓮弁文等 ―		包含層

第５表　青磁観察表（2）



第35図　青磁実測図（1）



第36図　青磁実測図（2）

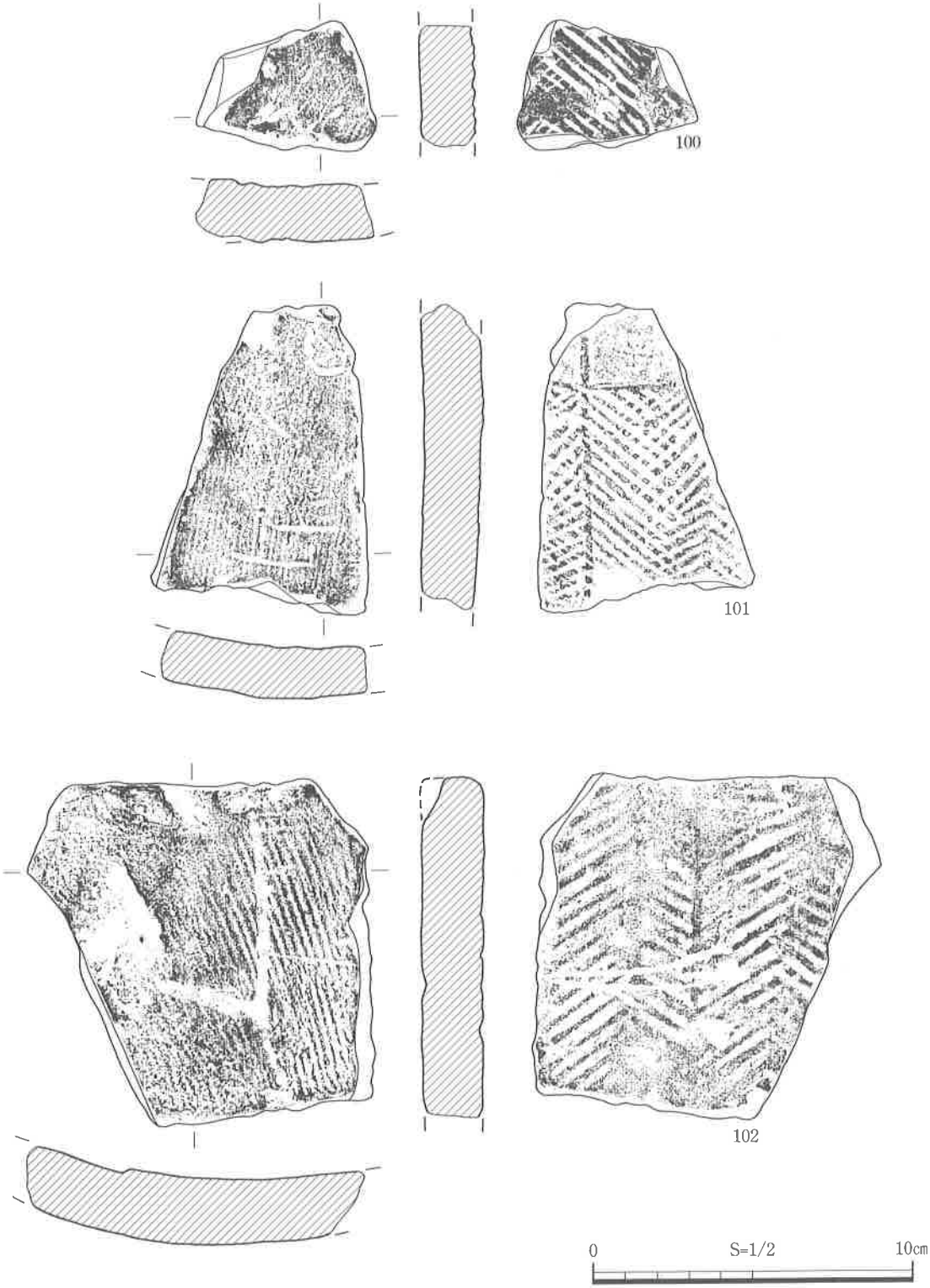
第37図　青磁（3）・青花・黒釉陶器・褐釉陶器・土製品・銭・釘実測図

挿図No. 図版No. 遺物No.	器種	口径 器高 高台径 (cm)	素地色調 精粗	施釉範囲 呉須発色	外面文様 内面文様	備　　考	包含層／遺構
第37図 図版27 86	碗	— — 4.6	白色 精	畳付露胎 やや鮮明	唐草文 草花文	蓮子碗。外底に2本圏線と字款（文字不明）	包含層
第37図 図版27 87	碗？	— — —	白色 精	— やや鮮明	？ 1本界線	端反。	包含層
第37図 図版27 88	碗？	— — —	白色 精	— やや鮮明	2本界線と不明文様 1本界線	直口。	包含層
第37図 図版27 89	碗	— — —	白色 精	— 不鮮明	？ —	胴部から口縁へ直線的に伸びる。	包含層
第37図 図版27 90	皿	— — —	白色 精	— やや不鮮明	— —	内定に不明文様、外底に字款「国」。	包含層
第37図 図版27 91	皿	16.0 — —	白色 精	— 不鮮明、一部呉須黒ずむ	草花文および 2本圏線？	端反皿。	包含層
第37図 図版27 92	杯	4.9 — —	白色 精	— やや鮮明	豹文 —	端反杯。	包含層

第６表　青花観察表

挿図No. 図版No. 遺物No.	種　類	器種	型　式	口径 器高 高台径 (cm)	外面色調 断面色調 内面色調	調整・施釉・備考	包含層／遺構
第37図 図版28 93	黒釉陶器	碗	—	— — —	黒色 灰色 黒色	貫入なし。	包含層
第37図 図版28 94	褐釉陶器	壺	—	— — —	暗褐色 灰色 暗褐色	口縁部を小さく肥厚させる。口唇部の釉は削り取る。	包含層
第37図 図版28 95	褐釉陶器	壺	—	11.0 — —	黒褐色 黄灰色 黒褐色	口唇部の釉を掻き取る。口唇部に砂付着。	包含層
第37図 図版28 96	土製品	不明	—	— — —	橙色 明灰色 橙色	摩滅激しく調整不明。目立った混入物は見られず。	包含層
第37図 図版19 97	半練	蓋	—	— — —	淡橙色 淡橙色 淡橙色	端部を折り曲げ、上面を平坦に仕上げる。	ピット102
第37図 図版28 98	銭	真鍮	○永○寳	— — —	— — —	寛永通寳。4文銭。11波。銭厚1.3㎜、重量2.5ｇ。	包含層
第37図 図版28 99	釘	銅釘	折頭形角釘	— — —	— — —	復原長9.3㎝、重量22.0ｇ。	包含層
第38図 図版29 100	瓦	高麗系瓦	？	— — —	暗橙色 灰色 暗橙色	凸面羽状タタキ、凹面糸切痕と布目痕。	包含層
第38図 図版29 101	瓦	高麗系瓦	癸酉年高麗瓦匠造	— — —	暗灰色 灰色 暗灰色	凸面羽状タタキ、凹面糸切痕と布目痕。	包含層
第38図 図版29 102	瓦	高麗系瓦	？	— — —	橙灰色 灰色 橙灰色	凸面羽状タタキ、凹面糸切痕と布目痕。摩滅激しい。	包含層

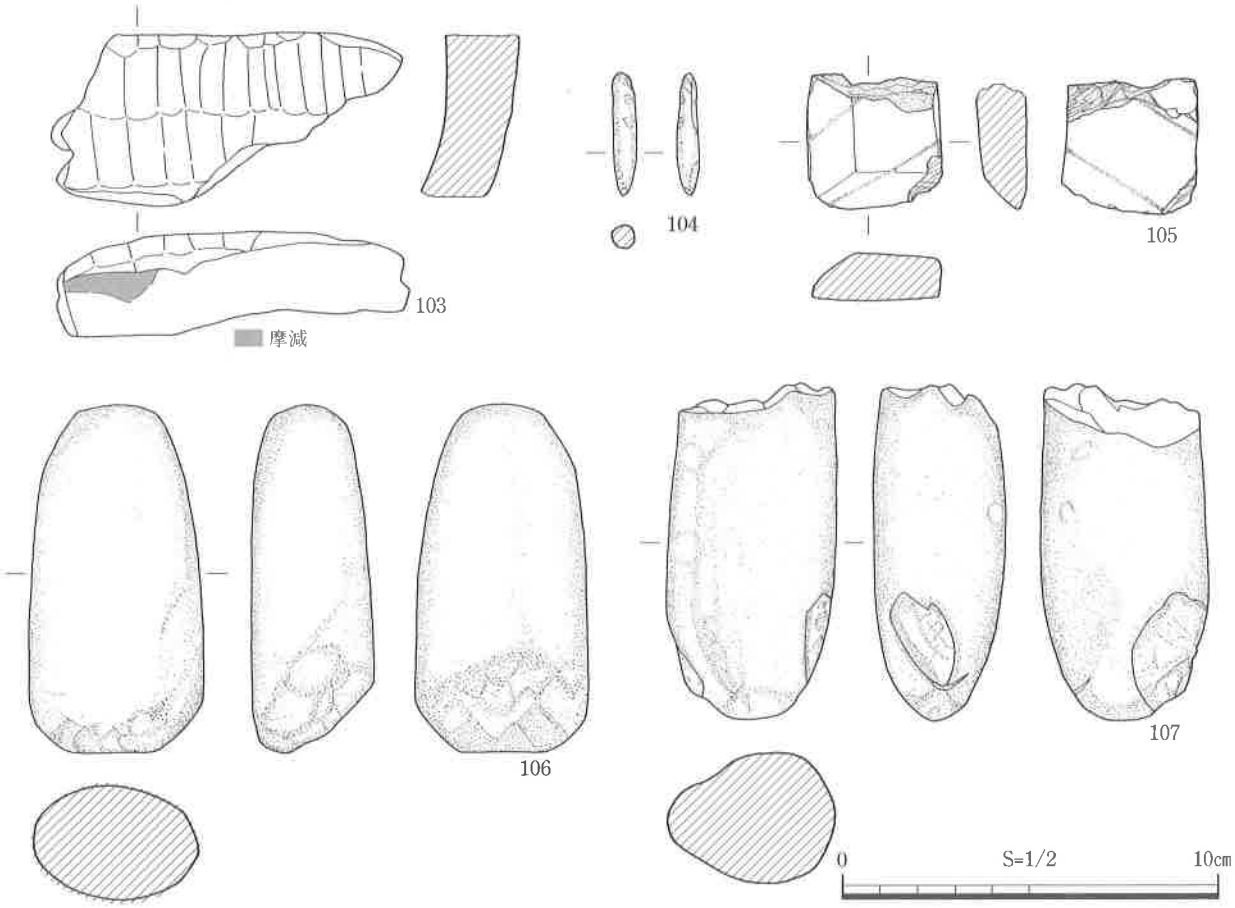
第７表　黒釉陶器・褐釉陶器・土製品・半練・銭・釘・高麗系瓦観察表



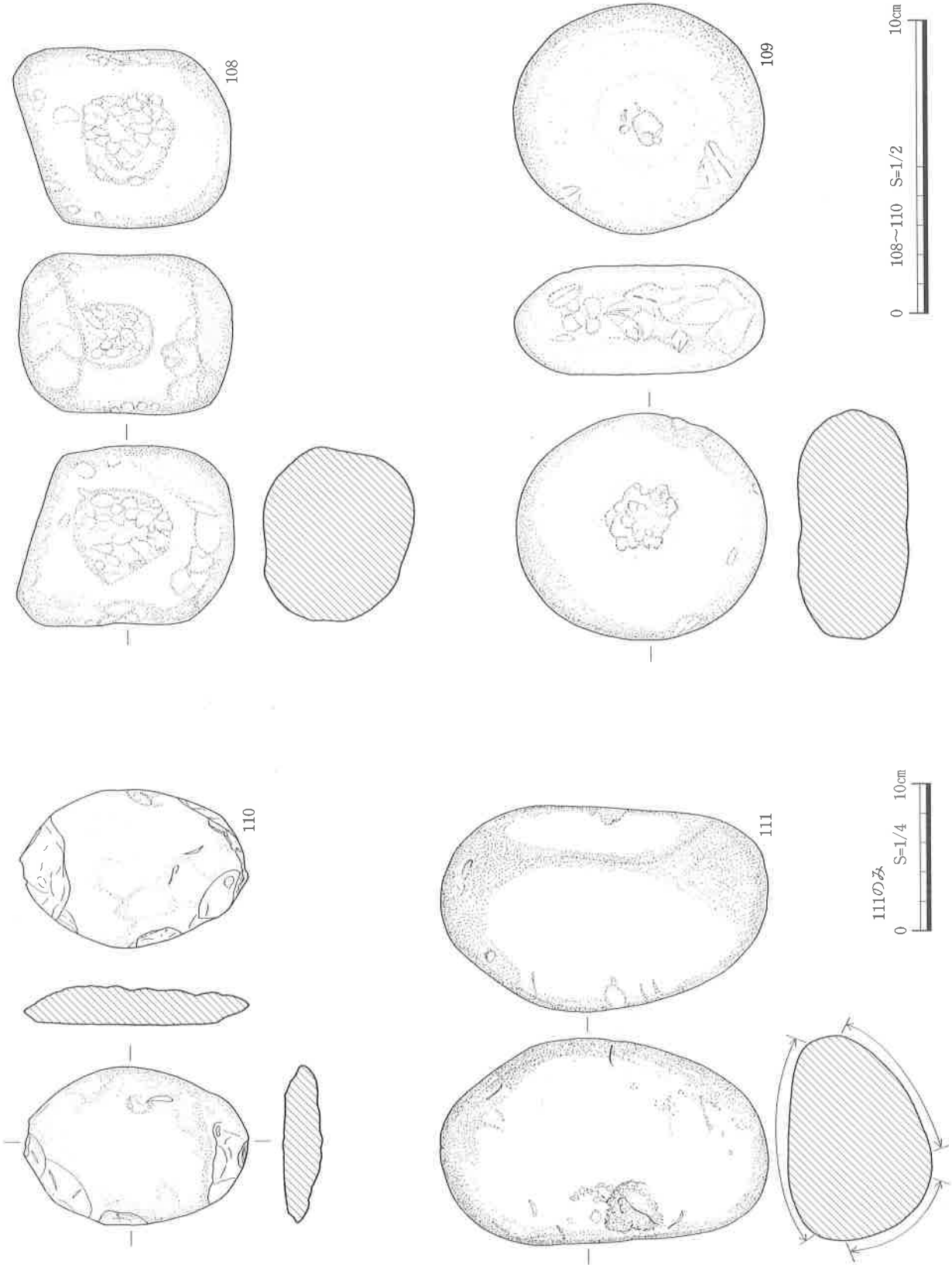
第38図　高麗系瓦実測図

挿図No 図版No 遺物No	種類	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備　　考	包含層 ／遺構
第39図 図版17 103	鍋	滑石	—	—	—	114	外面に縦位の削り。破損部の一部に摩滅。	ピット9
第39図 図版30 104	不明	滑石	3.2	0.6	0.6	1.8	棒状滑石製品。	包含層
第39図 図版30 105	石斧	緑色千枚岩	3.5	3.6	1.3	30	先端部に僅かな欠けがみられる。使用痕?	包含層
第39図 図版30 106	石斧	変輝緑岩	9.1	4.5	3.1	240	先端部に使用による潰れがみられる。	包含層
第39図 図版18 107	砥石？	緑色片岩	8.3	4.3	3.4	210	上下方向に凹み。棒状石製品を転用か。	溝176
第40図 図版30 108	敲石	砂岩	7.0	5.3	4.8	360	両面と側面片面に打痕がみられる。	包含層
第40図 図版18 109	敲石	砂岩	8.5	7.8	3.5	390	両面と側面に打痕がみられる。	溝177
第40図 図版18 110	石斧？	緑色片岩	5.6	5.5	1.3	80	先端部に階段状剥離様の潰れ。	溝176
第40図 図版28 111	石皿？	砂岩のホルンフェルス	22.3	13.8	9.8	4450	磨面3面。	土坑207

第８表　石製品観察表



第39図　石製品実測図（1）



第40図　石製品実測図（2）

遺　構　一　覧

遺構番号	挿図	図版	土色	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)	種別	土器	青磁	白磁	カムイヤキ	沖縄産陶器		青花	他
												無釉	施釉		
1	22		灰褐	54	54	13.2	土坑								
2			灰褐	23	20	11	ピット								
3			黒褐	22	22	9	ピット								
4			灰褐	26	23	9	ピット	1							
5			灰褐	24	14	11	ピット								
6			黒褐	32	20	35	ピット	1							
7			複層	24	20	25	ピット								
8		7	複層	28	18	15	ピット								
9		6	黒褐	28	26	21	ピット	1							
10		7	複層	30	26	28	ピット								
11			黒褐	36	24	22	ピット								
12			灰褐	44	24	17	ピット								
13			黒褐	24	18	18	ピット								
14			灰褐	22	20	8	ピット								
15			灰褐	25	24	18	ピット								
16			灰褐	22	22	20	ピット								
17			灰褐	28	27	29	ピット	4							1
18			灰褐	21	18	25	ピット								
19			灰褐	24	22	18	ピット	1							
20			灰褐	35	32	31	ピット	5							1
21			灰褐	32	30	23	ピット	1							
22			灰褐	26	23	29	ピット								
23			複層	22	17	22	ピット								
24			黒褐	28	21	30	ピット								
25			灰褐	17	16	9	ピット								
26			灰褐	26	26	7	ピット								
27			灰褐	18	15	11	ピット								
28			灰褐	28	24	21	ピット	2							
29			—	—	—	—	欠番								
30			—	—	—	—	欠番								
31			黒褐	36	18	24	ピット								
32			灰褐	24	20	11	ピット								
33			灰褐	48	23	15	土坑	1							
34			黒褐	24			ピット								
35			灰褐	20	20	8	ピット								
36			黒褐	32	20	37	ピット	2							
37			黒褐	30	28	26	ピット	3							
38			灰褐	28	26	10	ピット								
39			—	—	—	—	欠番								
40			黒褐	28	26	25	ピット			1					
41			—	—	—	—	欠番								
42			—	—	—	—	欠番								
43		8	複層	32	30	40	ピット	1							
44			灰褐	22	20	6	ピット								
45			灰褐	26	24	10	ピット								
46			灰褐	22	22	13	ピット		1						
47		8	黒褐	26	22	22	ピット								
48			—	—	—	—	欠番								
49			複層	32	26	28	ピット	2							
50			灰	24	20	16	ピット								
51			黒褐	26	25	33	ピット	2							
52			複層	28	20	38	ピット								
53			灰褐	28	20	17	ピット								
54			灰褐	22	18	14	ピット								
55			灰褐	28	24	15	ピット	3							
56			灰褐	18	14	7	ピット								
57			黒褐	30	24	22	ピット								
58	23		灰褐	30	28	19	ピット	1	1						
59			灰褐	22	18	7	ピット								
60			黒褐	14	13	5	ピット								
61			灰褐	20	16	8	ピット								

第９表　遺構データ一覧表（1）

遺構番号	挿図	図版	土色	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)	種別	土器	青磁	白磁	カムイヤキ	沖縄産陶器		青花	他
												無釉	施釉		
62			—	—	—	—	欠番								
63			黒褐	30	22	10	ピット								
64			—	—	—	—	欠番								
65			黒褐	38	32	18	ピット								
66			複層	34	28	27	ピット		1						
67			—	—	—	—	欠番								
68			灰褐	30	26	15	ピット								
69			灰褐	14	12	9	ピット								
70			黒褐	36	18	10	ピット								
71			黒褐	24	23	4	ピット								
72			—	—	—	—	欠番								
73			灰褐	18		9	ピット								
74			黒褐		24	8	ピット								
75			灰褐	28	20	14	ピット								
76			灰褐	15	15	11	ピット	1							
77			灰褐	16	13	11	ピット								
78			—	—	—	—	欠番								
79			黒褐	24	20	21	ピット								
80			灰褐	28	26	9	ピット								
81			黒褐	30	30	26	ピット	1							
82			—	—	—	—	欠番								
83	22		灰褐	50	38	30	土坑								
84			黒褐	28	22	20	ピット								
85			灰褐	21	17	10	ピット								
86			灰褐	22	20	12	ピット	1							
87			灰褐	19	15	11	ピット								
88			黒褐	16	14	14	ピット								
89			灰褐	22	14	7	ピット								
90			灰褐	30	26	13	ピット								
91			灰褐	26	22	14	ピット								
92			—	—	—	—	欠番								
93			灰褐	26	18	18	ピット								
94			灰褐	18	15	12	ピット								
95			黒褐	12	12	11	ピット								
96			黒褐	20	18	8	ピット								
97			灰褐	26	20	11	ピット								
98			黒褐	60	48	27	土坑		1						
99			灰褐	36	26	17	ピット								
100			黒褐	40	33	20	ピット	3							
101			黒褐	62	38	36	土坑	8							
102			灰褐	42	28	28	ピット	5							
103	22		黒褐	54	48	50	土坑	3							
104			黒褐	36	32	30	ピット								
105			灰褐	32	23	13	ピット								
106			複層	32	26	26	ピット	2							
107			—	—	—	—	欠番								
108			灰褐	22	18	7	ピット								
109			?	42	28	10	ピット								
110	17	9	複層	126	84	18	土坑	2							1
111	22	13	複層	66	44	35	土坑	2							
112			灰褐	18	18	17	ピット								
113			—	—	—	—	欠番								
114			灰褐	18	18	19	ピット								
115			灰褐	18	18	16	ピット								
116	18	9	複層	116	94	14	土坑	8							
117			—	—	—	—	欠番								
118			—	—	—	—	欠番								
119			黒褐	30	27	28	ピット								
120			—	—	—	—	欠番								
121	17		灰褐	80	52	4	土坑								
122			灰褐	26	23	6	ピット								

第10表　遺構データー覧表（2）

遺構番号	挿図	図版	土色	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)	種別	土器	青磁	白磁	カムイヤキ	沖縄産陶器		青花	他
												無釉	施釉		
123			—	—	—	—	欠番								
124			黒褐	18	18	19	ピット								
125			—	—	—	—	欠番								
126			—	—	—	—	欠番								
127			灰褐	20	18	6	ピット								
128			灰褐	24	24	12	ピット	1							
129			—	—	—	—	欠番								
130			黒褐	18	14	15	ピット	1							
131	22	13	暗灰褐	54	46	10	土坑	2							
132	22	13	黒褐	54	38	18	土坑	1							
133			黒褐	34	28	5	ピット								
134			灰褐	28	24	6	ピット								
135			灰褐	24	20	6	ピット								
136			灰褐	20	16	4	ピット								
137	20	10	複層	88	—	16	土坑	2							
138			灰褐	26	24	18	ピット	1							
139	22		黒褐	44	40	10	土坑								
140			黒褐	34	26	25	ピット								
141			灰褐	34	26	25	ピット								
142			黒褐	32	30	21	ピット	8							1
143			黒褐	32	24	22	ピット								
144			灰褐	24	22	21	ピット								
145			黒褐	34	32	11	ピット								
146			灰褐	26	22	7	ピット								
147			灰褐	24	22	14	ピット								
148			黒褐	24	22	13	ピット								
149			灰褐	19	16	12	ピット								
150			灰褐	26	22	7	ピット								
151			黒褐	20	18	13	ピット								
152			黒褐	29	24	4	ピット								
153	27	14	灰褐	45	28	25	ピット	14							
154			灰褐	24	22	13	ピット	1							
155			—	—	—	—	欠番								
156			—	—	—	—	欠番								
157			灰褐	26	16	24	ピット								
158			黒褐	32	28	18	ピット	6							
159	20	10	複層	90	76	28	土坑	11		1					
160			黒褐	24	22	11	ピット								
161			灰褐	20	15	6	ピット								
162			複層	23	20	13	ピット								
163			灰褐	19	16	12	ピット	1							
164			灰褐	22	17	9	ピット	2							
165			灰褐	28	22	13	ピット								
166			灰褐	34	28	13	ピット								
167			灰褐	22	18	—	ピット								
168			灰褐	30	28	18	ピット								
169			黒褐	20	20	13	ピット								
170			灰褐	26	20	14	ピット								
171			灰褐	22	20	17	ピット	2							
172			複層	24	23	25	ピット	2							
173	20	11	複層	84	72	10	土坑	1							
174	25	14	複層	22	21	29	ピット	3		1					
175			黒褐	24	23	13	ピット								
176	8	3·4	複層	1325	155	54	溝	215	7	9	4				5
177	8	5	複層	320	115	35	溝	28	1						1
178			複層	400	56	5	溝	9					1		1
179			灰褐	40	34	22	ピット								
180			灰褐	32	28	10	ピット								
181			灰褐	36	24	15	ピット								
182			複層	902	71	9	溝								
183			—	—	—	—	欠番								

第11表　遺構データー覧表（3）

遺構番号	挿図	図版	土色	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)	種別	土器	青磁	白磁	カムィヤキ	沖縄産陶器		青花	他
												無釉	施釉		
184			—	—	—	—	欠番								
185			—	—	—	—	欠番								
186			—	—	—	—	欠番								
187			—	—	—	—	欠番								
188	29		灰褐	729	140	7	溝	7	1			7	5	1	7
189	29		複層	931	41	22	溝								
190			?	26	22	18	ピット								
191			灰褐	28	28	29	ピット								
192			黒褐	26	23	17	ピット								
193			?	30	28	12	ピット								
194			複層	103	31	6	溝								
195			灰褐	32	26	8	ピット								
196			灰褐	24	18	9	ピット								
197			灰褐	30	22	12	ピット								
198			黒褐	20	20	15	ピット								
199			灰褐	31	22	9	ピット								
200			—	—	—	—	欠番								
201			灰褐	20	16	15	ピット								
202	30		灰	568	146	6	溝	8				1	3		1
203			灰褐	20	18	12	ピット								
204	20	11	複層	110	—	18	土坑	1							
205			黒褐	16	16	9	ピット								
206			—	—	—	—	欠番								
207	21	12	灰褐	76	70	10	土坑	1							

第12表　遺構データー覧表（4）

第３章　仲間後原遺跡（その２）調査成果

第１節　№８トレンチの基本層序と遺構

基本層序

層序の概要　範囲確認のため設定した№８トレンチの基本層序は、地山を含めて６層に分層することが出来た。第１層は現在の表土。第２層は最近まで畑として使用されていた土。第３層では中国産陶磁器やグスク土器が見られ始めた。また砲弾片が目立つ。第４層は遺物包含層である。中国産陶磁器のほかグスク土器などが見られ、３層のように砲弾片の出土はない。第５層は遺構が検出された層である。土質により２つに分層できた。５ａ層はトレンチ内の東側の一部のみで見られ、５ｂ層ではピットが検出された。遺物は見られない。第６層は地山であり、５ｂ層同様ピットが検出された。

層序については上層から下層へ順に番号を付与し、土色は土色帳を使用した。各土層の特徴については以下のとおりである。

第Ⅰ層　黒色腐葉土、現在の表土である（10YR３／３）。東側でみられた。

第Ⅱ層　茶褐色土（10YR４／４）。一部、表土。畑として使用されていた。北壁のみで見られる。

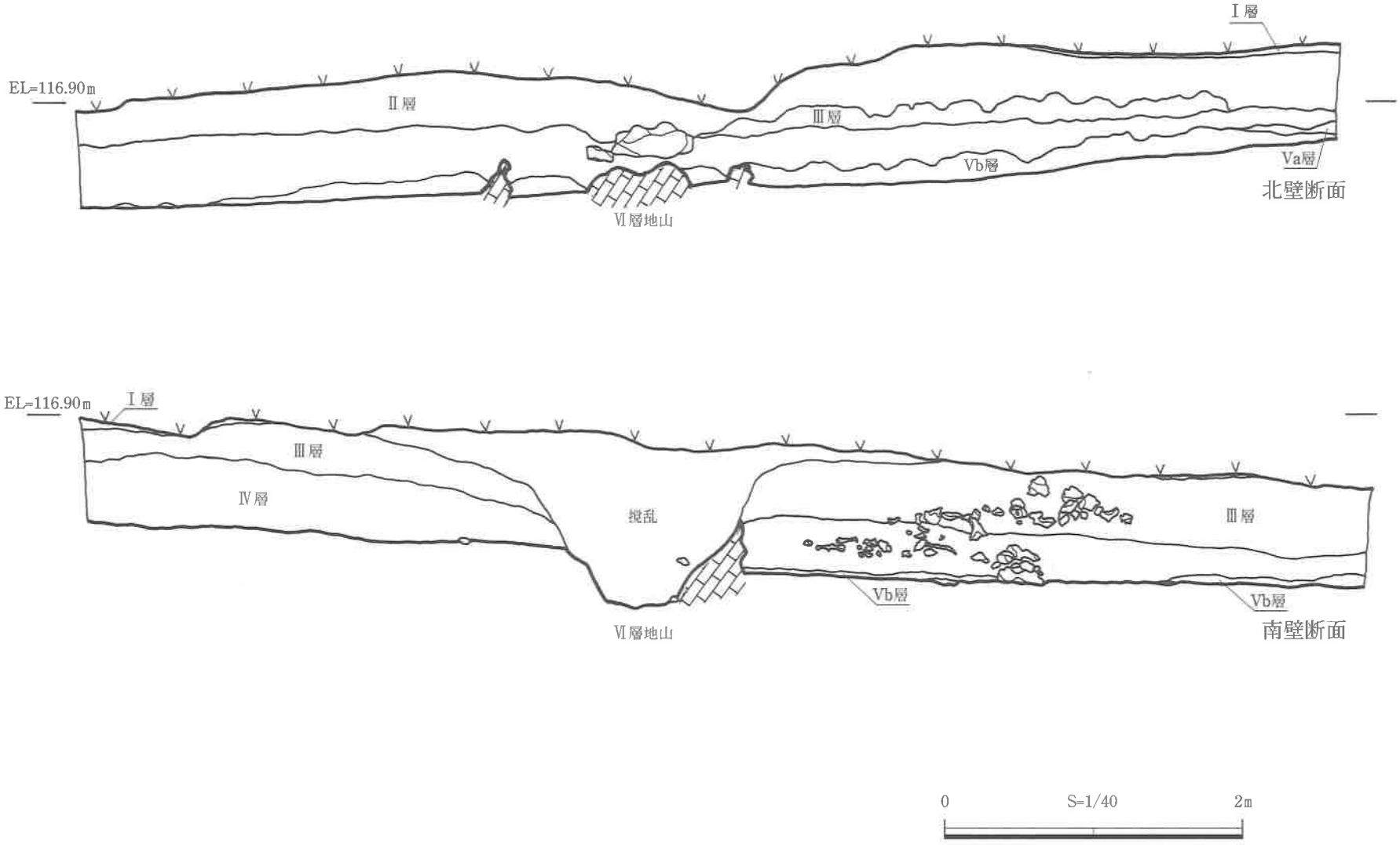
第Ⅲ層　暗褐色土（10YR３／４）。焼土・炭を含み、中国産青磁やグスク土器が出土する。北壁では畑作で撹乱を受けたのか、一部薄くなっている。南壁では一部表土として露出していたのか砲弾片が目立つ。

第Ⅳ層　黒褐色土（10YR２／３）。中国産青磁・白磁や、グスク土器が目立って出土する。焼土・炭も多く含み、トレンチ内全面で広がっている。出土する遺物は３～４センチの小破片が多く、器形復元出来る資料は得られなかった。

第Ⅴａ層　黄茶褐色砂質土。トレンチ内東側でのみ見られた層。カムィヤキ、中国産白磁、グスク土器が出土。

第Ⅴｂ層　黄茶褐色土（10YR５／８）にⅣ層の土である黒褐色土（10YR２／３）がまだらのように混じる。締り良し。地山への移行層。グスク時期だと考えられるピットが検出された。遺構以外からは遺物の出土無し。

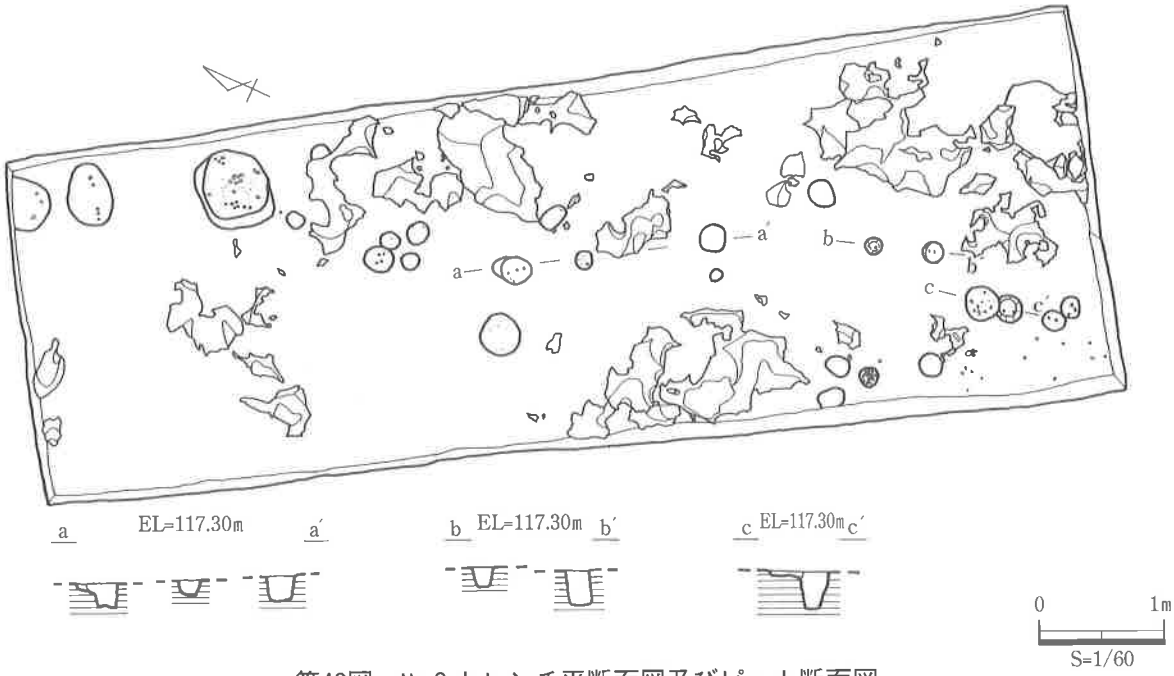
第Ⅵ層　地山。Ⅴｂ層同様にピットが検出された。



第41図　No.8 トレンチ基本層序図

遺構と出土遺物

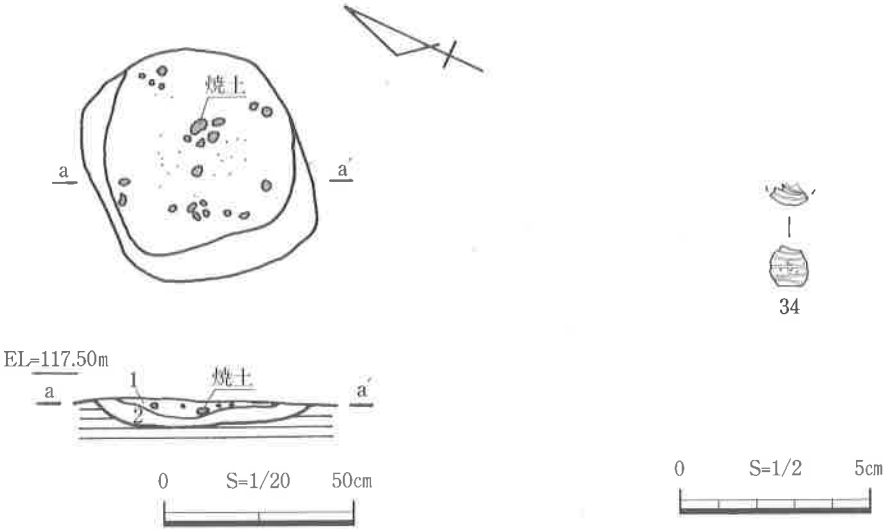
遺構　大小あわせて26基のピットを確認した。Ｖｂ層及びⅥ層（地山）を掘りこんだピットで、埋土はⅣ層の土である。径10～15cm 内外に収まるピットと、径20～25cm 内外に収まるピットが主にみられた。これらは建物としてのプランは掴めず、東西横位に並ぶ傾向があることから柵列が想定されたが性格は不明である。またピット03のように焼土が多く見られたものもあった。



第42図　No.8 トレンチ平断面図及びピット断面図

ピット03（第43図　図版32）　平面観は円形を呈し、長径60cm、短径55cm、深さ６cm で皿状の断面形である。焼土が最も多く見られた。埋土は10YR２／３黒褐色土が主体であるが、混入物により２層に分層することが出来た。１は10YR２／３黒褐色土で焼土や炭を多く含み、土質も軟らかい。２は10YR２／３黒褐色土に7.5YR５／６明褐色泥質土がまだら状に観察できる。１～２㎜の焼土が少量見られたが、他は見られなかった。壁に焼壁等はなく、炉としての使用は不明。

出土遺物（第43図）　ガラス製の玉が１点出土した。



第43図　ピット03平断面図及び出土遺物

第２節　Ⅰ区の基本層序と遺構

基本層序

層序の概要　Ⅰ区の層序は、大きく５層に分層することが出来た。第１層は現在の表土。第２層は戦時中の表土。第３層が遺跡を形成する遺物包含層である。第３層は、さらにａ・ｂの２層に細分される。ａ層は全体的にみられたが、ｂ層は調査区西側グリッドのＡ地区の岩盤周辺でのみ見られる。第４層は層的に薄く、遺物もほとんど見られない。第５層は遺構が検出され、48基のピットと１基の土坑を確認した。

層序については上層から下層へ順に番号を付与し、土色は土色帳を使用した。各土層の特徴については以下のとおりである。

第Ⅰ層　現表土。黒色腐葉土（10YR３／３）。調査区は木々に囲まれた地区だったため、全体的に堆積している。

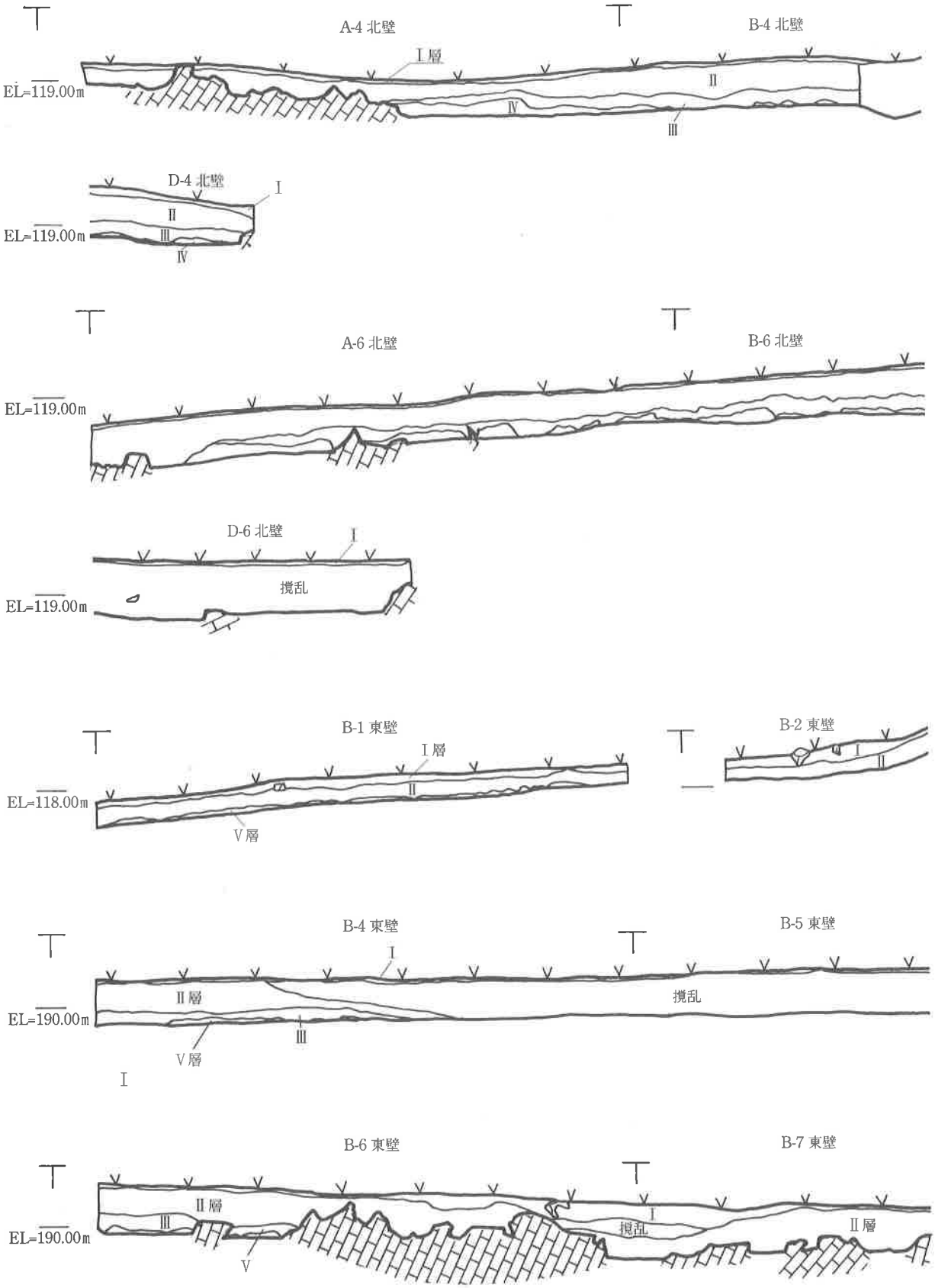
第Ⅱ層　褐色混砂質土（7.5YR４／４）、やや硬め。砲弾片が目立つ層序である。また近代陶磁器、ガラス片らも見られた。時折中国産青磁片や染付け等も出土した。木の根も多い。少量の焼土、炭を含む。

第Ⅲａ層　灰茶褐色土（7.5YR４／４褐色土をベースに7.5YR３／１黒褐色土混じる）、やや硬めで少々粘質。上記Ⅱ層より若干黒味が増す程度であり、平面にて確認するのは困難であった。遺物はグスク土器や中国産陶磁器が少量出土した。調査区の２ラインから６ラインまで広がり、中心部分は４・５ラインである。Ａ地区ではほとんど見られない。砲弾抗も何箇所か有る。

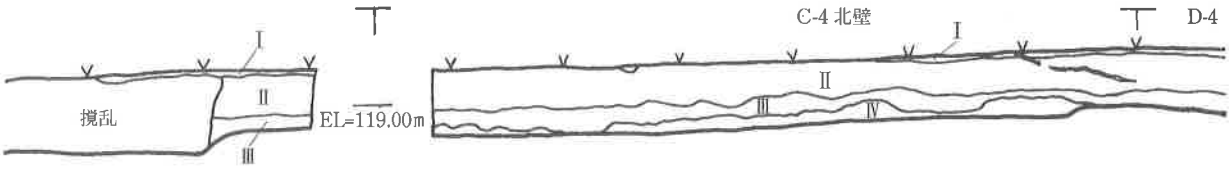
第Ⅲｂ層　暗茶褐色土。Ａ４～６、Ｂ６～７グリッドでのみ見られ、岩盤周辺に堆積しており、ほとんどが岩と岩の間に溜まった土である。面縄前庭式土器の破片が数点出土した。Ａ６グリッドでは面での広がりがあった。

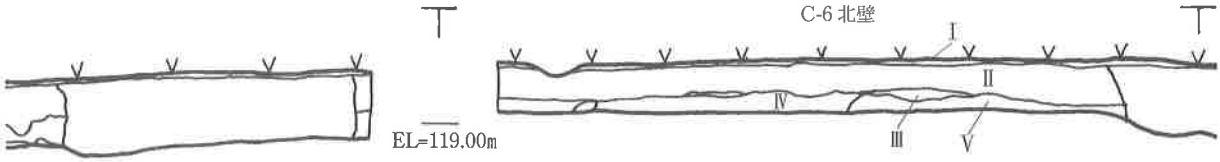
第Ⅳ層　橙褐色土（7.5YR５／８の土に7.5YR４／４褐色土がブッロク状に混じる）、締り良し。地山への移行層と考えられる。堆積は薄く、遺物はほとんど見られない。

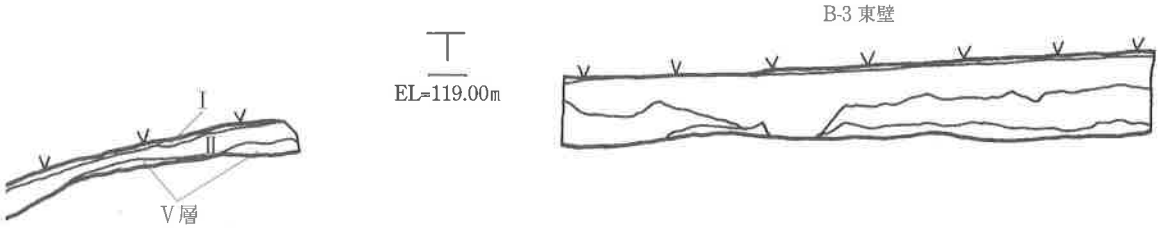
第Ⅴ層　橙褐色土（7.5YR５／８）。地山。石灰岩が風化したいわゆるマージの土。グスク期の遺構と考えられるピットが検出された。Ⅲａ層と同様に砲弾抗も何箇所か有った。

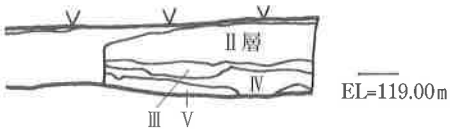


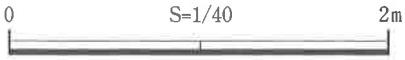
第44図　Ⅰ区基本層序図

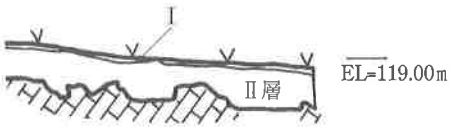

C-4 北壁
D-4
I
II
III
IV
撹乱
EL=119.00m

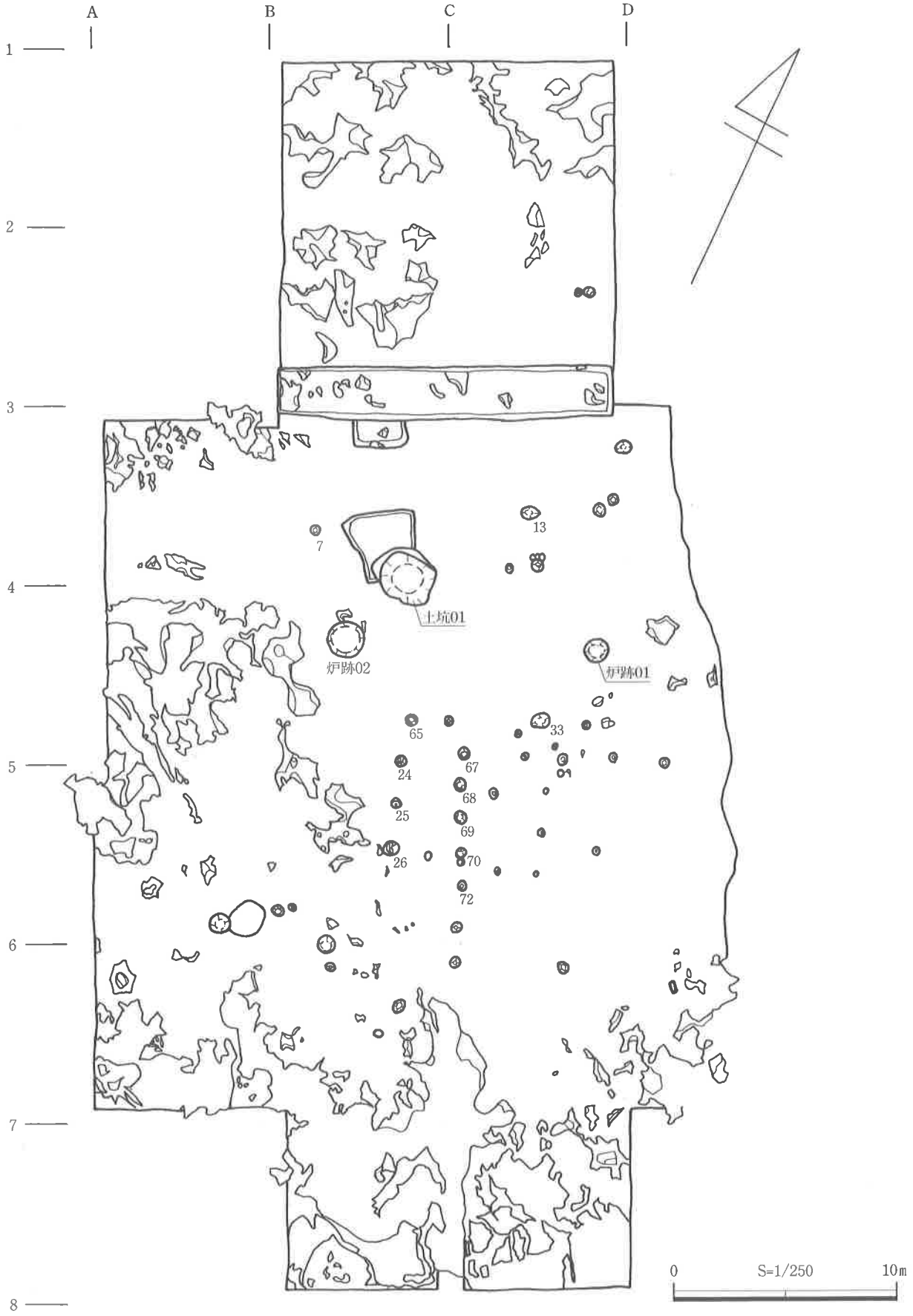

C-6 北壁
I
II
III
IV
V
EL=119.00m


B-3 東壁
I
II
V 層
EL=119.00m


II 層
IV
III
V
EL=119.00m


0
S=1/40
2m


I
II 層
EL=119.00m



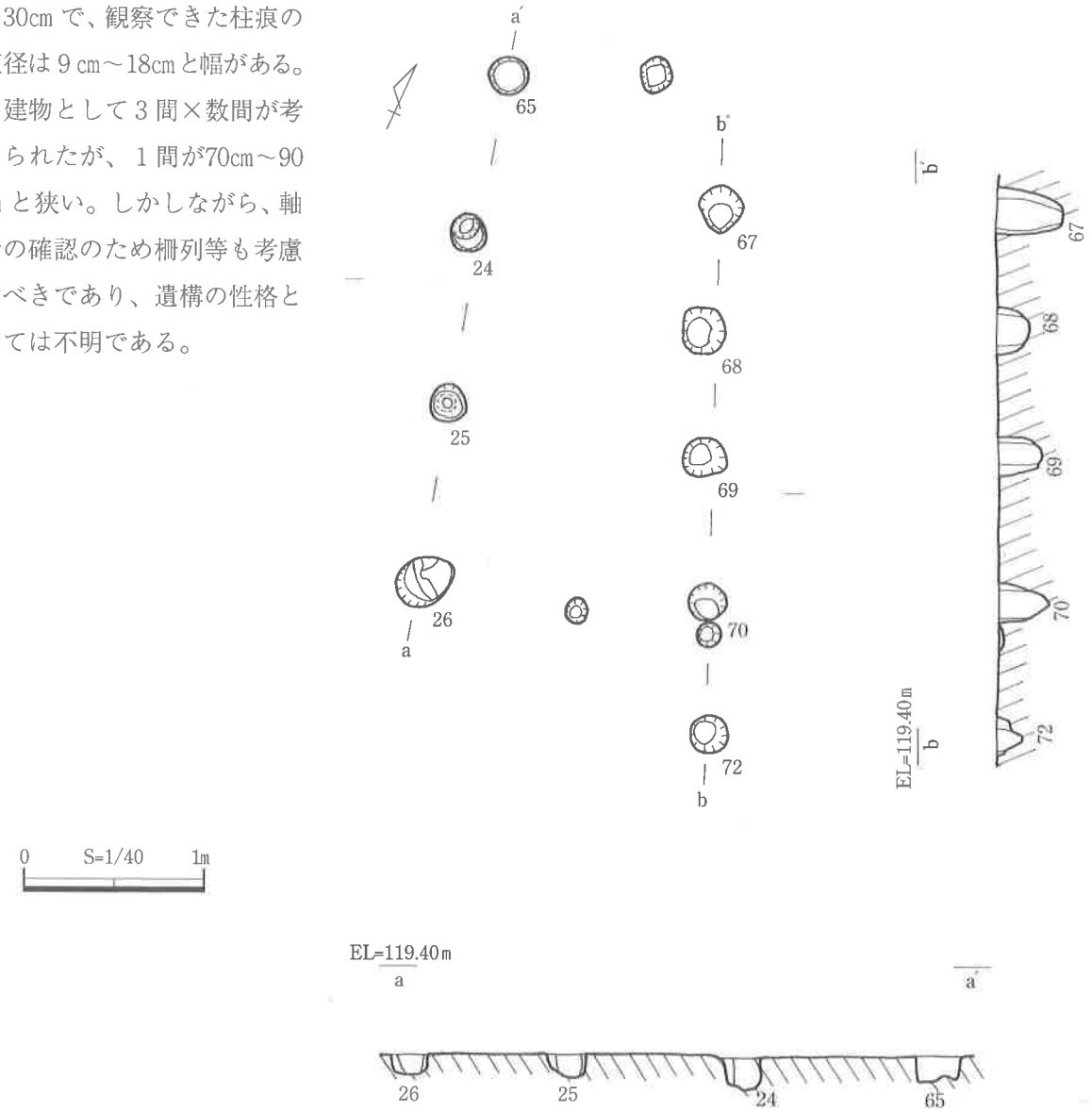
第45図　Ⅰ区遺構全体図

遺構と遺構内遺物

遺構概要　48基のピットと１基の土坑を確認した。第Ⅴ層いわゆる地山面で確認でき、埋土は第Ⅲａ層の土である。ピットには柱痕が観察出来るものもあり、何らかの構造物が建っていたと考えられる。調査地区北側で検出された炉跡の周辺にはピットは見られなかった。当時の人はピットでみられた何らかの構造物と火を使用する場所を区別していたと考えられる。

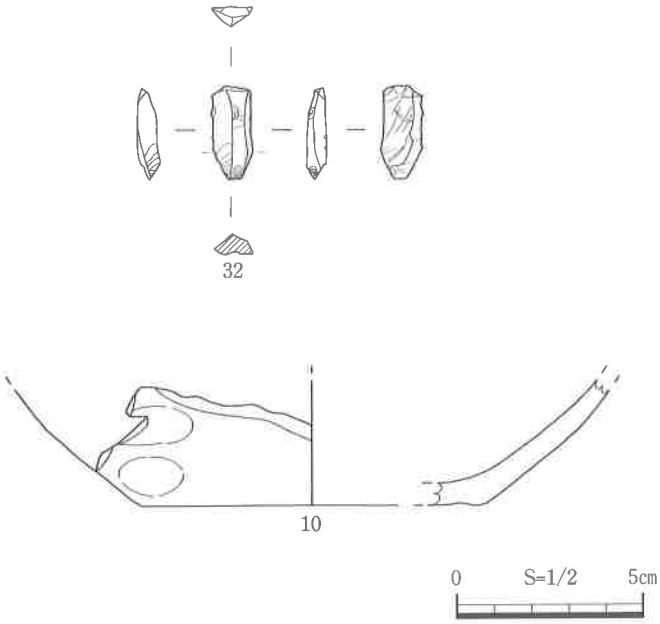
ピット　Ⅰ区は西側と南側で琉球石灰岩が露頭しており、中央と東側及び北側でフラットな面が続く。第45図　遺構全体図が示すように確認されたピットは中央から東側のフラットな面でみられ、特に中央で集中し、北側に少し空間を挟んで、土坑や炉跡と考えられるピットが検出された。ピットは48基確認したものの、建物としてのプランを掴めなかったが、２本の軸が考えられた。一つは北北西―南南東に並ぶ４基のピットの軸、もう一つは北西―南東に並ぶ５基のピットの軸である。前者のピット間は3.1m、後者3.1m。もしこの２本の軸が建物のプランの一部だと想定すると、その想定した２棟は重なり、数回の建て替えが考えられた。柱穴の平面形は円形で、直径10cm ～40cm の範疇であり、深さは10cm ～30cm で、観察できた柱痕の直径は９cm～18cm と幅がある。

建物として３間×数間が考えられたが、１間が70cm～90cm と狭い。しかしながら、軸での確認のため柵列等も考慮すべきであり、遺構の性格としては不明である。



第46図　Ⅰ区ピット平断面図（一部）

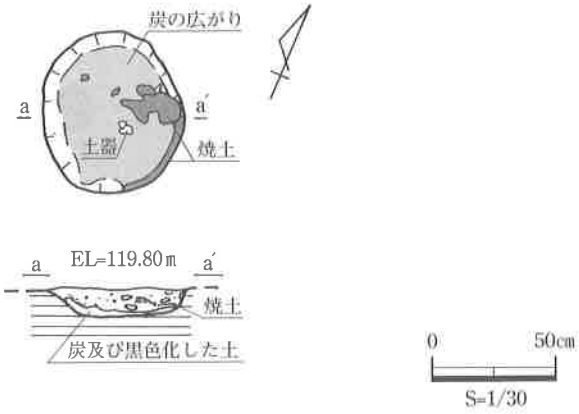
出土遺物　ピットよりグスク土器片及びチャート片が出土した。土器の胴部については図化を省略したが、ピット33よりチャート製品、ピット07、13より土器底部が出土し、それぞれを図化した。このように、チャート片とグスク時代の遺物が共伴するという事例は、市内の同丘陵上に有る真久原遺跡（註：1985沖縄県教育委員会）でも見られる。



第47図　Ⅰ区ピット出土遺物

炉跡01（第48図　図版34）　平面観円形を呈し、長径64cm、短径55cm、深さ10cmで皿状の断面形。埋土からグスク土器の破片が出土した。床部では全体的に薄く炭や炭の影響で黒く変色した土が広がっており、焼土の塊も見られた。また壁の一部にも焼土壁が見られた。炭化米や食料残骸等の遺物は検出されなかった。C－4グリッド。

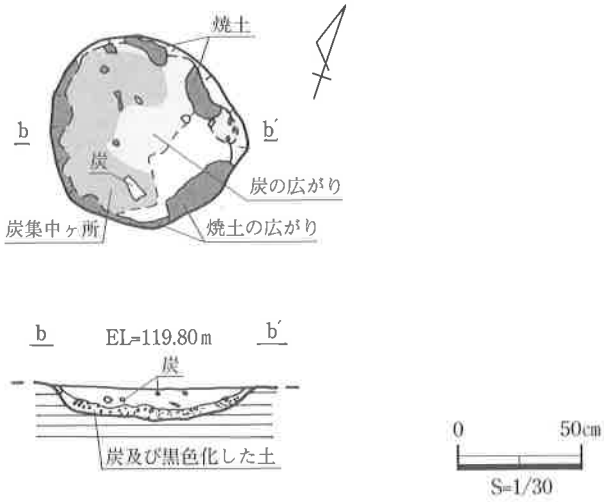
グスク土器が2点出土したが、胴部破片により図は割愛した。



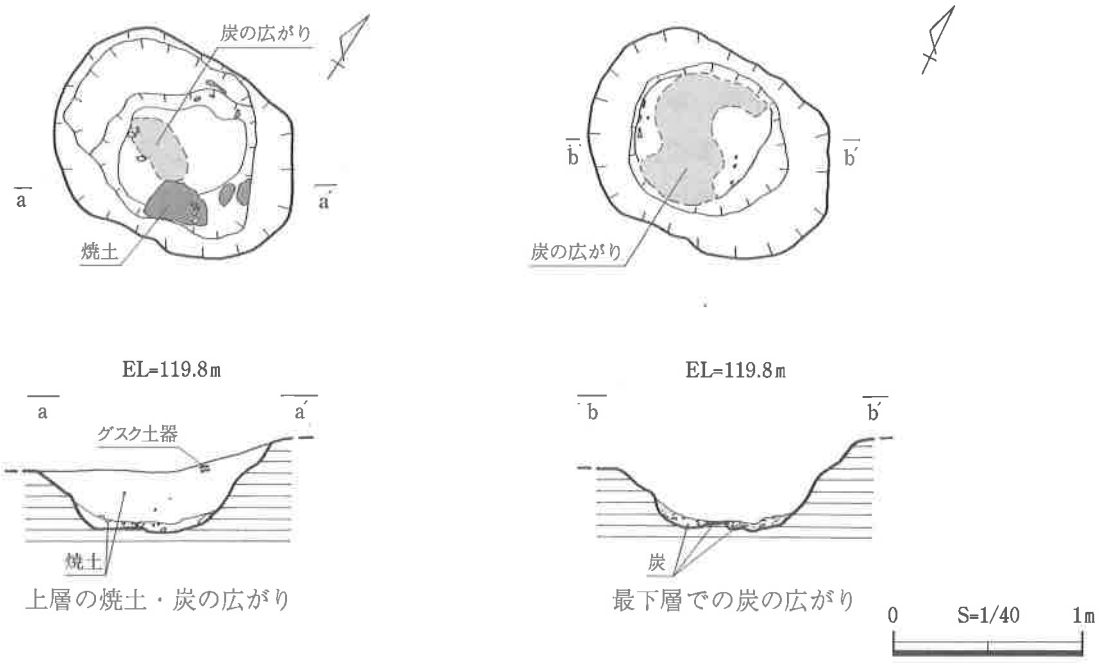
第48図　Ⅰ区炉跡01平断面図

炉跡02（第49図　図版34）　平面観円形を呈し、長径74cm、短径64cm、深さ12cmで炉跡。1同様皿状の断面形。焼土が壁側に集中し、床部に向かって薄く炭が広がっている。左半分の壁には焼土壁が厚くみられ、炭の広がりも左半分に集中する。右半分でも焼土はみられたが、壁としては厚みが無く焼土の広がりのみであった。B－4グリッド。

埋土から約1センチ程の木炭や、グスク土器の破片が数点出土した。土器は胴部破片により、上記同様図面は割愛した。



第49図　Ⅰ区炉跡02平断面図

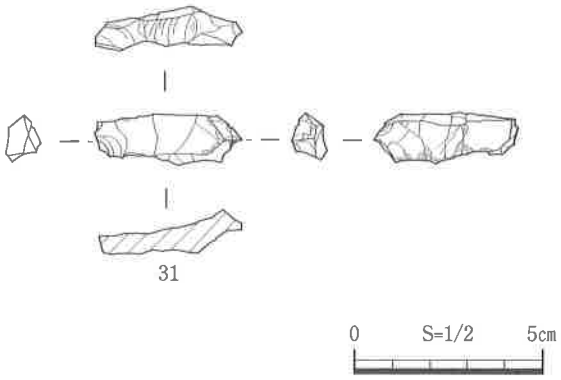


第50図　Ⅰ区土坑01平断面図

土坑01（第50図　図版34）　長径136cm、短径100cm、深さ26cm の平面観隅丸方形を呈する。埋土はⅢa層の土である。上層でグスク土器が数点、チャート製品が１点出土し、その他に炭や焼土が混入する。掘り下げるにつれて、床部で薄い炭の広がりが見られた。また、南東の壁には焼土が薄く広がり、近くには14cm×６cmの焼土塊が見られた。土坑内の土を持ち帰り洗浄した結果、炭化米や食料残骸等の遺物は検出されなかった。Ｃ－３・４グリッドより検出。

土坑の南西方向１ｍの箇所には炉跡02が存在するが、両者の関係はつかめていない。

出土遺物（第51図）　土坑01ではグスク土器やチャート製品が出土した。グスク土器はすべて胴部破片だったため図化は省略した。チャート製品は１点出土した(右図)。右端部を打割により尖らせる。自然面も一部みられ、また明確な刃部が見られないことから、未製品だと考えられる。産地は、本島北部と考えられ、当時の人々の交流範囲を示す材料である。



第51図　Ⅰ区土坑01出土遺物

第３節　出土遺物

Ｉ区とトレンチからグスク土器、中国産陶磁器である青磁や白磁、天目等が出土した。この項では地区別にせず、遺物別で紹介する。また、沖縄産陶器も若干みられたが、割合として土器や輸入陶磁器等の遺物が多くみられ、沖縄産陶器等は割愛した。

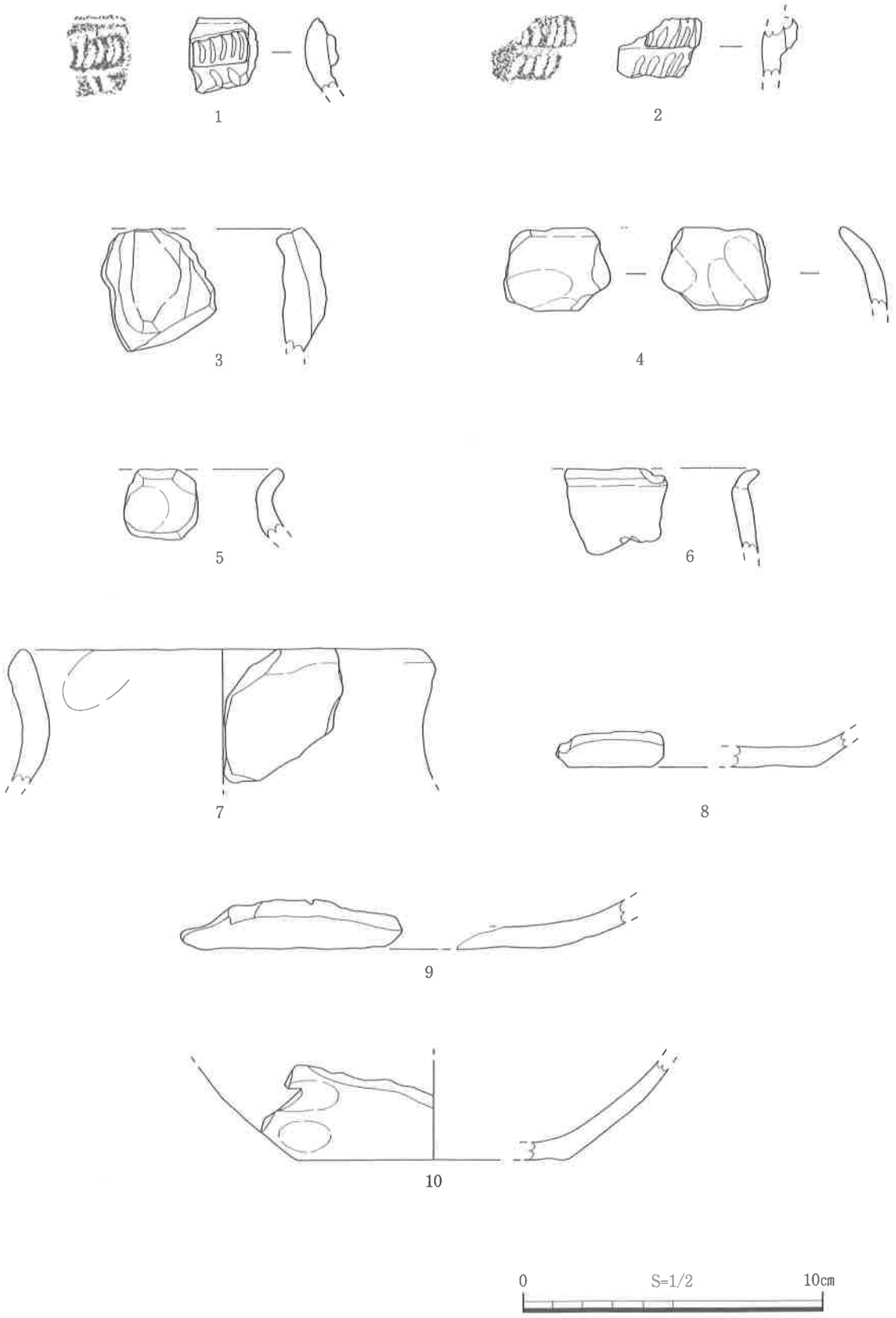
(1) 土器

本遺跡（その２）で出土した土器はいわゆるグスク土器の範疇に入る土器が主であり、総破片数567点を数えた。どれも小破片による出土であり、全形を窺える資料が無かったことは残念であった。グスク土器の他に、沖縄暫定編年前Ⅲ期に相当する面縄前庭式土器の小破片が数点出土した。それらは岩盤の窪地や隙間に溜まった土からの出土で層的には見られなかったが、本遺跡が所在する仲間集落から出土した土器の中では最も古手であり注目に値する。

面縄前庭式土器は特徴が窺える資料を、グスク土器については器形が窺える資料を図化した。

第13表　土器観察表

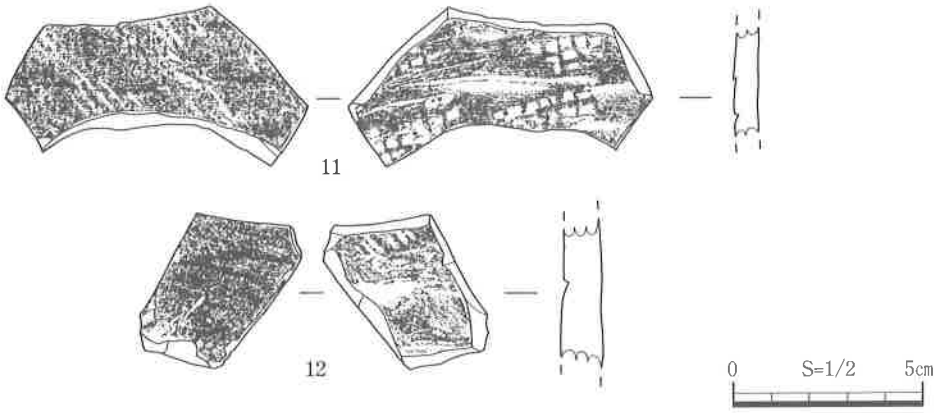
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	種類	器種／部位	観　察　事　項
第52図１ 図版36	Ａ－４ Ⅲｂ層	面縄前庭式	－	頸部資料。文様は凸帯上を半截竹管状工具により密に施文する。その上部には斜位の沈線が見られ、鋸歯文の一部だと考えられる。胎土には白色粒子・石灰質砂粒の混入物を粗く含む。
第52図２ 図版36	Ａ－４ Ⅲｂ層		－	頸部資料。文様は凸帯上を半截竹管状工具により密に施文する。その上部には斜位の沈線が見られ、鋸歯文の一部だと考えられる。胎土には白色粒子・石灰質砂粒の混入物を粗く含む。上記の破片と同一個体だと考えられる。
第52図３ 図版36	№6トレンチ 地山直上	グスク土器	鍋型	いわゆる石鍋模倣土器である。縦長の瘤状突起を口縁部に張付ける。口唇部は平坦に成形する。胎土中に僅かに白色粒子が見られた。
第52図４ 図版36	№8トレンチ Ⅳ層		鍋型	口唇部の内端を尖らせ、口縁部が内湾した資料。器面はアバタ状で、赤色粒の混入物を含む。器面の調整は丁寧なナデ仕上げである。
第52図５ 図版36	№8トレンチ Ⅳ層		鉢型	口縁部が外反する資料。内外面ともに丁寧なナデ仕上げを施している。器面はアバタ状。
第52図６ 図版36	Ａ－６ Ｉ層		甕型	口唇部を外側に強く折る。内外面ともに丁寧なナデ調整を施している。器面はアバタ状で、胎土には赤色粒の混入物を含む。
第52図７ 図版36	№8トレンチ Ⅳ層		壺型	頸部が長く直口し、口唇内が指圧により直口気味に立ち上がる。胎土には白色粒子・赤色粒・石灰質白色粒の混入物を含む。
第52図８ 図版36	№8トレンチ Ⅳ層		底部	内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。胎土には白色粒子・赤色粒・石灰質白色粒の混入物を含む。
第52図９ 図版36	Ｂ－６ Pit 07		底部	なだらかに立ち上がる底部の資料である。内面丁寧なナデ調整を施す。外面はナデ調整するものの粗雑である。外面アバタ状。
第52図10 図版36	Ｃ－３ Pit 13		底部	内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。胎土には白色粒子・赤色粒・石灰質白色粒の混入物を含む。



第52図　土器実測図

(2) カムィヤキ

カムィヤキの資料出土数は大変少なく５点のみの出土である。総て胴部破片であった。そのうち特徴的な２点を図化した。



第53図　カムィヤキ実測図

第14表　カムィヤキ観察表

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	部位	胎　土	焼　　成	観　察　事　項
第53図11 図版37	A－6 Ⅲｂ層	胴部	緻密で白色微細粒が多量に混入。	内外面共に青灰色で断面は赤茶褐色のサンドウィッチ状を呈する。焼成は堅緻で器壁は約６㎜。	壺と推定される資料。外面はナデ調整を施すが、斜め方向に平行文の叩き痕が僅かに認められる。内面は巻き上げ技法による粘土紐接合の痕跡が顕著にみられ粗雑な凹凸を呈す。格子目文の当て具痕が明瞭で、横位の回転擦痕が認められる。
第53図12 図版37	D－3 Ⅲａ層	胴部	緻密で白色微細粒が僅かながらに混入。	外面は灰色で、内面が灰褐色、断面は赤茶褐色を呈す。焼成はやや軟質な印象を受ける。器壁は上記11と比べ、やや厚い。	外面は丁寧なナデ調整を施す。内面は巻き上げ技法による粘土紐接合痕跡が顕著にみられ、一部（図上方）で斜位の当て具痕が見られる。粗雑なナデ調整。

(3) 中国産磁器

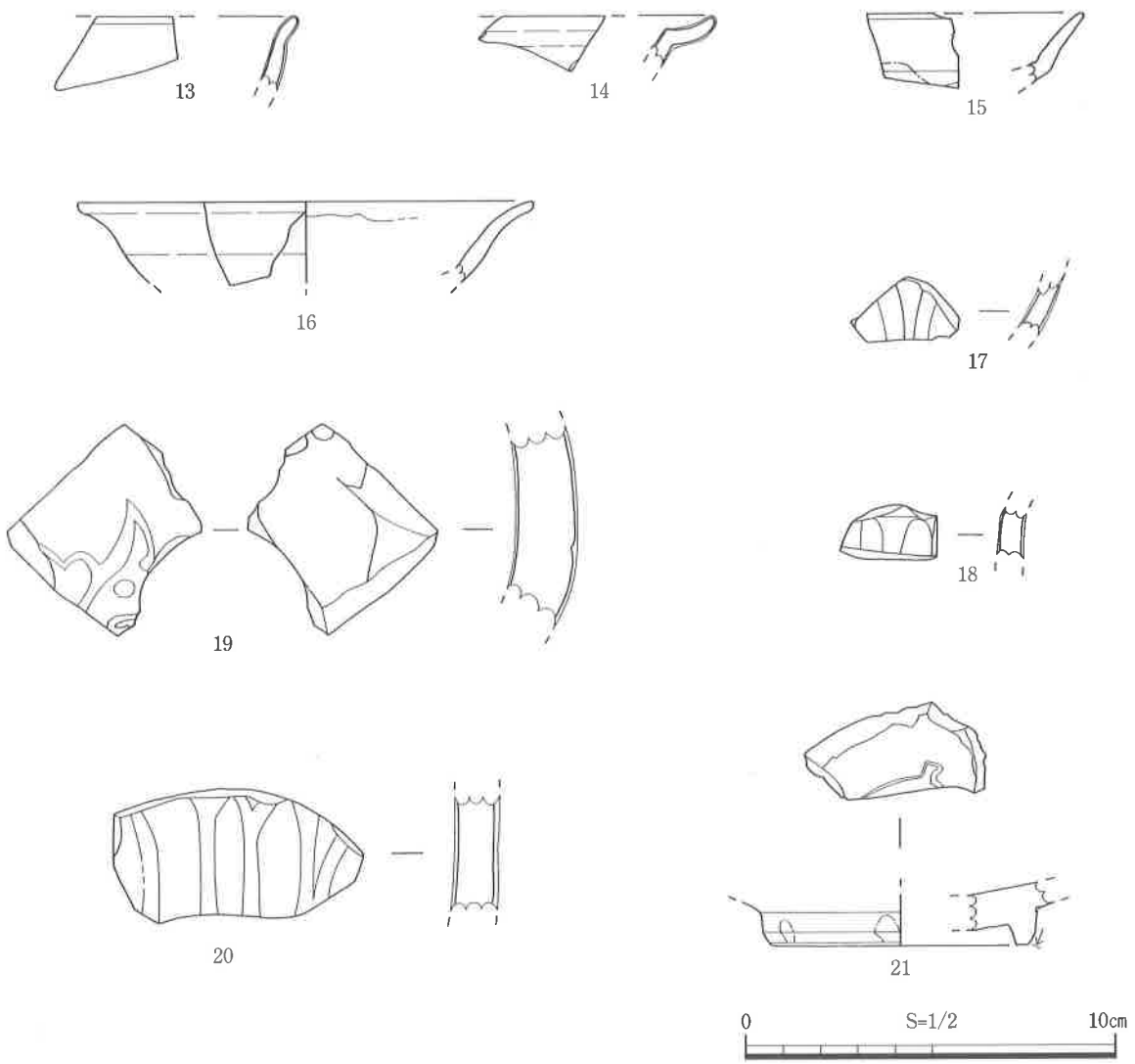
• 青磁

本遺跡で出土した青磁は総て中国産であった。土器同様に全形を窺える資料はなく、総て破片による出土である。総破片数114点で、土器に次いで多い。器形には碗、皿などがみられ、破片で全形が窺える資料がなく残念だが、第54図19、20のように壺と思われる胴部片も出土した。以下概述する。

第15表　青磁観察表

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高	観　察　事　項
第54図13 図版37	No1トレンチ 地山直上	碗	－	－	－	外反する口縁部の破片。灰青緑色のやや薄い透明釉を施し、両面ともに無文である。素地は淡灰色で、微粒子。
第54図14 図版37	No8トレンチ Ⅳ層	皿	－	－	－	口折皿の鍔部破片。口縁部を「く」の字状に折り曲げ、更に端部を上方に引き上げる。内外面ともに無文である。青緑色の透明釉を施す。素地は灰白色でやや微粒子である。
第54図15 図版37	A－6 Ⅲｂ層	皿	－	－	－	薄くやや黄色味のある透明なガラス質の釉を外面体部上位まで施釉する。外面中央でやや外側に屈曲し、口唇部を平たく成形する。両面ともに粗い貫入が見られる。同安窯系の青磁皿か。

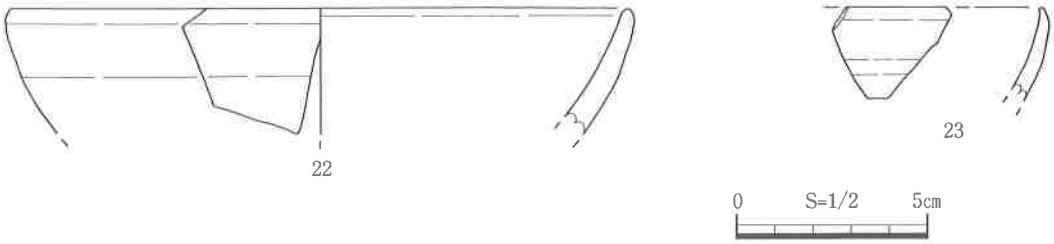
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高	観　察　事　項
第54図16 図版37	No1トレンチ 地山直上	Ⅲ	12.2	—	—	腰折れ外反Ⅲの破片。腰部より口縁部にかけて強く外反する。内外面ともに無文である。素地は白色で、灰青色の釉を施釉する。
第54図17 図版37	C－2 第Ⅱ層	胴部	—	—	—	外面にヘラ削りによる蓮弁文がみられる胴部破片である。灰白色に、淡青色の釉を施釉する。鎬はみられない。
第54図18 図版37	No8トレンチ Ⅳ層	胴部	—	—	—	内面丸篦で蓮弁を施し、外面は無文の胴部破片である。灰白色の素地に緑色の釉を施釉し、蓮弁部分では濃緑色を呈す。
第54図19 図版37	No1トレンチ 地山直上	胴部	—	—	—	外面に片切彫りによる花唐草文が施され、内面は無文。両面に粗い貫入が顕著にみられ、特に内面は外面よりも粗い。素地は淡灰色の素粒子で、明青緑色の釉を施釉する。器壁が1.8cm と厚い。
第54図20 図版37	No8トレンチ Ⅳ層	胴部	—	—	—	外面にヘラ削りによる蓮弁文がみられる。内面は無文。素地は淡灰白色の微粒子で淡青緑色の釉を施釉する。上記資料同様に器壁厚い。
第54図21 図版37	C－6 Ⅱ層	底部	—	7.4	—	畳付から外底は露胎である。内底に印花文。灰青色の釉を内面は薄く施釉され、外面高台際まで施釉する。内面に粗い貫入がみられる。



第54図　青磁実測図

• 白磁

白磁の出土量もカムィヤキと同様出土量は少なく、総て破片である。総破片数22点。出土地点別では約７割がNo８トレンチより出土した。そのうち特徴的な２点を図化した。



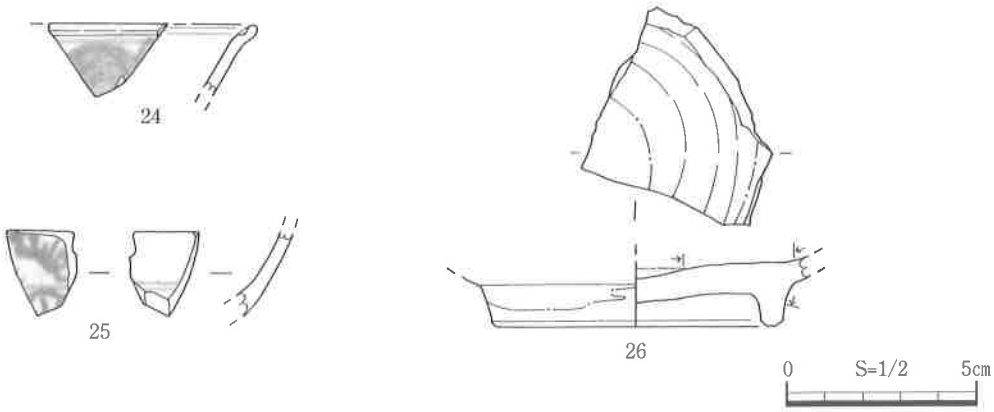
第55図　白磁実測図

第16表　白磁観察表

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器種	口径 (cm)	観　察　事　項
第55図22 図版38	No２トレンチ 地山直上	碗	16.2	内湾する口縁部の破片。内外面ともに無文。素地は灰白色で、気泡のような小さな穴が多数見られる。灰白色の透明釉を施釉する。内外面ともに細かな貫入有り。ビロースクタイプ。
第55図23 図版38	No８トレンチ Ⅳ層	碗	－	本資料も22と同様に内湾する口縁部の破片。素地は乳白色を呈する。内外面ともに細かな貫入がみられ、口唇部がやや平たく、陵を示す。器壁は22と比べて薄い。

• 青花

青花は総破片数50点出土し、そのうち約８割は本調査区での出土する傾向が見られた。特徴的な３点を図化し、以下概述する。



第56図　青花実測図

第17表　青花観察表

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器種	底径 (cm)	観　察　事　項
第56図24 図版38	D－５ Ⅱ層	碗	－	外反する口縁部の破片。外面口縁直下に圏線が１本施され、その下位に何らかの文様（唐草文？）が描かれている。内面口唇直下に幅の広い界線が見られる。呉須の発色弱く、淡青色。
第56図25 図版38	表土	胴部	－	外面に１本の圏線、唐草文、蓮弁文が施され、内面は下方に２本の圏線を施す。呉須の発色良い。素地は白色で堅緻。碗の胴部破片か。
第56図26 図版38	B－２ Ⅱ層	底部	7.7	見込みの釉薬を蛇の目状に掻き取って露胎とする。また見込みに輪状の剥離痕有り。高台脇畳付け露胎。畳付けや高台内側に砂が付着する。素地は灰白色で、気泡のような小さな穴が見られた。

• 天目

天目は出土破片数６点と非常に少ない。そのうち８割はNo.８トレンチより出土し、白磁の出土傾向と類似する。そのうち器形が窺える口縁部２点を図化した。

第57図　天目実測図

第18表　天目観察表

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器　種	観　察　事　項
第57図27 図版38	No.８トレンチ Ⅳ層	碗	口縁部がやや外側に開き、軽く角度を変えて立ち上がる。釉薬中に気泡があり、表面光沢無し。口唇部は薄く施釉する。素地は灰白色を呈し、黒色微粒・白色微粒の混入物を含む。
第57図28 図版38	No.８トレンチ Ⅳ層	碗	口縁部が弱く外反する。口縁部は茶褐色、胴部に黒褐色の釉薬がかかり、黒褐色の釉の表面には内外面ともに禾目が見られる。素地は灰色を呈し、黒色微粒の混入物を含む。

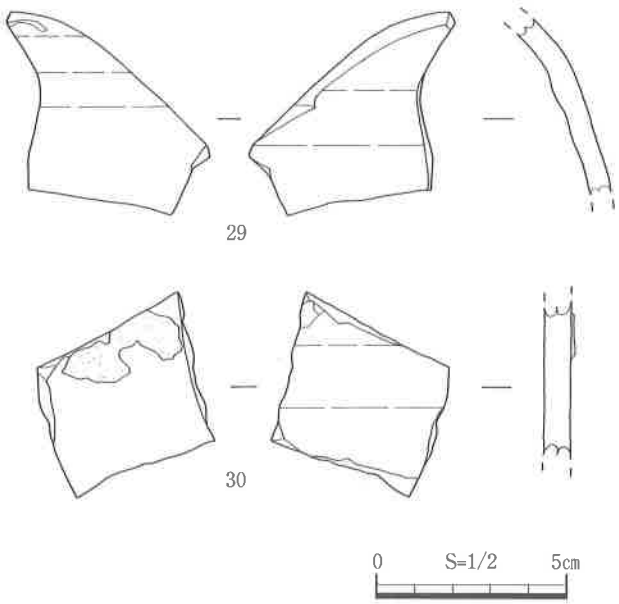
• 褐釉陶器

褐釉陶器は出土破片数18点を数え、そのうち約６割はNo.８トレンチより出土した。総て破片であったことから器形を窺える資料は無かったが、大半は壺だと考えられる。以下、地区別に出土した下記の２点を図化した。

29はNo.８トレンチ第Ⅳ層より出土した。断面図上方で若干だが内に入っていくので、肩部に近い胴部破片だと考えられる。素地は淡灰褐色で両面に施釉される。内外面ともに黄茶褐色の釉を施し、轆轤成形痕も僅かに見られる。素地には白色微粒子の混入物がみられた。

30はＡ－３グリッド第Ⅱ層より出土した胴部破片である。

内外面とも暗褐色の釉を施す。内面には轆轤成形痕が顕著に見られ、外面には焼成時の積跡がある。素地は淡茶褐色のやや粗い粒子で、赤色・白色・半透明色粒の混入物が見られる。



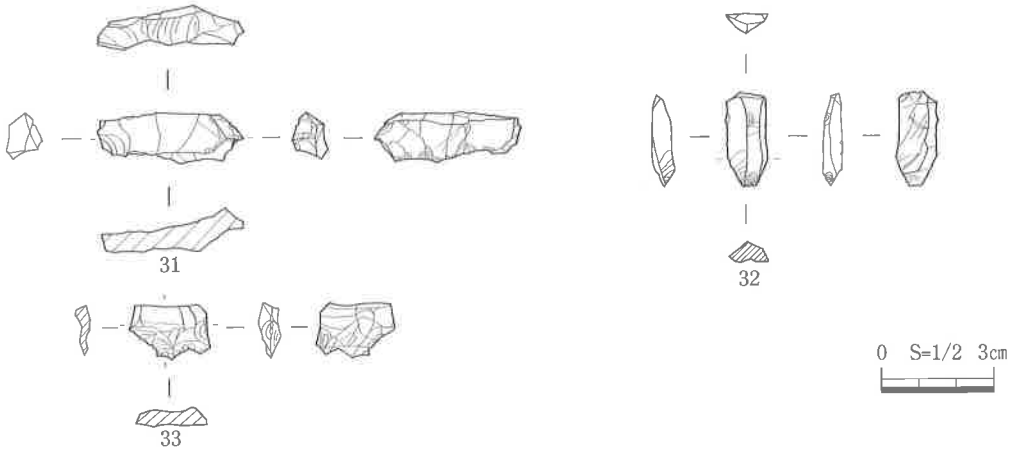
第58図　褐釉陶器実測図

(4) 石器

本遺跡より出土した石器は、チャート製品、くぼみ石、石斧などがみられた。特にチャート製品については包含層はもとよりピットや土坑からも出土した。くぼみ石や石斧は表採である。今回はチャート製品のみ図化した。

• チャート製品

形は様々であり、製作時の打割痕が見られた。形状から未製品だと考えられた。



第59図　チャート製品実測図

第19表　チャート製品観察表

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	縦軸／横軸 厚さ／重量	産 地	石 質	観 察 事 項
第59図31 図版38	土坑B3-1	1.2／3.9 0.7／5.01	沖縄本島 北部	チャート	右端部を打割により尖らせる。自然面を一部残すものの、５つの面に加工。成形途中か。
第59図32 図版38	C－4 pit 33	2.4／1.0 0.5／1.39	沖縄本島 北部	チャート	比較的丁寧に成形される。刃部は使用時の刃こぼれにも見える。横断面三角形に近い四角形。
第59図33 図版38	A－5 Ⅱ層	1.4／2.1 0.7／1.62	沖縄本島 北部	チャート	図化した中で一番鋭利な部分を持つが、使用痕は判然としない。メノウの様な色。

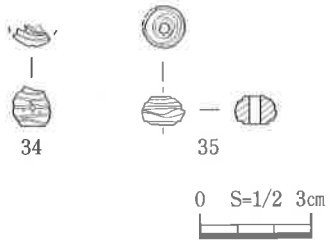
(5) ガラス製玉

本遺跡からは２点のガラス製玉が出土した。１点は遺構編でも先述したとおり、№８トレンチのpit03より出土し、残り１点も同じく№８トレンチの第Ⅳ層で出土した。

34はpit03より出土した玉で、法量は高さ1.1cm、重量0.46ｇで、破損しているため孔径は不明。巻き付け法による横位の条線が見られた。表面中央に小孔が見られるが貫通はしていない。しかし風化が著しく人工的なものか気泡等による自然のものか判然としなかった。色調は不透明な青色。

35は№８トレンチ第Ⅳ層より出土した。法量は外径1.2cm、内径0.3cm、高さ0.75cm、重量1.12ｇである。34と同様巻き付け法により横位の条線が螺旋状に走り、孔の端部は平坦である。出土した時は表面青緑色であったが、時間とともに白色化してしまった。

色調は割れ面観察により不透明な淡青緑色。



第60図　ガラス製玉実測図

第４章　仲間後原遺跡（その３）調査成果

2006年に発掘調査を行った（その３）の調査地域は、（その２）調査区の北西約10mに位置する。調査前の標高は115.5～117.0m。昭和10年代の土地利用図をみると、この一帯は「山林・原野・雑種地」となっており、現在の土地利用とさほど大きな変わりは無い様である。（その２）調査区から北西へは傾斜の非常に緩やかな斜面地となっており、南東側の調査区を１区、北西側の調査区を２区と命名した。ちなみに、１区・２区の調査区と仲間あさと原の印部土手とは10mしか離れていないという位置関係にある。

確認した層序のうち基本的な層序は３層で、それは１区も２区も変わりは無い。層名は上層から下層へ順に番号を付与した。

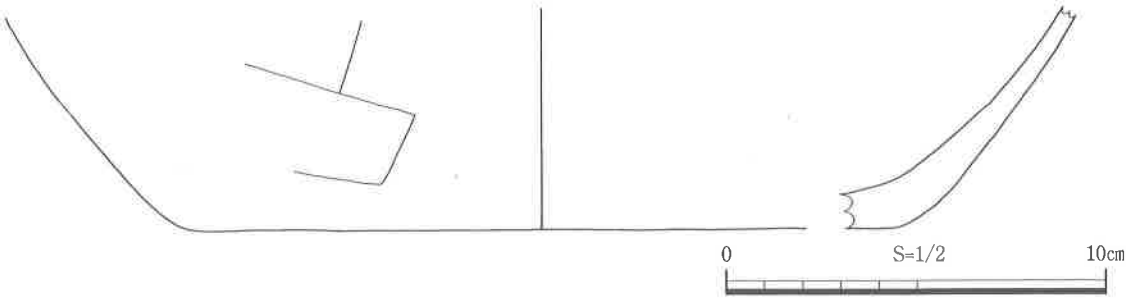
第Ⅰ層　褐色砂質土で、層の厚さ20～40cm

第Ⅱ層　褐色砂質土で、層の厚さ10～20cm。第Ⅰ層に比べて暗く見える。第Ⅲ層および黒褐色砂質土の細かいブロックを若干含んでいる。

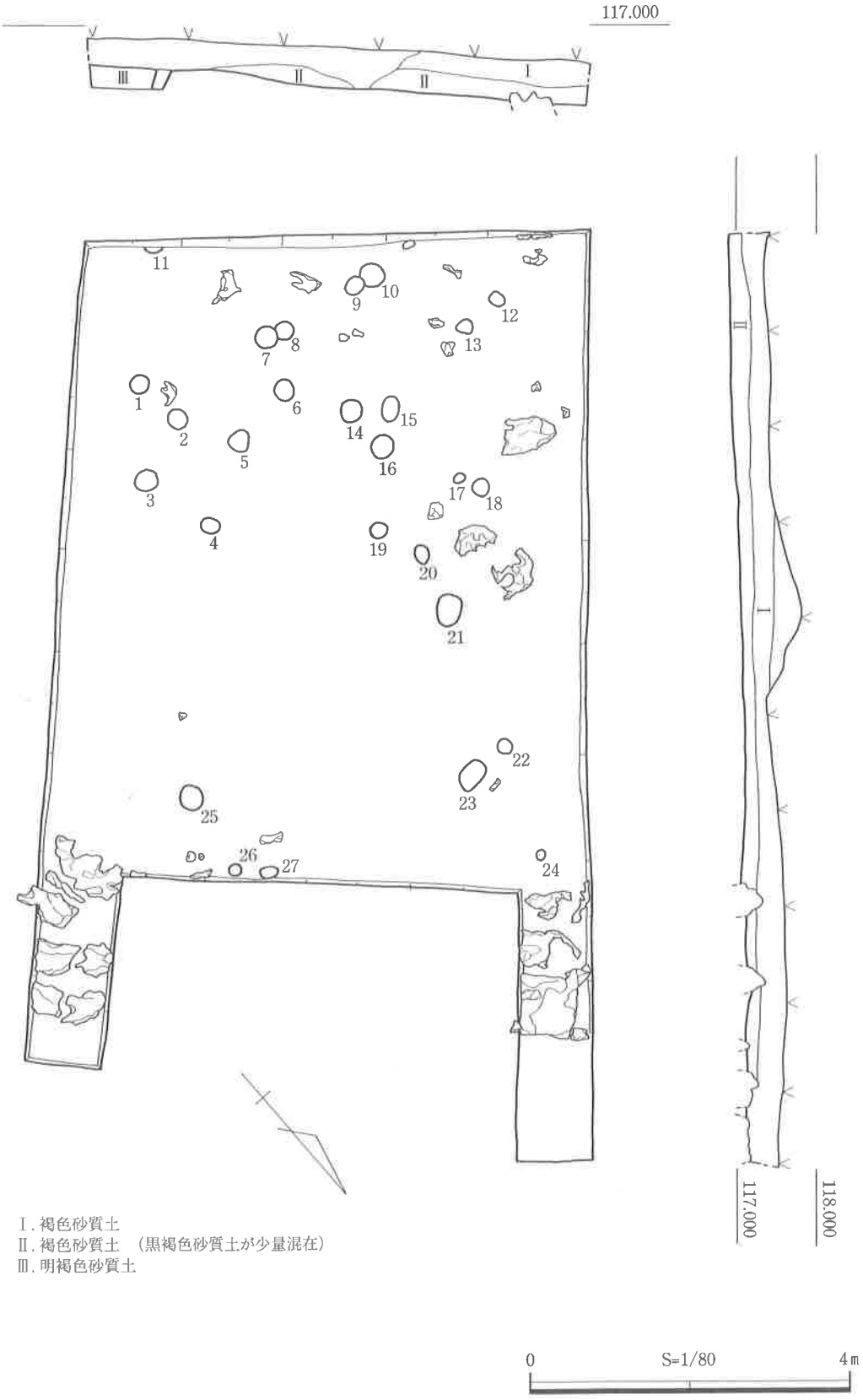
第Ⅲ層　無遺物層である明褐色砂質土である。いわゆる沖縄の方言のマージで、当層の下は石灰岩の岩盤となる。この層の上面に遺構を確認した。

１区では27基のピットを確認したが、ほとんどが直径20～30cm、深さ10～20cm ほどの小ピットであった。調査区が狭いため建物のプランは不明である。ピットの断面観察でも柱の痕跡は観察されない。出土遺物は少ない。包含層出土遺物は近世陶器がほとんどを占めるが、土器片やカムィヤキ片、青磁片が若干みられる。遺構内出土遺物はピット24の底からグスク土器底部が出土したほかは、ピット16、18、21から土器の小片が数点出土したにとどまる。第61図はピット24から出土した器種不明のグスク土器底部。器面調整は外面がヘラケズリ、内面はナデ調整とみられるがはっきりしない。胎土に径２～５㎜の赤褐色粒を多く含む。

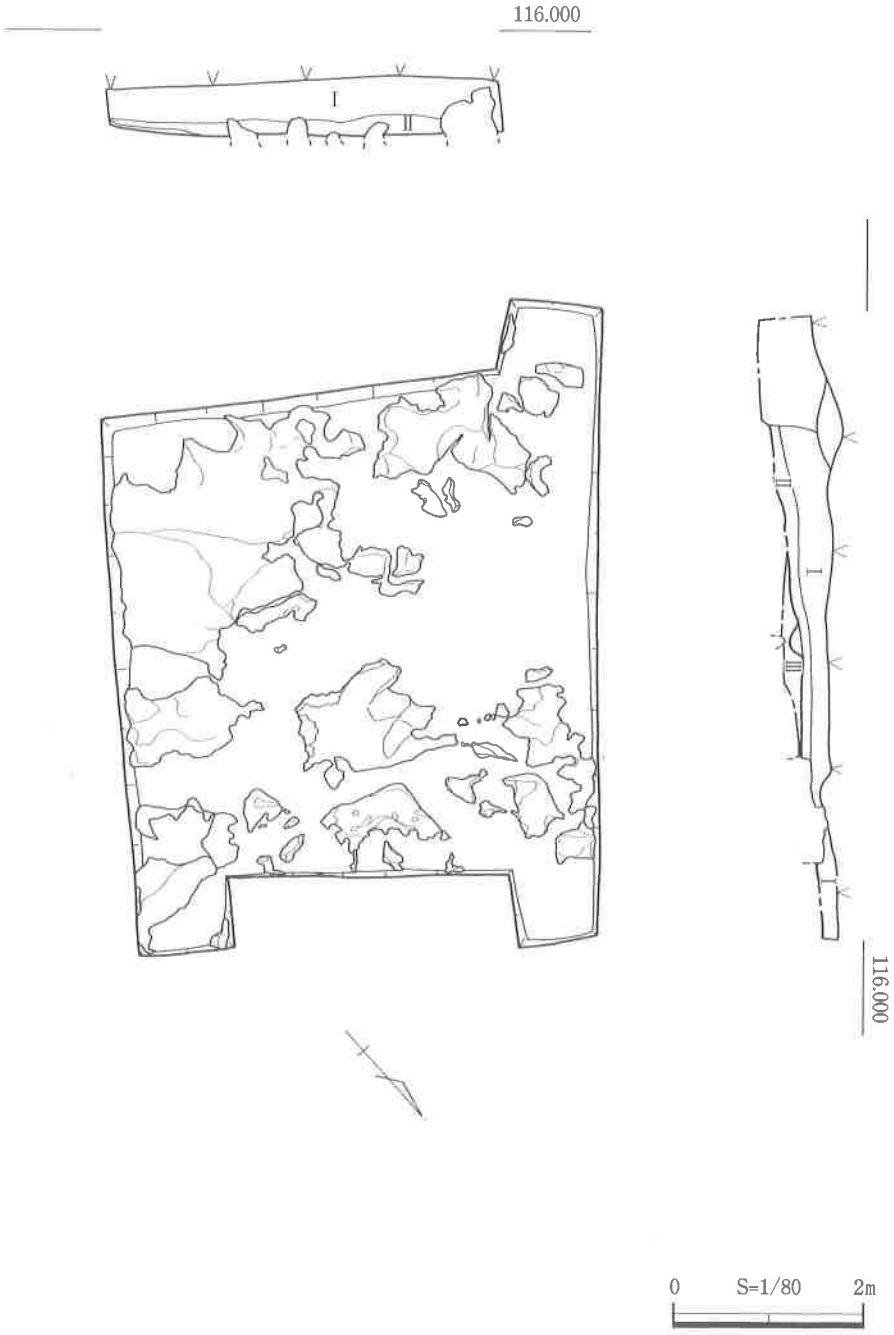
２区では遺構を確認しておらず、石灰岩岩盤を確認したのみである。遺物も近世陶器の破片などが数点出土したのみである。



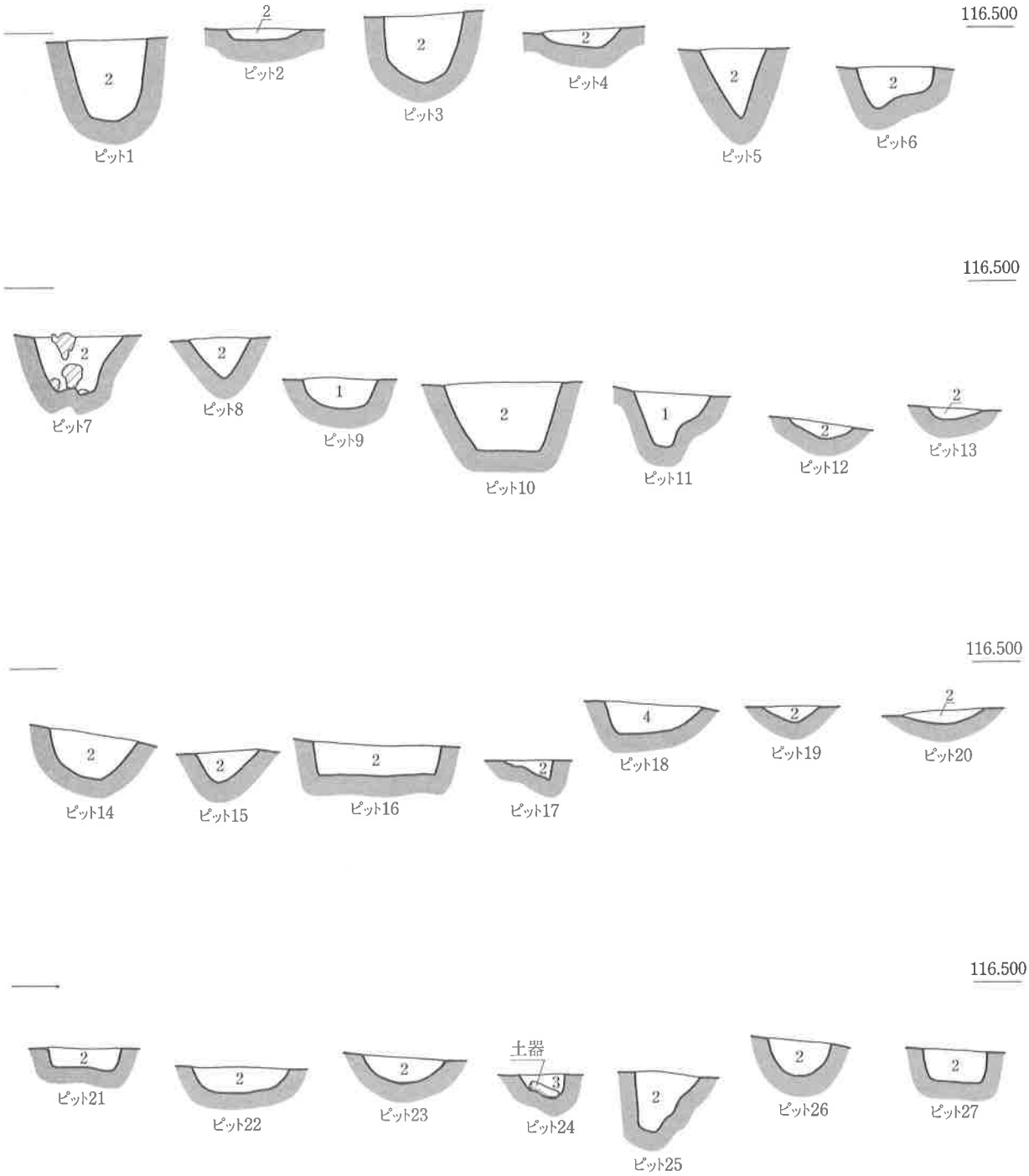
第61図　ピット24出土遺物


117.000
Ⅲ
Ⅱ
Ⅱ
Ⅰ
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
Ⅱ
Ⅰ
117.000
118.000
Ⅰ. 褐色砂質土
Ⅱ. 褐色砂質土　(黒褐色砂質土が少量混在)
Ⅲ. 明褐色砂質土
0
S=1/80
4m

第62図　1区平断面図



第63図　２区平断面図



1. 暗褐色砂質土
2. 褐色砂質土
3. 黒褐色砂質土
4. にぶい黄褐色砂質土

0　S=1/20　1m

第64図　1区遺構断面図

第5章　まとめ

Ⅰ．はじめに

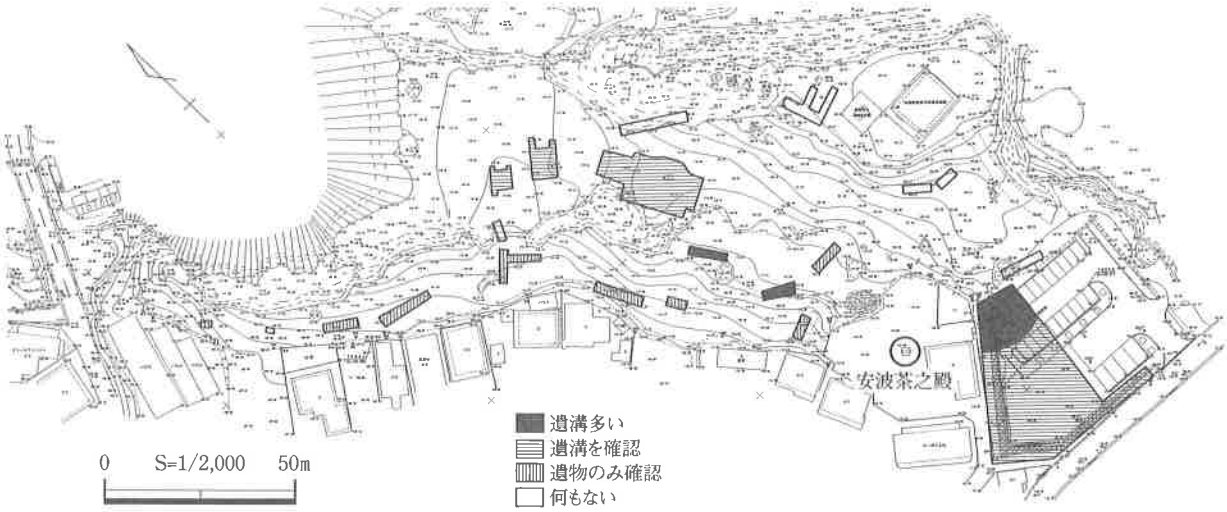
仲間後原遺跡は浦添グスクから最短距離にしてわずか300mしか離れていない、まさに浦添グスクの目と鼻の先に位置する遺跡である。そのため、「仲間後原遺跡は浦添グスクとどの様な関係にあるのか」という問題が最大の関心事であるといってもよい。この章では仲間後原遺跡の発掘調査成果をまとめた上で、この問題についていくらかの見通しのようなものを示すこととしたい。

Ⅱ．仲間後原遺跡について

1．仲間後原遺跡の広がり

まずは仲間後原遺跡がどれだけの範囲に広がったのかについて考えていく。仲間後原遺跡の広がりについては、本書で報告した発掘調査と、2003年（平成15）度などに行った範囲確認調査が大いに参考になるため、それらの結果を戦後に作成された米軍地形図に重ね合わせた（第65図）。それによると、標高375～400ft.（114～122m）の平坦面に設定した調査区ないしトレンチで遺構を確認しており、遺物のみを確認したトレンチもその周辺に限られている。その上、2000年度調査区（その1）の南側（道に接する部分）には遺構176･177以外の顕著な遺構が認められないことから、ここより南側に広がることはないものと思われる。また、遺構を確認したトレンチや調査区のうち、安波茶の殿を挟んだ南北両側で特に遺構が集中していることから、このあたりに仲間後原遺跡の「中心」の存在が想起される。

ここで安波茶の殿について少し詳しく説明しておく。安波茶の殿は浦添市仲間後原684番地に位置しており、「琉球国由来記」に記される仲間村後上之殿であるとされる。この殿は仲間と安波茶の両集落における祭祀に必要不可欠な拝所であったが、現在は個人住宅の一部となっており、殿の痕跡を示すものは残っていない。しかし、安波茶村の殿が仲間に位置していることや、仲間の拝順は仲間集落内で完結するのに対し安波茶の拝順は仲間まで及ぶことから、浦添市史では安波茶集落が仲間集落からの分村であることの証であるとしている（浦添市教委1983）。



第65図　仲間後原遺跡調査箇所

次に現在我々の目に触れているこの遺跡の姿が、本来の姿をどこまで残しているのかという問題について考えてみよう。というのも、第１章「報告の前提」にも記述したごとく、当地一帯は戦後の採石工事や宅地造成によって地形改変を受けたため、「かつては遺構が存在したが、現在は削り取られてしまっている」場所があるという可能性も否定できないからである。そのため、今一度過去と現在の地形図を詳細に検討しておく（第２図・第３図）。

まずは砕石工事によって地形が大規模に改変された地域であるが、現在の地形図を見ると、今回遺構の確認された調査区が所在する丘陵の北西側と南東側で大きく削り取られている所がある。同じ場所を米軍作成の地形図で見てみると、前者で402ft.（122.5m）、後者で430ft.（131.0m）の高まりとなっている。現在は前者で96.2m、後者で112.6mとなっているため、20～25mは削り取られている計算になる。

次に宅地開発によって小規模に改変された地域であるが、地形図の比較によると、仲間集落は北側に一ブロック分拡張されているようである。すなわち、かつて畑地であった仲間集落の北側縁辺―ここは仲間後原遺跡が所在する丘陵の南裾にあたる―が戦後になって宅地として開発されているということであり、これは1945年に撮影された米軍撮影の航空写真と現況との比較からも確認できる（沖縄県教委2002）。戦後に宅地造成が行われた範囲には安波茶の殿も含まれるのであるが、どのくらい削られているのか？

この疑問を解くために500分の１現況地形図と米軍作成地形図とを比較すると、現況絶対高のデータのある11の敷地のうち、８の敷地において比交差が１m以内に収まっている。また、比高差が１mを超える敷地も、それを大きく超えることはない。ということは、地形図の縮尺率の違いに起因する作図精度の差などを考慮にいれても、宅地造成の後と前ではほとんど絶対高に差がない―大きな地形改変はない―と考えてよい。そして、仲間集落内で行なった個人住宅における試掘調査では、仲間集落の北側縁辺周辺ではグスク時代の遺構が見つかっていない。

これらのことをふまえると、以下のことが言える。まずは仲間後原遺跡の広がる範囲であるが、発掘調査の結果からおおむね米軍作成地形図で375～400ft.（114～122m）に位置する平坦面に限られるものと想定される。具体的には、北側は標高402ft.の高まりの裾、南側は浦添グスクへと登る道まで、東側は標高430ft.の高まりの裾、西側は現在の仲間集落の北側縁辺に接するところまでの、東西40m、南北200mの細長い範囲である。次に、仲間後原遺跡の具体的な内容について、発掘調査の年度ごとにみていこう。

２．2000年度調査区（その１）について

2000年度調査区の出土遺物全体を見渡すと、12世紀頃から近世にかけて幅広い時期の遺物が出土している。もっとも古い時期に属するものとしては白磁玉縁口縁碗や櫛描文碗、青磁櫛描文碗、青磁鎬連弁文碗、白磁口禿碗、青磁劃花文碗などを挙げることができ、新しいものでは（掲載はしていないが）近世の壺屋焼が出土している。それらの間を埋めるものとしては青磁篦描き蓮弁文碗や青磁雷文帯碗、青磁細蓮弁文碗、青花蓮子碗などがある。しかし、これを遺構内出土遺物に限ると、一部の溝を除き13世紀中頃から14世紀に集中しているとみることができる。

2000年度（その１）の調査区で確認したグスク時代の遺構のうち、遺物の出土量が最も多いのはなんといっても溝176である。溝176から出土した遺物のほとんどはグスク土器の胴部や底部であるが、それらと共に青磁鎬蓮弁文碗や白磁ビロースクタイプ碗Ⅱも出土しており、ここから溝176が機能した時期を決めることができそうである。特にビロースクタイプ碗は５点出土しており、量の上からも注目され

る。鎬蓮弁文碗は13世紀、ビロースクタイプ碗Ⅱは13世紀末から14世紀前半の時期が与えられている。出土遺物をそのまま遺構の機能した時期に当てはめるのは危険であるが、その頃までは機能していたものと考えることができるだろう。

それでは他の遺構の時期はどうか。まずは南側の溝である溝176と溝177であるが、これらはお互いに近接するうえ延びる方向もほぼ同じで、かつ出土遺物にも矛盾がないため、同時期に機能したものとみて間違いなかろう。

次に溝176と調査区北側のピットや土坑を中心とする遺構群の時期的関係であるが、ピットからはあまり遺物が出土しないため、個々のピットと溝176の時期を逐一対比させることは難しい。そこで北側の遺構群をひとつの「群」として眺めると、掘立柱建物１を構成するとしたピットから出土した遺物（後述）やピット174の白磁口禿碗が目に付く。白磁口禿碗は13世紀後半～14世紀前半の年代が与えることができ、溝176から導き出される年代と矛盾するものではない。

また、調査区北側の遺構群を正しく理解するためには、掘立柱建物１とした一連のピットを平面形と出土遺物からもう少し検討する必要がある。掘立柱建物１は平面形からみると、①北側で柱の列が外側に膨らんでおり、柱通りは良いとは言えない、②各辺の柱の間隔はまちまちである、③相対する辺の柱は対称とならない、④床面積は20㎡を測る、⑤建物の中央に中柱らしきものが存在する、といった特徴を挙げることができる。沖縄県内におけるグスク時代建物跡の分類を行った宮城弘樹氏の仕事に従えば、掘立柱建物１は掘立柱建物跡Ｃ群２類になると考えられるが、床面積が分類概念である「24㎡以上」に比べ20㎡しかないことから、この分類に当てることに疑念がないわけではない。

掘立柱建物１を構成するとしたピットから出土した遺物としては、ピット９出土の滑石製石鍋片と鉢形土器の口縁部、ピット40出土の白磁外反碗口縁部、ピット102出土のタイ産半練蓋小片が挙げられる。このうち白磁外反碗は14世紀後半から15世紀初頭に位置づけられており、掘立柱建物１の廃絶もこのあたりではないかと思われる。

以上から2000年度調査区（その１）の姿を復元すると次のごとくなる。包含層出土遺物からみると、仲間後原遺跡に人間活動の痕跡が認められるのはおおよそ12世紀のことであるが、実際に柱穴などが穿たれるのは13世紀中頃から14世紀に集中する。調査区は北と南で段差があるが、この頃は一段低い南側に、集落の内外を分かつためとみられる溝176と溝177が掘り込まれ、高くなる北側は居住空間として使用されていた。溝176と溝177との間は3.3mほど空いているが、ここは通り道であった可能性が高い。また、一段高い北側には170個もの柱穴が集中していることから、住居の重なりとしては認識できなかったものの、頻繁に建物の立て替えが行われていたと想像される。溝176・177と掘立柱建物１の出土遺物には若干の時期差が認められることから、溝の方は建物に比べ早めに役割を失った可能性がある。確認した炉としては土坑173があるが、それを取り囲むような掘立柱建物の柱穴が存在しないことから、屋外にしつらえられたものと考えられる。また、長径50～100㎝を測る土坑も複数確認しているが、今のところその性格は不明である。包含層からは15世紀以降の遺物や壺屋産陶器も一定量出土するため、何らかの人間活動は行われていたものと想像されるが、遺構としては溝182など近世に属する溝を数条確認したのみである。

３．2003年度調査区（その２）と2004年度調査区（その３）について

2003年度は遺跡範囲確認のためのトレンチ調査と面的な調査を行っている。トレンチ調査では先述のとおり仲間後原遺跡の範囲がほぼ確定したが、遺構や遺物を確認したトレンチのうち、特に本報告書で

ふれたNo.８トレンチは25㎡という矮小なトレンチながら26基ものピットを確認した点で注目される。なかでも、ピット03は焼土や炭を多く含み、壁に焼けた痕跡がみられない点や周囲にこれを取り囲むピットがみられない点は、2000年度調査区（その１）で確認した土坑173と共通性が認められる。調査面積の制約上、個々の遺構の性格を推定することは困難であるが、ピット03内出土も含めガラス製の玉が２点出土したことは、当遺跡における他の調査区にはない特徴であるといえる。その他の遺物としてはグスク土器、青磁口折皿やビロースクタイプ碗Ⅱ、天目碗などが出土した。

Ⅰ区では一定の間隔も保ちながら並ぶピットや炉跡２基、焼土の入った土坑１基を確認した。確認したピットの並びからは柵ないし建物としての機能が推定されたのみで、それ以上のことは不明と言わざるを得ないが、これらのピットから少々離れた場所で確認した炉や焼土入りの土坑は、やはり2000年度調査区（その１）のあり方と共通している。また、2000年度調査区や９号園路No.８トレンチと比べると遺構の密度は低いため、ここは遺跡の中心部からは若干外れた場所であると考えられる。本調査地区から出土した遺物としては遺構内から出土したグスク土器や青磁外底無釉碗、チャート、粗製の染付碗底部が目を引く。

No.８トレンチと本調査地区の出土遺物をみると、主体となる時期は2000年度調査区（その１）と同様であると考えられる。なお、本調査地区からは面縄前庭式土器が出土しており、ここで人間が活動した時期が貝塚時代前期まで遡る可能性を示唆している。

2004年度の調査区（その３）は面積が矮小な上に出土遺物も少なかったことから、遺跡内における位置づけが困難である。ただ、調査区の北西はまとまった平地が存在している割には確認した遺構が少ないため、この周辺は遺跡としては周辺部にあたるものと考えられる。

Ⅲ．仲間後原遺跡と浦添グスク

最後に、仲間後原遺跡と浦添グスクとの関係についてみておきたい。1982から84年に行われた浦添グスクの調査では、13世紀末から18世紀頃まで５つの時期の遺構が確認されている（浦添市教委1985）。このうち浦添グスクで本格的な土木造成工事が行われたのは14世紀から15世紀にあたる第二期に位置づけられており、仲間後原遺跡と平行するのはこれより古い第一期から、第二期のなかでも比較的古い時期にあたると考えられる。第一期の浦添グスクは低い野面積石垣と掘立柱建物で構成されており、現在の展望台から通称城門地区と呼ばれる50m四方の狭い範囲に広がるとみられている。

仲間後原遺跡と浦添グスクを比較すると、その規模や内容にあまりにもギャップがあることは否めない。すなわち、仲間後原遺跡の範囲や出土遺物からは他を圧倒するだけの政治的優位性は感じ取れない。詳細は浦添グスクとその周辺の遺跡から出土した遺物を統一的視点でカウントした上で論じなければならないが、浦添グスクの築城時期と周辺遺跡の関係を今後具体的に検討していかなければならない。

浦添市教育委員会　1983『浦添市史第４巻資料編３　浦添の民俗』
浦添市教育委員会　1985『浦添城跡発掘調査報告書』
沖縄県教育委員会　2002『沖縄県史ビジュアル版10　空から見た昔の沖縄』
宮城　弘樹　2006「沖縄諸島におけるグスク時代建物跡の分類」『廣友会誌』第２号　廣友会

Ⅱ．仲間あさと原の印部土手

第1章　はじめに

第1節　調査の経緯

平成15年度の仲間後原遺跡（その2）発掘調査終了後、重機で埋め戻し作業をおこなっていたが、排土の山のすぐ隣の草むらに碑のような石が立っているのが偶然発見された。これが仲間(なかま)あさと原(ばる)の印部(しるぴ)土手(どて)で、浦添で初めてそして唯一確認されている印部土手である[1]。ただ残念なことに石碑（通称“ハル石”、以下この名称を使用）の上部三分の一が欠けており、通常刻まれている原名(ハルナー)（小字名）は「…と原」しか読めなかった。当該地の原名は後原(くしばる)（くし原）であり、周囲にも該当する原名は見あたらなかった。やはり刻まれる記号イロハ（いろは）も一部欠けていたが、片仮名の「ス」であることは推定できた。このハル石の周囲には一部は動いていたものの、崩壊を防ぐ根張石として加工された石灰岩が一重巡らされていた。

平成17年度に浦添大公園9号園路の整備に向けて最終的な文化財調査が行われることになった。9号園路のルート確定のため、計画地にある仲間後原遺跡とともに印部土手の範囲を確認し保護対策を講じる必要があった。平成18年（2006）1月24日の周辺除草から作業を開始し、途中同時進行の他調査との兼ね合いから何度かの中断を挟みながら3月31日の写真撮影をもって現場作業を終了した。

第2節　調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	
事業責任	教 育 長	西原廣美
事業所管	文化部長	安里　進（～平成18年9月）
	文化部長（教育部長兼任）	宮里親一（平成18年10月～）
事業統括	文化課長	下地安広
事業事務	グスク整備係長	村山みき（平成17年度）
	グスク整備係長	松川　章（平成18年度）
	主任主事	安里静子（平成17年度）
	主任主事	宮城キミ（平成18年度）
	主任主事	佐伯信之
調査担当	主任主事	佐伯信之
調査補助	臨時職員	喜納政英・新垣智・新城茂人・菊池恒三
整理作業	臨時職員	木下秋海・澤岻永子・比嘉美智子
作 業 員	社団法人浦添市シルバー人材センターより派遣	

なお、資料収集等に次の方々からご協力いただいた。記して感謝申し上げます（五十音順・敬称略）。
大城一成（糸満市教育委員会）、神谷厚昭（沖縄県立博物館友の会）、金城善（糸満市教育委員会）、

崎原恒寿（恩納村博物館）、輝 広志（那覇市歴史博物館）、照屋 孝（うるま市教育委員会）、長間安彦（浦添市立図書館）、外間政明（那覇市歴史博物館）

第２章　歴史的環境

慶長14年（1609）に琉球を支配下においた薩摩藩は、その翌年の慶長15年から16年にかけて奄美諸島以南、宮古・八重山まで検地を行った。いわゆる慶長検地である。そして薩摩直轄地とした奄美をのぞいた地域の石高８万9086石の目録を王府に下付した（のちに誤りが発見され８万3085石余に修正されている）。寛永12年（1635）に薩摩藩は自領内の検地、いわゆる内検を行う（寛永内検）。さらに享保12年（1727）に享保内検を行うが、これら内検の度に琉球王府に石高の見直しとそれに伴う増税である盛増（もりまし）を命じた。寛永盛増では９万0883石余、享保盛増の際には９万4230石としている。この二度の盛増の間に薩摩は王府に検地を命じているが王府側はこれを拒否している。

しかし、検地を行わずに盛増をしたため矛盾が生じる結果となってしまい、また一方で開発も進み耕地面積が増加したが、他村・他間切などの耕地が入り組んでいる状況であった。これらの問題を解消・解決するため、また山林・原野と耕作地との境界をただすことなどを目的として王府による内検が行われた。宮古・八重山の両先島を除いた沖縄本島と周辺離島において、元文２年（1737）から寛延３年（1750）まで14年の歳月をかけて行われたこの元文検地は、通常琉球で使用された中国の年号をとって乾隆検地あるいは乾隆大御支配ともいわれる。この検地の際に測量図根点として設置されたのが印部土手である。印部土手はシルビグヮー、ドゥティグヮー、ドゥリイシともいわれ、マウンドの中央に原名といろはを刻んだ石（ハル石）を立てその周囲に石を巡らせる（根張石）形が一般的である。

仲間は「浦添のなかの浦添」とも呼ばれ、浦添城跡や龍福寺、琉球王国時代の間切番所があった場所であり、近代以降も浦添村役場が置かれるなど浦添の中心地であった。字仲間には現在９の小字がある。集落は浦添原を中心に北側の後原、西側の安田草原（あだくさ）に広がる。

後原は、前田から牧港へ延びる浦添丘陵のちょうど浦添グスクと伊祖グスクの間にあり、丘陵にそって北西－南東方向に細長い形をしている。近世には後原と西側の安田草原・樋口原の間に宿道（しゅくみち）の西海道（中頭方西海道（なかがみほう））が走り、沿道にはウマチ毛（モー）や一里毛（モー）があった。北端には仲間後原近世墓群がある。昭和10年代の土地利用状況をみると、丘陵のため面積の半分近くは山林・原野・雑種地になり、残り半分は丘陵裾に畑地と宅地があった。印部土手は仲間集落の北側、山林他と畑地のちょうど境あたりに位置する。民家は44軒あり、字のサーターヤー（製糖小屋）四ヶ所が集中していた。また隣接する字安波茶の殿（トゥン）（祭祀場）があった。

第３章　調 査 成 果

調査はまず周辺の伐採から開始した。遺構のある平場はもちろん、その立地条件も重要であるため南西側斜面も行った。第１章でも述べたとおりハル石の上部は欠損しており文字は完全には判読できない

状況だったが、その一部が斜面に転がっているのが発見された。さいわい原名が彫られている部分であり、またハル石の大きさも判明することとなった。

ハル石の周囲には根張石として加工された石灰岩が巡らされていたが、さらにその外側所々に石灰岩が頭をのぞかせていた。このあたりの表土を削るとこれもハル石を中心に取り巻いており、根張石が二重に巡らされていることが判明した。

この印部土手は保全されることが決まっているため、土手の造成の様子をみる断ち割りは行わなかった。また表土を削った程度なので遺物は得られていない。

印部土手は小丘陵上平坦面の斜面際に設置されており、旧地形では斜面下の旧耕作地から６～７ｍあがった場所にある。マウンドは盛土か削り出しによるものかは不明。厳密な範囲は明示しがたいが平面形は楕円形で、北西－南東方向は約６ｍ、北東－南西方向は3.5～４ｍ、南西側はそのまま丘陵斜面となって下っている。マウンド頂部とその裾の比高差は場所により異なるが20～30㎝近くある。

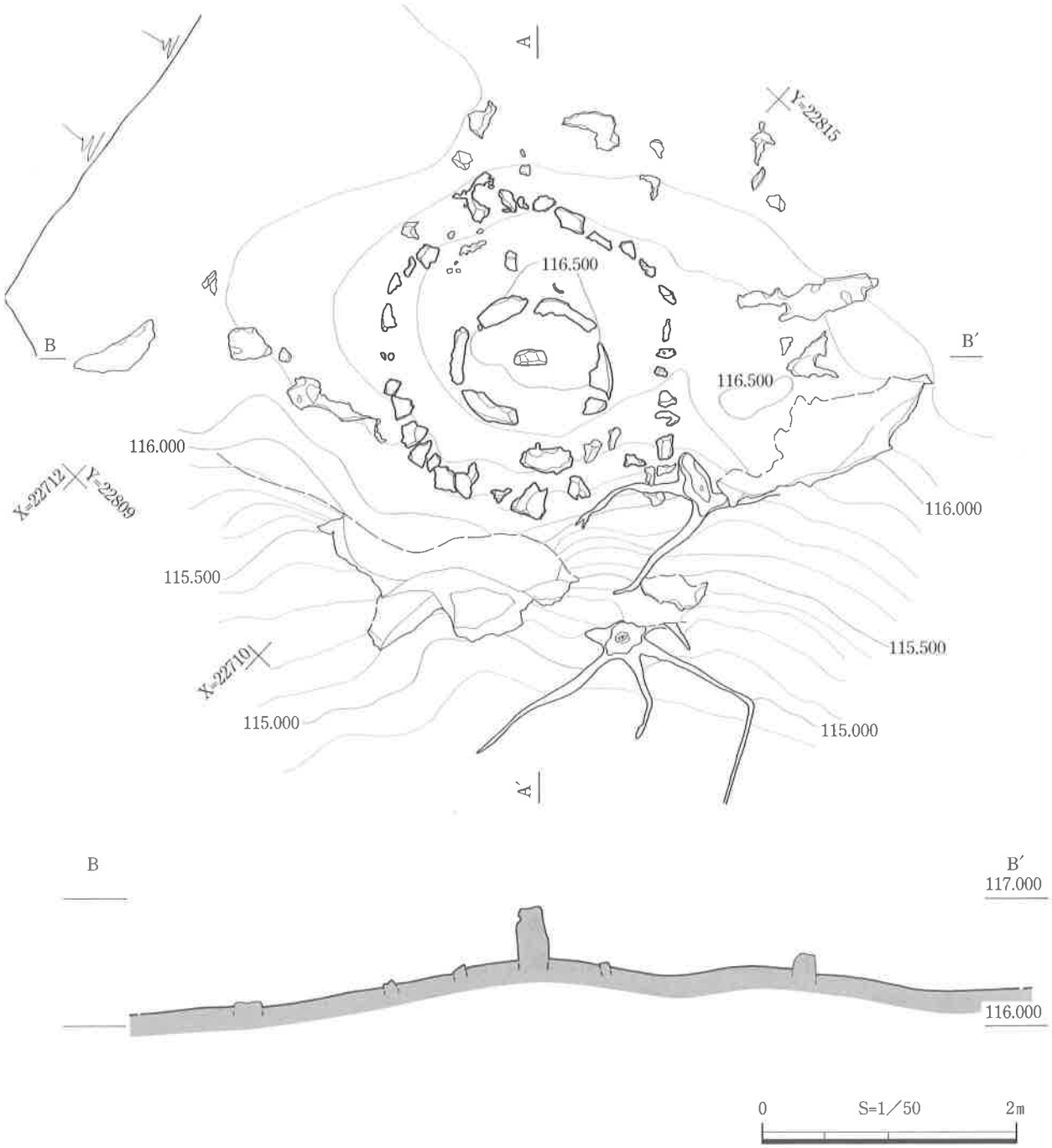
石灰岩の根張石（俗称チンマーサー）は二重に巡らされている。内周は長径約1.3ｍ・短径約１ｍ、弧を描くように加工された石灰岩６個で円をつくるが、内１個は斜面に滑り落ちてひっくり返っている。外周は木の根に押されている箇所はあるものの正円に近く直径は2.4ｍ前後、拳大から20㎝近くの石灰岩約30個を隙間をつくって並べている。第４章で述べるように根張石は土手の崩壊を防ぐために据えられるものだが、内周はハル石の支えであるものの、外周は崩壊を防ぐというよりは土手の範囲を示すかあるいは装飾として存在しているように思われる。

一般にハル石と呼ばれる石碑は碑面を南西方向、斜面側に向ける。地上部分の碑の高さ44.2㎝、碑面の幅21.2㎝、厚さ約12㎝。材は細粒砂岩が凝固したいわゆる「ニービの骨（フニ）」である。碑面に向かって左上が欠失しており、また文字の摩滅が進行しているものの判読は可能である。約17×13㎝角で「ス」（一画目が一部欠失）、その右側に縦一行で「あさと原」とある。前述のように「あさと原」は現存せず、史料でもこのハル石が初見となる。「ス」字および「あさと」の「さ」字の途中を境に碑は二つに割れている。断面の碑面側に小片が剥離した痕跡があるため、一点に打撃がありその結果左上部の粉砕欠失・右上部の分離が起こったようである。戦争中の被弾が考えられる。

第４章　文献にみる印部土手－おわりに代えて

印部土手という名称　元文検地が始まった乾隆２年（1737）の『田地奉行規模帳（抄）』には「田畠検地相済次第一々印針竿仕致以後無粉様ニ仕付置可申事」とあり、元文４年（乾隆４）、王府から大里間切にだされた『御支配方仰渡』には「印土手江立置候石之儀、田畠混乱之時右印石を以相糺申事候間」（下線は引用者、以下同）とある。この「印土手」が印部土手であり、そこに立てられた石を「印土手江立置候石」「印石」と呼んでいる。検地の際には測量簿である竿入帳が作成されたが[2]、『羽地間切屋我地田山野畠針竿帳』（同治９：1870写）には「あたんまた原つ之印土手」などとあるほか[3]、測量技法に関する帳簿『断片綴（針竿関係）』（乾隆16：1751）には「印土手并針図之事」という項目で「印土手」の名称が繰り返し出てくる。このように検地を行っている時期には図根点を「印土手」と表記していた[4]。

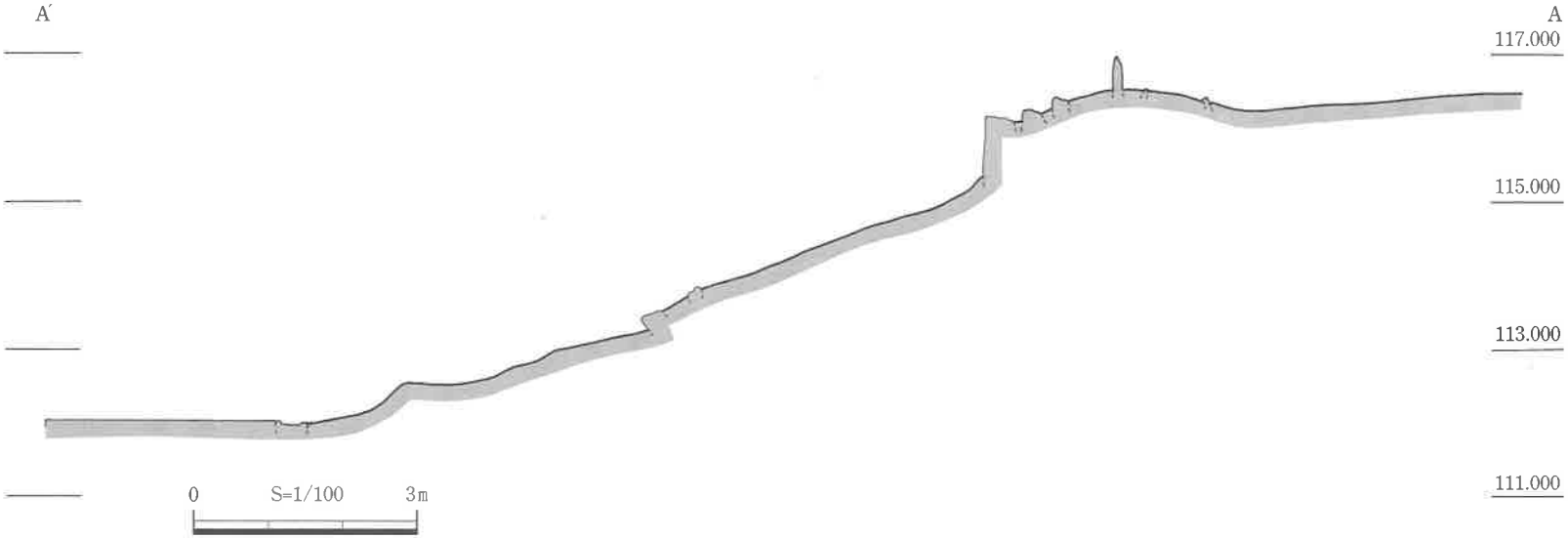
元文検地が終了してから半世紀たった嘉慶14年（1809）編集の『田地奉行規模帳』では「印部土手惣



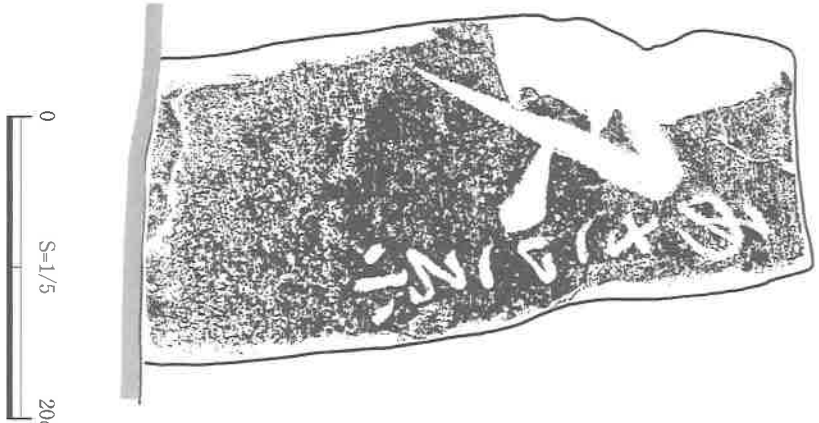
第66図　仲間あさと原の印部土手　平・横断面図

方切土手山野土手格護方堅固取締申渡就中印部土手之儀」云々とあり「印部土手」と記されている。さらに複数存在する『南風原間切総耕作当日記』や、明治時代の『沖縄県旧慣間切内法』など19世紀以降の文献のほとんどがこの表記を使っており[5]、「印部土手」の表記が一般的になっている。

印部土手の保護　印部土手は土地境界等に関する根本であることから、その破損・欠失について王府は非常に注意を払っている。元文４年（乾隆４：1739）の『御支配方仰渡』には「印土手江立置候石之儀、田畠混乱之時右印石を以相糺申事候間、右申出之通耕作当に而時々見廻仕、各にも毎年二八月両度致惣



第67図　仲間あさと原の印部土手　縦断面図



第68図　ハル石立面図および拓本

廻首尾可申出事。但破損有之節は、各に而能々入念修補仕させ可申事」とあり、随時の見廻りと年二度の定期の見廻りを行い、破損していれば補修することを定めている。また『南風原間切総耕作当日記』では、土手の保全と補修を「兼々申渡置候通」(咸豊９：1859か)、「毎度申渡置候通」(同治９：1870)と繰り返し通達している様子がうかがえる。このように重要視しているだけあり、失われた印部土手を再設置した功を賞されている例がある。向姓高嶺家九世鳳圖（名乗朝滋）は具志川間切下知役の折に杣山や耕作地の保護・振興を行ったことについて、同治６年（1867）に褒賞されているがその具体策の中に「印ひ土手相失境め致混乱候處、気を付針竿引當相糺、土手委敷築立境め正敷召成候」という一文がみられる[6]。

明治18年（1885）に沖縄県が届け出を命じ、王府時代の間切等の自治的規範を集成した『沖縄県旧慣間切内法』によれば、多くの間切内法に印部土手の記述がある。中部地域の間切に関しては残念ながら記述が見あたらないが、南部地域のものは大方次のようなものである。「役々ニ於テ田畑印部土手田畑ト山野トノ印部土手他村他間切トノ境界土手ヲ巡視シ若シ切リ細メ又ハ破損シタルモノハ事軽重ニ応シ弐拾銭以上弐円以下ノ科金申付」(小禄間切内法）とあり、破損した場合科料の徴収が定められている。兼城・大里両間切では「元姿ニ復セシメ」た上で科料の徴収があった。北部地域はこれとは文言が若干異なるが、やはり補修を義務づけ破損の場合は罰金を徴収している[7]。ともかくもその破損に対して十分に注意を払っている様子がうかがわれる[8]。

このように保護されてきた印部土手であるが、明治32～36（1899～1903）に行われた土地整理でその役割を終えてしまう。『沖縄県土地整理紀要』(明治36：1903）には一等図根点と二等図根点の位置を選定し、「其位置ニハ地上ニ埋石シテ之ヲ標示シ且他点ヨリノ覘望ニ供スル為メ高ク標式ヲ建設スヘキモノトス」とあり、新たな図根点が設置されていった[9]。印部土手を撤去するという記述はみられないが、それに取って代わるものが現れたためこれを契機としてその後の開発、そしておそらく戦災でほとんどの印部土手が失われてゆき、現在ではかろうじて十数箇所ほど確認されているにすぎない[10]。

印部土手の規格　前掲の『断片綴（針竿関係)』には「印土手之儀一ヶ間切ニ二三百程も可有之候」とあり沖縄全体では数千を数える計算になるため、一定の規格が存在していたようである。同文書には「いろは之文字を以石ニ彫付印本相立」てることとしている。ハル石に識別用とみられる「いろは」文字を刻むのだが、実際には片仮名の「イロハ」も存在する。この平仮名と片仮名の使い分けは不明である。

マウンド部分に関して『南風原間切総耕作当日記』では「印部土手并方切土手之儀、大切成御仕置に而候間、兼々申渡置候通、格護方可入意候、自然崩掛候處も有之候はゞ、差渡六尺根張石に而積廻可置事」とあり、直径６尺の根張石を巡らせることを定めている。明治25年（1892）の『原勝負其他農事慣例』真和志間切の条文には「印部土手碑文并字面正敷、且つ根張一間高さ三尺仕合之定規」とあり、根張の径１間、高さは３尺と定められていた。

浦添の印部土手　『尚家御蔵本目録』によれば浦添関係の竿入帳は34冊が知られるが、現在は１冊も確認されていない。『旧慣間切内法』など明治の文献でも触れられていないものの、池原家文書のうち口上覚（墓敷針図)に浦添間切西原村の印部土手の存在が確認できる。これは購入した墓の範囲を示したものだが「針本おちま原か之印より酉□□弐間七合」と記され、「おちま原」の「か」の印部土手を基準点にして測量していることがわかる。残念ながら現在浦添市西原に「おちま原」という小字はなく、この印部

土手あるいはハル石自体も確認されていない。

最後に余談であるが、印部土手あるいはハル石が信仰の対象となる点についてである[11]。あさと原の印部土手の周囲で公園造成が始まったころ現地に赴くと、驚いたことに内周根張石の内側、碑面とは反対側に生米と塩が供えられていた。誰かが拝んだのだろうかと思っていたら、造成工事施工業者が供えたということだった。その理由として「なんだか何かが宿っていそうだったから」ということであった。おそらく着工時の安全祈願での出来事であるということでこの例を普遍化することはできないが、前提として印部土手が何か理解できなかったことがあり、印部土手あるいはハル石が新たな「拝所」となる理由の一端を見た思いがした。

〈参考文献〉

安里進　1985「近世羽地間切の村と耕地」『地域と文化』第34号
安里進　1991『考古学からみた琉球史　下　古琉球から近世琉球へ』ひるぎ社
浦添市字仲間自治会　1991『字誌なかま』
浦添市史編集委員会　1986『浦添市史』第六巻資料編５　自然・考古・産業・歌謡
浦添市史編集委員会　1989『浦添市史』第一巻通史編　浦添のあゆみ
浦添市立図書館　1992『浦添市立図書館紀要 №４』
沖縄県地域史協議会　1981『沖縄県地域史協議会ニュース２』
沖縄県地域史協議会　1987「印部土手石（仮称「ハル石」）一覧」（第２回沖縄県地域史まつり冊子）
沖縄県立図書館史料編集室編　1989『沖縄県史料』前近代６　首里王府仕置２
沖縄大百科事典刊行事務局編　1983『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
小野武夫編　1932『近世地方経済史料』第九巻　琉球産業制度史料　前編　吉川弘文館
北中城村教育委員会　1999『北中城村文化財調査報告書第四集　北中城の石碑』
田村浩　1927『琉球共産村落之研究』岡書院（至言社覆刻版 1977）
北谷町史編集委員会　1986『北谷町史』第二巻資料編１　前近代・近代文献資料
北谷町史編集委員会　2005『北谷町史』第一巻通史編
仲間勇栄　1985「『伊平屋島杣山竿入帳』について」『地域と文化』第29・30合併号
長間安彦　1990「新発見のハル石（印部石）－近世琉球の土地測量資料－」『浦添市立図書館紀要 №２』
中村誠司・仲原弘哲　1985「羽地間切竿入帳の分析」『地域と文化』第33号
那覇市企画部市史編集室　1982『那覇市史』資料篇第１巻７　家譜資料三
那覇市市民文化部歴史資料室　2004『那覇市史』資料編第１巻12 近世資料補遺・雑纂
那覇市総務部市史編集室　1970『那覇市史』資料編第１巻の２
山岡光治　2005「琉球王府の図根点－『ハル石』を訪ねて」『測量』３月号　社団法人日本測量協会
琉球政府　1965『沖縄県史』第14巻資料編４　雑纂１（国書刊行会復刻版 1989）
琉球政府　1968『沖縄県史』第21巻資料編11 旧慣調査資料

〈註〉

1　碑のみでいえば浦添では現在10基が確認されている。

2　『沖縄県旧慣租税制度』（明治26：1893）によれば、竿入帳には田畑竿入帳、山野針竿帳などとともに「印土手帳」と呼ばれるものがあったという。

3　他に『伊平屋島杣山竿入帳』も「印土手」と記している。

4　『北谷間切桑江村竿入帳』では「ひら原お之印より子」など印土手という表現は使われていない。

5　例外的に『沖縄旧慣地方制度』（明治26：1893）には「土手印部（検地ノ目標）」とみえる。

6　『曹姓家譜（平敷家）』十世慶明の記事にも同様の内容があり、少なくともこの時に下知役・高嶺里之子親雲上と森永筑登之親雲上、山筆者・泊親（親泊）筑登之親雲上（＝慶明）の３名が褒賞されている。なおこの記事から印部土手の読みは“シルヒドテ”“シルビドテ”であったことがわかる。

7　北部地域に関しては大方次のようである。「印部土手並名書牌文又ハ方切土手ノ義到テ大切ナル御仕置ニテ少シトテモ相破候テハ御沙汰ノ程モ不軽事候間間切中印部土手帳表春秋田地御巡回前相改メ修補サセ若シ印部石無之候ハヽ地頭代ヘ相達シ頭御役衆案内ノ上調方可申付無其ノ義夫々不行届候ハヽ科銭弐拾銭申付尤不下知ノ品ニ依テ重科ニモ及ブベク事」（「金武間切内法」）。さらに別の条文では「役々ニ於テ田畑印部土手山野印部土手他村他間切トノ境界土手巡視シ若シ切細メ又破損シアル者ハ事ノ軽重ニ応シ科銭」（同）を徴収するとある。

8　その他明治25年（1892）の『原勝負其他農事慣例』にも印部土手の補修を行うこと（兼城・真和志両間切）や、破壊したものは科銭２円（知念間切）、同100貫文（南風原間切）など罰金を科することが記されている。

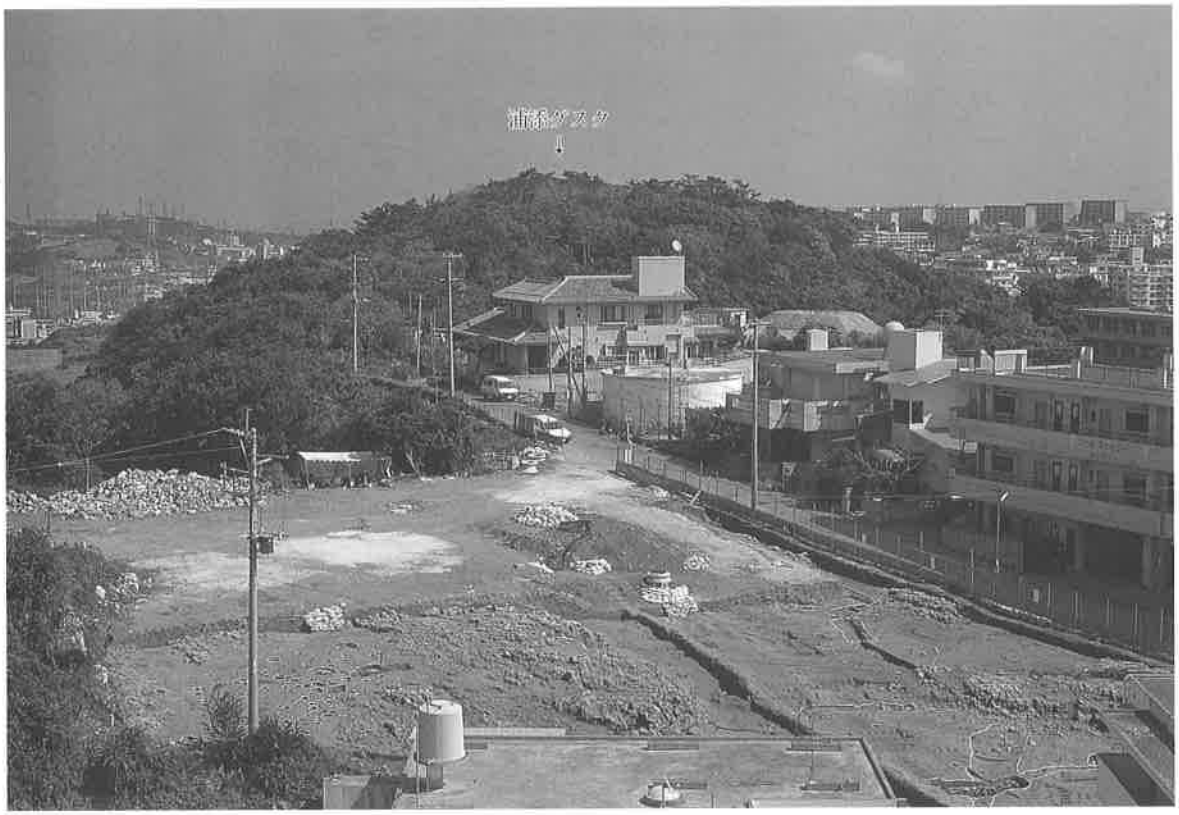
9　うるま市具志川江洲の印部土手（江洲印部土手遺跡）のすぐ脇にこの図根点が現存する。

10　現地に印部土手が残っている例であり、ハル石が移設あるいは保管されている例はさらに多い。
　破壊から免れた理由として忘れ去られた結果のものがある一方、大切に守られてきた場合がある。今帰仁村古宇利島の印部土手について、「子どものころからヤギの草刈りのときいつも気になっていた。亡き父からは大事なものだから触ってはいけないと教えられていた」という地元住民の証言がある（琉球新報2006年１月11日朝刊）。これは先述したように破損に注意を払うよう繰り返し通達されているうえ科料の徴収があったため当時から「大事なもの」とされ、時代が下って印部土手（ハル石）の機能が失われあるいは忘れ去られてもこの「大事なもの」という意識のみが残った可能性がある。

11　浦添市沢岻では意味不明な碑ということで霊石として拝まれていたという。これも印部土手やハル石が残された理由のひとつである。

図　　版

図版1　仲間後原遺跡（その1）

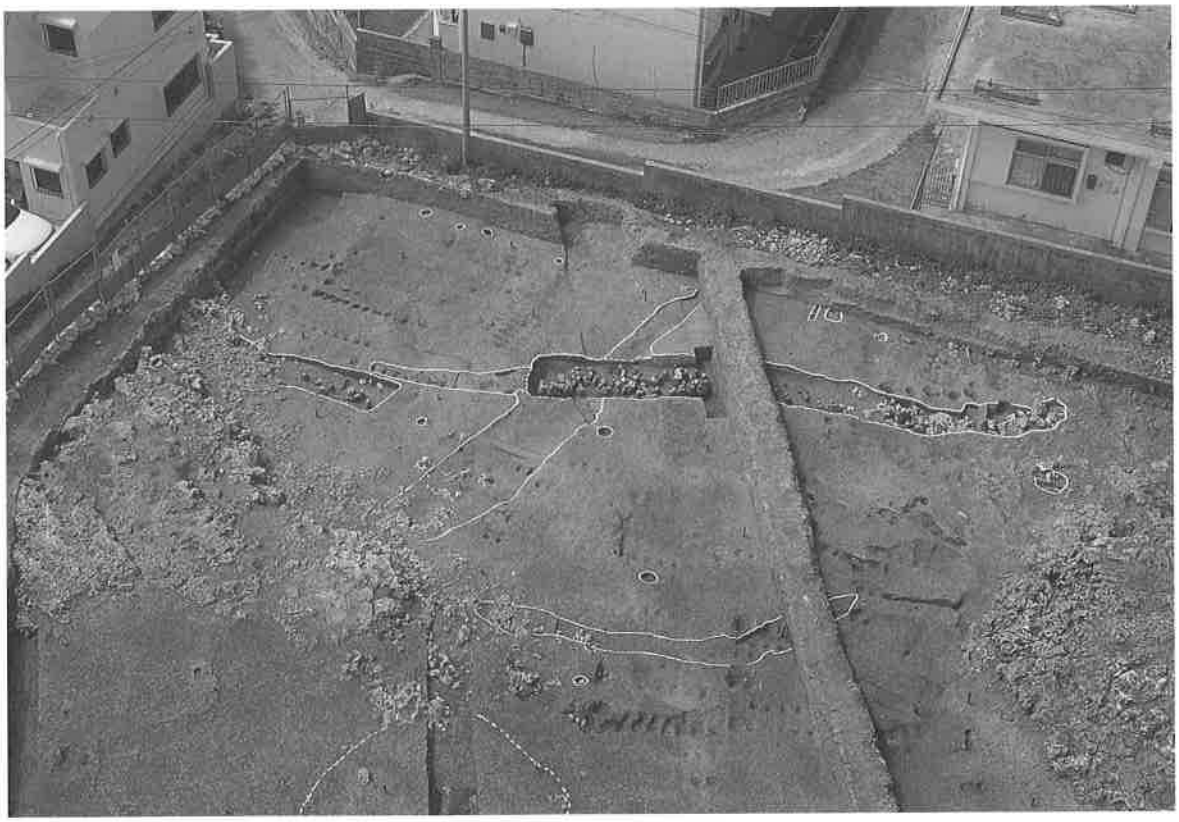


仲間後原遺跡（その１）と浦添グスク

東より

図版2　仲間後原遺跡（その1）

調査区北側（東より）



調査区南側（東より）

図版3　仲間後原遺跡（その1）

溝176（南より）

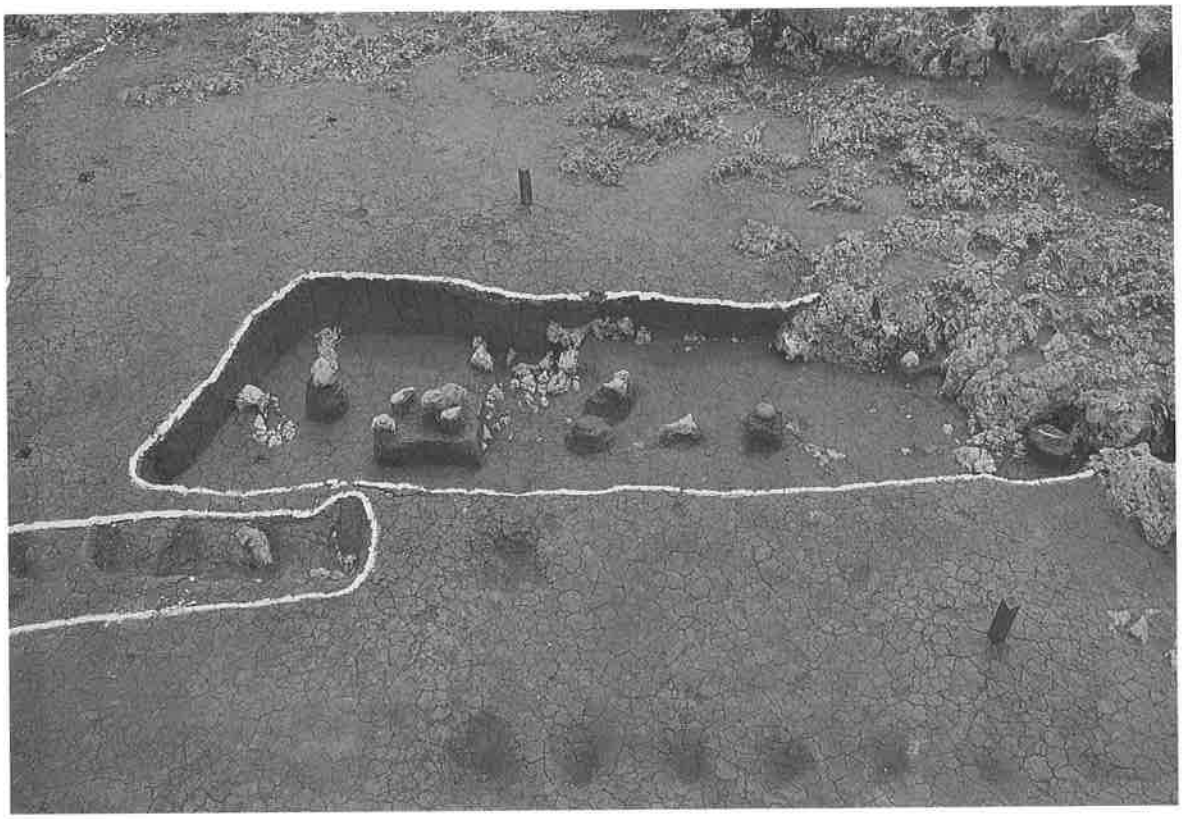
溝176断面（南より）

図版4　仲間後原遺跡（その1）

溝176近景（南より）

溝176（北より）

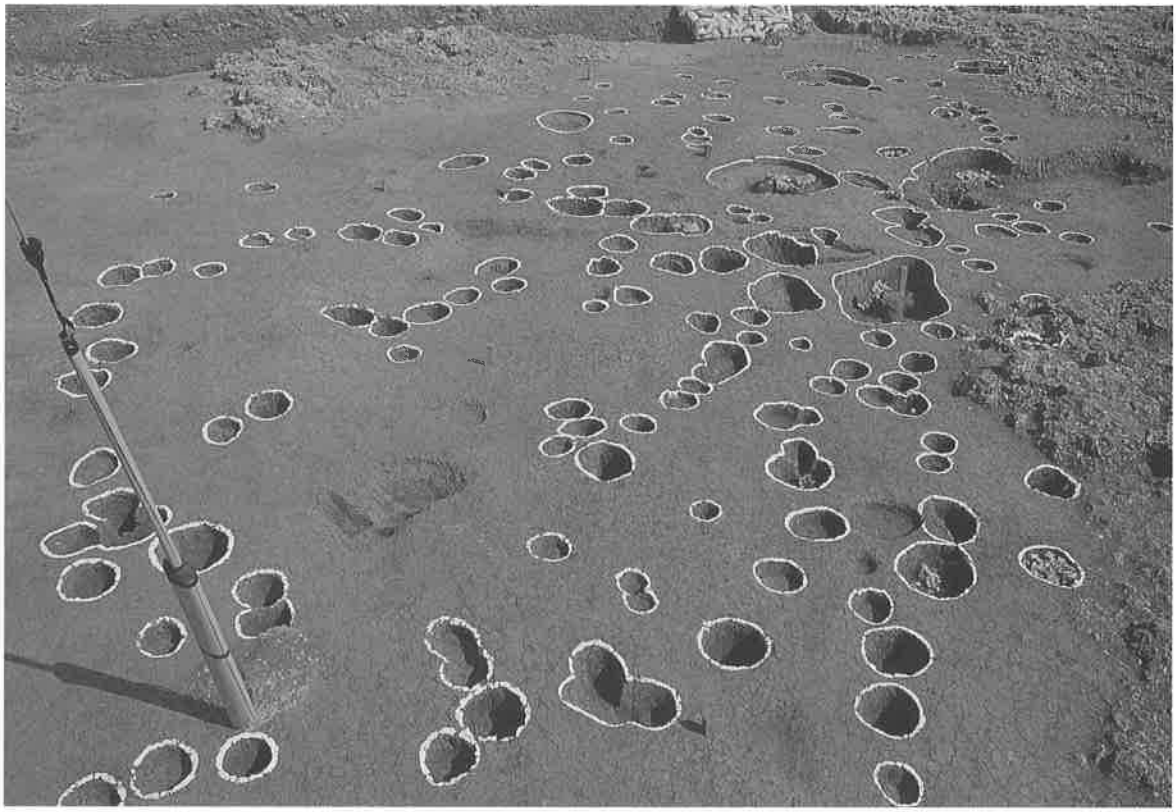
図版5　仲間後原遺跡（その1）



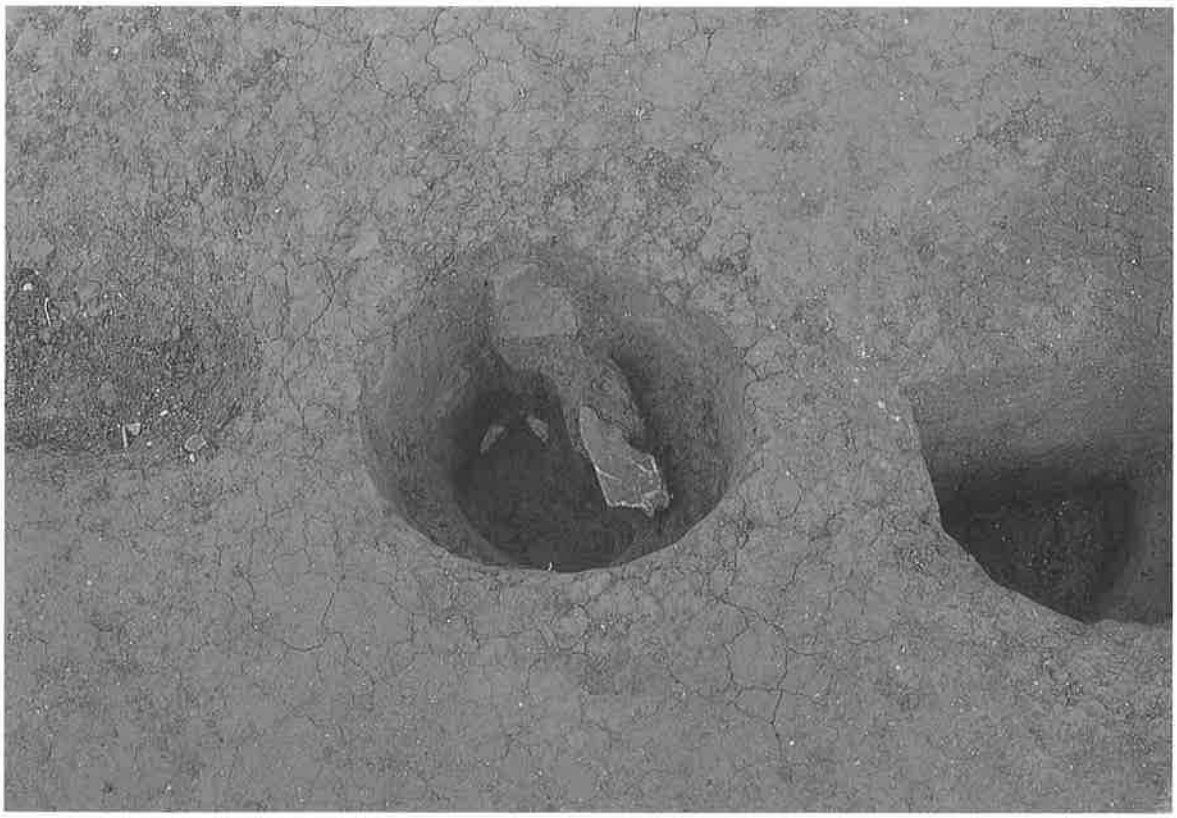
溝177（西より）

溝177断面（南より）

図版6　仲間後原遺跡（その1）



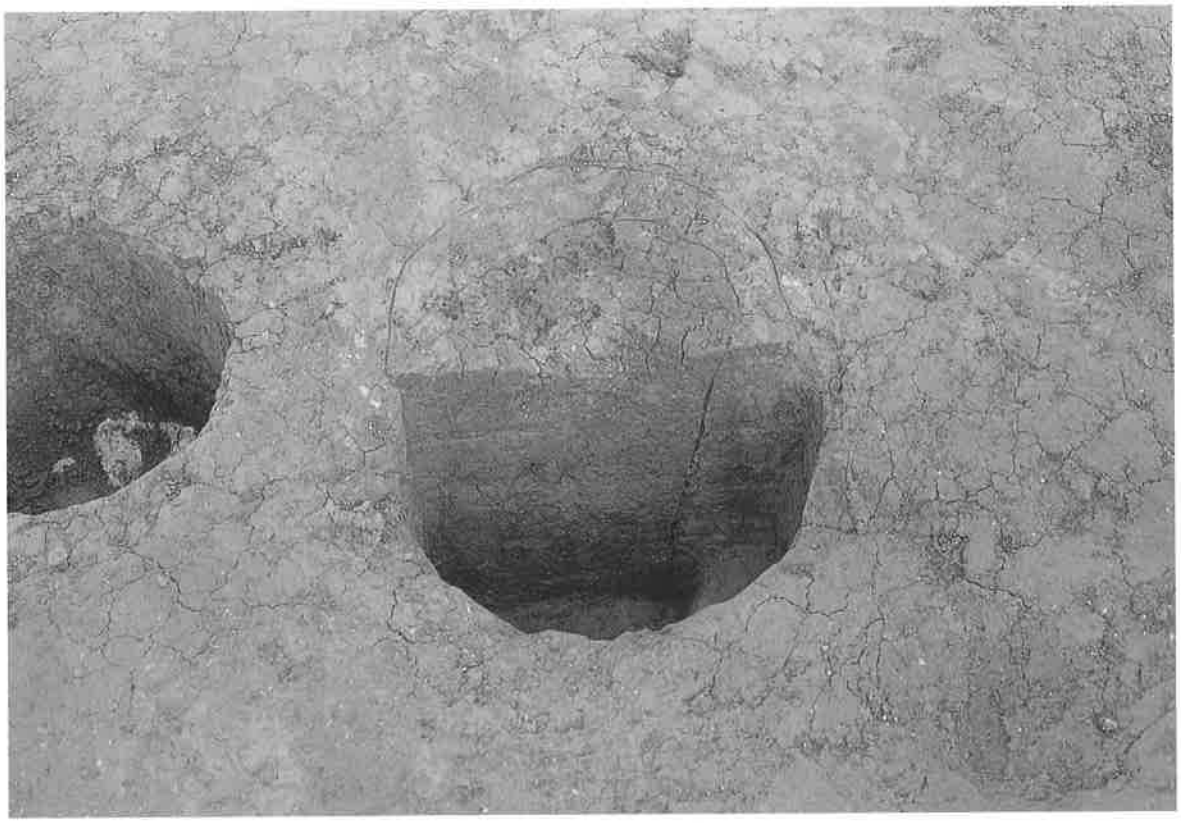
掘立柱建物1（西より）



ピット9（南より）

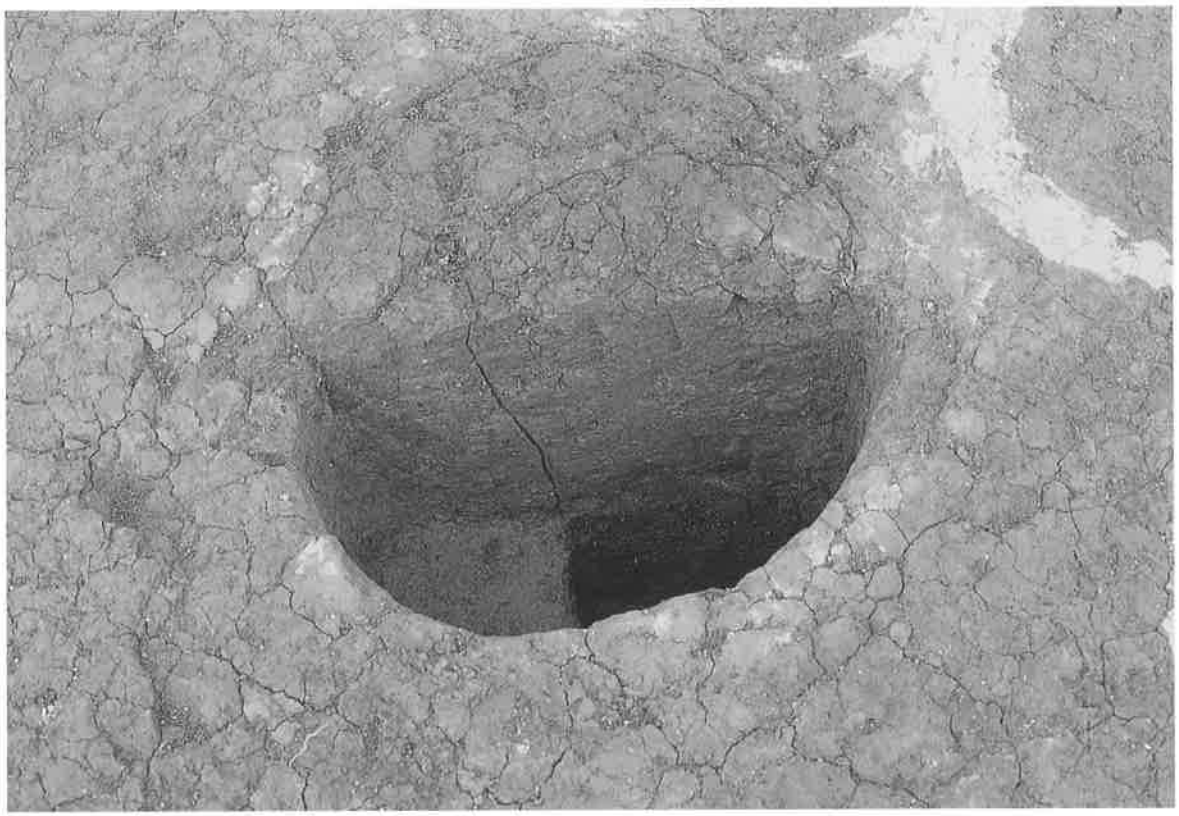
図版7　仲間後原遺跡（その1）

ピット8（南より）

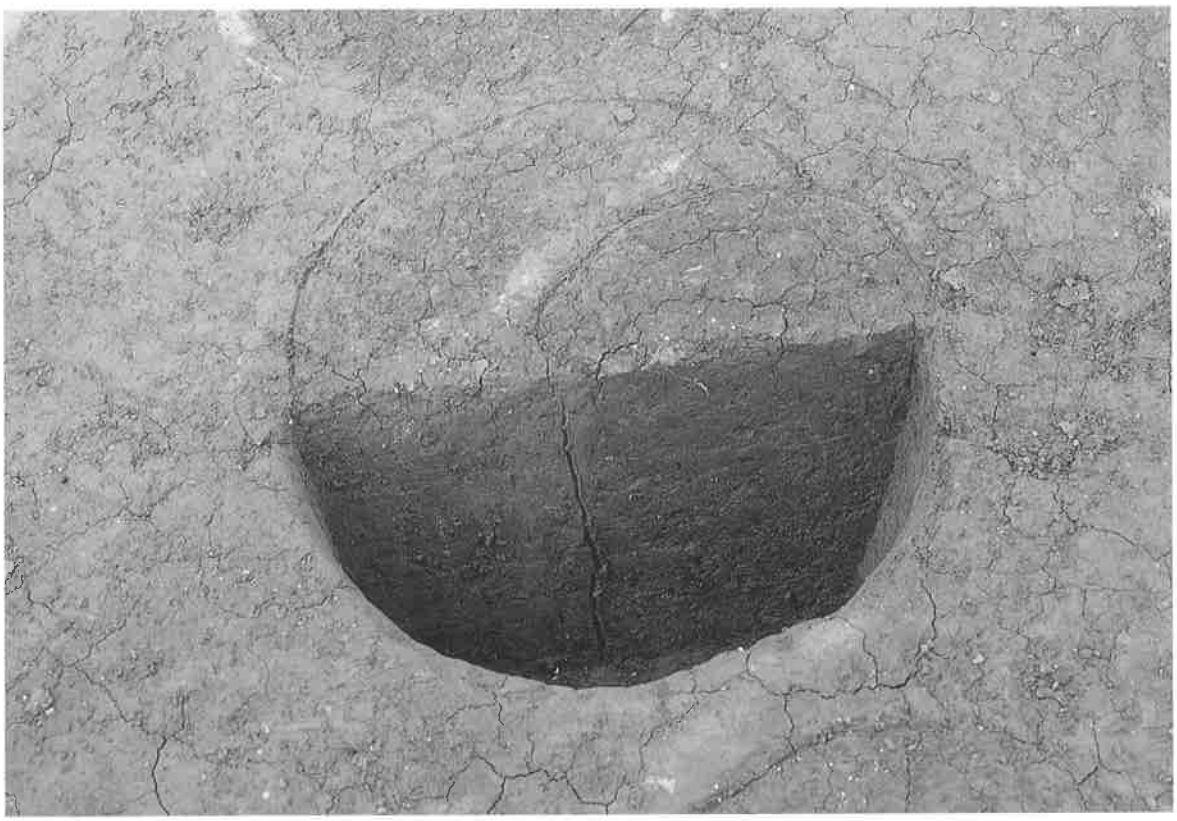


ピット10（南より）

図版8　仲間後原遺跡（その1）



ピット43（南より）



ピット49（南より）

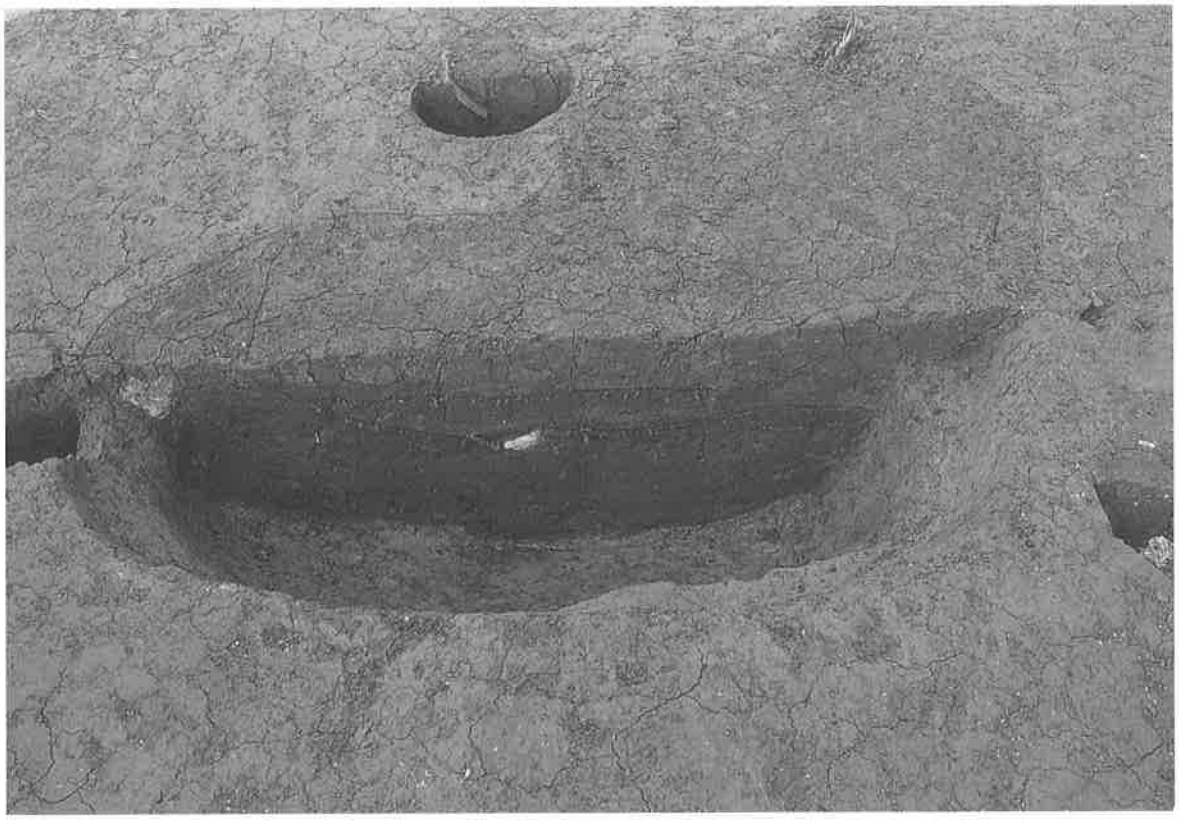
図版9　仲間後原遺跡（その1）

土坑110（北より）

土坑116（南より）

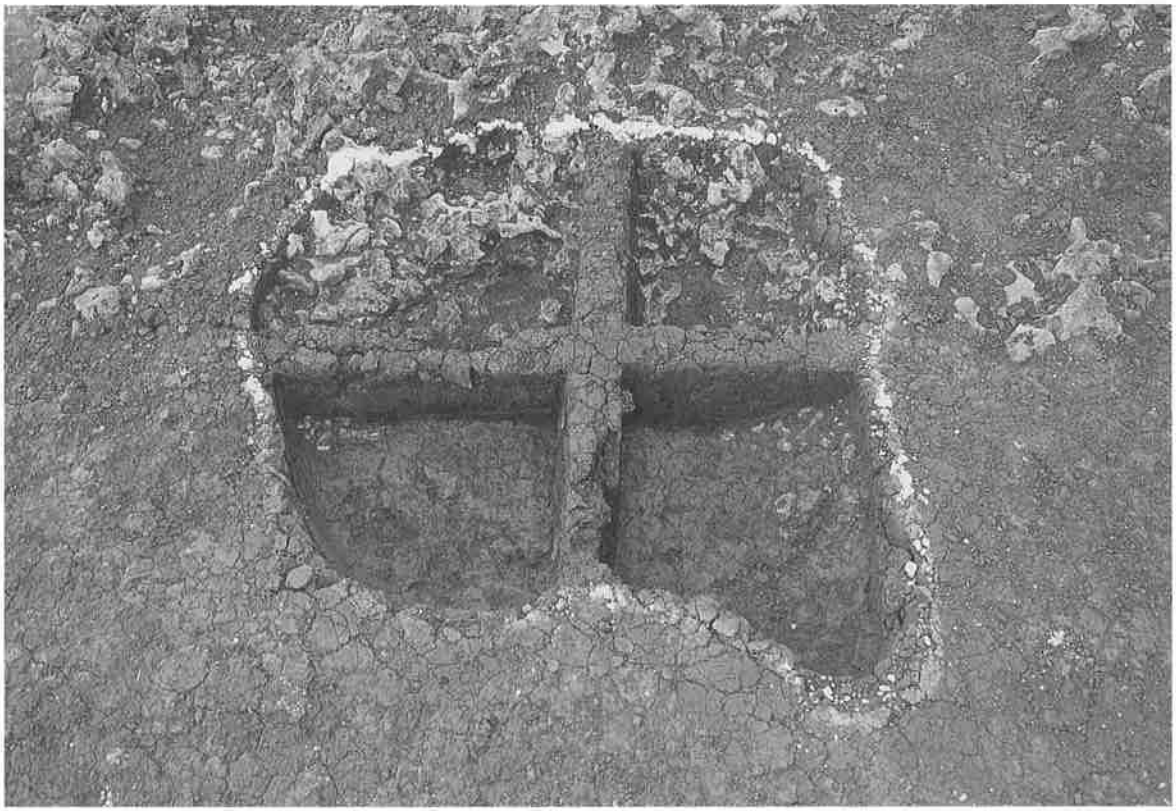
図版10　仲間後原遺跡（その1）

土坑137（南より）



土坑159（南より）

図版11　仲間後原遺跡（その1）

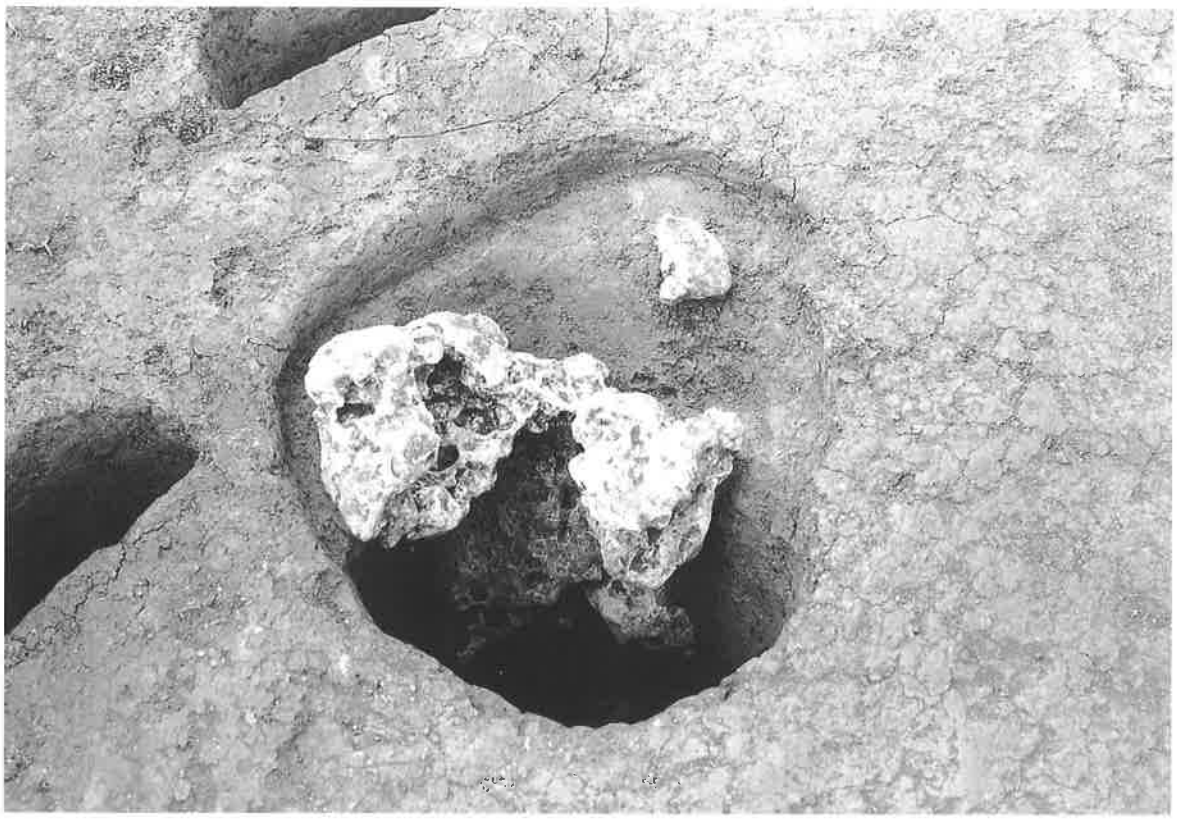


土坑173（北より）

土坑204（西より）

図版12　仲間後原遺跡（その1）

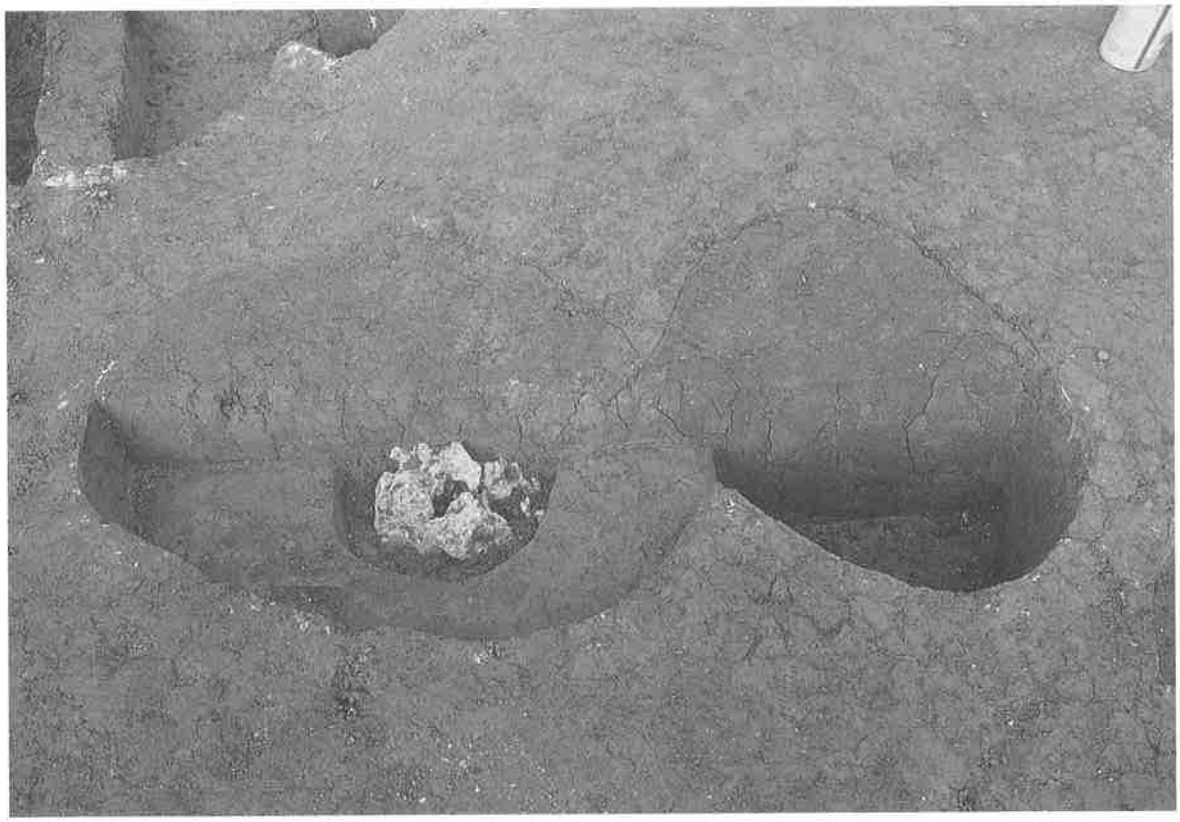
土坑207（東より）



土坑103（東より）

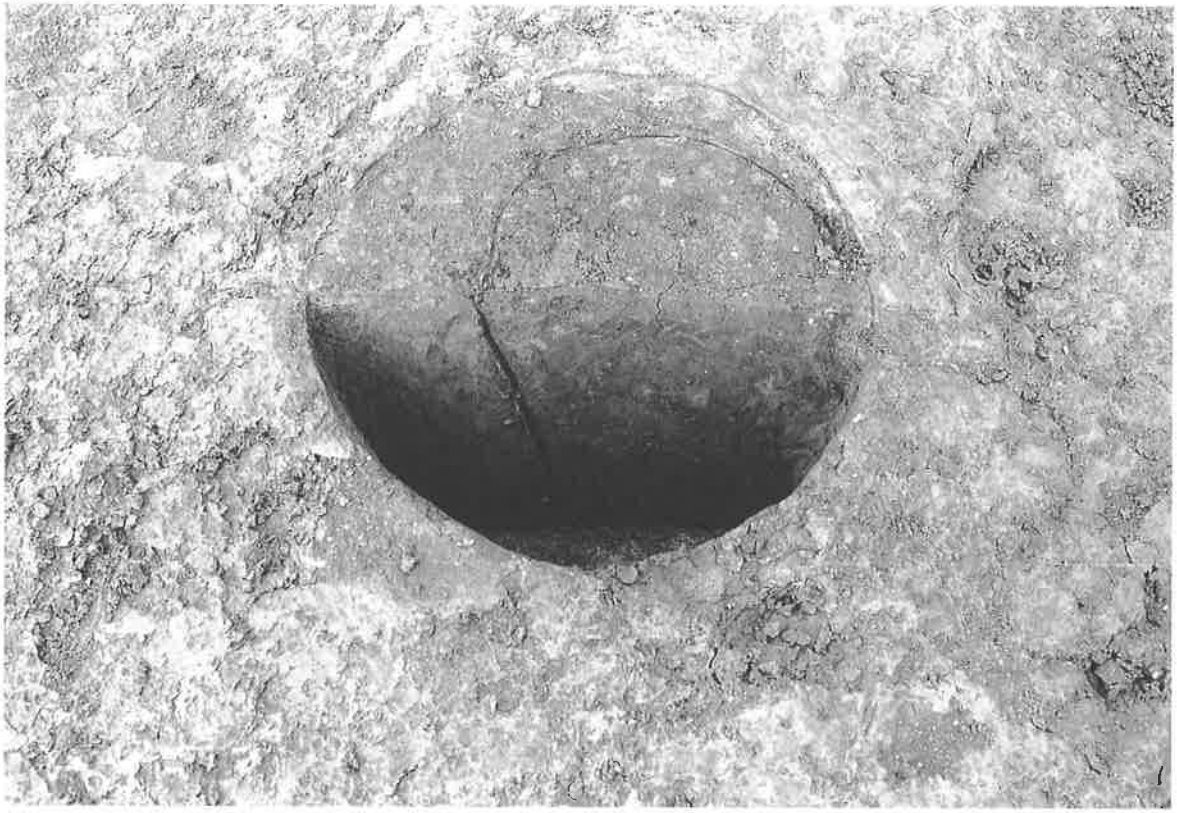
図版13　仲間後原遺跡（その1）

土坑111（北より）



土坑131・土坑132（南より）

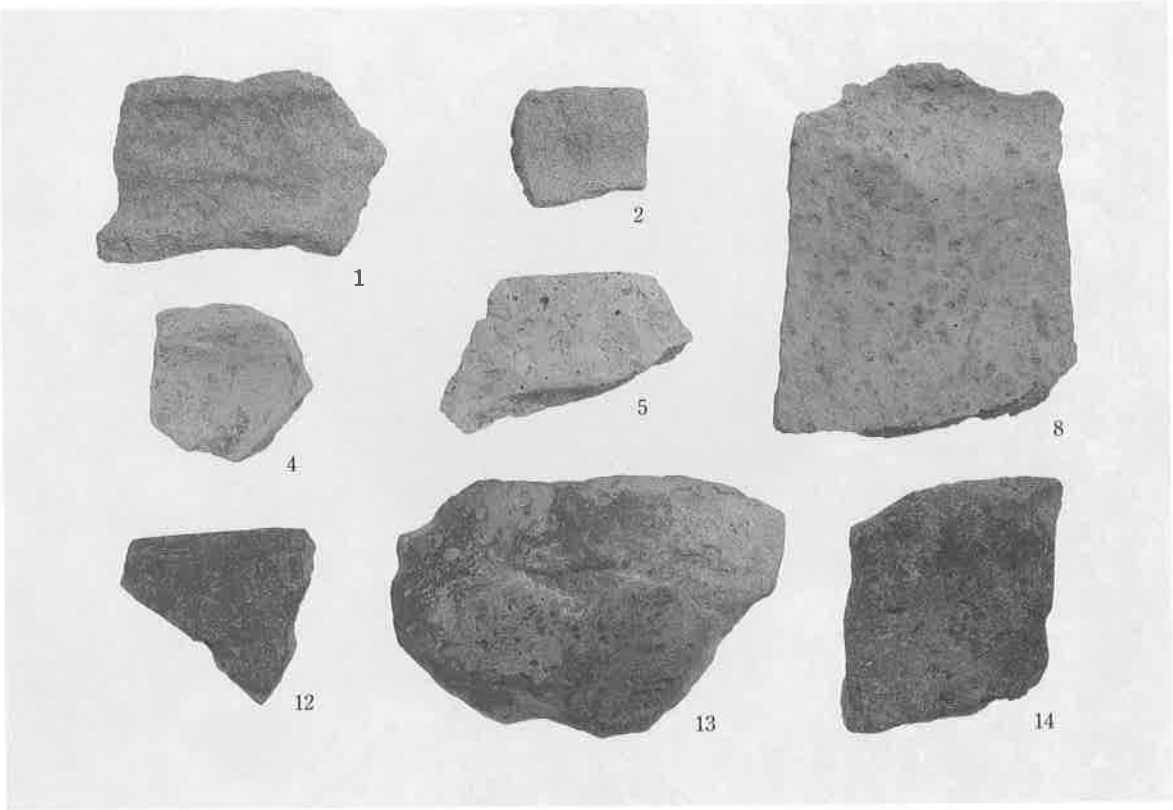
図版14　仲間後原遺跡（その1）



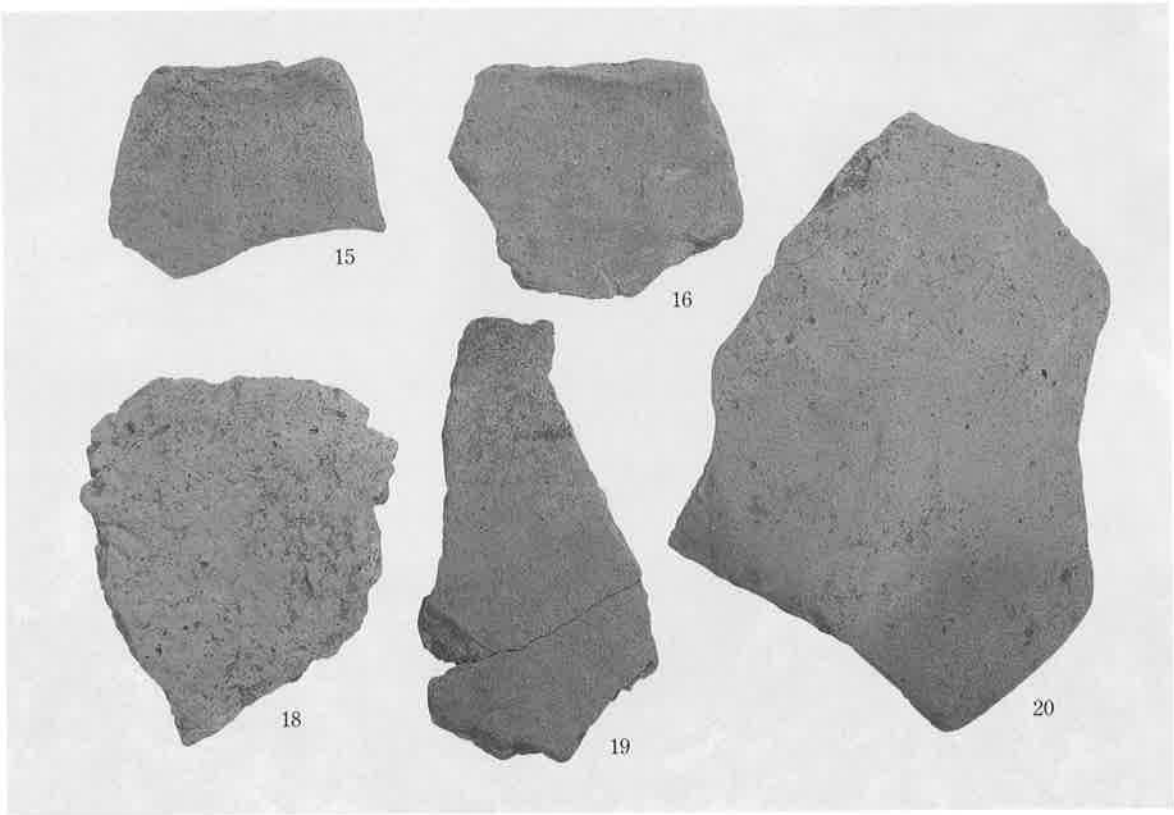
ピット174（南より）

ピット153（北より）

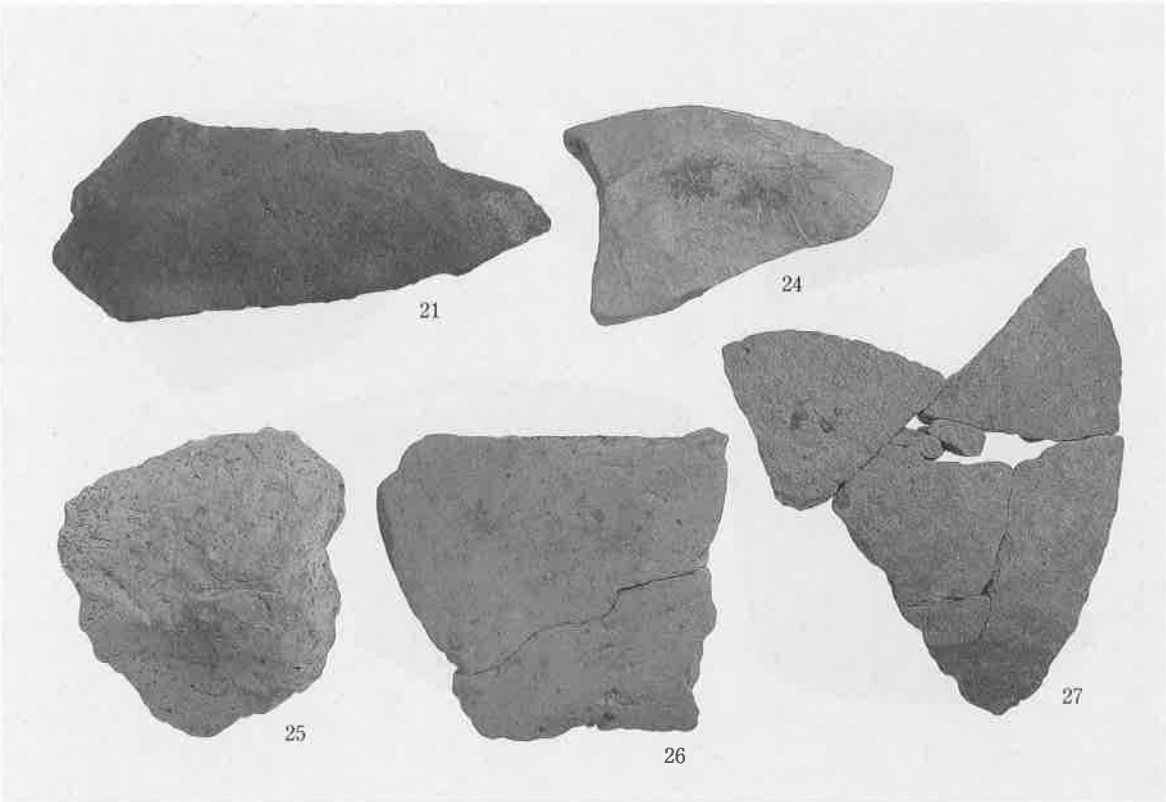
図版15　仲間後原遺跡（その1）



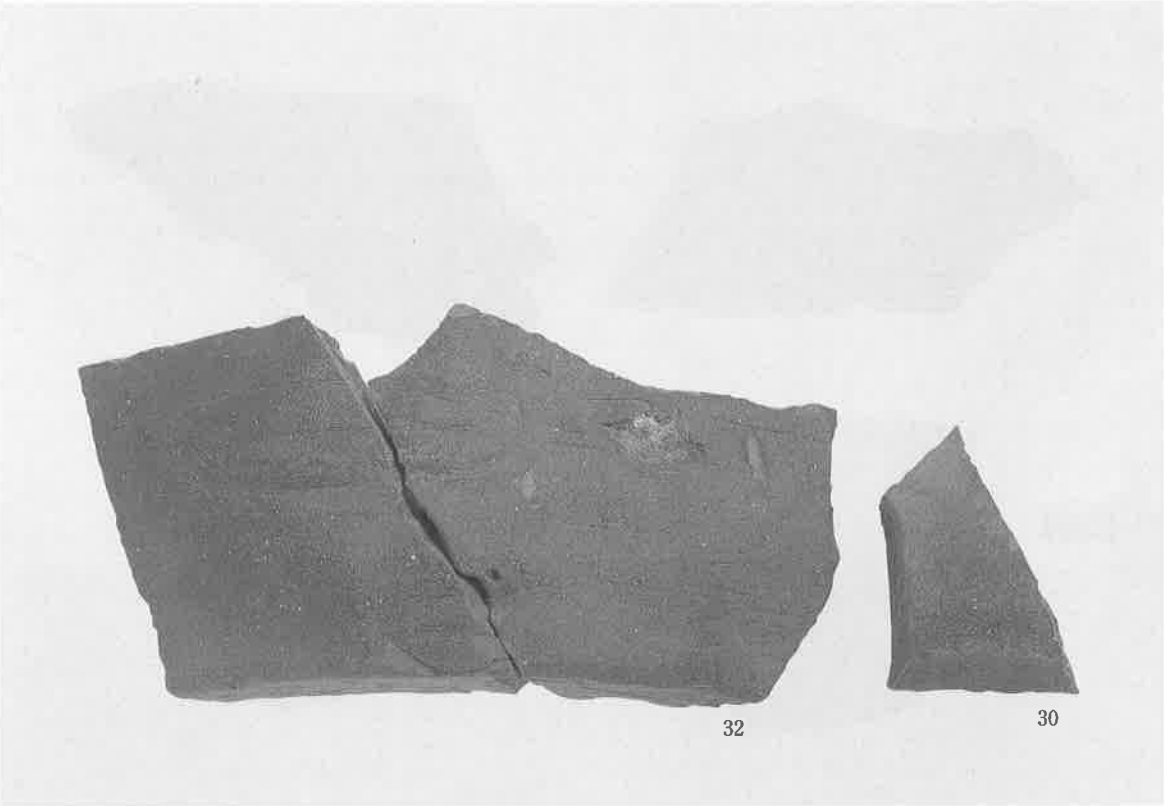
溝176出土遺物（土器）



溝176出土遺物（土器）

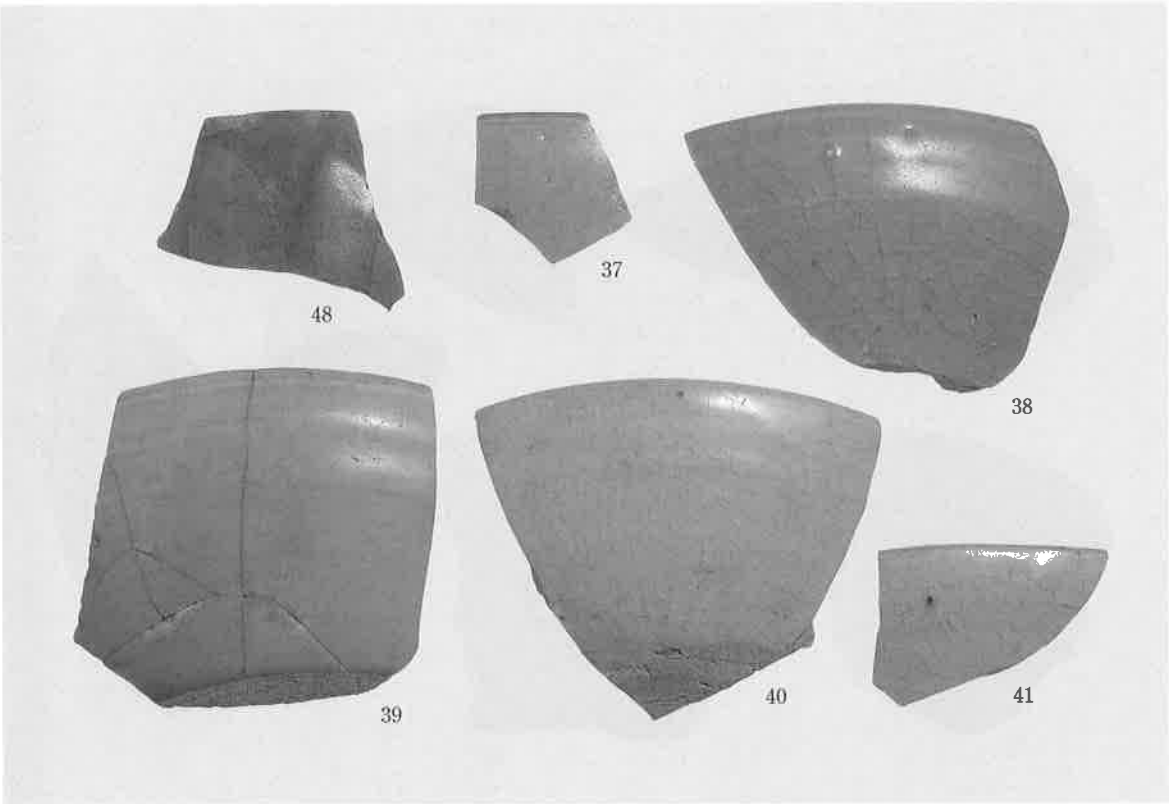


溝176出土遺物（土器）

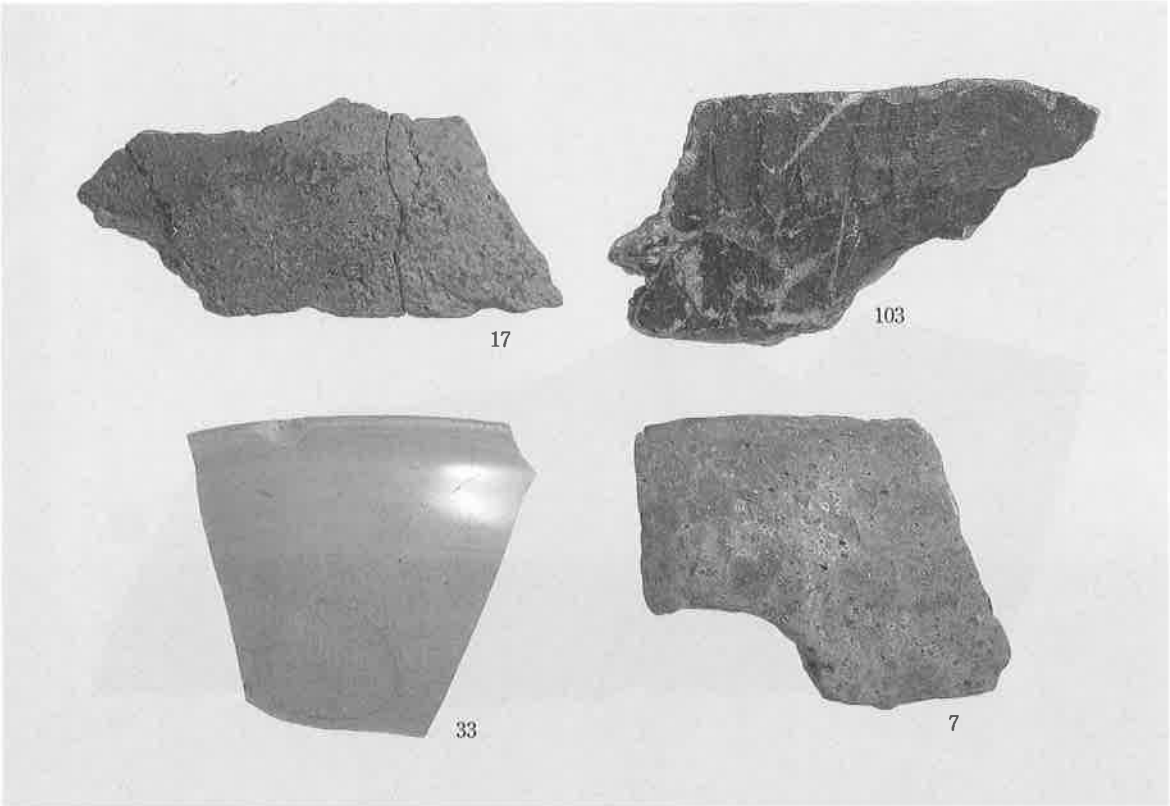


溝176出土遺物（カムィヤキ）

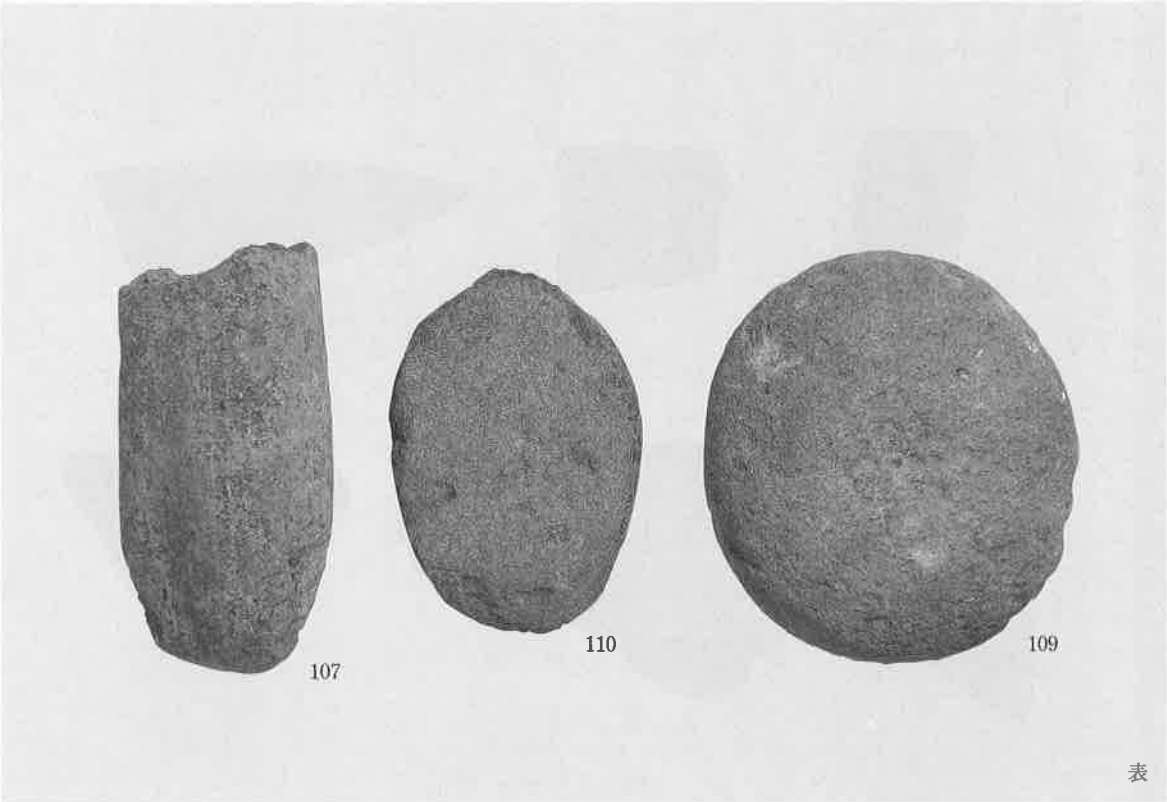
図版17　仲間後原遺跡（その1）



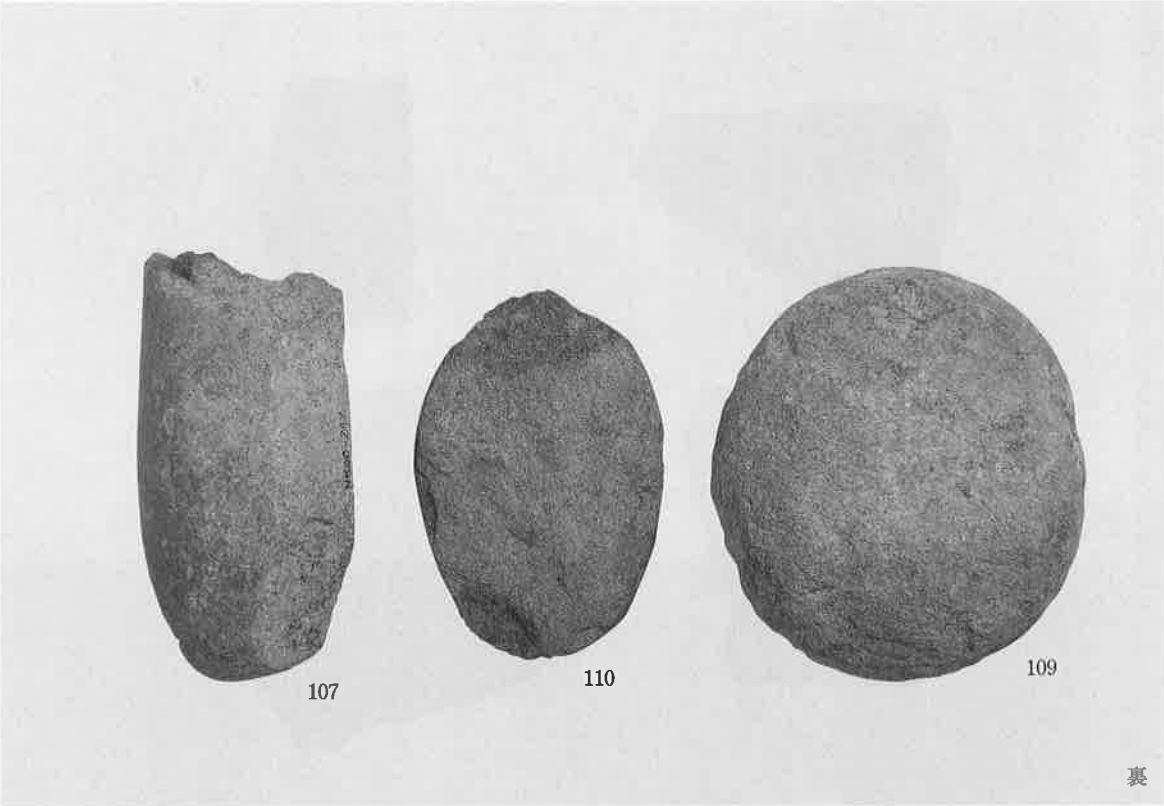
溝176出土遺物（青磁・白磁）



溝177・ピット40・ピット９出土遺物（土器・白磁・滑石製石鍋）

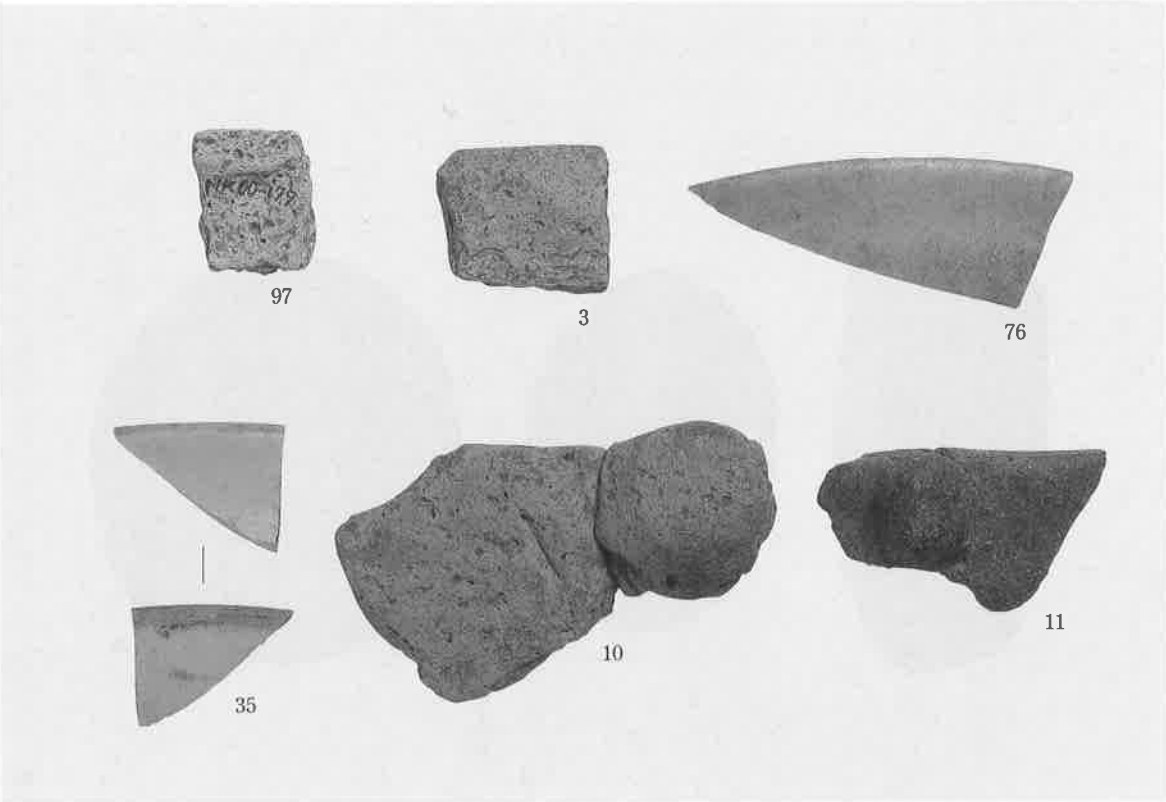


溝176・177出土遺物（石器）

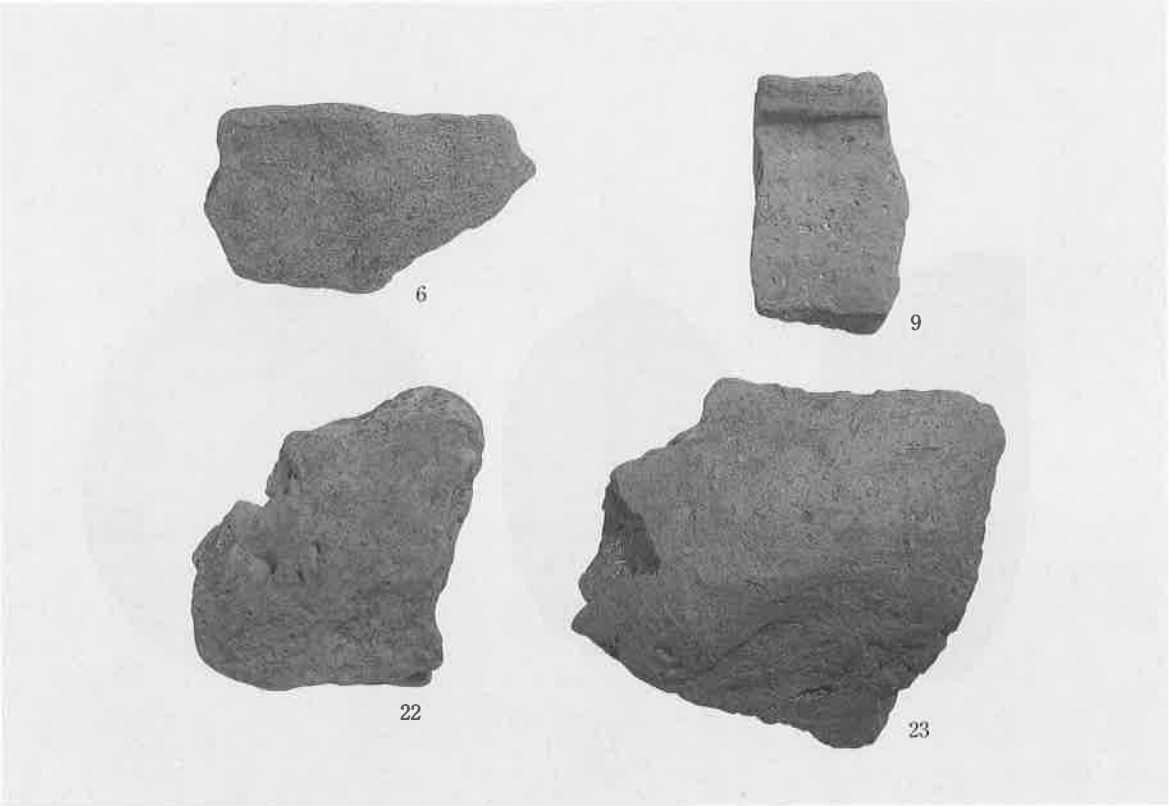


溝176・177出土遺物（石器）

図版19　仲間後原遺跡（その1）

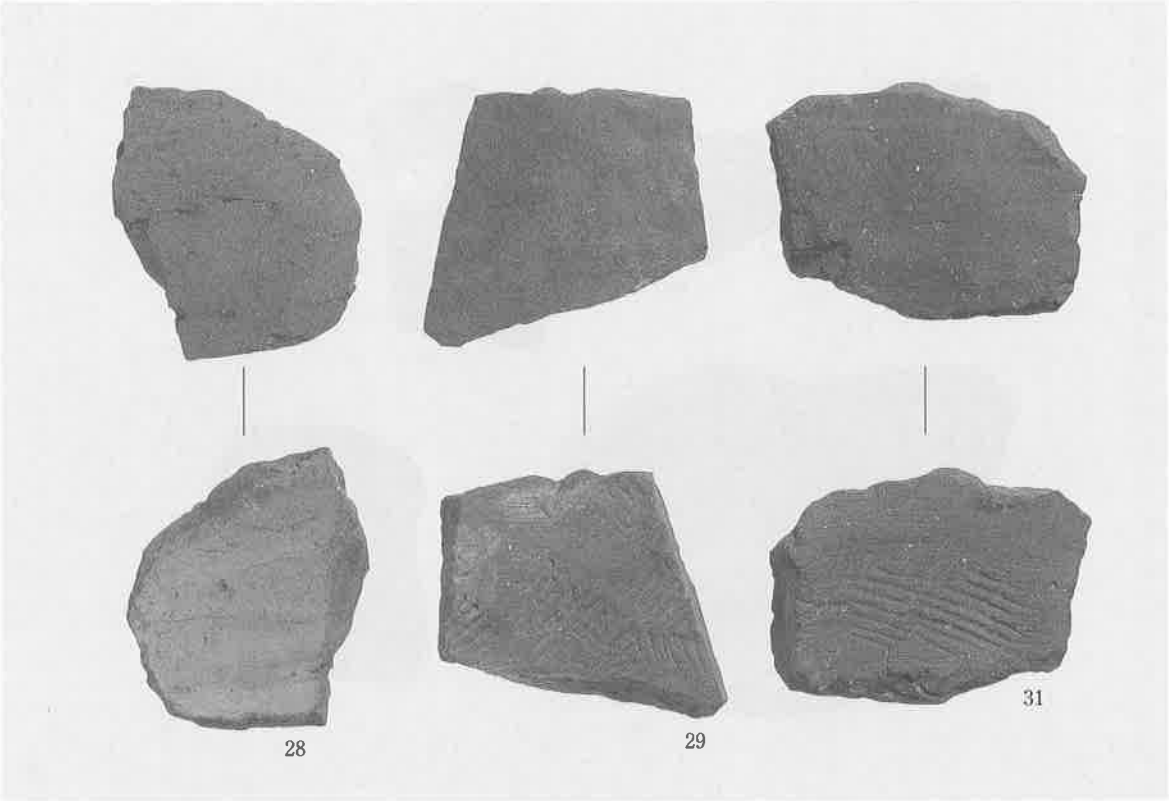


ピット102・土坑116・ピット58・ピット174・ピット153出土遺物（半練・土器・青磁・白磁）

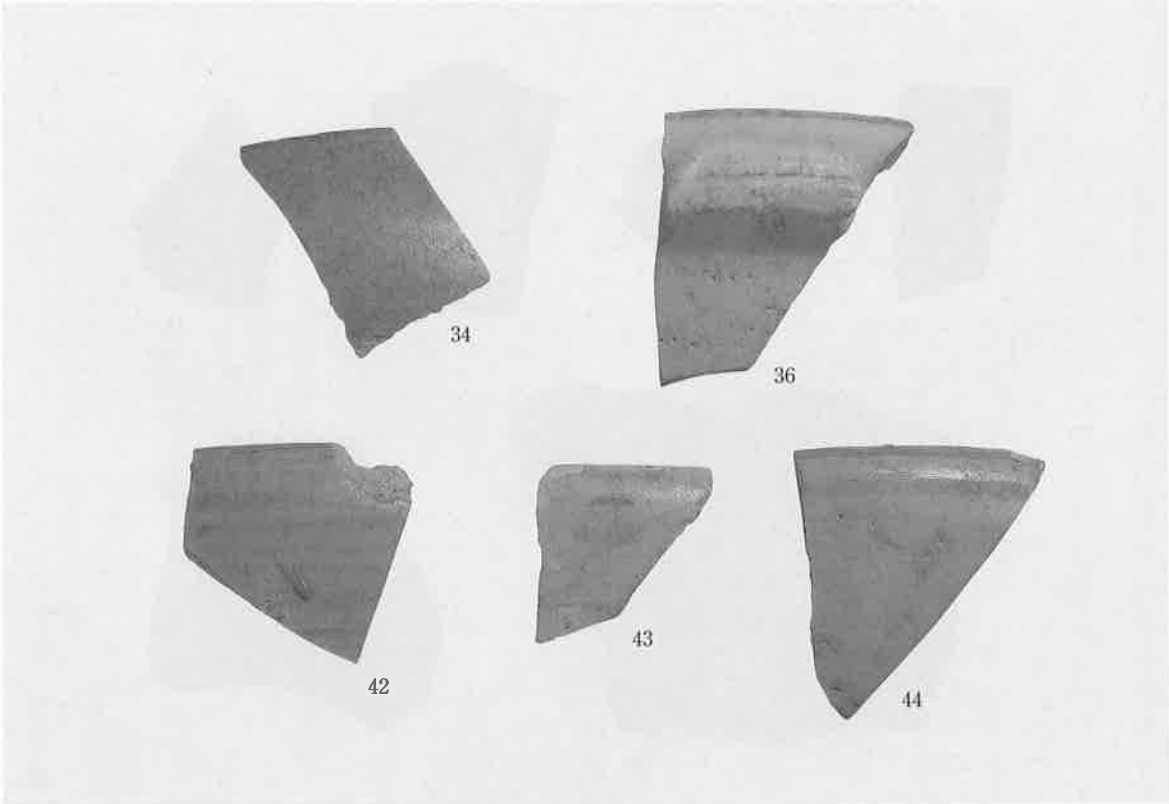


土器

図版20　仲間後原遺跡（その1）

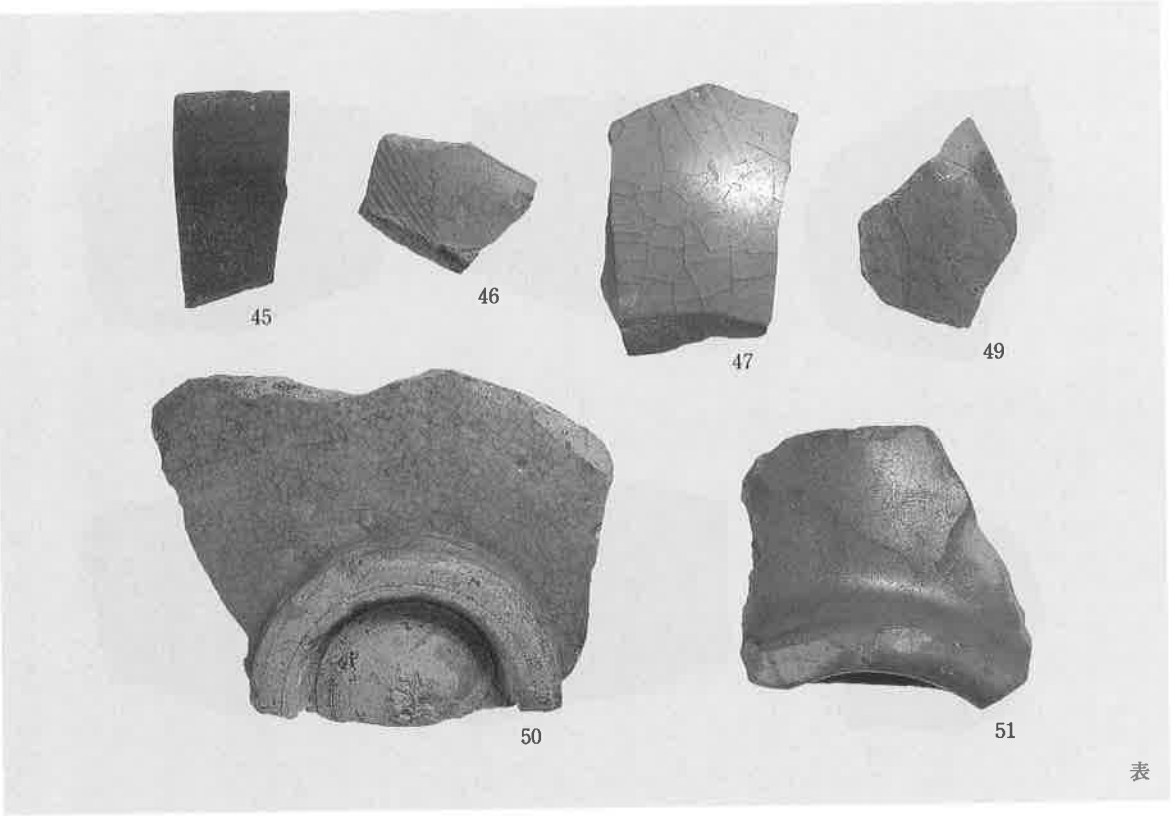


カムィヤキ

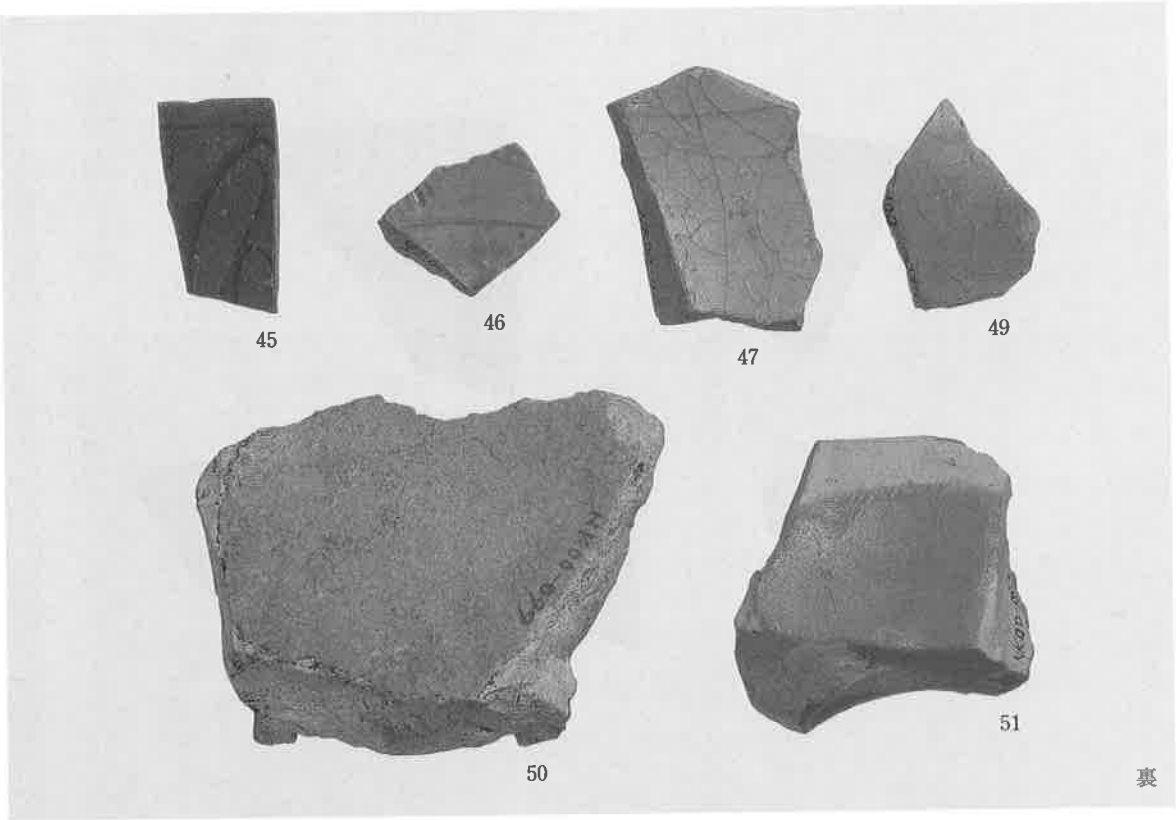


白磁

図版21　仲間後原遺跡（その1）

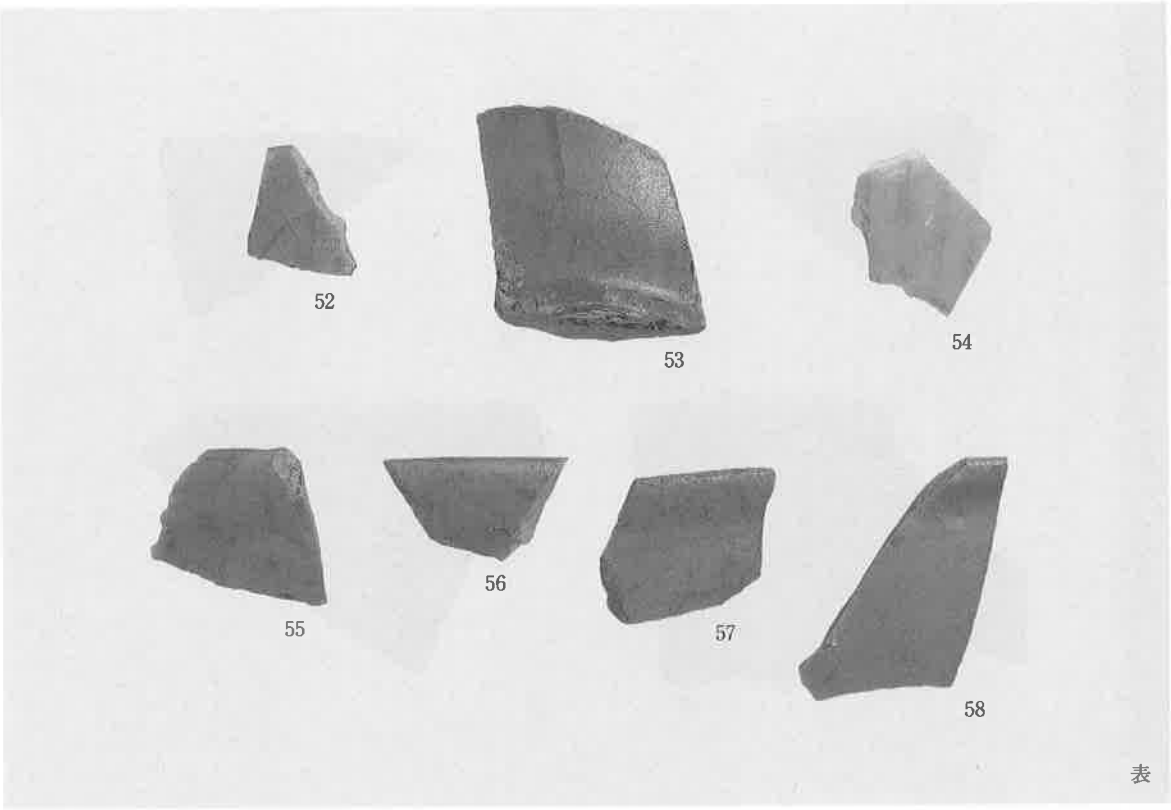


青磁

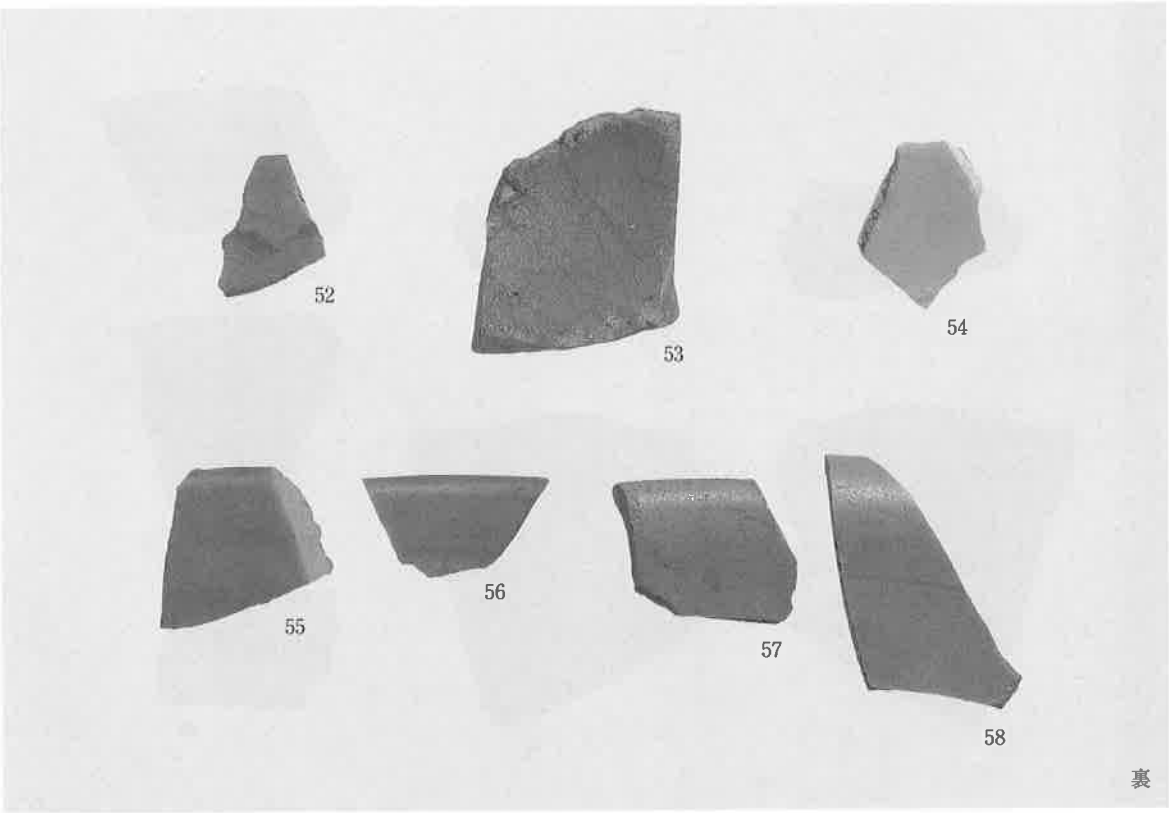


青磁

図版22　仲間後原遺跡（その1）

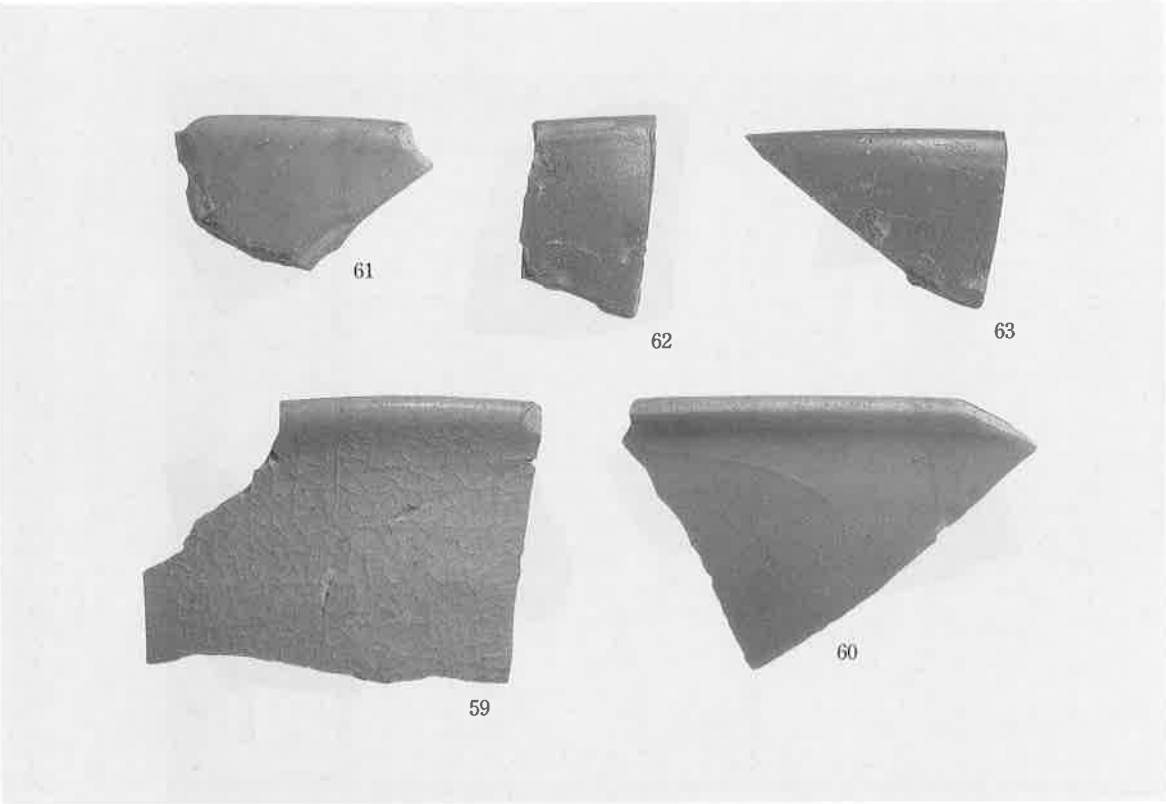


青磁

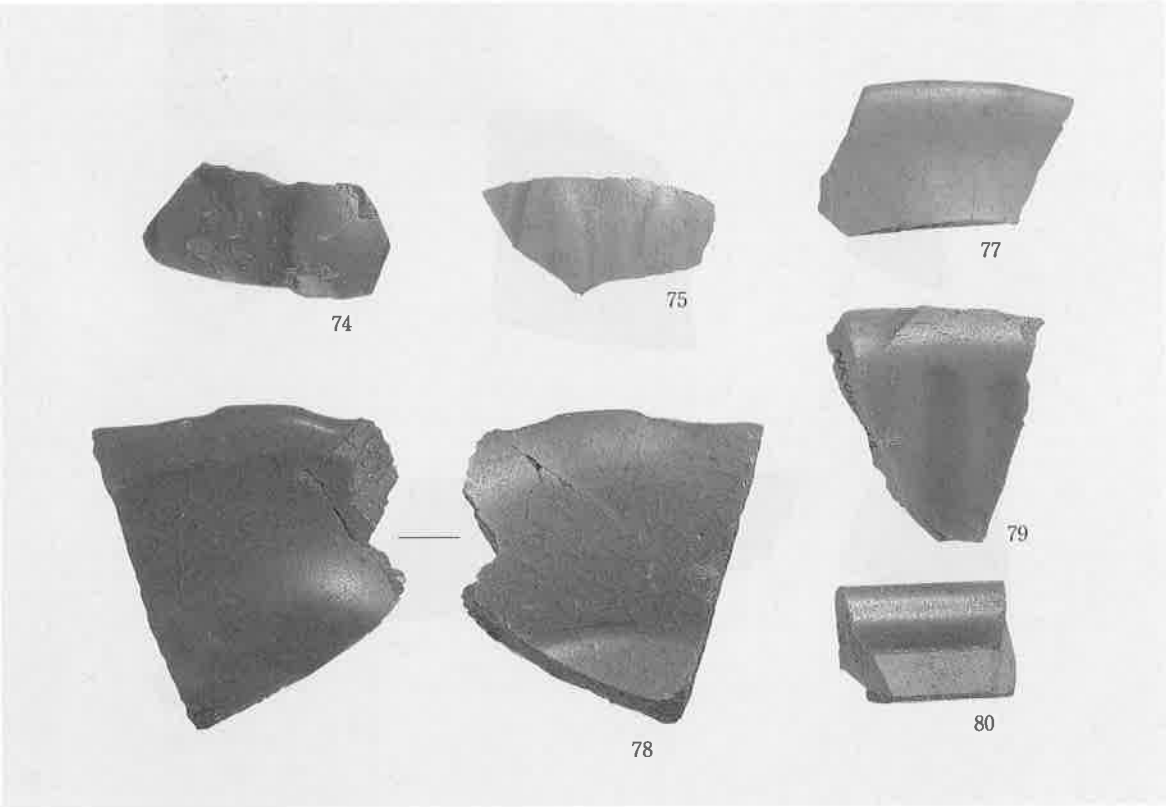


青磁

図版23　仲間後原遺跡（その1）

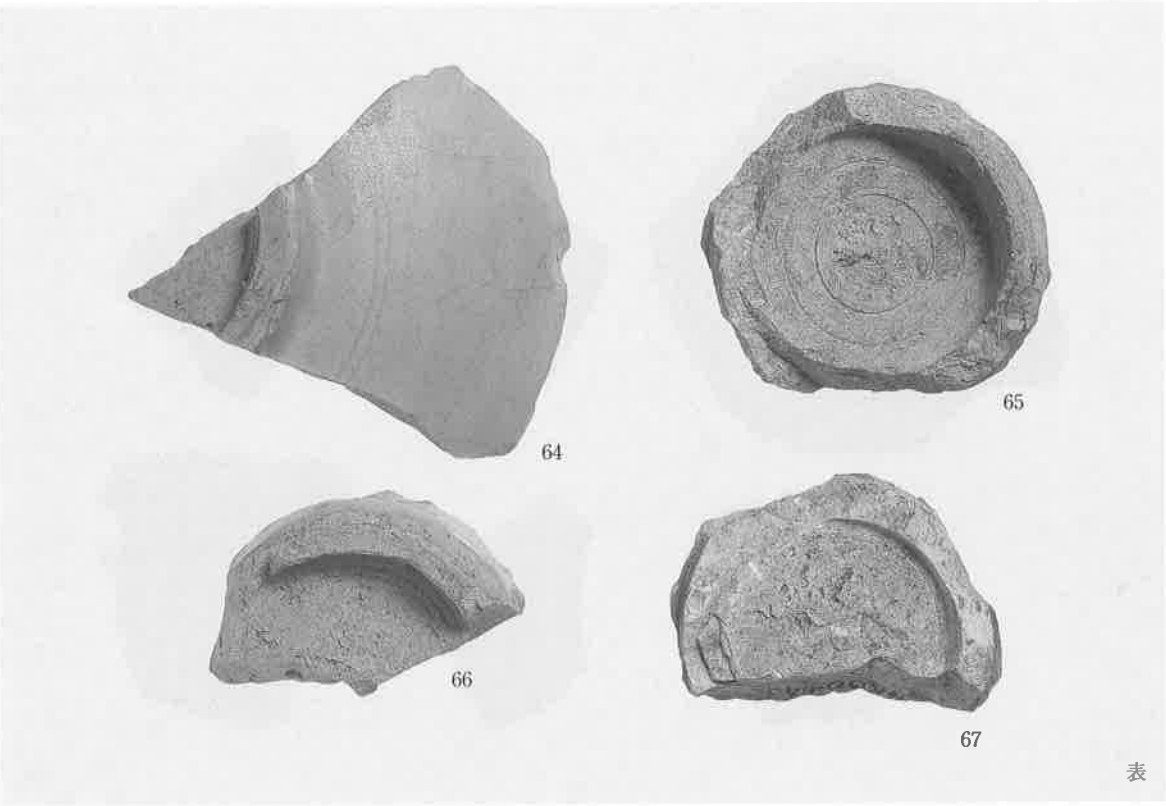


青磁

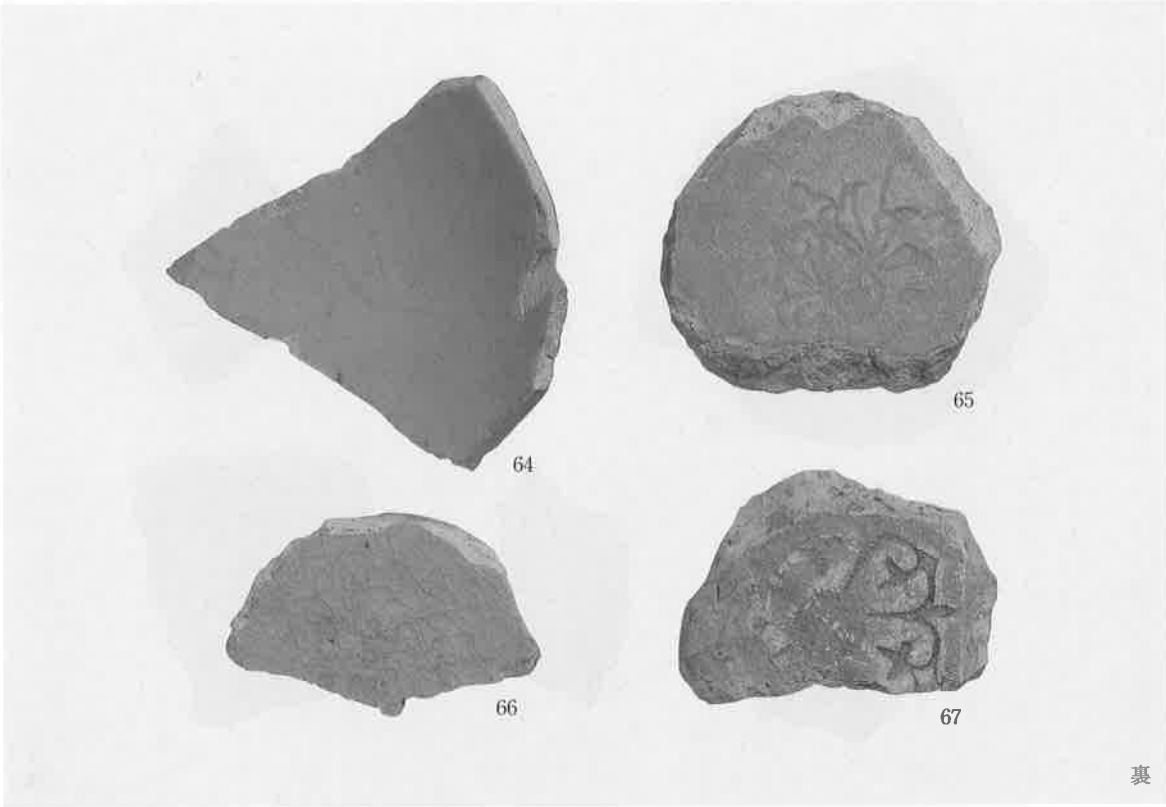


青磁

図版24　仲間後原遺跡（その1）

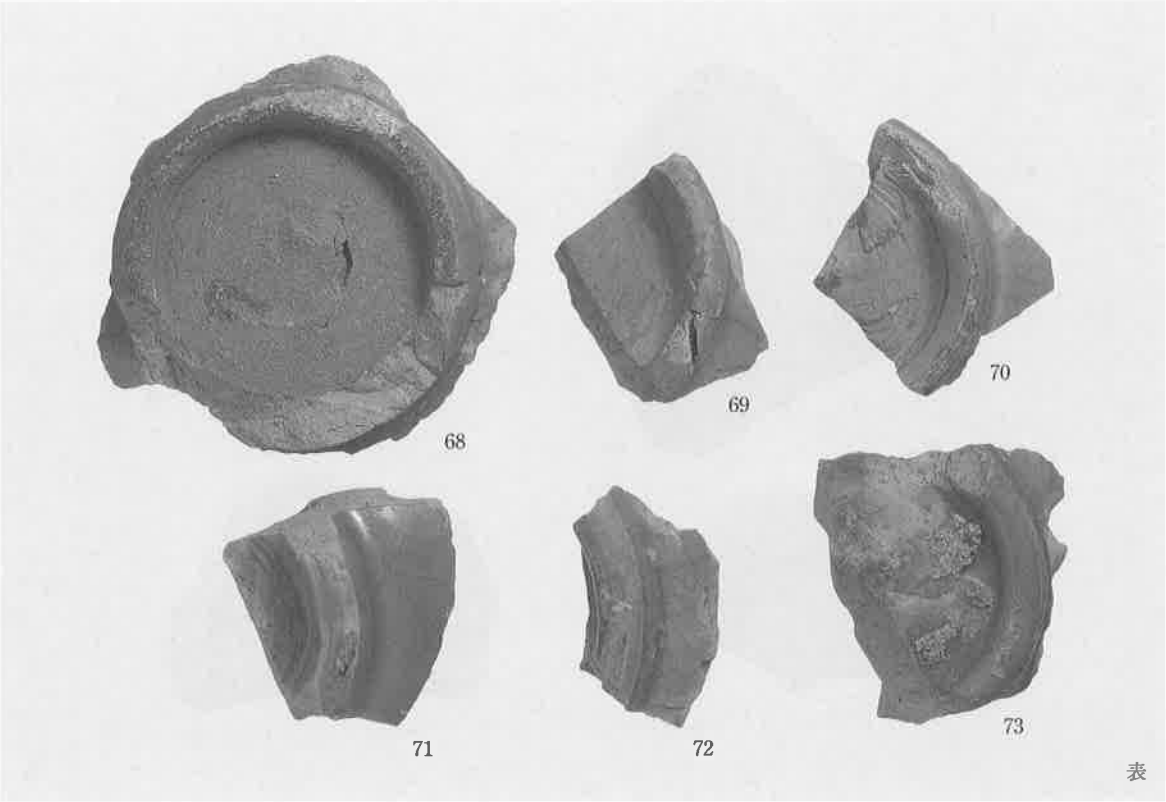


青磁

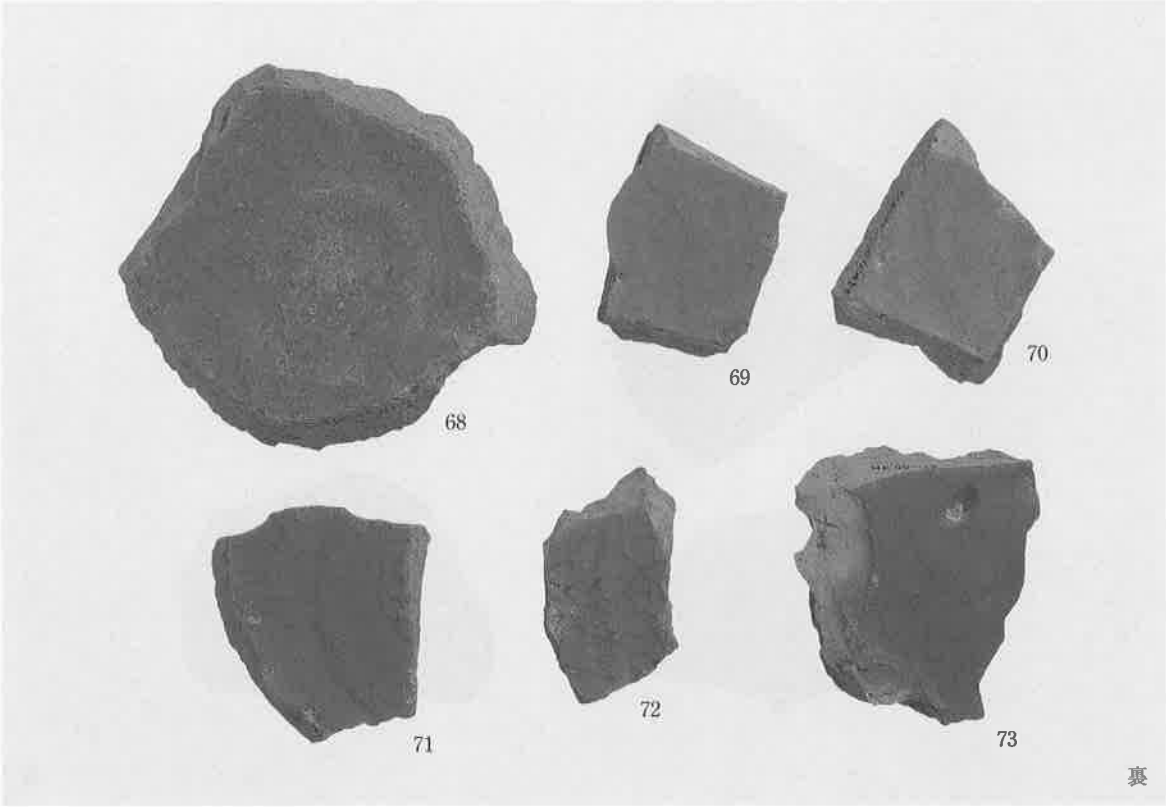


青磁

図版25　仲間後原遺跡（その1）

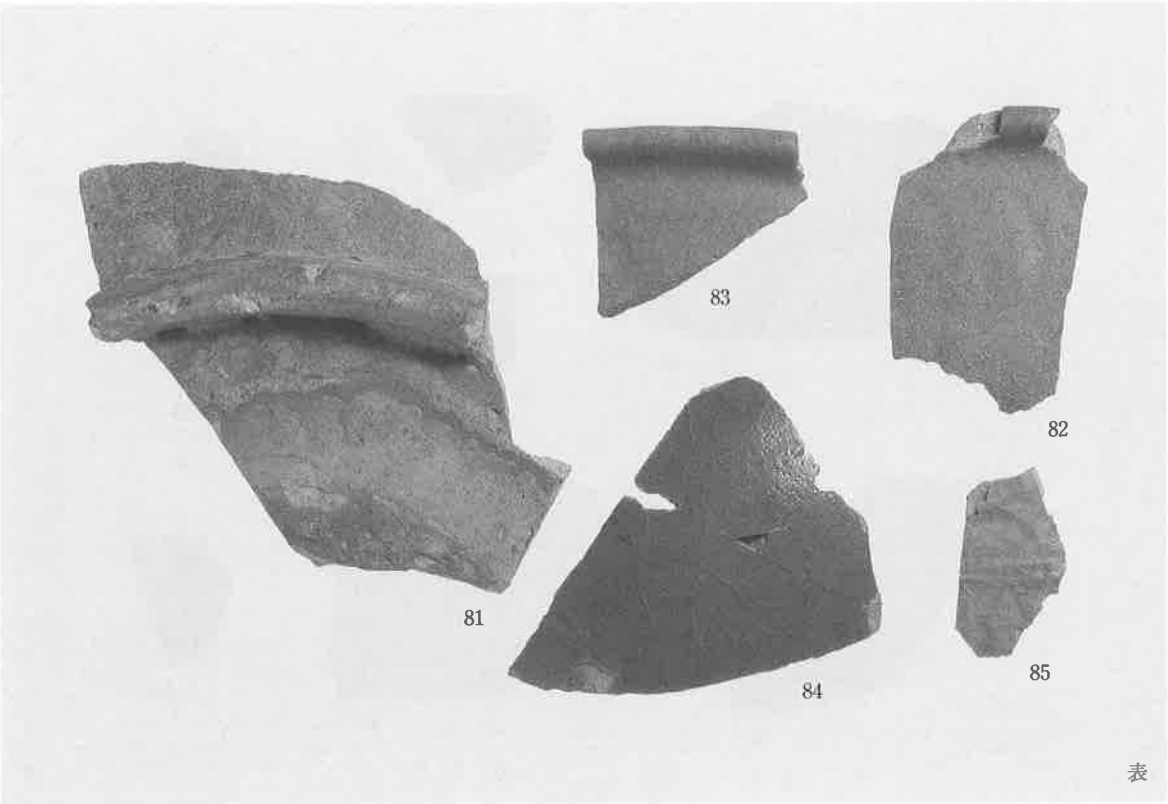


青磁

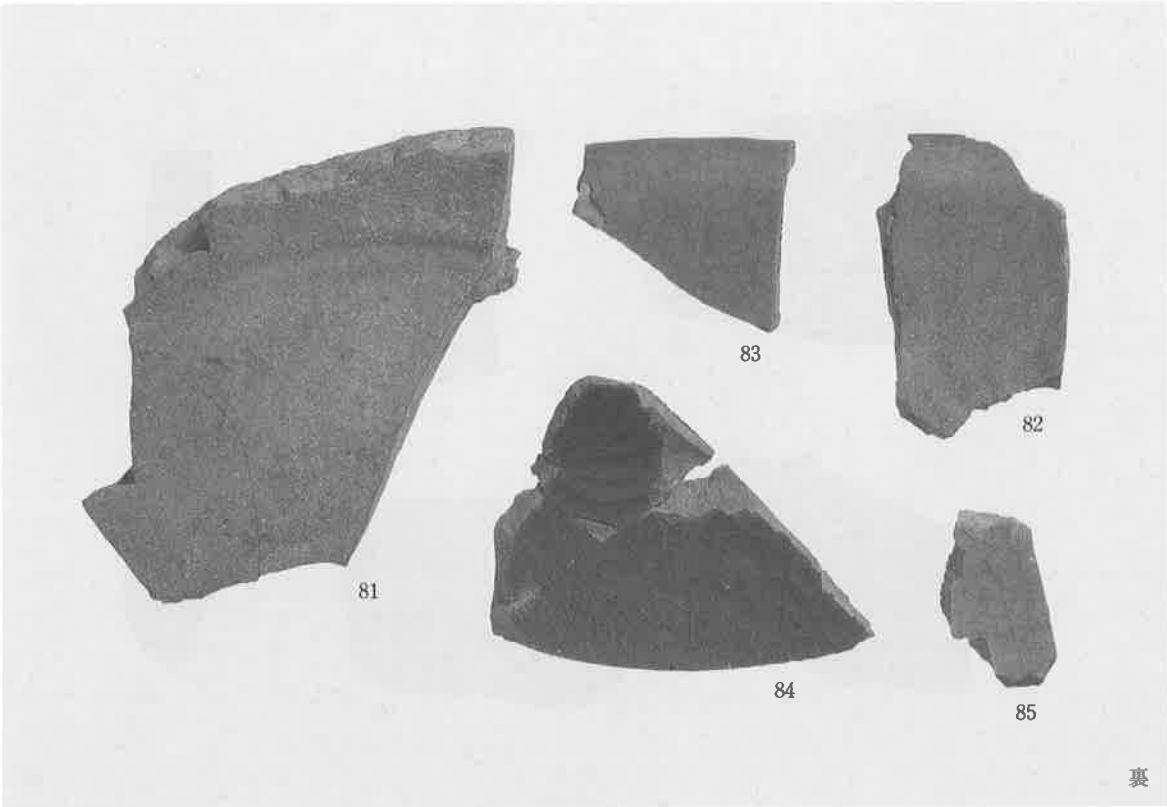


青磁

図版26　仲間後原遺跡（その1）

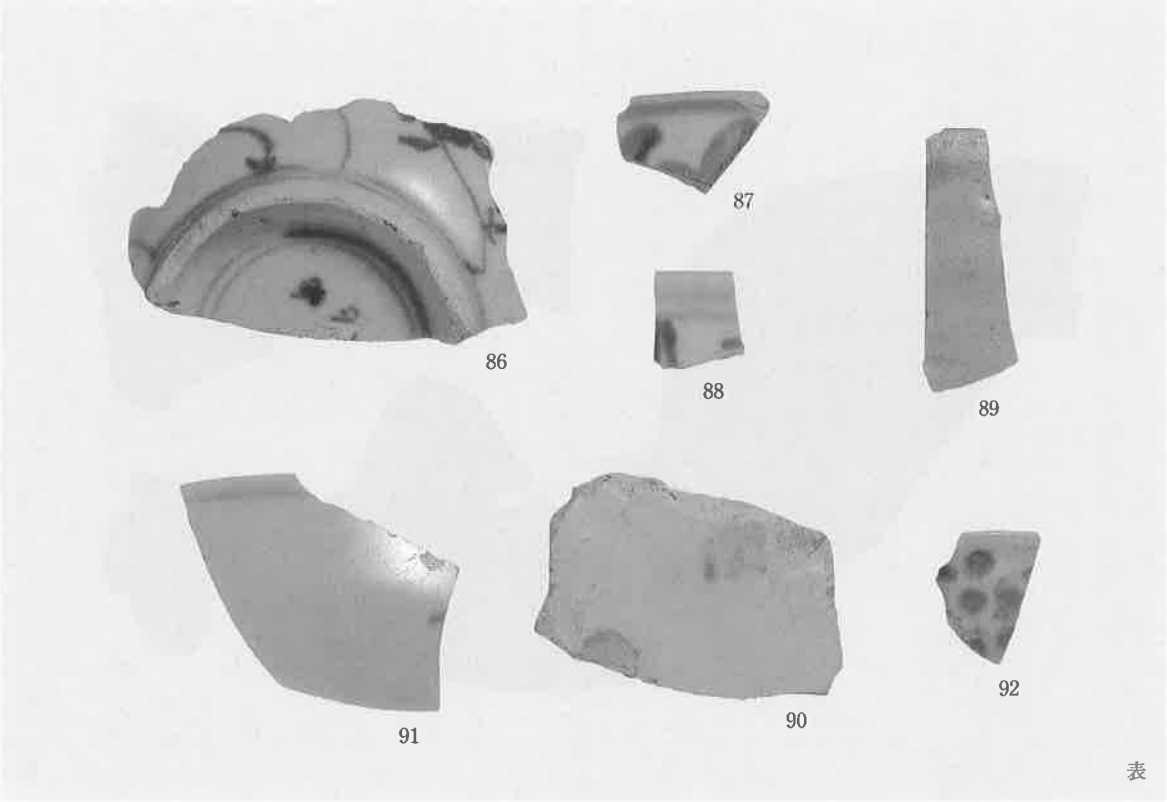


青磁

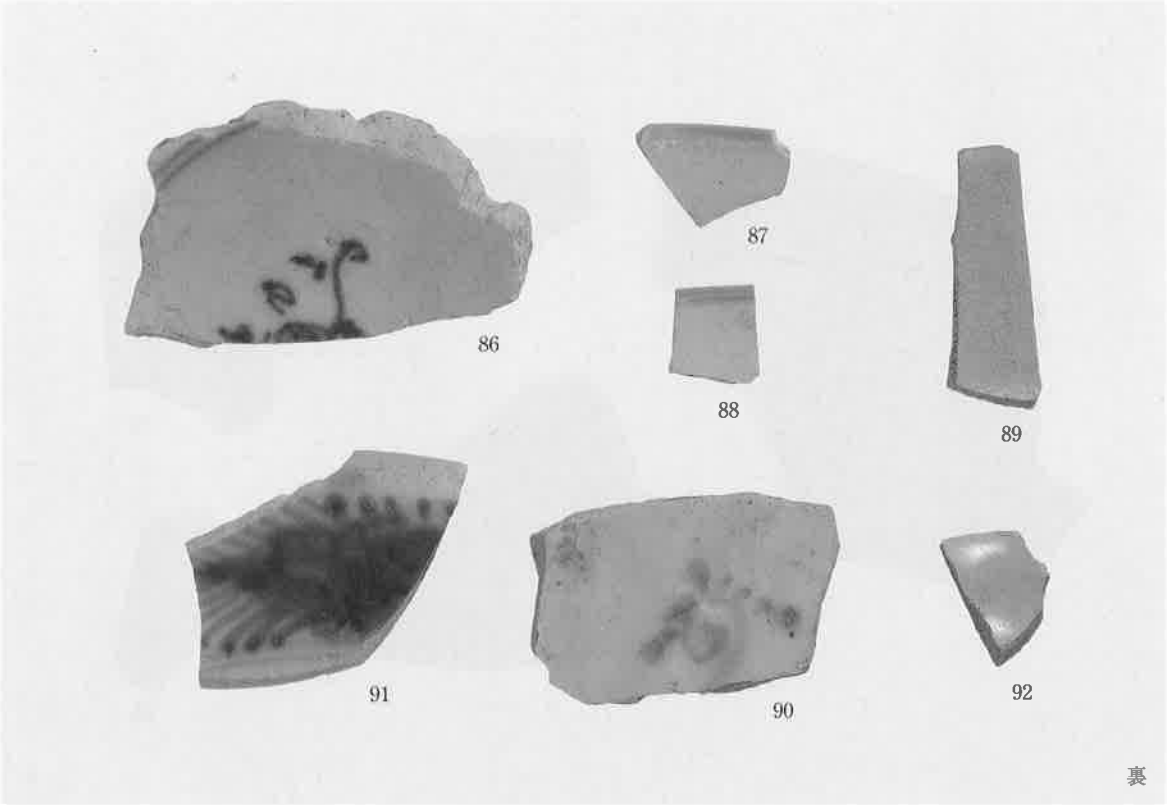


青磁

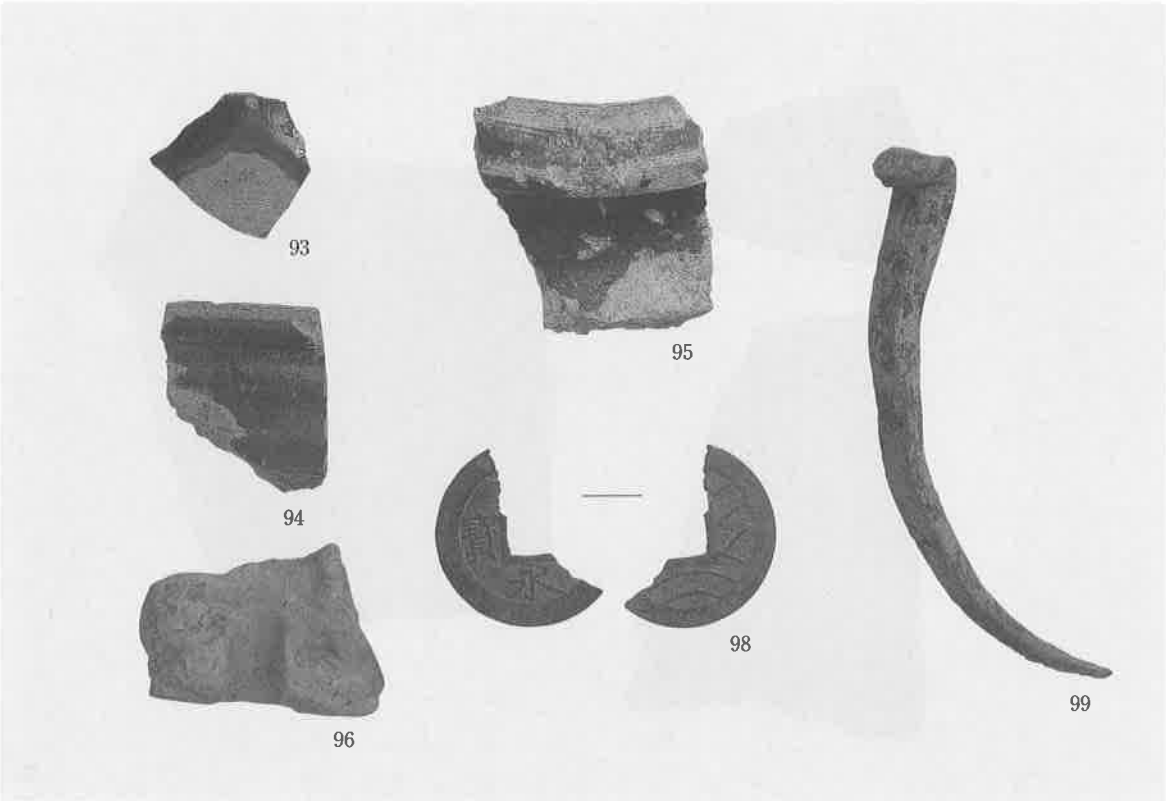
図版27　仲間後原遺跡（その1）



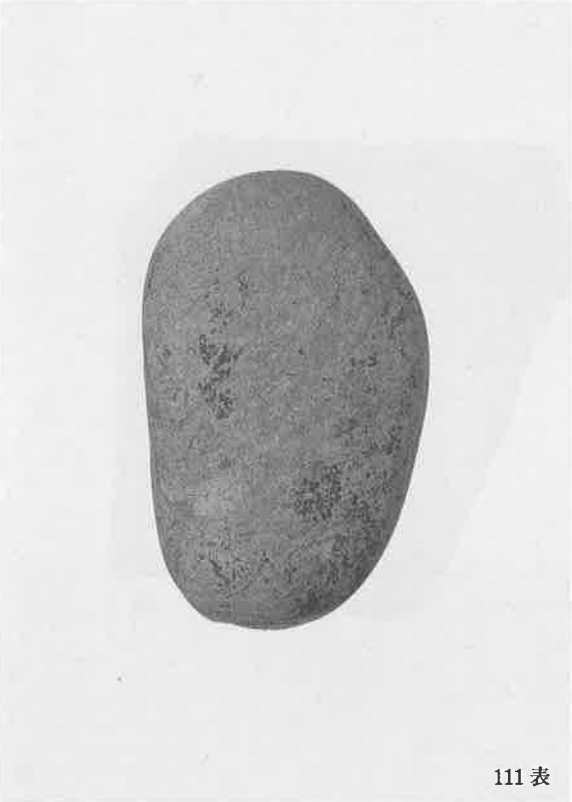
青花



青花

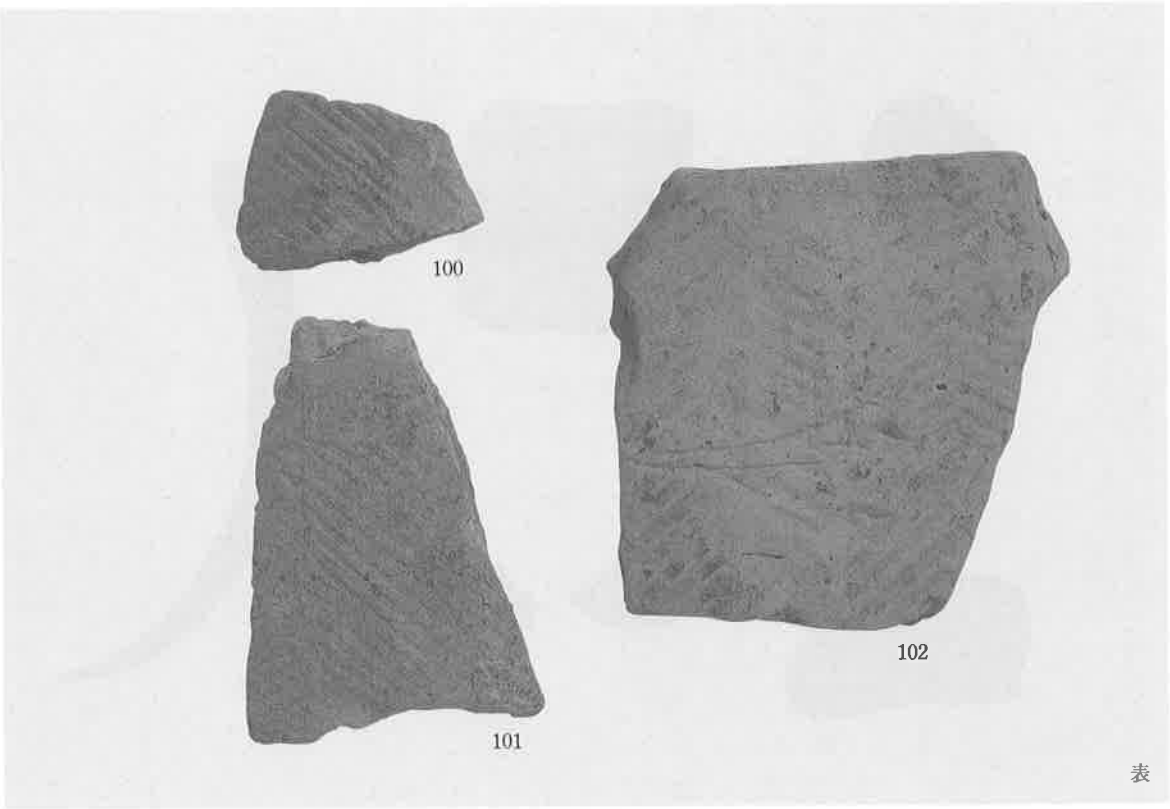


黒釉陶器・褐釉陶器・土製品・銭・釘

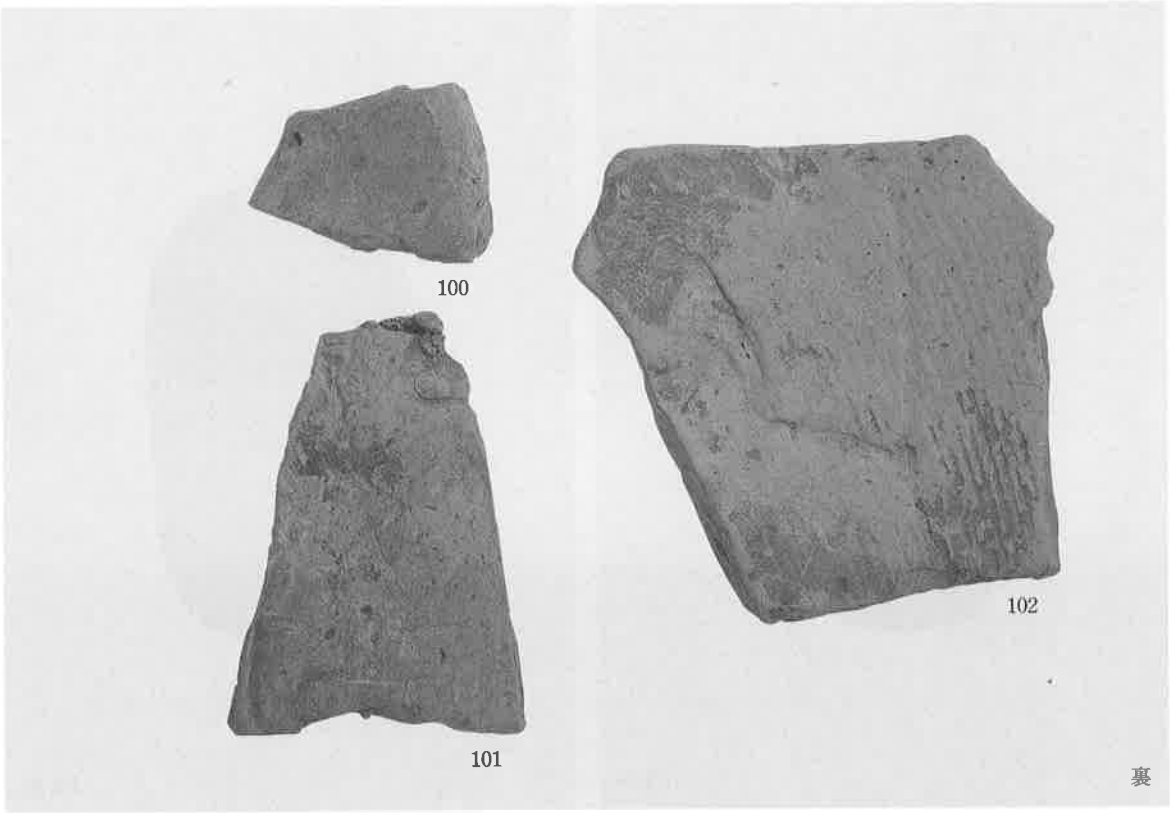


土坑207出土遺物（石器）

図版29　仲間後原遺跡（その1）

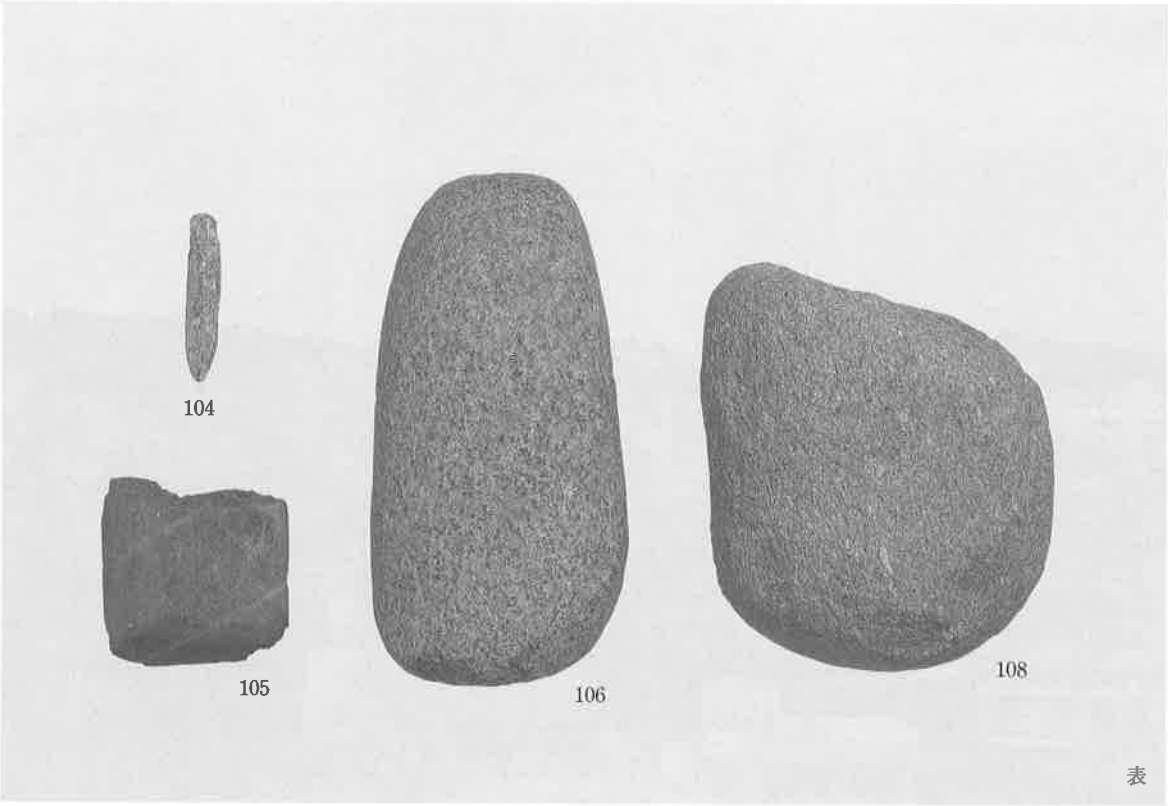


高麗系瓦

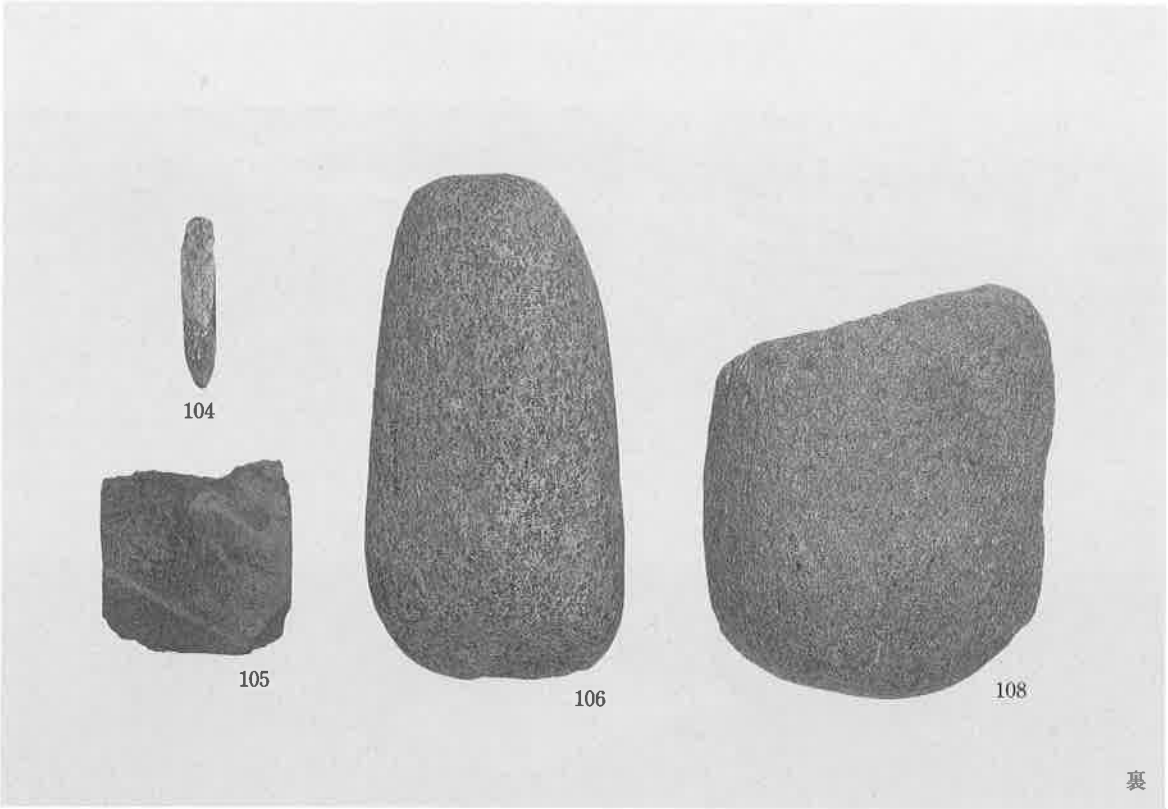


高麗系瓦

図版30　仲間後原遺跡（その1）



石器



石器

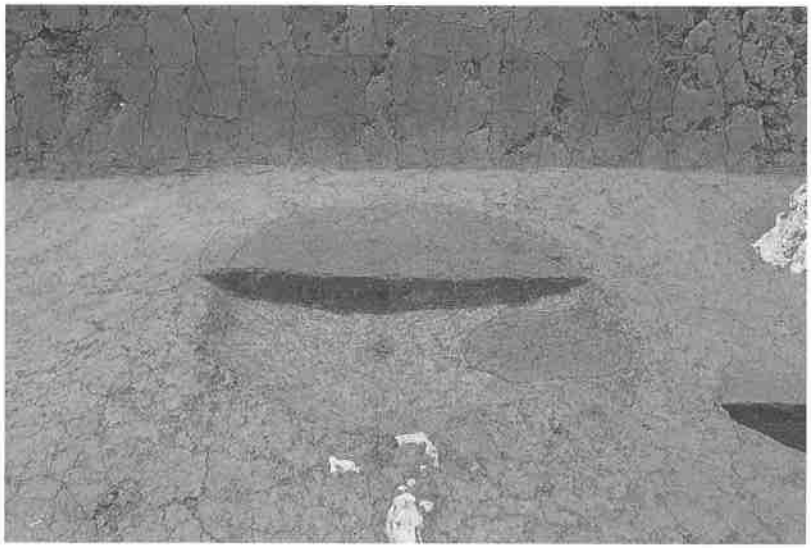
図版31　仲間後原遺跡（その2）

調査地遠景（南西より）：写真奥の鉄塔横が仲間後原遺跡、右側丘陵は浦添城跡

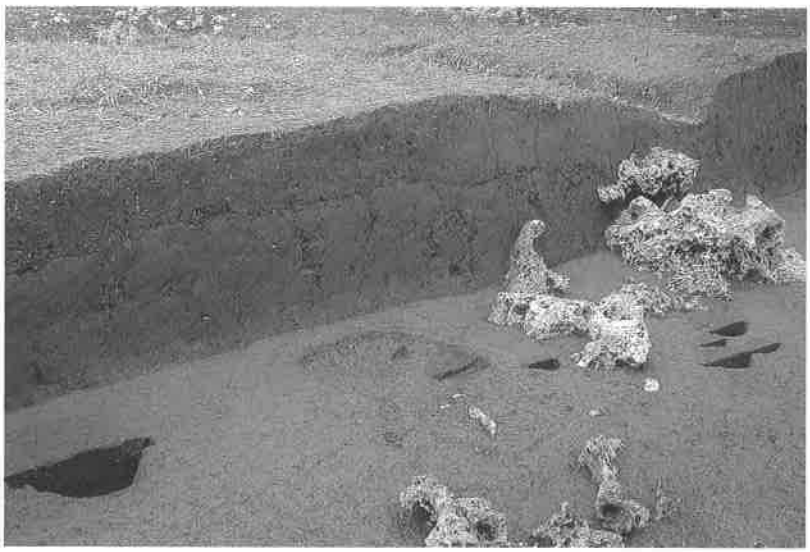
Ⅰ区遠景（南より）

図版32　仲間後原遺跡（その2）

No.8 トレンチ
遺構検出状況（北東より）

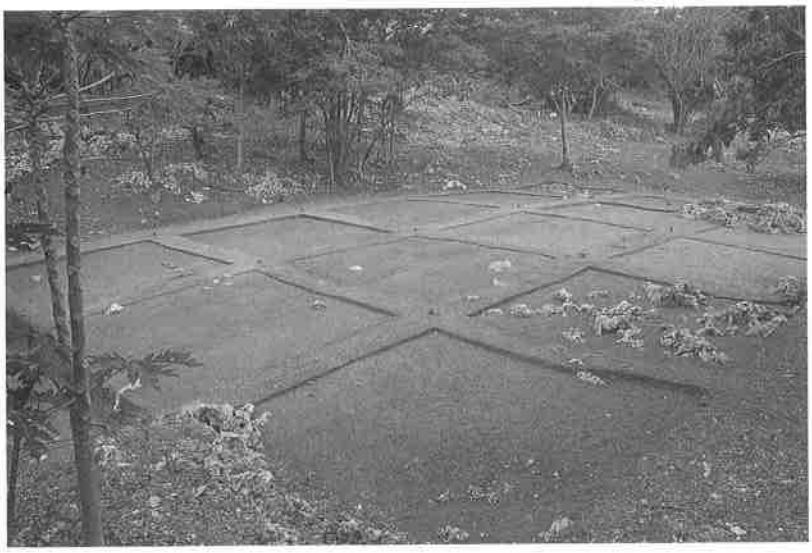


No.8 トレンチ
ピット03半截状況



No.8 トレンチ
層序（北壁）（東より）

図版33　仲間後原遺跡（その2）



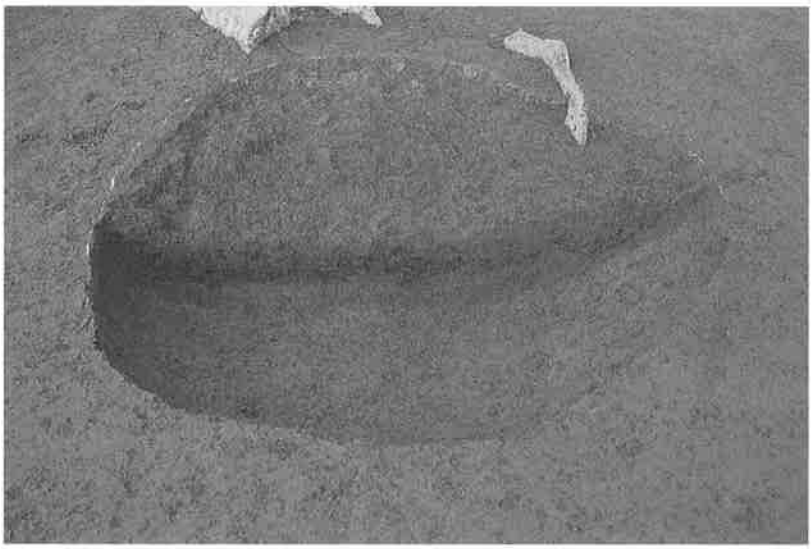
Ⅰ区　表土
剥ぎ後の状況（北西より）

C－4　層序（北壁）

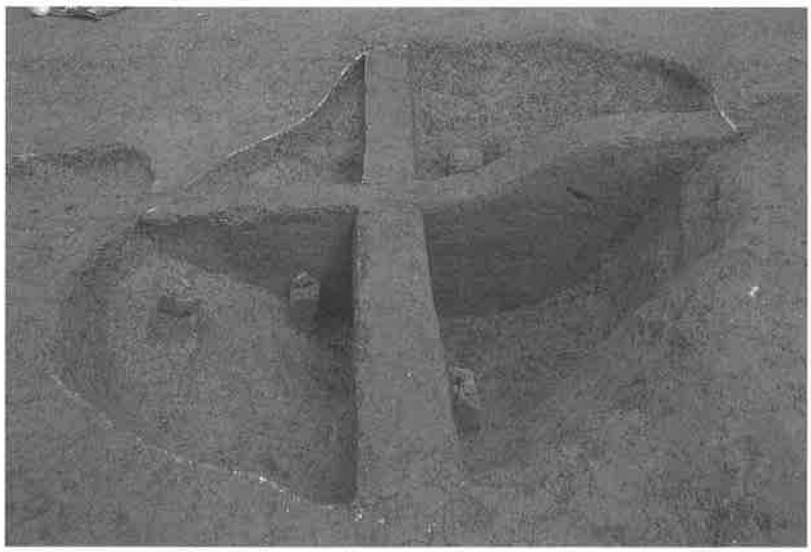
A－4　層序（東壁）

図版34　仲間後原遺跡（その2）

炉跡01　半截状況

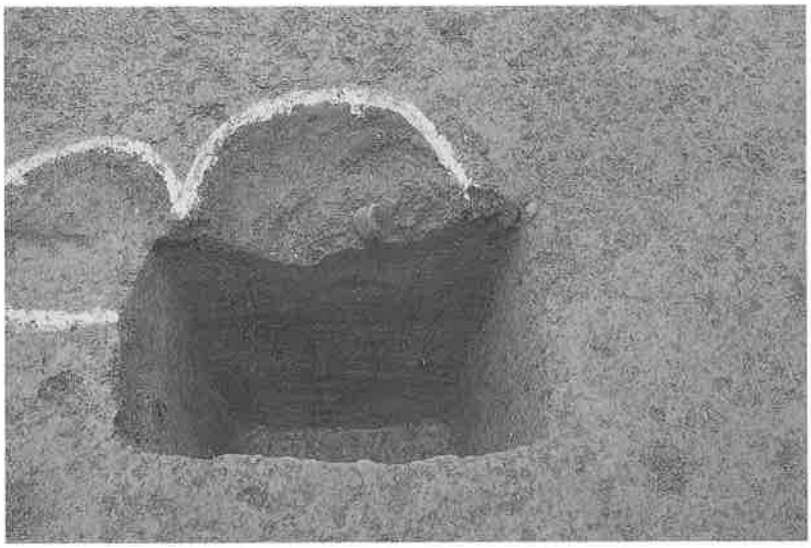


炉跡02　半截状況



土坑01内堆積土状況

図版35　仲間後原遺跡（その2）

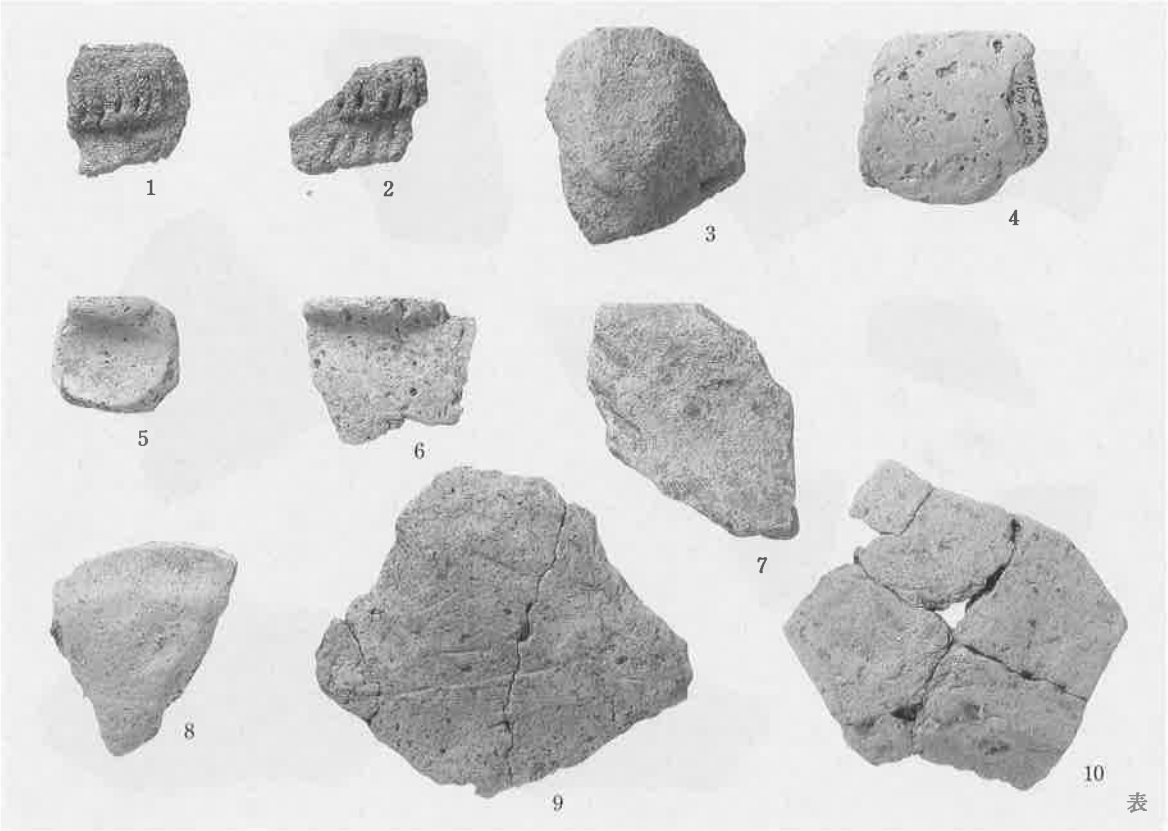


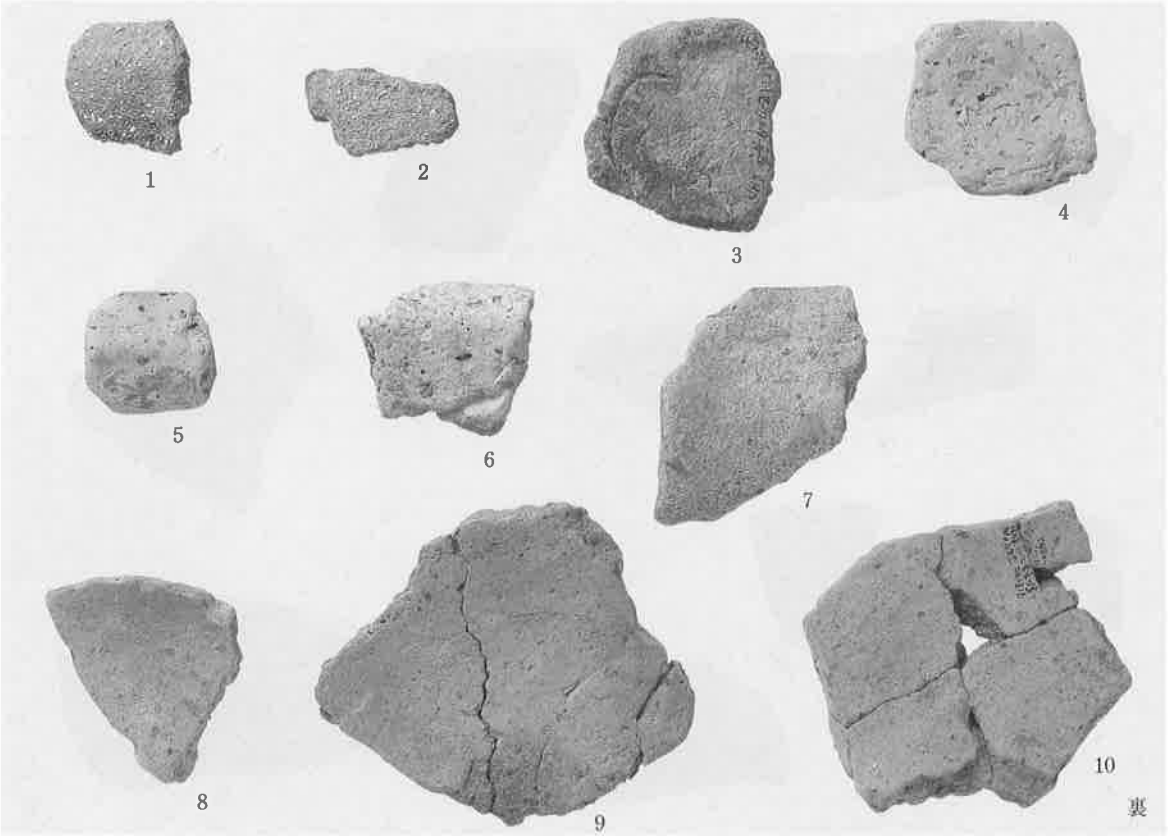
ピット70　半截状況

ピット検出状況（南東より）

遺構完掘状況（南南東より）

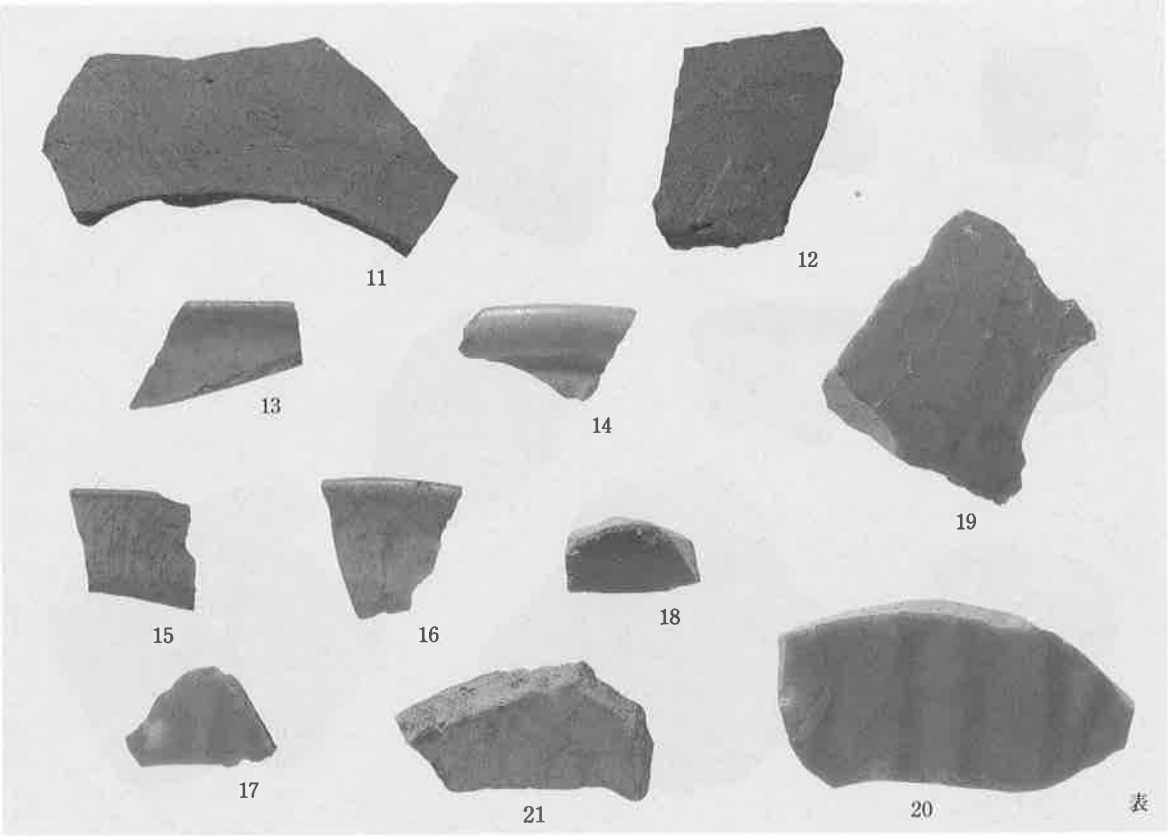
図版36　仲間後原遺跡（その2）

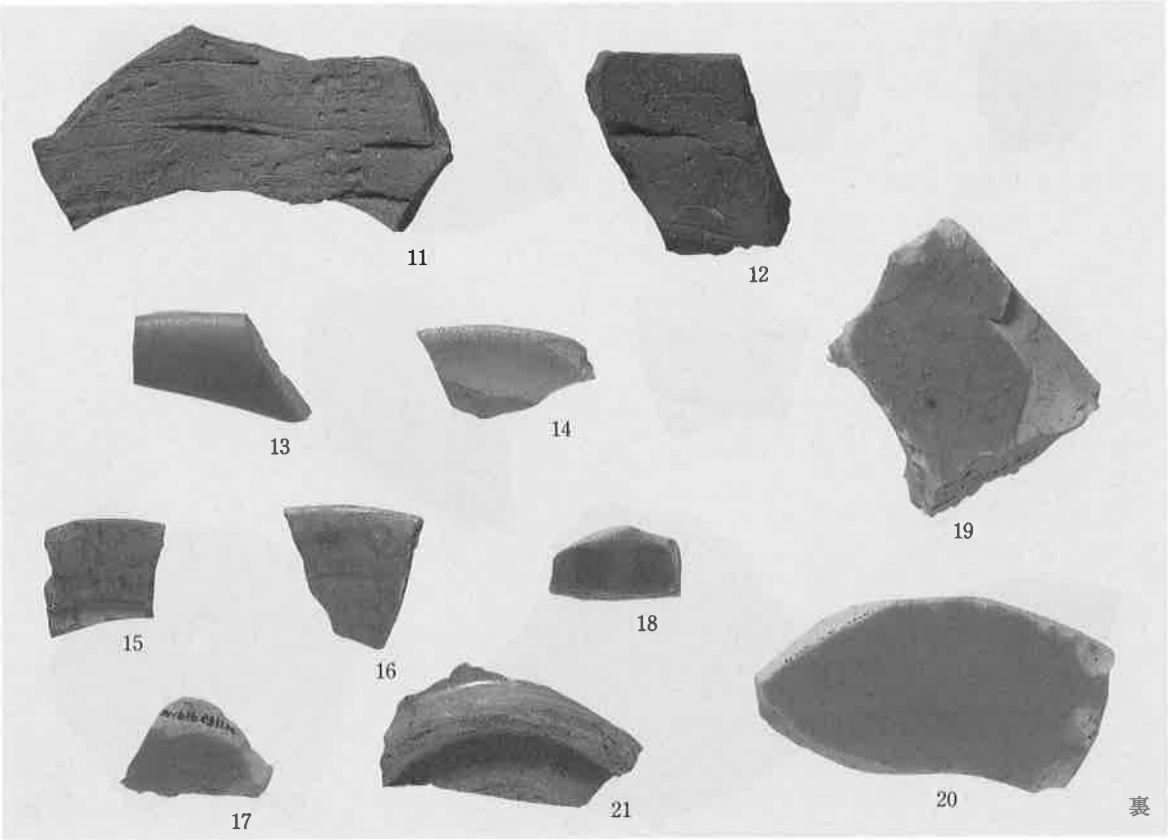




土器

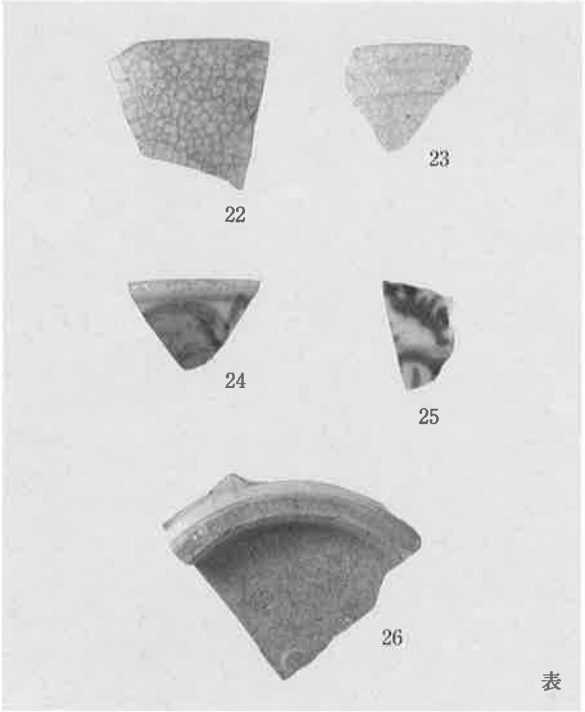
図版37　仲間後原遺跡（その2）

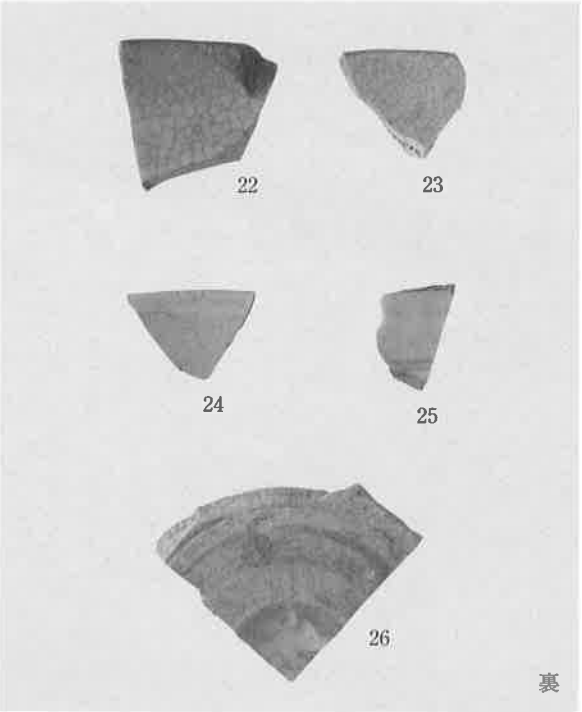


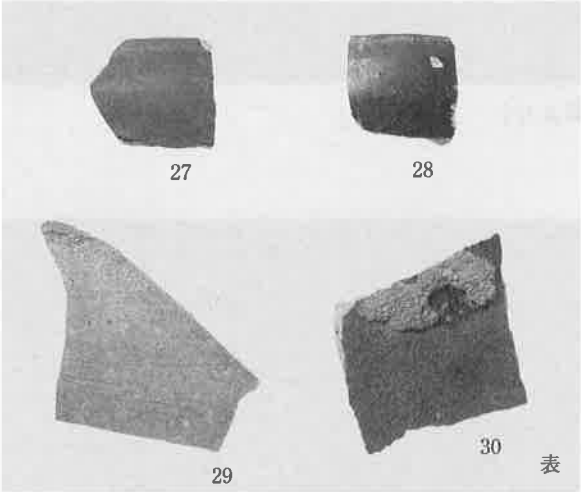


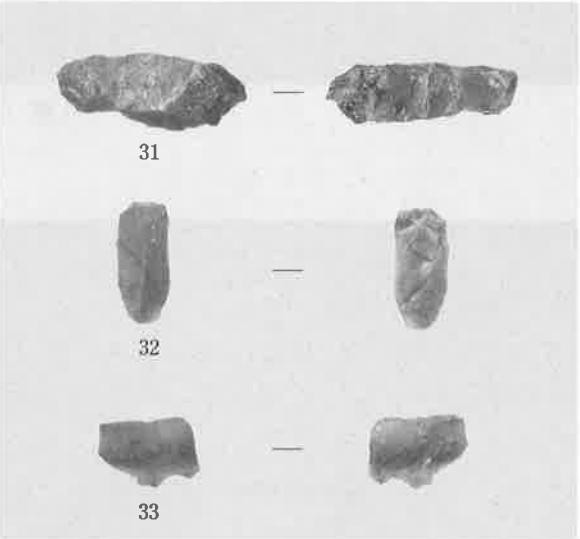
カムィヤキ・青磁

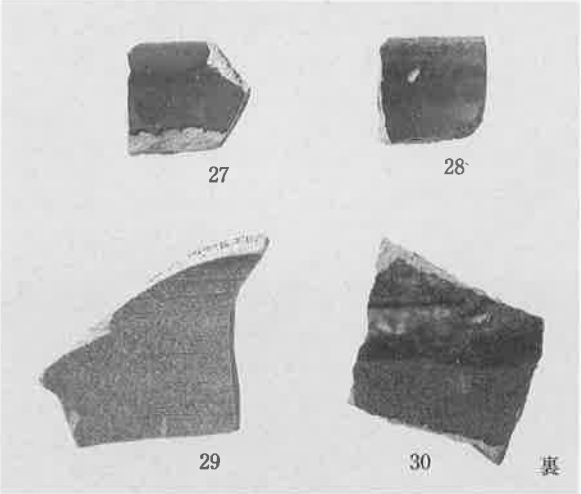
図版38　仲間後原遺跡（その2）

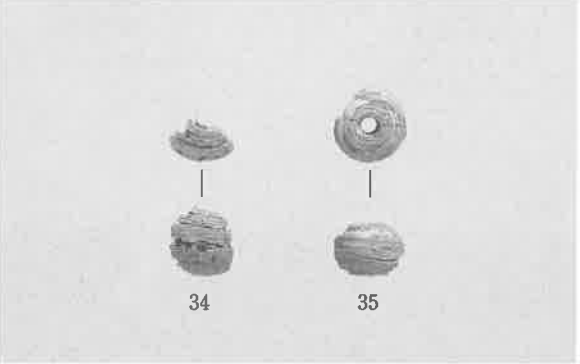












白磁・染付・天目・褐釉陶器・チャート製品・ガラス製玉

図版39　仲間後原遺跡（その3）

1区（南より）

ピット24（東より）

図版40　仲間後原遺跡（その3）

2区（東より）

ピット24出土遺物（土器）

図版41　仲間あさと原の印部土手

全景（西から）

全景（南西から）

碑面（南西から）

報告書抄録

ふりがな	なかまくしばるいせき　なかまあさとばるのしるびどて
書名	仲間後原遺跡　仲間あさと原の印部土手
副書名	浦添大公園整備発掘調査事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	浦添市文化財調査研究報告書
編著者名	仁王浩司　仲宗根久里子　佐伯信之
編集機関	浦添市教育委員会
所在地	〒901-2501　沖縄県浦添市安波茶一丁目１－１　TEL. 098－876－1234
発行年月日	2007年３月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
仲間後原遺跡（その１）	沖縄県　浦添市 仲間後原	47208		26° 14′ 41″	127° 43′ 50″	2000.12.21 ～ 2001.3.30	980	公園整備
仲間後原遺跡（その２）	沖縄県　浦添市 仲間後原	47208		26° 14′ 45″	127° 43′ 49″	2003.8.13 ～ 2004.1.30	300	
仲間後原遺跡（その３）	沖縄県　浦添市 仲間後原	47208		26° 14′ 45″	127° 43′ 49″	2006.1.10 ～ 2006.3.8	87	
仲間あさと原の印部土手	沖縄県　浦添市 仲間後原	47208		26° 14′ 45″	127° 43′ 48″	2006.1.24 ～ 2006.3.31	3	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仲間後原遺跡（その１）	住居跡	グスク時代	柱穴・土坑・溝	グスク土器・カムィヤキ・白磁・青磁・青花	
仲間後原遺跡（その２）	住居跡	グスク時代	柱穴・土坑	グスク土器・カムィヤキ・白磁・青磁・青花	面縄前庭式土器出土
仲間後原遺跡（その３）	住居跡	グスク時代	柱穴	グスク土器	
仲間あさと原の印部土手	その他	近世	印部土手		

浦添市文化財調査研究報告書

仲 間 後 原 遺 跡
仲間あさと原の印部土手

浦添大公園整備発掘調査事業に伴う発掘調査報告書

2007年３月発行

編集・発行　浦添市教育委員会

〒901-2501　沖縄県浦添市安波茶一丁目１番１号
TEL. 098-876-1234　　FAX. 098-878-1487

印刷・製本　株式会社　近代美術